

定 納 古 墳 群

2005

滋賀県坂田郡

近江町教育委員会

例　　言

1. 本書は、滋賀県坂田郡近江町新庄・額戸・日光寺の境界域に所在する定納古墳群の発掘調査報告書である。
2. この調査は、平成14年度～17年度国庫補助事業埋蔵文化財（近江町内遺跡）発掘調査の中で実施された。定納古墳群の発掘調査は、保存を講ずるための基礎資料を得ることを目的とした確認調査であり、近江町教育委員会が主体となり、大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センターに共同調査を依頼して実施した。事業経費および各補助金は、以下のとおりである。

	国庫補助金	県費補助金	町負担金	事業経費	うち定納古墳経費
平成14年度	2,000,000円	1,000,000円	1,000,000円	4,000,000円	3,200,000円
平成15年度	3,000,000円	1,500,000円	1,500,000円	6,000,000円	4,500,000円
平成16年度	3,000,000円	1,500,000円	1,500,000円	6,000,000円	5,300,000円
平成17年度	2,500,000円	1,250,000円	1,250,000円	5,000,000円	5,000,000円
計	10,500,000円	5,250,000円	5,250,000円	21,000,000円	18,000,000円

3. 発掘調査および整理作業は、近江町教育委員会と大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センターが共同で実施した。発掘調査は平成14年度から同17年度の4箇年にわたっておこない、最終年度に報告書を刊行した。
4. 今回の調査対象地は、すべてにおいて民有地であり、里山保全ならびに文化財の調査についてご理解をいただき、一定期間無償提供の了承をいただいた範囲内で実施した。
5. 調査に際しては、特定非営利法人NPOやまんばの会にご協力いただき、地権者交渉・資材運搬・造構の保護被覆・周辺の環境改善等で多大なご迷惑をおかけした。
6. 調査体制は下記のとおりである。

調査主体　近江町教育委員会 教育長 戸田隆三

大手前大学 史学研究所 所長 秋山進午

調査事務局　近江町教育委員会 社会教育課 課長 松居義治

社会教育課 課長補佐 宮崎幹也

調査指導　大手前大学 人文科学部史学科 教授 横本誠一

主任調査員　近江町教育委員会 社会教育課 課長補佐 宮崎幹也

大手前大学 人文科学部史学科 助教授 森下章司

大手前大学 人文科学部史学科 非常勤講師・史学研究所研究員 藤本史子

調査参加者　大手前大学 人文科学部 学生

岩崎浩隆・奥田智子・神倉知宏・徳永将憲・山口勝頼・檜原聰・竹知克征・津田剛志・

村上大介・井上綾里・川上文子・佐藤路子・松本美沙・山崎麻衣子・畠中麻由・原田章史・

荒木清隆・江口裕・田中佑典・鮑耀昌

調査補助者　大手前大学 史学研究所 赤松和佳・岩本崇・魚津知克・中村朋子・橋本明子

作業従事者　近江町生涯現役センター

豊田清一・大林宗男・雨森三郎・安食清士・安食達雄・安藤二三男・伊藤房栄・

伊部重与茂・岩崎卓大・岩本善弘・上田宏・牛尾田喜子・大林成義・大林園子・

小川きく・小野政市・鹿取悠紀子・鹿取 廉・河居純一・川口 純・川本徳久・
北居和子・北居貞義・北川市次郎・北川和男・北川雷枝・北村香代子・北村しづ枝・
北村直行・北森宣子・小原八重子・坂井俊子・沢村和子・鳩 米子・鳩田武司・鳩田忠則・
須戸美代・須藤正一・高居利彦・高居由吉・田中直夫・田中すみ子・塚本新一・堤 一郎・
堤 茂雄・堤 正男・豊田淑美・中川太郎平・中田和子・夏原和夫・西川孝雄・西川暢省・
西村照枝・濱田竹男・原田喜與吉・日比文夫・廣瀬信也・広瀬利・廣田ふみ子・古野哲子・
古野卓子・古野徳嘉・古野 宏・増田義一・松岡政信・松岡 薫・松岡純次・宮口敏夫・
村居弘雄・村岡和枝・村岡紀代治・村岡 慎・山田収蔵・山脇操枝・吉居靖子・吉岡信幸・
吉田栄子・吉田利光・吉田康治・吉田廣栄

保全作業 特定非営利法人N P Oやまんばの会

大林文彦・北村 刚・伊藤忠夫・垣下充宏・垣下智宏・河合郁夫・七里智子・鳩田忠則・
須戸三重子・田中 茂・都築 学・寺村和美・富永美砂穂・廣瀬正明・山田英雄・
吉田文大

教員研修 息長小学校教諭 田中敏和

7. 本書における標高はすべて海拔(T.P.)で表し、方位は磁北を示す。1号墳と5号墳においては墳丘の軸をもとにした座標をそれぞれに設定している。1号墳・6号墳・2号墳では後方部頂の中心点を0、おおむね北・南・東・西の各方向をそれぞれN・S・E・Wとして1m単位の座標を区切って示す。5号墳・7号墳では5号墳の墳頂中心を0として、おおむね北東・北西・南東・南西方向をそれぞれNE・NW・SE・SWとして1m単位の座標を区切って示す。5号墳埋葬施設ではまた別に軸に沿った座標を設定し、同様にn・s・e・wを用いて示した。これらの方位や本文中で触れる方位は、いずれも便利的なものであり、厳密なものではない。

8. 土層表記は目測による。

9. 本文の執筆者は目次に示した。なお5号墳埋葬施設の赤色顔料、1号墳・5号墳出土の炭化材については(株)パレオラボに分析・原稿の執筆を依頼した(IV-7・9)。息長古墳群周辺のG I S利用地図・可視領域図は福井亘が作成した。

10. 参考文献はI~IV・VIでは章末に、Vでは各論考の末尾につけている。

11. 造構写真の撮影については、寿福写房：寿福 滋・酒井純子の両氏に手を煩わせたほか、森下が細部および遺物写真的撮影を担当した。

12. 捜団の作成・製図者名は検団目次に示してある。

13. 三次元レーザー計測については、近江町教育委員会から大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センターに委託業務がおこなわれ、塚本敏夫・岡本篤志が計測・編集を担当した。

14. 基準点測量および空中写真測量は、金城測量設計株式会社に委託し、木下秀行・円城伸彦が担当した。

15. 伐木作業に際しては、長浜坂田森林組合(池田隆)の指導による安全講習を定期的に開催した。またチエーンソー・刈払機については近江町生涯現役センターより借り受けたほか、1,300kg級チッパーシュレッダーについては(株)滋賀コマツより借り上げた。

16. 調査器材については、(有)滋賀建機サービス(吉田庫吉)から支援を受けた。

17. 筒形銅器・銅製舌の保存処理は株式会社吉田生物研究所が担当した。

18. 出土資料および記録資料は、近江町教育委員会の保管であるが、平成17年10月以降は、編入合併先の米原市教育委員会で管理されることとなる。

19. 大津紙業写真印刷株式会社(田邊久佳)が印刷製本を担当した。

定納古墳群

目 次

例 言	1
目 次	iii
図版目次・挿図目次・表目次	iv
I 里山の再生と活用をめざして— 定納古墳群における新たな試み	宮崎幹也 1
1はじめ	1
2森林の環境変化	1
3定納古墳群周辺における里山の現状	2
4荒廃と対策	3
5取り組みの体制	4
6古墳の実態を明らかにする	5
7古墳の保全	5
8「里山の保全」と「文化遺産の活用」	6
9「幼稚園の裏山」から「古墳の眠る里山」へ	7
10眠れる文化遺産の活用	8
II 古墳の位置と環境	藤本史子・奥田智子 9
III 調査の経過	宮崎幹也・森下章司・藤本史子 13
IV 調査の成果	
1古墳の名称と調査の方法	森下章司・藤本史子・奥田智子・原田章史 19
2定納1号墳	森下章司・藤本史子・岩本崇・奥田智子・原田章史 21
3定納6号墳	森下章司・藤本史子・奥田智子・原田章史 34
4定納2・3・4号墳	森下章司・藤本史子・奥田智子・原田章史 34
5定納5号墳	森下章司・藤本史子・奥田智子・原田章史 34
6定納7号墳	森下章司・藤本史子・奥田智子・原田章史 43
7定納1号墳埋葬施設赤色顔料の分析	藤根 久 43
8定納5号墳埋葬施設赤色顔料の分析	森下章司・藤本史子・奥田智子・原田章史 45
9定納古墳群出土木材・炭化材の樹種同定	植田弥生 46
V 研究	
朝抜式木棺小考	森下章司 51

筒形銅器の副葬とその背景	岩本 崇	61
近江町内中世遺跡における流通拠点としての特質	藤本史子	85
息長古墳群の変遷と特質	森下章司	99
VII 総 括	宮崎幹也・森下章司・藤本史子	109

報告書抄録

図 版

図 版 目 次

図版 1 定納古墳群周辺の遺跡

図版 2 定納古墳群

1 天野川と横山丘陵 南東から 2 横山丘陵と定納古墳群 南西から

図版 3 定納古墳群

1 天野川のほとりから望む定納古墳群 西から 2 丘陵下から望む定納古墳群 南西から

図版 4 定納古墳群

古墳群全景 北から 手前から 1号、6号、2~4号墳、遠景に5・7号墳

図版 5 定納 1号墳

1 墳丘 北東から 2 墳丘 南東から

図版 6 定納 1号墳

埋葬施設 北から

図版 7 定納 1号墳

1 筒形銅器出土状況 北東から 2 筒形銅器と銅製舌 3 鉄製品

図版 8 定納 5号墳

1 墳丘 北から 2 墳丘と琵琶湖遠景 南東から

図版 9 定納 5号墳

埋葬施設と琵琶湖遠景 南東から

図版 10 定納 5号墳

埋葬施設 南から 左：西棺 右：東棺

図版 11 定納 5号墳

1 埋葬施設 北東から 2 西棺・東棺の端部 南東から

図版 12 定納 5号墳

1 西棺北端部粘土塊の断面 西から 2 西棺南端部粘土塊の断面 西から

図版 13 定納 5号墳

1 西棺と東棺の棺床 南から 2 西棺の赤色顔料

図版 14 定納古墳群の保護・整備

1 チップで覆われた1号墳 南東から 2 チップで覆われた5号墳 北から

図版 15 定納 1号墳

1 調査前の墳丘 南から 2 墳頂部の擾乱穴 南から

図版16 定納1号墳

墳丘全景 南から

図版17 定納1号墳

1 墳丘北調査区 北から 2 墳丘北調査区の盛土 北から 3 墳丘西調査区 南西から
4 墳丘東調査区 南東から

図版18 定納1号墳

1 陸橋部 北から 2 西陸橋部 西から

図版19 定納1号墳

1 東陸橋部と前方部 東から 2 東くびれ部調査区の地山と盛土 東から

図版20 定納1号墳

埋葬施設 北から

図版21 定納1号墳

1 埋葬施設 南東から 2 埋葬施設 北から

図版22 定納1号墳

1 摰乱溝・穴の断面 南から 2 溝状施設 東から

図版23 定納6・2・3号墳

1 6号墳の北斜面 北西から 2 6号墳の南斜面と2・3号墳 北西から

図版24 定納1号墳

1 筒形銅器 2 銅製舌 3 筒形銅器目釘部 4 筒形銅器内面 5 筒形銅器口縁部
6 筒形銅器透かし端部 7 銅製舌側面 8 銅製舌端部 9 銅製舌端部

図版25 定納1号墳

1 土器(a・c・d:東くびれ部調査区 b:墳丘北調査区) 2 鉄器(a:刀剣茎 b:劍 c:不明鉄器)
3 筒形銅器・銅製舌X線写真 4 刀剣茎X線写真 5 石鎧

図版26 定納5号墳

1 墳丘 北から 2 墳丘上部 南東から

図版27 定納5号墳

1 墳丘と周溝 北東から 2 哉と陸橋状施設 北から

図版28 定納5号墳

1 埋葬施設検出状況 南から 2 埋葬施設 北東から

図版29 定納5号墳

埋葬施設 南から

図版30 定納5号墳

1 西棺南端部 北東から 2 西棺北端部 南東から 3 東棺南端部 北東から 4 東棺北端部
南東から

図版31 定納5号墳

1 西棺北端部粘土塊の断面 西から 2 西棺南端部粘土塊の断面 西から 3 西棺棺床 南から
4 東棺棺床 南から

図版32 定納5号墳

1 西棺と東棺の棺床断面 南西から 2 埋葬施設東部の盛土層断面 北東から

図版33 定納5号墳

- 1 東棺北端内埋土断面 南東から 2 西棺南端内埋土断面 西から 3 東棺内埋土 北から
4 西棺内埋土 北から

図版34 定納5号墳

- 1 刀子 2 刀子X線写真 3 須恵器 4 石獣

図版35 定納7号墳

- 墳丘 北から

図版36 定納7号墳

- 1 埋葬施設 南東から 2 7号墳-5号墳間の溝 東から

図版37 定納古墳群

- 1号墳筒形銅器下層出土木材・5号墳墳丘盛土出土炭化材の材組織走査電子顕微鏡写真

図版38 定納古墳群

- 5号墳墳丘盛土出土炭化材の材組織走査電子顕微鏡写真

図版39 定納古墳群

- 1・5号墳墳丘盛土出土炭化材の材組織走査電子顕微鏡写真

図版40 やまんばの会

- 1 里山の保全作業 2 こどもたちの作業 3 やまんばの森学園祭 4 やまんばの家にて
5 やまんばの会

挿 図 目 次

図1 定納古墳群の整備風景	6
図2 近江町の関連跡分布【藤本史子作成】	9
図3 調査風景(1)	14
図4 調査風景(2)	15
図5 調査風景(3)	16
図6 定納古墳群【奥田智子作成】	20
図7 定納1・6・2号墳の地形図【森下章司・奥田作成】	22
図8 定納1・6号墳の墳丘・各調査区平面図【森下・奥田作成】	22
図9 定納1号墳の墳丘・各調査区平面図【森下・奥田作成】	23
図10 定納1号墳後方部西側査区土層断面図【原田章史製図】	24
図11 定納1号墳後方部東側査区土層断面図【原田製図】	25
図12 定納1号墳前方部西側査区土層断面図【原田製図】	24
図13 定納1号墳前方部東側査区土層断面図【原田製図】	25
図14 定納1号墳後方部北調査区土層断面図【原田製図】	26
図15 定納1・6・2号墳土層断面図【原田製図】	27
図16 定納1号墳後方部の墳頂平面図【奥田製図】	29
図17 定納1号墳埋葬施設平面図・断面図【奥田製図】	30
図18 定納1号墳筒形銅器の出土状況平面図・見通し図【奥田製図】	30

図19 定納1号墳墳頂部・埋葬施設土層断面図〔奥田製図〕	31
図20 定納1号墳出土筒形銅器・銅製舌実測図〔岩本崇製図〕	32
図21 定納1号墳出土遺物実測図（1：刀劍茎 2：劍 3：不明鉄器 4：石鐵）〔森下・奥田製図〕	33
図22 定納5・7号墳平面図〔奥田作成〕	35
図23 定納5号墳南東・北西斜面の土層断面図〔原田製図〕	36・37
図24 定納5号墳北東斜面の土層断面図〔原田製図〕	37
図25 定納7号墳北西・南東斜面の土層断面図〔原田製図〕	36・37
図26 定納7号墳北東斜面の土層断面図〔原田製図〕	37
図27 定納5号墳の埋葬施設平面図・断面図〔奥田製図〕	40
図28 定納5号墳墳頂部・埋葬施設土層断面図〔奥田製図〕	41
図29 定納5号墳出土遺物実測図（1：刀子 2・3：須恵器 4：石鐵）〔奥田製図〕	43
図30 定納1号墳埋葬施設赤色顔料試料（P1）の蛍光X線スペクトル図〔藤根久作成〕	44
図31 定納1号墳埋葬施設赤色顔料試料採取地点〔奥田作成〕	45
図32 定納5号墳埋葬施設赤色顔料試料採取地点〔奥田作成〕	45
図33 定納5号墳埋葬施設レーザー3次元計測図〔岡本篤志作成〕	53
図34 棺端に粘土塊を据える刳抜式木棺埋葬〔森下作成〕	54
図35 木棺端部の分類〔森下作成〕	56
図36 古墳における筒形銅器の副葬配置〔岩本製図〕	66・67
図37 韓半島の墳墓における筒形銅器の副葬配置〔岩本作成〕	70・71
図38 筒形銅器出土古墳の規模・形態〔岩本作成〕	72
図39 筒形銅器出土遺跡の分布〔岩本作成〕	73
図40 筒形銅器出土古墳の埋葬施設〔岩本作成〕	74
図41 墳墓における筒形銅器の出土点数〔岩本作成〕	74
図42 近江町内中世遺跡分布図〔藤本作成〕	85
図43 湖東・湖北の中世主要交通路・港津〔藤本作成〕	87
図44 絵図に記された琵琶・朝妻漆〔藤本作成〕	88
図45 中世における東国・北陸への推定交通路と集落〔藤本作成〕	89
図46 若宮氏・鳩氏居館推定地〔藤本作成〕	90
図47 新庄城跡付近地籍図〔藤本作成〕	91
図48 東国・北陸への推定交通路周辺遺跡出土遺物実測図（1）〔藤本作成〕	92
図49 東国・北陸への推定交通路周辺遺跡出土遺物実測図（2）〔藤本作成〕	93
図50 息長古墳群・長浜古墳群と集落遺跡〔福井亘作成〕	101
図51 定納古墳群の可視領域〔福井作成〕	105
図52 定納古墳群復元想定図〔奥田作成〕	110

表 目 次

表1 定納1号墳埋葬施設赤色顔料試料の蛍光X線分析結果〔藤根久作成〕	44
表2 定納1・5号墳出土木材・炭化材の樹種同定結果〔植田弥生作成〕	47
表3 古墳出土の筒形銅器一覧〔岩本作成〕	62・63

I 里山の再生と活用をめざして — 定納古墳群における新たな試み —

1 はじめに

「荒廃した里山に眠る文化遺産の実態を明らかにし、その保護と活用をめざす。」

今回の調査テーマは、この一言に尽きる。平成14年度に開始した定納古墳群の調査は、枯木と倒木の伐採除去から始まり、大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センターの手による測量調査・発掘調査が進められ、しだいに遺跡の実態が明らかにされてきた。また調査終了後には、埋め戻しを経て、地元のNPO団体と協働した「里山の環境改善」が展開され、現在、活用準備が進められている。

日常の生活を送るなかでは省みることのない部分ではあるが、これまでの生活様式における大きな変化は、集落背後の里山を大きく荒廃させ、そこに眠る文化遺産へのアプローチを極めて困難なものへと追いやり始めている。ここでは調査を含めた今回の取り組みのめざすところについて説く。各調査テーマに従いながら、「森林の環境変化」「古墳周辺の現状」「荒廃と対策」などを通じて、この遺跡に適した「保護と活用」を明らかにしたい。

2 森林の環境変化

本州島のほぼ中央に位置する滋賀県は、伊吹、鈴鹿、比良、野坂の山系に囲まれた世界有数の古代湖「琵琶湖」を持ち、自然豊かな県域を構成している。県下北東の一画に位置する近江町はその琵琶湖に接し、伊吹山系に連なる森林と実り多き農地を持ち、町内を縦横無尽に走る交通網により住環境は県内でも比較的良好な地域として知られる。

現在、近江町の森林は、スギやヒノキなどの人工林と、コナラ、アベマキ、アカマツなどの天然林が一体となった地形的に浅い山林で構成されており、入里に近いため「里山」と称される部類に区分される。古代の樹種としては、ナラ類が主であったことが今回の調査からも推測され、古墳時代は比較的肥えた土壌が豊かな森林を育てていたものと推測される。

森林は水源の涵養や土壤の保全、地球温暖化の防止などさまざまな役割を果たしており、古来より生活に不可欠な存在となっている。豊かな水をたたえる琵琶湖から多くの恵みを受けており、その琵琶湖の水を育んでいるのも、また周囲のみどり豊かな森林である。

昭和30年代に起った『燃料革命』以後、人々の生活は急激な変化をおこした。生活様式の変化により「薪炭」から「化石燃料」への転換、第1次産業から第2・3次産業への依存度が増し、次第に森林は生活から遠い存在となっていました。

特に山村では、社会基盤整備の遅れや就労機会が限定されることなどから、高度経済成長期以降、若年層を中心として多くの人口が流出した。近江町では旧来、林業で生計を立てていた林家は存在せず、兼業農業を中心とした就業形態であったため、急激な人口の流出こそなかったが、生活様式の変化と森林での過酷な労働を嫌い、森林からは人離れが進んだ。また長期にわたる木材価格の低迷による林業の不振も森林離れに一層拍車をかける結果となつた。

このような社会経済的な変化により、それまで管理されていた森林は、次第に人の手が入らなくなり、特に里山においては、徐々にカシ類やツバキなどの常緑広葉樹（照葉樹）が繁茂する、量なお暗い密生林へと変化していった。

近年では「松枯れ」に加えて、「モウソウチクの異常な繁茂と近隣の森林への侵入」がこの状態に拍車をかけている。極度に寄生した状態から、林内の照度は非常に低くなり、下層植生は大変乏しい状態となり、表土が剥き出しになっているところも少なくない。

適切に管理された森林では、多くの樹種と下草が育ち、花・果実・樹液に集まる幾種類もの昆虫・鳥などが生息するなど豊かな生態系を維持することができる。しかし、このように手入れされない森林では、生息できる生き物の種類は少なく、現在は絶滅した種もあり、「荒廃した森林」へと変化した。

森林をこのままの状態で放置すれば、琵琶湖の水源涵養はもとより、土壤の保全など森林の持つ公益的機能が損なわれ、人々の生活環境に深刻な影響をもたらすことにもなる。そこで荒廃した森林を、かつてのような里山に再生するためには、地域に住む人々が森林に触れ親しむ機会を作り、自然に対する敬愛を育みながら様々な活用を進めることが重要といえよう。「文化遺産の活用」もそうした活用と関連づけられる事業の候補として注目される。

また、近年においては台風や地震により全国各地で山林災害が数多く発生している。災害を未然に防止し安全で安心できる社会を実現するためには、災害に強い森林づくりをすすめる必要がある。さらに平成17年(2005)2月には、地球温暖化防止のための『京都議定書』が発効されたが、温室効果ガスの削減に向かって、二酸化炭素の吸収源である森林を適切に整備してゆくことも重要となる。遺跡調査の場合であっても安易に伐採するだけの手法は、今後は成り立たず、保全のビジョンを明確化する必要がある。

滋賀県が平成16年度に策定した『琵琶湖森林づくり基本計画2005~2020』では、「琵琶湖と人々の暮らしを支える森林づくりの推進」を基本方向とし、「森林の多面的機能の持続的發揮に重点をおいた森林づくり・県民全体で支える森林づくり」を基本方針にすえ、森林を県民全体の貴重な財産として、森林所有者のみに任せのではなく県民全体での森林づくりを進めることができると提案されている。そのような観点からも、森林のもつ多面的機能を改めて見つめ直し、そこに新たな価値を見出しながら、地域住民や行政、企業などが協働して地域の森林づくりを進めていく新しい時代に突入している。

3 定納古墳群周辺における里山の現状

定納古墳群の一帯では、旧来からアカマツが多く自生していたが、近年、マツクイムシの被害が拡大し、現在では見る影もない状態にある。この区域における里山の現在の植生は、①常緑広葉樹林（アラカシ優先型）、②落葉広葉樹林（アカマツ・コナラ優先型）、③マダケ・モウソウチク優先林、④スギ・ヒノキ植林の4つに区分される。

①常緑広葉樹林

主に南側斜面と西側斜面で広く見られ、まとまった林を作っている。アラカシやシラカシなどカシ類のほかソヨゴ・ツバキ類が繁茂し、カシ類は秋に果実（ドングリ）となる。昭和40年代頃より里山からは薪類が取られなくなり、「落葉広葉樹林」から「常緑広葉樹林」へと植生が遷移したことがわかる。

②落葉広葉樹林

もともとアカマツ林であったが、松枯れで変化し、現在では全域に広く分布している。コナラ・アベマキなど、秋に果実（ドングリ）が生る。アベマキは樹皮が厚いコルク質でできているという特徴を持ち備えており、アカマツはそのほとんどがマツクイムシの被害により枯損している。

コナラ・アカマツは、関東・中部・近畿地方の暖温帶では二次林を構成する主な樹種で、かつては薪炭材

や水田の縁肥として利用されてきた。

③マダケ・モウソウチク優先林

定納古墳群の東側斜面の奥部とその谷沿いに広く見られる。モウソウチクは、稈の節に1個の環、マダケは2個の環があり、簡単に見分けることができる。一部の竹林では現在でも管理が行われているが、多くは荒れた林となっている。旧来、マダケ・モウソウチクは食用や竹材として栽培されてきた品種であるが、現在では全国各地で分布を拡大している。特に近年、混みすぎた竹が行き場を失い、隣接する広葉樹等の森林へと侵入し、従来あった植生が駆逐されていくことが問題視されている。放置された竹林は多様な自然環境を単純化する特徴がある。特に、カシ類・コナラ等のドングリを食べる動物たち、あるいは明るい森林に生育する植物の生活の場が少なくなる要因であるため、自然環境を保全する上での課題として挙げられている。

④スギ・ヒノキ植林

この区域は、かつてアカマツを育てマツ林を大切にしてきたことから、スギ・ヒノキの植林は面積・分布とも少ない状態にある。これは、小面積の土地所有者が多数存在するために、大規模な植林が行われなかつたことに起因している。自生種のスギ・ヒノキも一部にみられるが、絶対量は少ない。

こうした植生においては、いくつかの問題点をみつけることができる。第一は、生活様式の変化がアカマツ林の機能を停止させたことである。この地域では「アカマツ重視」で松林が大切に育てられてきた。これは地域の生活燃料の主が近年まで「松葉」で構成されていたことにも合致する。通称「五右衛門風呂」と呼ばれる風呂では、燃焼時間が長くもつ「松葉」が主として燃料に使われていた。

個人で山を所有できない住民にとっては、共有林が一般開放される日、地域では「山のクチが開く日」と呼ばれる日に、一年分の焚きつけとして多量の松葉を山から持ち出していた。この行為こそがアカマツ林を保全する一番の決め手となっており、同時に松茸の育成にも大きく貢献していた。しかしながら、プロパンガスが普及することで、松葉の堆積を増加させ、山林の荒廃を進めることになった。

第二は、広葉樹林の変化である。コナラ・アベマキ等で構成される落葉広葉樹では、薪炭材や水田堆肥としての利用停止にともない、森林の枯損を加速させ、やがては、より耐陰性・萌芽性が高く群生をつくりやすい常緑広葉樹へと植生遷移をすすめたようである。外部から見れば常緑の森林に見えるものの、極めて通気性が悪く、暗い森林へと変化させたことになる。

第三は、荒廃した森林にひろがるマダケ・モウソウチクの繁茂である。間伐という行為を失い、植生密度を高め、隣接地へ侵入し、多様な森林環境を単純化させ続けている。本来は、集落に近い森林低地に植えられた竹が、急斜面に広がり、尾根を越える事象も確認される。

4 荒廃と対策

こうした森林環境にあって、定納古墳群周辺は荒廃化の一途をたどっている。古墳の立地する丘陵尾根は、「顔戸」「新庄」「日光寺」という3集落の境界域にあたる。尾根に至る道は幾つか存在し、かつてはいずれの集落からも伸びていた。なかでも最も活用されていた道は、西方の「顔戸」集落から「山田溜」を経由して続くもので、最も活発に利用されていたが、北陸自動車道の建設によって断絶し、これを発端に丘陵尾根西斜面と自動車道東方に挟まれた範囲から荒廃が始まった。特に自動車道はトンネル南出口が定納古墳群の立地する尾根の直下にあたり、大型トラック等から飛散する害虫類が、アカマツの枯損を急速に広げていった。

マツが枯れ、台風などの自然災害時に倒木する一方で、モウソウチクのみが繁茂の勢力を増し、調査地周辺は荒廃が進んだ。

森林は、活用される時点で「協働」が意識される。そこで生活に必要な燃料や堆肥が確保できるときには、共有林で大人数作業が開始され、その取得作業が、地権者の森林保全作業を軽減させてきた。しかしながら、次第に山の利用が停滞すると、途端に所有者個人にのみ管理が委ねられてしまう。手入れ不足によって荒廃した森林の「多面的な機能回復」は極めて困難なものになるのである。

ここで課題となるのは「荒廃した森林の回復」である。一般に、森林は「植林」をすすめ、「樹木の伐採」を禁止することによって守られるものと思われがちだが、決してそうではない。特に近江町の森林は全て「里山」に分類され、昔から里人が手を入れてきた森林である。里山では、20~30年毎に雑木を伐採し、燃料として活用してきた。この伐採によって、切り株から新たな芽が育つ「萌芽更新」という手法により、絶えず樹木の世代交代がなされてきた。

伐採された森林は一時的に高木のない山肌となるが、日照が確保されると表土の中で休眠していた種子が発芽し、萌芽更新による樹木の回復までの間、草木類や低木が荒廃を防止する。さらには昆虫等の生物が環境の変化に合わせて移動を開始し、繁殖を行うことで個体数や種類の増加が認められるようになる。

もちろん広範囲の区域全体を一斉に伐採するのではなく、いくつかのケースに区分し、「伐る」「植える」「そのままにする」などの手法によって、モザイク的に様々な環境条件を作りながら、森林全体を緩やかに更新することで、生態系を豊かにすることが可能となる。動植物豊かな森林づくりには、森林が持つ自然治癒力を活かした計画的な整備を行うことが最も重要といえよう。

5 取り組みの体制

今回の調査では、地元教育委員会が調査主体となり、「大学」「行政」「NPO」「地権者」「地元住民」「シルバー人材センター」「図書館」「学校」など、多くの団体や組織と連携できるような取り組み体制を構築し、「里山の保全」と「古墳の調査」といった二大テーマを掲げて協働が図られた。

調査に入る前の定納古墳群は、鬱蒼とした雑木に覆われており、古墳群の全景はもとより、各古墳の埴丘すらも全景をみわたすのは困難であった。その一方で、ふもとに所在する近江町立ふたば幼稚園の園児たちは、日常より丘陵を遊び場として積極的に活用しており、尾根の南先端のかなり急な小道や、西斜面に乗らされたロープをつたって頂上に登り、ドングリ拾いなどに興じていた。

古墳の丘陵東裾部に位置する日光寺集落では、1990年代後半より里山保全活動が活発化し、やがてNPO団体（特定非営利法人やまんばの会：大林文彦理事長）が誕生した。やまんばの会は、地元の里山保全と活用事業に関して、きわめて活発な活動をおこなってきた団体である。地権者より無償で手入れされなくなった山を借り受け、不用木を伐採して自然環境をよみがえらせてきた。伐った樹木などを用いて小屋を作り活動拠点とし、動植物の育成にも努めている。また子どもから大人まで対応する自然体験・環境学習の場を提供している（図版40）。

地元の地権者より無償で土地を借り受け、荒廃化の進む里山の保全をおこないながら、環境教育の場を作り出す手法は、やがて定納古墳群や甲塚古墳の存在にも注目し、歴史文化遺産の実態を明らかにし、保護と活用を考慮しながら、周辺全域の保全を進めることを提案するに至った。

こうした事業を進めていくには、文化財保護を所管する教育委員会事務局の組織だけでは不十分であり、NPO団体、行政の林業所管課、地権者を含めた調整協議を進め、実際の調査が始まった。

作業は地域のシルバー人材センターから作業員を提供してもらい、安全講習を繰り返しながら「伐木作業」

「墳形調査」を開始した。近江町では、発掘調査に従事する作業員の構成を従来の「熟練者」から「シルバー人材」へ移行し数年が経過した段階であった。「ワークシェアリング（雇用細分）」の概念を重視し、「古墳の調査」というひとつの仕事に大勢で関わりあい、理解を深めながら参加するといった行為が、やがては「文化財保護」意識の啓発に大きく役立ち、資料館（近江町はにわ館）における考古学セミナーの参加者を年々増加させるに至った。また地元小学校の教員による職域研修の場としても活用され、伐木作業・墳形調査への参加を受け入れた。

伐採作業を終了した後は、大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センターによって「測量調査」と「古墳主体部を中心とした発掘調査」がおこなわれ、古墳の数、形状、規模を明らかにし、築造年代を判断し、地域に分布する島長古墳群の変遷における定納古墳群の位置づけ、さらには歴史的評価を与えることが試みられた。古墳群の実態を明らかにすることでは、「大学等の研究機関」の協力が大きなウエイトを占めている。大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センターとの共同調査が実施され、遺跡に対して客観的な判断が下せたと感じている。

調査が終了した後は、教育委員会が「土を使った埋め戻し作業」と「ウッドチップを使った被覆作業」をおこなった。これまでの作業を当該事業経費（国庫補助事業：近江町内遺跡発掘調査）の中で執行した。

ウッドチップを使った被覆作業は、既に町内の黒山保全事業や、2001年に近江町教育委員会と大手前大学史学研究所が共同でおこなった人猿山の遺跡調査（宮崎2003 森下・藤本2002）においても採用事例をもつていてある。

6 古墳の実態を明らかにする

里山に眠る古墳の実態を明らかにするためには、まず正確な測量調査を実施する必要がある。かつて京都大学考古学研究室の有志によって測量調査が実施された定納古墳群であるが、近年の荒廃化によって、既に目視することができない状況にあった。

長浜坂田森林組合を指導者に据えた「伐木の安全講習会」「チェーンソー取扱資格講習会」等を定期的に取り込みながら、松枯木の伐採、繁茂するモウソウチクの伐採、雑木の伐採をおこない、南北に連立する古墳群の姿を徐々に明らかにさせ、測量調査・発掘調査へと移行させた。

7 古墳の保全（図版14）

発掘で明らかにされた遺構は、必ずしも築造当時の古墳の姿を示すものではなく、後世に改変を受けた箇所を多く持ち備えている。そのため、時代を経て改変された箇所には補修をおこない、さらに詳細な調査が展開された中心主体部については「保護砂」を充填し、丘陵尾根部において埋め戻し作業をおこなった。

古墳の整備調査では、しばしば「芝牛」や「特定の植物類」を植えつける保全処置が遂行されているが、定納古墳群では、不要な雑木や竹林を伐採し、直径20cmまでのものをチッパーシュレッダーで粉碎し、大量のウッドチップを現地でつくりだし、被覆箇所をおこなった。チップ被覆は、一定期間、雑草の生育を抑える役割を發揮し、さらに古墳の外観を整える効果もある。一見すると、風雨によって簡単に崩れそうに見えるが、雨によって固まる効果もあり、一定期間はその形を維持できそうである。

今回使用したウッドチップは、「生木」「枯木」「竹」などを混合したもので、被覆箇所では古墳本来の墳形を復元しながら積み上げることが可能であり、発掘調査によって新たに発見された「方墳（6号墳）」などは本来の形状を復原することができた。



図1 定納古墳群の整備風景

このようにウッドチップを使用した被覆では、墳形復元が容易であることと、後に雑草が生えにくいという特徴を備えている。芝生を貼り付けた整備古墳の多くでは、整備翌年から除草作業と格闘することとなるが、これを回避できる点が注目される。

今回の被覆作業は、単年度実施をイメージしたものではなく、今後継続する調査の中で、一定期間は毎年被覆を繰り返すことで「保全」の意識を地域に定着させようと計画している。

8 「里山の保全」と「文化遺産の活用」

調査が一定の範囲で終了を迎える、ウッドチップによる一時的な被覆作業を終えた段階で平成14年度～17年度の補助事業調査は終了し、その後「保全と活用」をテーマにした取り組みが、地域の里山保全団体（NPO やまんばの会）を中心として始まった。

テーマの一つは「里山の保全」であり、もう一つは「文化遺産の活用」である。平成14年度に調査を開始する前後から、荒廃した里山では、台風や集中豪雨のたびに土砂崩れがおこり、松枯木や生立木の転倒が繰り返されてきた。平成15年度には定納5号墳を埋め戻した後に樹木が倒れ、翌16年度には定納1号墳・4号墳で同様の事態に陥った。

これは調査を終えた箇所と、周辺里山との間に「環境格差」が生じたことを原因としており、周辺域の環境改善をもって、ようやく「保全」が成り立つのである。つまり貴重な文化遺産「定納古墳群」を里山の中には残すためには、周辺森林を計画的に改善していくかなければ意味をなさない。

ここでは、多様な樹種、林齡の樹木が混在して階層構造がよく発達した針広混交林と、適当な日照が確保された大径木がその中に点在する森林づくりを目指すこととなる。現在の荒廃した森林にはモウソウチクが急激に侵入し、ナラ類などの在来樹種が駆逐されているため、まずは、竹類の進入を防ぎ、本来の森林の多面的機能を回復することが必要とされる。

多くの場合、森林整備では他種の樹木を植栽することで、進入を防ぐ方策もとられることがあるが、在来種以外の樹種を植栽することは、生態系のバランスを崩すことにつながるため、いくつかのケースに区分し、「天然更新を中心として緩やかに機能回復を促すような里山づくり」を基本におかなければならない。

定納古墳群においては、東側斜面地に繁茂するモウソウチクを徹底的に切り倒し、チッパーシュレッダーを使用して粉碎し、生み出されたチップを可能な限り「古墳の墳丘」と「登山路」に被覆した。いったん伐採されたモウソウチクは、強い生命力を發揮しながら、その後も新しく萌芽させていくため、定期的な補足伐採が必要とされる。

また良策な面がクローズアップされる「ウッドチップ被覆」であるが、経年変化によって腐葉土に転ずることも知られており、定期的に新たな素材による被覆を繰り返す必要がある。

「文化遺産の活用」では、幼稚園から中学校までの学年を個々に対象とした授業と、教職員研修、社会教育委員研修などを開催した。遺跡の活用は、小学校6年生を対象とした「社会」もしくは「総合」の授業実施に採用することが一般的である。従来から、当該地域の小学校では、地元の資料館施設（近江町はにわ館）を会場に、同種の受入支援授業を展開しており、それを補足する現地見学も一定の効果をあげる教育資料となりえる。

9 「幼稚園の裏山」から「古墳の眠る里山」へ

平成元年（1989）から近江町立ふたば幼稚園では、「やまんば広場遊び」と呼ばれる『園外活動』が「幼稚園の裏山」で展開されている。

童話の「やまんば」を題材に、幼稚園教諭と園児たちの自山な発想と「やまんば広場」と呼ばれる森林が、園児たちの自然体験・環境学習の基礎を築いてきた。この「やまんば広場」は、定納古墳群のある丘陵裾部に位置しており、広場から丘陵斜面を駆け上ると今回の調査地点である定納5号墳の北端に行き着くこととなる。

つまり近年、里山が荒廃したとはいえ、丘陵裾に位置する幼稚園からは、園児たちが冒険心満載で駆け上がってくる場所が「定納古墳群」そのものであり、眼下に拡がる近江町・米原町の平野部を見おろす遊びが繰り広げられている。毎年、親子で体験するプログラムも組まれていることから、「定納古墳群」といった文化遺産よりも、「やまんば広場」といった裏山空間として、長い間、住民に知られてきた。

調査期間中は、毎年、「やまんば広場の秘密」と題した埋もれた文化遺産の話を園児と保護者に話し続け、日常を過ごす里山に古墳が所在することを周知させ続けてきた。つまり今後の課題は、「幼稚園の裏山」と理解されてきた箇所を、「古墳の眠る里山」へと転換させていくことにある。

幼稚園児が自由に活動できる里山空間を作りこむことが大事で、放置すれば荒廃するだけの森林も、園児が遊びまわることによって環境をきわめて良好に保つことが可能となる。園児一人一人の力は僅かなものであるが、集団で行動することによって「下草刈り」と同様の効果を發揮し、里山の保全には大きな力となりえている。

里山保全団体による定納古墳群と周辺の保全活動、さらには幼稚園児による体験学習が進むことで、保全領域が自然と広がり、次の整備段階へと進むことができる所以である。

10 眠れる文化遺産の活用

古代から累々と受け継がれてきた歴史・自然を後世に伝えるために、みどり豊かな近江の地において自然とふれあい、森林の持つ様々な働きを学びながら、歴史を身近に感じられる空間をつくることが「文化遺産の活用」には不可欠なものである。

近江町は息長村と坂田村が1955（昭和30）年に合併して誕生し、50年の時間を経て、再び合併して2005（平成17）年10月1日に新「米原市」に編入されることとなる。つまり多くの人が実際にこの報告書を目にするときには、既に「近江町」という自治体は消失しており、定納古墳群も米原市の「周知の埋蔵文化財包蔵地」として認識していただくこととなろう。

かつての「村名」でもあった旧地名の「息長（オキナガ）」は、古代豪族「息長氏」からつけられたもので、元来、歴史を愛し、愛郷心の高い住民が多く居住する地域であった。今後、米原市に編入合併をされた後、当地に対しては3つの基本理念に沿った整備が計画されている。この3つの基本理念とは「①古墳の成り立ちを学び次世代に伝える空間とすること」、「②良好な自然環境を保全する起点となる空間とすること」、「③自然とかかわる想いの空間とすること」である。

全国各地で展開される「公園整備」は、利便性や安全性・コスト面を考慮するあまり、訪れた人に違和感を与えることが多い。特に、古墳公園の整備では、その築造時に使われていないはずの芝を用いることで、土砂の流出を防ぎ文化財を守る手法が使われてきた。しかしながら、芝は年数回の除草作業と刈り取りが必要なため、相当額の維持経費も必要となっている。

定納古墳群では、現在までに9基の古墳が確認されているが、丘陵尾根の稜線に沿って築造されているため、長年の風雨や地滑りで表土が流出している状態にある。定納古墳群の尾根を絶て、さらに上に進むと、大型円墳「甲塚古墳」へと続く。甲塚古墳においても基本的には古墳の保護とあわせて原盤を推測しながら、ウッドチップで盛り上げて形状を成形し、古墳の周囲を周回できる散策路を設置するといった安全対策をもつことで、初めて「活用できる歴史資料」となろう。

古墳の保護材料として使用するウッドチップについては、家屋などの廃材を利用した「リサイクルチップ」ではなく、環境保全を重視して、古墳調査地周辺の整備で出てくる不要木を材料にした「現地生産のウッドチップ」を使用している。それが「環境学習」の一端を兼ねることを、すでに地域のこどもたちは理解し始めている。

定納古墳群から始める「文化遺産の眠る里山」の保全は、やがて甲塚古墳を取り込み、大掛かりに里山全体の保全を呼び起こし、その上で「歴史文化遺産（古墳）の活用」を考え続けることとなるが、現在はまだ「自然環境の保全」をキーワードとして、自然環境への影響を極力抑えた古墳公園の整備のあり方を示す段階であると考える。

ゆっくりとしたペースで自然環境を回復させる里山整備の手法を用いることで、「古墳の保護」に採用される方法も違った形となるであろうし、「活用の領域」も幅をもったものになりえると考えるのである。近い将来、自然のなかに文化遺産が溶け込んだ新しいタイプの古墳公園が出現することであろう。

参考文献

- 宮崎幹也 2003 「息長古墳群3」一人塚山古墳発掘調査報告書一 近江町文化財調査報告書第24集 近江町教育委員会
 森下卓司・藤本史子 2002 「滋賀県坂田郡近江町人塚山の発掘調査」「大手前大学史学研究所紀要」第1号 大手前大学
 史学研究所 15-25頁

II 古墳の位置と環境（図版1～3 図2）

定納古墳群は滋賀県坂田郡近江町新庄・額戸・日光寺の境界域に所在する。近江町は滋賀県の北東部に位置し、東に横山山系が連なり、西には琵琶湖が広がる。

滋賀県北東部の地質構造は、石灰岩を中心とした中古生層の西端部にあたり、伊吹山地および鈴鹿山地北部を経て、美濃帯へ続く。この周辺では、伊吹山・金仙山一帯から本町東部の多和田周辺に分布している。

約500万年前になると、三重県の伊賀地方を中心となり古琵琶湖が形成された。その後、1万年前になると氷河期も終わり、気候も温暖化し、近江町域を東から西に流れる天野川の流域も確定し、沖積平野を拡大していった。最近まで残っていた近江町から米原市に広がる入江内湖などの大小の内湖が形成されたのもこの時代である。

天野川は米原市山東町柏原の菖蒲池を源流として、途中、能登瀬から町内に入り、世継の南で琵琶湖に注ぎ込む全長約7.5kmの近江町内における主要河川である。また、町域の山は標高200～300mの低い山が多く、最も高い山は、東の八九端山（かぶと山北峰）で標高315m、定納古墳群が位置する日光寺山は標高約265mである。このように地形的には、横山丘陵の西縁部と、琵琶湖北東岸の天野川河口の沖積作用による三角州と氾濫原からなっている。宇賀戸・額戸・長沢などの集落は自然堤防の微高地に、また、世継の集落は浜堤上に立地している。

この地は、近畿地方・東海地方・北陸地方へと通ずる交通路の分岐点にあたる。そして古代から湖北第一の琵琶湖水運の拠点港である朝妻湊を天野川河口に控え、その北には世継湊が位置するという水陸ともに交通の要衝である。古代においては、東海地方から送られた官物は、東山道を経て朝妻湊に集められ、湖上を経て大津・瀬田川を下って京都・奈良へ運ばれたと推定される。そして長沢には「長沢の関」が、山津照神社あたりには「青木關」が設けられていたと伝えられる。このような交通の要衝としての近江町域の重要性は現在でも変わらず、東海道本線、北陸本線、新幹線、北陸自動車道など、日本の大動脈ともいえる交通路が町内を通過している。



図2 近江町の関連遺跡分布（国土地理院2万5千分の1地形図『長浜』『彦根東部』を改変）

近江町内で人間の生活が確認されるのは、縄文時代に入ってからである。古いものでは、縄文時代早期の土器が高瀬川の法勝寺遺跡で出土し(宮崎1990c)、前期の土器は南に接する高瀬遺跡で発見されている(宮崎1990a)。また、明確な年代は分からぬが、狐塚遺跡(宮崎1996)や黒田遺跡(宮崎1994a)からも縄文時代の遺物が出土している。縄文時代の集落は、広葉樹林を背後にし、湧水が近くから得られる微高地に営まれたと思われる。また出土した土器から、近江町周辺の縄文文化は前期には東から、中期以降は西からの土器文化の影響を受け、展開してきたことが窺える。

弥生時代前期では縦遺跡で竪穴住居と土器が見つかっている(宮崎1991d・宮崎2001b)。中期以後は淀川水系の土器の影響と、東海地方からの土器の強い影響も受けていることが、法勝寺(宮崎1990c)・奥松戸(宮崎1992a)・長沢遺跡(鬼柳はか1973)などの出土遺物から明らかとなっている。黒田遺跡でも中期から明確な遺構が見つかり(宮崎1991e)、法勝寺遺跡でも遺構数が増え、特に法勝寺遺跡では100基を超える方形周溝墓が発見されている。遺跡内においては弥生時代終末の前方後方形周溝墓や大型方形周溝墓が出現し、中核をもった墳墓群の成立が確認されている。集落遺跡は法勝寺以降、天野川を隔て南の西円寺遺跡に広がり、低墳丘墓も築かれ始める(宮崎1993)。これにより地域的な首長の出現が窺える。

古墳時代前期には日撫山古墳[長方形墳 15m](宮崎1995)が横山丘陵上に築かれ、近江町内最古の古墳と推定されている。また黒田遺跡や竪遺跡(宮崎1991d・宮崎2001b)、高瀬遺跡(宮崎1990a)においても集落が営まれ、黒田遺跡では北陸・東海・近江・四国など各地の土器を用いた水辺祭祀遺構も見つかっている。

古墳時代中期では、葺石を持つ甲塚1号墳[円墳 直径43m]、その北側にあり不整形墳もしくは1号墳の造出しの可能性を持つ甲塚2号墳(宮崎1995・小野山はか1995)や奥深古墳群が前期に引き続き丘陵上に築造される(宮崎2000)。また、帆立貝式古墳と言われている後別当古墳や、その東側の大正寺古墳[円墳]、造り出し部を持つ円墳と言われるアミタビ古墳、円筒埴輪片が採集された鶴戸山塚1号墳などもあげられるが(宮崎2000・小野山はか1995)、古墳であるという確証は見つかっていない。

古墳時代後期になると塚の越古墳[前方後円墳 40m]・狐塚古墳群・山津照神社古墳[前方後円墳 46m]・黄牛塚古墳[円墳]などの古墳が形成される。

塚の越古墳は県営は場整備の関係で、1989(平成元)年より2年にわたり発掘調査が行われた。平地に築造された前方後円墳で、埋葬施設は横穴式石室と考えられている。後円部の裾より石見型盾形埴輪が出土した(宮崎1991c)。また塚の越古墳出土と伝えられている副葬品に、同型鏡群の画文帯仏獣鏡を模倣した仿製鏡や、銅を持つ製品がみられる(小野山はか1995)。

狐塚遺跡は、一般国道8号(長浜バイパス)の建設に際して、1983・84(昭和58・59)年度に発掘調査が行われた(吉田・田中1987)。遺跡内には5基の古墳が墳丘を失った形で検出されている。狐塚5号墳[帆立貝式古墳 30m]が最も古く、多数の器財埴輪や人物埴輪が出土している。中でも武具を持つ巫女形埴輪が知られている(宮崎1996)。塚の越古墳、狐塚5号墳に続くのが、前方後円墳として町内では最大規模をもつ山津照神社古墳である。

山津照神社古墳は1882(明治15)年に神社の参道拡幅工事が行われた時に、家形石棺もしくは石層形を収めた横穴式石室が発見された。石室内部からは鏡2面のほか馬具、須恵器など多くの副葬品が出土した。その後石室は埋め戻されており、現在は見ることができない。1940(昭和15)年に京都帝国大学文学部考古学教室によって墳丘の測量調査と遺物調査が行われ、その後も立命館大学歴史研究会考古部会による墳丘測量図が作られた。1994(平成6)年には墳丘周辺の発掘調査が京都大学文学部考古学研究室によって行われ、須恵器・土師器・埴輪が出土した。墳丘裾部には円筒埴輪や朝顔形埴輪、石見型盾形埴輪がめぐらされていることが確かめられた(小野山はか1995)。なお、山津照神社古墳は、天野川中・下流域を本拠とする息長氏と関連づけられている。息長氏は、同族息長丹生氏とともに地方豪族としてこの地域の支配者であったと推定

され、「古事記」や「日本書紀」によれば、大王・天皇系譜と深く関わる皇親氏族でもあった。

黄牛塚古墳は、北陸自動車道建設工事に際して発掘調査が行われた。1975（昭和50）年の調査では横穴式石室が発見され、須恵器・土師器・勾玉などが出土している（宮崎2000）。また息長古墳群最後の前方後円墳とされていた人冢山は、2001（平成13）年の近江町教育委員会と大手前大学史学研究所による発掘調査の結果、前方後円墳ではなく、近代以降に形作られた塚である可能性が高まつた（森下・藤本2002 宮崎ほか2003）。後期の集落遺跡については不明な点が多いが、法勝寺遺跡（宮崎1990c）や碇遺跡（宮崎1991d・宮崎2001b）から遺物が出土している。

律令制下では、坂田郡八郷のうちの朝妻・上丹・阿那の三郷に属する。また、近江町域内の条里は、十一条以南に当たるが、十四条以下にそれがみられ、さらに天野川の両岸は斜行地割となっている（北村1992・1993）。この斜行地割内には、式内社の日撫神社と山津照神社も位置する。このように当町域内における条里制に規制されない地割がなされた背景として、息長氏の存在を想定する説もある（近江町史編さん委員会1989 79-81頁）が、その他にも地形による制約などの要因が考えられる。また、町内には白鳳寺院として、山田寺式の軒丸瓦が出土した法勝寺遺跡と飯村庵寺遺跡があり、両寺の造営主体は関連があるものと考えられる（北村2001）。

莊園としては、東大寺領息長荘が平安時代末期まで存続していたことが明らかであるが、その後鎌倉時代以降になると消滅し、朝妻荘、箕浦荘が成立する。しかしこれらの莊園は武家による介入や土豪の押領をうけることとなり、戦国期には北陸・東海と京を結ぶ要地であったため、六角氏・京極氏・浅井氏などの争いに巻き込まれた。

この地域における近世の産業の主体となるのは稻作で、農閑期の副業として岩脇村を中心に真綿や麻の晒布が製造されていた。また、箕浦村には中世以来、坂田郡の市場がおかれた。一方、古代以来湖北第一の要港であった朝妻湊は、慶長年間（1596～1615）に米原湊が開かれると、東海からの物資や人の流れが変化し、世羅湊とともに衰微の一途をたどることになった。

参考文献

- 近江町史編さん委員会(編) 1989 『近江町史』 近江町役場
 鬼柳彰・谷口義介・松浦俊和・大橋信弥・中谷雅治 1973 『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書』Ⅲ 滋賀県
 教育委員会
 小野山節・高橋克壽・森下章司・吉井秀夫 1995 『琵琶湖周辺の6世紀を探る』平成6年度科学研究費補助金一般研究
 B調査研究成果報告書 京都大学文学部考古学研究室
 北村丰弘 1992 『近江國坂田荘の開発（上）』『紀要』第5号 財團法人滋賀県文化財保護協会 46-55頁
 北村圭弘 1993 『近江國坂田荘の開発（下）』『紀要』第6号 財團法人滋賀県文化財保護協会 114-124頁
 北村圭弘 2001 『近江の山田寺式軒丸瓦と大上氏』『近江の考古と歴史』 真陽社 183-190頁
 坂田郡教育会(編) 1875 a 『改訂近江國坂田郡志』第一卷 日本資料刊行会
 坂田郡教育会(編) 1875 b 『改訂近江國坂田郡志』第二卷 日本資料刊行会
 坂田郡教育会(編) 1875 c 『改訂近江國坂田郡志』第三卷 日本資料刊行会
 滋賀県埋蔵文化財センター 2005 『荒神山古墳の発掘調査』『滋賀埋文ニュース』第300号 滋賀県埋蔵文化財センター
 1-2頁
 島田貞彦 1925 『近江國坂田郡能登瀬の古墳』『歴史と地理』第15巻第3号 史學地理學同好會 64-82頁
 定納古墳群測量調査団 1998 『近江町定納古墳群測量調査報告』『滋賀考古』第20号 滋賀考古学研究会 34-40頁
 高橋克壽 1995 『湖北の後期前方後円墳の動態』『琵琶湖周辺の6世紀を探る』平成6年度科学研究費補助金一般研究B

Ⅱ 調査の経過

調査研究成果報告書 京都大学文学部考古学研究室 109-121頁

- 田中勝弘 1987 「狐塚古墳群の問題」「一般国道8号（長浜バイパス）関連遺跡発掘調査報告」IV 一西火打遺跡・狐塚遺跡一 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 83-91頁
- 長浜市史編さん委員会 1996 『長浜市史』第1巻 湖北の古代 長浜市役所
- 宮崎幹也 1990 a 「高溝遺跡」近江町文化財調査報告書第4集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1990 b 「額戸遺跡」近江町文化財調査報告書第5集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1990 c 「法勝寺遺跡」近江町文化財調査報告書第6集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1991 a 「巡塚遺跡」近江町文化財調査報告書第8集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1991 b 「埋塚遺跡2」近江町文化財調査報告書第9集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1991 c 「塚の越古墳」近江町文化財調査報告書第10集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1991 d 「鍬遺跡2」近江町文化財調査報告書第11集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1991 e 「黒田遺跡」近江町文化財調査報告書第12集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1991 f 「黒田遺跡2」近江町文化財調査報告書第13集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1991 g 「天野川流域における背長墓の動向」「滋賀考古」第6号 滋賀考古学研究会 26-32頁
- 宮崎幹也 1992 a 「奥松戸遺跡」近江町文化財調査報告書第14集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也ほか 1992 b 「一般国道8号（米原バイパス）関連 黒田遺跡試掘調査概報」近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1993 「西円寺遺跡」近江町文化財調査報告書第16集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1994 a 「黒田遺跡3」近江町文化財調査報告書第17集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1994 b 「北近江の土器様相」「庄内式土器研究」VI 一庄内式併行期の土器生産とその動き—近江系土器の実態とその移動 庄内式土器研究会 45-66頁
- 宮崎幹也 1995 「近江町埋蔵文化財調査集報」1 国庫補助事業「町内遺跡発掘調査」報告書 近江町文化財調査報告書第18集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1996 「近江町埋蔵文化財調査集報」2 一狐塚遺跡発掘調査報告書— 近江町文化財調査報告書第19集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 2000 「息長古墳群1」—遺跡詳細分布調査報告書— 近江町文化財調査報告書第20集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 2001 a 「近江町埋蔵文化財調査集報」3 一町内遺跡発掘調査報告書— 近江町文化財調査報告書第21集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 2001 b 「近江町埋蔵文化財調査集報」4 一鍬遺跡 第3次発掘調査— 近江町文化財調査報告書第22集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 2002 「息長古墳群2」近江町文化財調査報告書第23集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 2003 「息長古墳群3」一人塚山古墳発掘調査報告書— 近江町教育委員会
- 森下寿司・藤本史子・宮崎幹也 2004 「滋賀県坂田郡近江町定納古墳群の発掘調査」「大手前大学史学研究所紀要」第4号 オープン・リサーチ・センター報告 大手前大学史学研究所 23-30頁
- 用山政啓・細川修平 1992 「近江」「前方後円墳集成」近畿発 山川出版社 35-43頁
- 吉田秀則・田中勝弘 1987 「一般国道8号（長浜バイパス）関連遺跡発掘調査報告書」IV 狐塚遺跡 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 古田秀則 1988 「一般国道8号（長浜バイパス）関連遺跡発掘調査報告書」V 一狐塚遺跡・法勝寺遺跡一 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会

III 調査の経過（図3～5）

近江町教育委員会では、息長古墳群の実態を考古学によって明らかにすることを目的として、大学等の研究機関と協力しながら継続的な調査をおこなってきた。

2001（平成13）年には、大手前大学史学研究所と共同で、町内額戸に位置する人猿山の発掘調査を実施した。また山津照神社古墳出土埴輪の検討など、さまざまな調査研究事業をおこなった。その中で息長古墳群の変遷を理解するうえで鍵となる、定納古墳群の内容を発掘調査によって確かめようとする案が浮上した。また地元からも定納古墳群の位置する丘陵を里山として整備し、遺跡と自然を活用する計画が提出された。

これを受けた近江町教育委員会は、大手前大学史学研究所と共同で、定納古墳群の発掘調査に着手することとなったのである。

定納古墳群の存在が知られたのは、北陸自動車道の敷設工事以前に遡る。滋賀大学・立命館大学有志の踏査によって計7基の墳墓の存在が確認され、1～7の番号が振られた。このうち6号墳は道路建設によって消滅し、7号墳も墳丘のほとんどを失った。

1992（平成4）年に刊行された『前方後円墳集成』近畿編において用田政晴氏は、群中に前方後円墳の存在を認め、「定納古墳」として提示している（用田・無川1992：143頁）。全長35mと復元され、「後円部背面に平坦部を備える」と注目すべき観察結果が示されている。

1998（平成10）年、定納古墳群測量調査団によって、はじめて本格的な測量調査がおこなわれた（定納古墳群測量調査団1998）。これによって、5基の古墳が現存することが確認され、北から1～5号墳と名づけられた。

近江町教育委員会と大手前大学史学研究所による発掘調査および保護・整備事業は、2002～2005年度にわたりて実施された。

2002年度には樹木の伐採・測量・表土掘削など準備となる作業をおこない、2003・2004年度に本格的な発掘調査をおこなった。

以下に2002～2005年度における調査の経過について、日誌の抄録などを利用しながら、一部記述や表現に変更を加えて掲げる。特に記さない限り2002・2003年度調査に関しては5号墳についての調査事項を示し、2004年度に関しては1号墳の調査事項を示す。

2002年度

3月13日 斎栗土木課林業担当・近江町教育委員会・NPO法人やまんばの会による三者協議。

4月26日 地権者説明会を実施。

5月13日 伐木安全講習会を開催。

5月14日～31日 5号墳の伐木作業。

7月30日 割付作業を実施。

9月4日～10月31日 表土掘削作業を実施。

11月22日～24日 測量調査。

11月29日 現地調査終了。

2003年度

6月19・20日 チェーンソー安全講習（滋賀県林業災害防止協会）を開催。

7月1日 伐木安全講習会を開催。



5号墳墳丘北東部



5号墳墓室検出状況



5号墳跡跡検出状況



5号墳墳丘施設写真撮影

図3 調査風景（1）

7月3日 伐採作業・発掘作業開始。

7月28日 5号墳埋葬施設の調査開始。

8月4日 検出墓塚の写真撮影。

8月7日 墳丘部分のレーザー三次元計測。

8月8日 台風のため作業中止。

8月13日～8月18日 盆休み。大手前大学を会場として第52回埋蔵文化財研究集会を実施。

8月20日 墓塚掘り下げ開始。埋葬施設が2基並列する可能性。

8月21日 東棺の南端部を検出。

8月22日 周溝周辺の土壤掘削。墓塚写真撮影。

8月23日 藤本引率のもと考古学実習Ⅰの受講学生見学。はにわ館および近江町内の遺跡見学も行なう。

8月24日 墓塚内において東棺の輪郭を検出し、例抜式木棺であることを確認。埋葬施設保護のため、テント設営を試みるが、突風のため延期。

8月25日 テントを墳頂部に設営。墓塚北端の畦幅を狭め、棺の肩幅確認。サブトレンチにおいて顔料検出。周溝部を掘り下げ、北へ拡張。

8月29日 1号墳のレーザー三次元計測行なう。寿福滋氏に棺端部および赤色顔料についての細部撮影を依頼、下見に来訪。

8月30日 寿福氏による埋葬施設検出状況の写真撮影。

9月1日 埋葬施設に東西畦北側にサブトレンチを設定し、掘り下げ。墳丘部は周溝部付近を北側へ延長し、墳塁を確認。

9月2日 墳丘指をほぼ検出。墳丘北部は20cmコンタラインで平板測量。

9月5日 排水溝の調査。

9月7日 墳丘南部の「くびれ部」精査。地山まで掘削。ここで2つの墳丘に分かれることが判明。5号墳の墳形は方墳であり、その南に別に一基の古墳があることになる（7号墳）。東棺北小口において鉄器出土。

9月8日 東棺はば検出作業終了。埋葬施設のレーザー三次元計測。

9月9日 西棺掘り下げ。雷雲接近のため午後4時で作業中止。

9月15日 寿福氏により埋葬施設を中心として撮影。

9月18日 塚本氏、筒本氏によって埋葬施設付近のレーザー三次元計測。西棺の棺底検出。

- 9月21日 墓葬施設清掃後、寿福氏により写真撮影。
- 9月22日 近江町立双葉中学校の生徒が、調査見学と作業実習のために来訪。
- 9月24日 長浜市役所記者クラブにおいて記者発表。現地説明会資料の作成。
- 9月29日 現地説明会を実施。
- 10月4日 鉄製刀子に薬品処置を施し取り上げ。墓壙中央部断ち割り、実測・写真撮影。
- 10月5日 調査終了。保全作業開始。
- 12月19日 現地作業終了。

2004年度

- 6月1日 伐木安全講習会を開催。
- 6月2日 伐木作業・発掘調査開始。
- 7月26日 調査区設定。1号墳墳丘測量団体足。
- 7月27日 1号墳墳頂部表土剥ぎを行い、精査。
- 7月29日 墳頂部で墓壙・陥没ラインを確認。
- 7月30日 1号墳の主軸に沿って前方部南へ調査区設定。
- 7月31日 降雨のため現場中止。やまんばの森を見学。
- 8月2日 2号墳北側において検出した溝は幅1mを超える規模と判明。1号墳と2号墳の間にもう1基古墳がある。
- 8月6日 墳頂部調査区の精査を行い、西側にて墓壙の輪郭検出。墳頂部を斜めに横切る溝跡は過去の調査のトレンチと断定。
- 8月13日 南北畦を除去。
- 8月14日 墳頂部東西サブトレンチを掘り下げ。東・西調査区精査。墳丘の東西断面略図作成。
- 8月19日 墓葬施設検出。中央の擾乱穴掘削。東西畦沿いに排水溝らしき遺構（溝状施設）を確認し、東側には埋葬施設はないことが確定。埋葬施設は墓壙内に一基のみ。
- 8月23日 排水溝らしき部分の上部畦を除去。7号墳の埋葬施設の調査区を設定。
- 8月24日 中央東西畦南側上層図作成。擾乱穴も含め再精査。墳丘北・東・西各調査区内の根を除去。7号墳埋葬施設の墓壙ライン検出。
- 8月26日 墓壙内掘り下げ、墓壙肩を検討。埋葬施設中央擾乱土より鉄器片出土。
- 8月28日 摆乱溝南壁から筒形銅器の底面を検出。
- 8月29日 墓葬施設、旧構造トレンチ、擾乱溝・穴、畦を清掃し写真撮影。5～7号墳南北畦実測。7号墳・東畦断



5号墳レーザー3次元計測



5号墳現地説明会



双葉中学校作業実習



7号墳—5号墳間の溝

図4 調査風景(2)



やまんばの森見学



1号墳墳頂施設



1号墳現地説明会



5号墳炭化物サンプリング

図5 調査風景（3）

面写真撮影・実測。

8月30日 午前中台風接近のため土蔵で養生。

9月1日 墳頂部清掃、午後よりテントを設営した後、棺内の掘削開始。

9月2日 墓葬施設精査。北調査区再精査。全体の模式図作成。

9月4日 墓葬施設調査継続。棺南部・中央部は棺底に到達。埴丘各調査区精査し、東南部でくびれ部を確認。藤本引率し、大手前大学考古学実習I受講生4名、武庫川女子大学考古学受講生3名見学。

9月6日 筒形銅器を覆う黒色物質の付着状況を写真撮影し、その後黒色物質を除去した上で写真撮影。筒形銅器表面に布付岩痕確認。墓葬施設北部埴の断面図作成。東くびれ部調査区において後方部南辺を検出し、前方後方埴と確認。

9月10日 午前より寿福氏により、墓葬施設撮影。前方部西南隅に新たに調査区設定。

9月13日 筒形銅器取り上げ。近江町教育委員会事務局において記者発表。

9月14日 午前中雷雨のため待機。午後よりパレオラボ植田弥生氏来訪、5号墳墳頂部焼土、1号墳筒形銅器下層木質部、棺底顔料サンプリング。

9月15日 東くびれ部をさらに掘削。写真撮影のため全面清掃。夕方、NHKニュースにて現場紹介放送あり。

9月16日 寿福氏により写真撮影。朝刊各紙に現場の紹介記事掲載。

9月17日 現地説明会資料作成と現地設営準備。

9月18日 午前10時より筒形銅器をはにわ館ロビーにおいて展示。午後1時より現地説明会開始。約100名参加。午後3時大雨のため撤収。

9月22日 7号墳の墳頂部を精査。

9月23日 東くびれ部調査区掘削後、全景写真撮影。撮影終了後、東くびれ部実測、東調査区土層断面図終了。7号墳は埴丘確定のため掘削。

9月27日 各調査区の土層断面図作成。

11月19日 現地調査一時終了。

2月22日～3月25日 墓め戻し作業再開。

2005年度

4月13日 伐木安全講習会を実施。

4月14日 補足調査・遺構核覆作業開始。

9月15日 現地調査終了。

<調査指導・協力者>

本発掘調査の実施にあたっては研究者各氏および諸機関から幅広いご指導・ご協力をいただいた。

赤塚次郎 梅本康広 大林文彦 大林宗男 桂田峰男 河内一浩 北川久志 北村 開 車崎正彦
 黒坂秀樹 小北晶男 阪口英毅 下垣仁志 白井忠雄 濑口眞司 高居芳美 高橋克壽 高橋順之
 趙 栄済 辻川哲朗 中井 均 中井正幸 中川治美 中司照世 中村大介 南部裕樹 額田由美子
 橋本明子 橋本英裕 廣瀬 覚 藤井康隆 村木二郎 森島一貴 安田 滋 用田政晴 和田晴吾
 やまんばの会 近江町立図書館 近江町母の郷文化センター 近江町生涯現役センター
 (株) バレオラボ

<調査参加者>

発掘調査は大手前大学人文科学部秋山進午・榎本誠一教授の指導を得ておこなった。調査参加者・協力者は以下の通りである。参加学生はすべて大手前大学の学生であり、学年は参加当時のものである。

2002年度調査

調査員 宮崎幹也 (近江町教育委員会)
 森下章司 (大手前大学人文科学部・大手前大学史学研究所)
 藤本史子 (大手前大学人文科学部・大手前大学史学研究所)
 橋本明子 (大手前大学大学院人文科学科研究生)
 奥田智子 山口勝頼 (大手前大学人文科学部史学科2年)
 津田剛志 (大手前大学人文科学部史学科1年)

2003年度調査

調査員 宮崎幹也 森下章司 藤本史子
 レーザー3次元計測 塚本敏夫 (財團法人元興寺文化財研究所研究員・大手前大学史学研究所共同研究員)
 岡本篤志 (大手前大学史学研究所研究員)
 写真撮影 寿福 澄 酒井純子 (寿福写房)
 調査参加学生 岩崎浩隆 奥田智子 神舎知宏 徳永将憲 山口勝頼 (大手前大学人文科学部史学科3年)
 横原 聰 竹知克征 津田剛志 村上大介 (大手前大学人文科学部史学科2年)
 畑中麻由 (大手前大学人文科学部史学科1年)
 調査補助 魚津知克 (大手前大学史学研究所研究員)
 岩本 崇 (大手前大学史学研究所PD研究員)
 中村朋子 (大手前大学史学研究所PD研究員)
 赤松和佳 (大手前大学史学研究所RA研究員)

2004年度調査

調査員 宮崎幹也 森下章司 藤本史子
 レーザー3次元計測 塚本敏夫 岡本篤志
 調査参加学生 奥田智子 山口勝頼 (大手前大学人文科学部史学科4年)
 井上繪里 川上文子 佐藤路子 竹知克征 松本美沙 村上大介 山崎麻衣子 (大手前大学人

文科学部史学科3年)

原田章史 荒木清隆(大手前大学人文科学部史学科2年)

江口 裕 田中佑典 鮎 耀昌(大手前大学人文科学部史学科1年)

調査補助 魚津知克 岩本 崇 中村朋子 赤松和佳

赤色顔料・木材・炭化材分析

植田弥生 藤根 久((株)パレオラボ)

2004~2005年度 整備事業

宮崎幹也 やまんばの会

参考文献

川田政晴・細川修平 1992 「近江」「前方後円墳集成」近畿編 山川出版社 35~43頁

IV 調査の成果

1 古墳の名称と調査の方法（図6）

今回の調査の結果、定納古墳群は9基の古墳からなることが判明した。

1998年の測量調査では計5基の古墳が確認され、北から1～5号墳と名づけられた。今回の調査で1号墳と2号墳の間に1基あることが判明した。また5号墳は当初、前方後円墳ないし前方後方墳としてひとつの古墳に数えていたが、2基の古墳に分かれることを確認した。ここでは1号墳の南に新たに確認した古墳を6号墳、5号墳の東に分離された古墳を7号墳と呼ぶことにする。なお3・4号墳についても発掘調査によって数が増減する可能性がある。また北陸自動車道敷設以前の踏査において尾根の南端で確認され、自動車道建設によって破壊された6・7号墳をそれぞれ8・9号墳と改称する。

踏査・1998年測量時の番号	今回の調査番号	墳形
1号墳	1号墳	前方後方墳
	6号墳	方墳か
2号墳	2号墳	方墳か
3号墳	3号墳	未調査 方墳か
4号墳	4号墳	未調査
5号墳	5号墳	方墳
	7号墳	稍円形墳
6号墳	8号墳	消滅
7号墳	9号墳	全壠 一部残存か

調査結果の報告に入る前に、調査の方法と手順、問題点について触れておく。

調査は2002年度、まず5号墳から始めた。この古墳がもっとも高い位置にあり、規模からみて中心的な墳墓と考えたからである。地形測量の結果から、後円部を西に向けた前方後円墳と推定して調査にはいった。

2002年度の調査ではまず樹木を全面的に伐採し、広く調査をおこなうための準備をおこなった。墳丘のほぼ半分を対象とした。5号墳の裾部が直線をなすことが判明し、前方後方墳となる可能性を想定した。

だが2003年度の調査で、後方部と推定した高まりと前方部と推定した高まりとの間が掘削で分かれており、それぞれ別の墳丘であることが判明した。なお墳丘北東斜面の流土中から須恵器2片が出土した。

2003年度は5号墳の墳丘調査とともに埋葬施設の調査を主眼としていた。墳頂部の表土を取り除くとすぐに基壙の輪郭が検出された。その軸は南北を向き、前方後方墳との推定時に設けた座標軸からは大きずれるものであったため、埋葬施設の座標を設定し、縦に1本、横に3本の畦を設けて墓壙内の掘削にはいった（図版28-1）。やがて東寄りの区画で赤色顔料の上縁を検出し、東西に並んで2つの棺が設置されていることが判明した。周囲の埋土には大量の黒褐色粘土があり、粘土で棺を固定したものと推定された。この時点で大型のテントで墓壙を覆い、また大量の水を運搬して撒布し夏日による乾燥に対処した。

墓壙内埋土を精査する一方、棺の形状を正確に把握するために横軸の畦脇に細いサブトレンチを設けて断面形状を確認し、また棺の縱軸に細い畦を設けて棺内の掘削を進めた。断面の状況から2つの棺は同一墓壙内に納められたものであり、切り合い関係がないことを確認した。また被覆粘土がなく、棺の身の部分の周

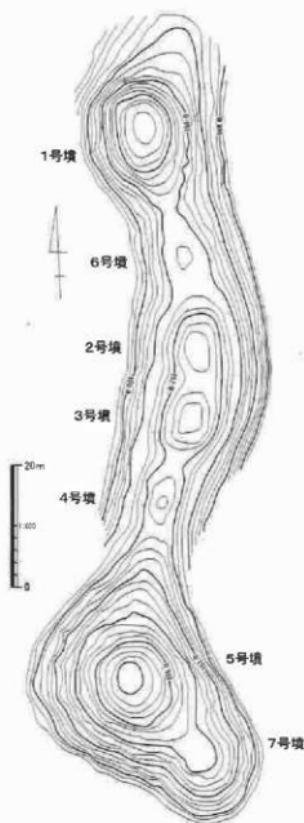


図6 定納古墳群
(定納古墳群測量調査図1998 図2を改変トレース)

確認することも目的としていたが、そうした存在を示す材料はえられていない。

墳丘南斜面の盛土層に炭や赤変した土を多くふくむ層のあることが注意された。

7号墳については墳頂部で埋葬施設や棺に関連する土層状況を検出したが、この年の調査では墳丘全体の削り出しにとどめた。

なお5号墳の墳丘および埋葬施設のレーザー3次元計測を、塙本敏夫・岡本篤志両氏によって実施した。

2004年度は1号墳の調査を主とし、5～7号墳について部分的な調査をおこなった。まず2～4号墳筋に

圓を粘土で固めた形式であることがわかった。縦軸の壁は仕切板の検出等をめざしたものであるが、塙土に差は認められなかった(国版33)。東棺はやや淡い朱色の顔料層、西棺は中央部に広がる紅色の顔料層を棺底と判断し、棺内の縦の細柱をはずし、実測図作成後、横軸の壁を除去して全面的な検出を進めた。両棺は大きさが異なるとのほか、とくに端部の造作に差があることが注意を引いた。東棺は端部にあたる粘土が垂直に立ち上がるのに対し、西棺では棺内に粘土塊を置いて端部を塞いでいた。

副葬品は東棺北端にあった刀子1点のみで、西棺には副葬品は認められなかった。なお棺内の埋土はすべて土壺に回収し、ふるいがけをおこなった。

棺底の検出が終わったところで全景写真を撮影した。撮影後、平面図、断面図を作成し、さらに埋葬施設の構造の確認を目的として、西棺端部粘土塊の断ち割り調査、サブトレンチの掘り下げ、墓域外への拡張をおこなった。墓域外では墳丘の断ち割りへと掘り進め、盛土状況を観察・記録した。

墳丘の調査においては、流土と盛土との識別に困難があり、畦によって土層の状況を確認しつつ何度も削り出しをおこなった。7号墳との間に溝が入ることはこの過程で判明した。墳丘北東斜面は本来の面の流出がいちじるしいが、7号墳との間の部分ははやくから流土で覆われていたことが予測され、注意深く墳裾を調査した。その結果、墳裾を走る細い溝を検出した。

またこの削り出しの過程で、盛土と地山の粘土質層との違いが明らかとなっていた。これにもとづいて南東面の精査をおこなった結果、反対の北西斜面のように急な斜面ではなく、途中の地山上で一つの段を作り出しながらゆるやかに傾斜する斜面であることが判明した。この時点で埋葬施設の位置が墳丘の中央から西よりにずれることも明白となった。この時点では墳丘墓等の上に、別の占墳が重なってつくられた可能性も想定してみた。

しかし先の断ち割り調査は、別の下部埋葬施設の有無を確認することも目的としていたが、そうした存在を示す材料はえられていない。

残っていた樹木の伐採をおこなった。

1号墳は、現地形からは前方後方墳ないし前方後円墳状の高まりを認めた。しかし前方部はきわめて低く、5号墳と7号墳のように別々の墳丘に分かれる可能性も考えられた。

墳頂部では埋葬施設の確認のため全体を覆う調査区を設定した。前方後方墳との想定をもとに、墳頂部に中心点を仮に決め、主軸に沿って南北に長い調査区を、東西に各1本の調査区を設けた。

1号墳の調査においても流土と墳丘土との判別に当初苦しつんだが、盛土層の堆積の特徴をつかみ、また地山の立ち上がりを確認して、それをもとに掘削を進めた。やがて南調査区において、当初の想定より北寄りに前方部の端が確認され、前方部が短くなることが判明した。これにより、墳丘の平面形を復元するためにくびれ部の形状を正確に確かめる必要が生じ、新たに東くびれ部調査区を設けた。また前方部前端の形状を見るために、南調査区を東西に拡張し、前方部東・前方部西調査区を設けた。これらの調査区では調査土量が多く生じ、労力を必要とした。

墳頂部では表土掘削後、中央に大きな擾乱穴がみつかり、その清掃過程で埋葬施設を確認した。これより東にも平坦面に空間があり、埋葬施設の存在が想定されたため、その検出に時間を費やしたが、最終的に東西方向に2本のサブトレンチを設けて確認した結果、ここには埋葬施設は認められず、1基のみであることが判明した。

埋葬施設を破壊している中央の擾乱穴、溝をまず掘削していった結果、棺内に施された赤色顔料の線や、その下の粘質土層を確認した。しかし一方で墓壙の平面形の検出には難渋し、北部は残存部が地表面から浅いせいもあってか、明確にはできなかつた。一方棺の平面形についても、北端は明確にできなかつた。

棺の中央を横断する擾乱溝を清掃している際に筒形銅器の底部が確認された。筒形銅器本体をとりまき、またその周囲にも広く黒色物質が認められたので、その状況を記録・確認しながら調査を進めた。

また前年度やり残した5号墳埋葬施設にともなう排水溝の有無、7号墳の精査をおこなった。結局排水溝は確認できなかつた。7号墳では端部が流出しているものの、やはり長大な刳抜式の棺を用いた埋葬施設があることを確認したが、内部の掘削はおこなっていない。

2004~2005年度にかけて、古墳群の保護および周辺域の整備作業をおこなった。丘陵上に通ずる道脇に繁茂していた雑木や竹を伐採・整理した。チッパーを用いてそれらの伐採材を粉碎し、古墳上や道の周辺に散布した。雑草を抑える役割を期待できるものである。なお7号墳埋葬施設についても一部補足調査をしている。

2 定納1号墳（図版4~7・15~22・24・25 図6~21）

墳丘 1号墳は古墳群中でもっとも北に位置する。裾部の標高150~151m。後方部を北に向かた前方後方墳で、主軸は尾根筋に沿う。尾根の西側と東側はともに古墳の墳丘より下が、崖状の急な傾斜面となっている。またはやくから注目されているように、後方部の北側に平坦面が存在する。

墳丘形状の調査を目的として、後方部北斜面・東斜面・西斜面にそれぞれ幅0.5mの調査区を設けた（図8・9）。それぞれ後方部北調査区・後方部東調査区・後方部西調査区と呼ぶ。後方部南斜面から前方部の前端を通って、隣の6号墳・2号墳に達する調査区を南調査区と呼ぶことにする。

後方部西調査区では、裾部となる傾斜変換点が明瞭であり、その外側の平坦面も2m幅で残っていた（図10）。裾部の標高149.8m。地山と墳丘盛土との境界は標高151.7m。流土は平坦面上では1m近くの厚さであった。流土層の中には炭を多量に含む層が認められた。

後方部東調査区では傾斜変換点を墳丘裾ととらえ、それより東側はゆるやかな傾斜面が続く（図11）。ここは尾根の斜面にあたる側であり、土砂の流出が北や南に比べていちじるしいものと考えられる。このゆるや

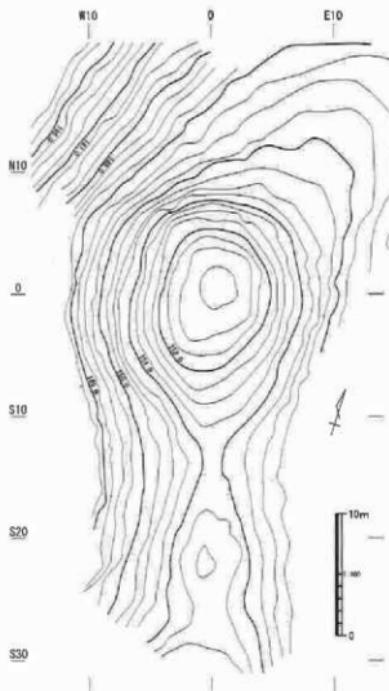


図7 定納1・6・2号墳の地形図

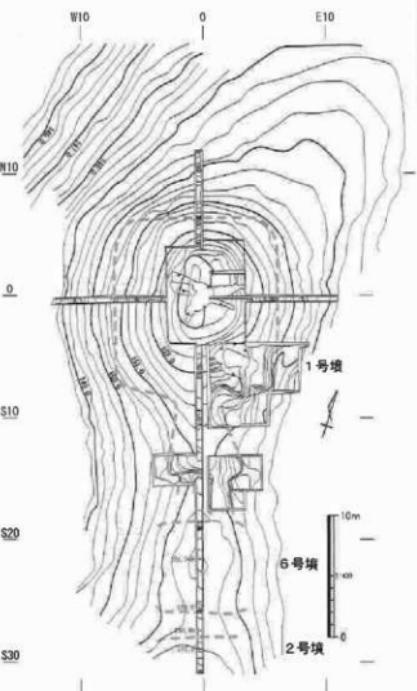


図8 定納1・6号墳の墳丘・各調査区平面図

かな傾斜面も本来は平坦面を形成していた可能性が考えられる。裾部の標高150.7m。ここでの地山と墳丘盛土の境界は標高151.1mである。

後方部北調査区では、検出した墳丘斜面は比較的急な傾斜であり、とくに裾部からはまっすぐに近い立ち上がりを示す(図14)。上半では傾斜が変わり、ややゆるやかなものとなっている。墳丘下部では砂質・粘質の流土が厚いところでは1m近く堆積していた。裾部の標高は150.8m、裾部から幅3.8mの平坦面が続き、そこから北へまた傾斜が始まっている。北・西調査区で認められたこうした平坦面は古墳築造時にくりだされたものとみてよいだろう。地山と盛土との境界は標高151.2mである。盛土には粘質土を中心にして10~20cm程度の細かい単位で積み上げている(図版17-2)。

南調査区および東くびれ部調査区では、後方部の南斜面および前方部上面・前端を確認した(図15)。後方部南斜面における地山と盛土との境は標高151.2mであり、ほぼ前方部上面の高さとそろっている。前方部はすべて地山の割り出しによって形作られている。前方部前面の斜面は比較的急傾斜な形状を残す。前方部前端裾の標高150.1m。なお前方部前端と6号墳との間の掘割は、堆積土の状況から一気に埋没したものと考えられる。

以上の調査の結果、墳丘は全長21.4m、後方部長15.0m、後方部幅13.3m、前方部長6.4m、前方幅5.9m、後方部高は北裾からでは2.0m、前方部高0.7mとなる。後方部は前後にやや細長くて大きく、それに比べて

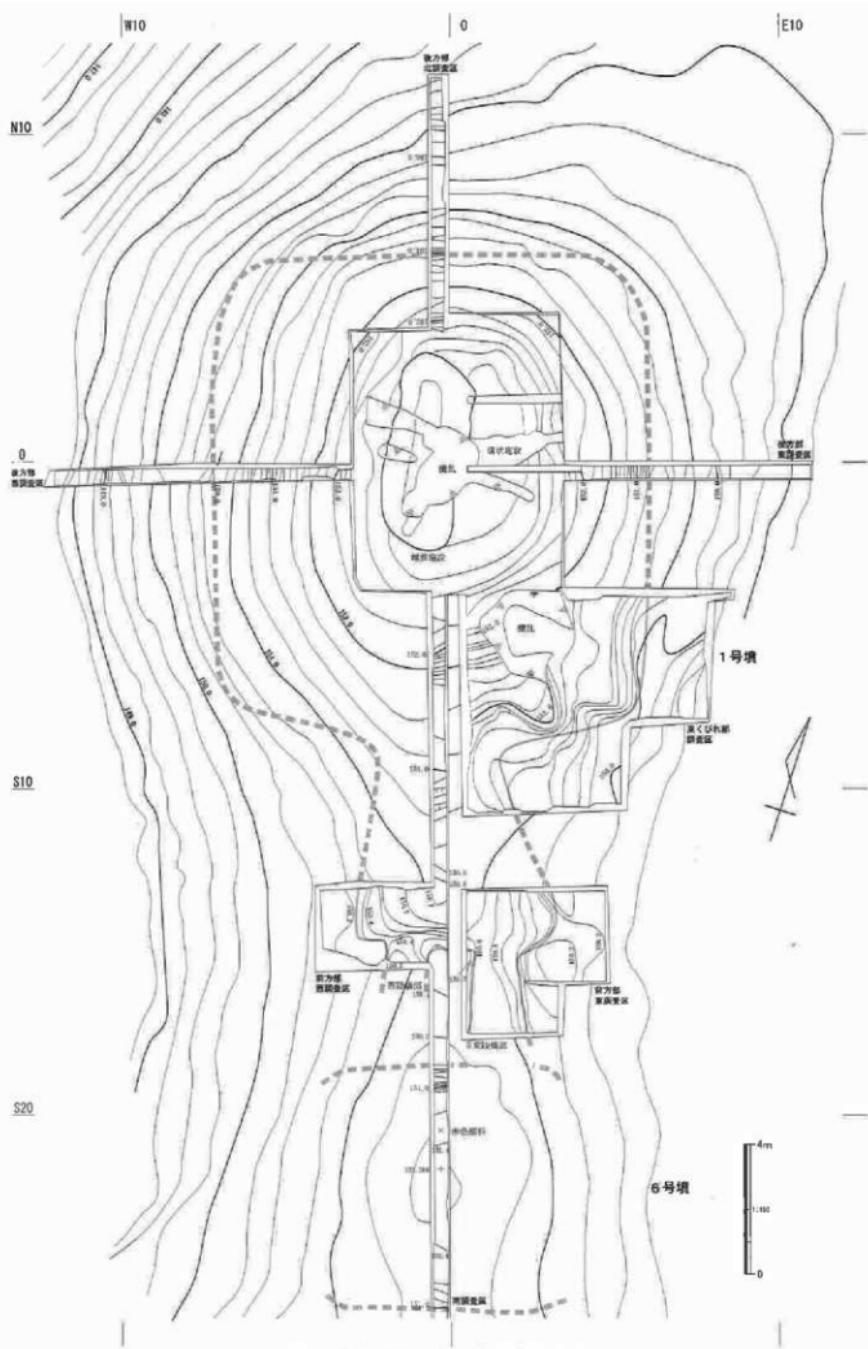


図9 定納1号墳の墳丘・各調査区平面図

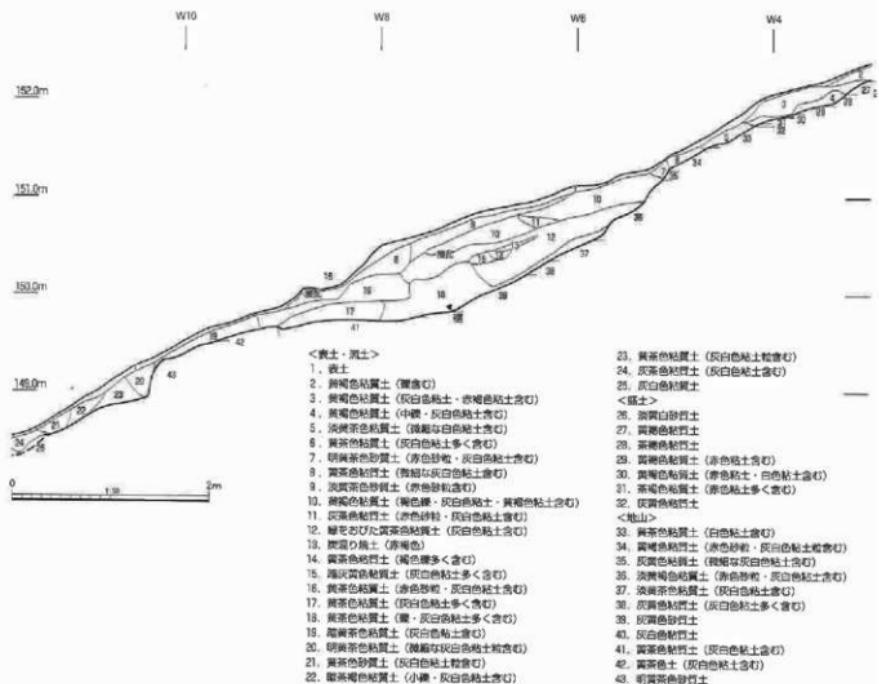


図10 定納1号墳後方部西調査区上層断面図

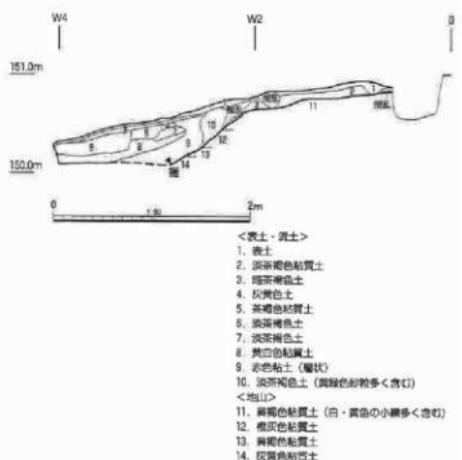


図12 定納1号墳前方部西調査区土層断面図

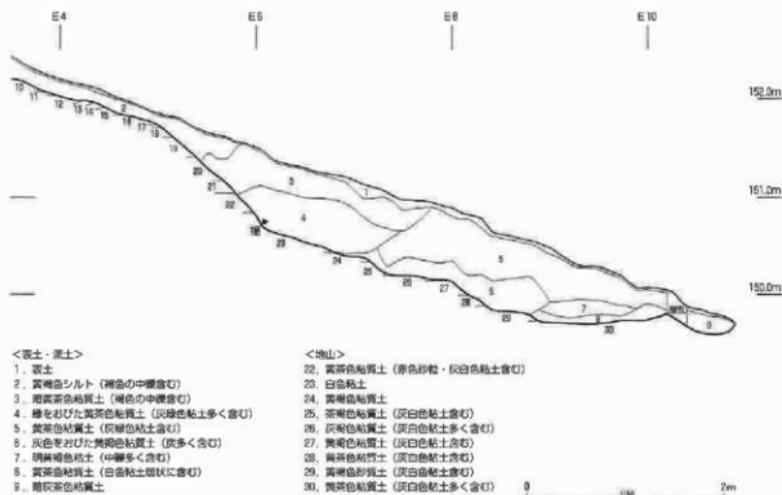


図11 定納1号墳後方部東調査区土層断面図

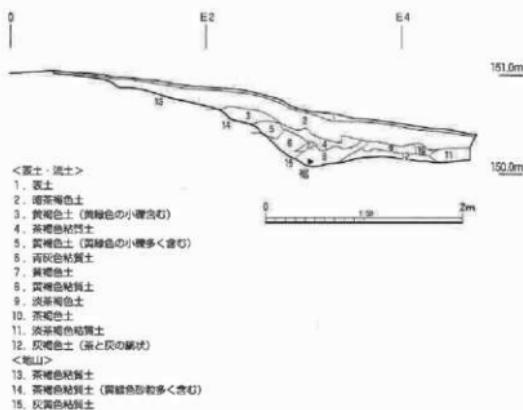
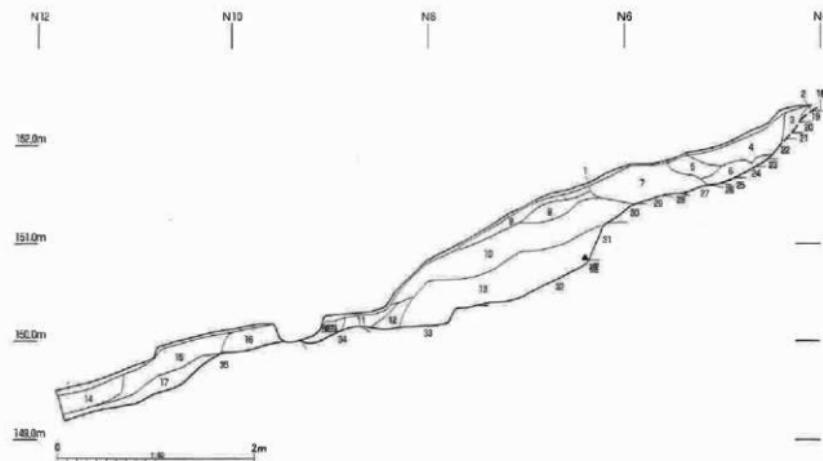


図13 定納1号墳前方部東調査区土層断面図



<土・土質>

1. 黄土
2. 淡黄色粘質土（薄・白色粘土層・含む）
3. 淡黃色粘質土（しまりあり 微細な網状粘土層）
4. 淡茶褐色粘質土（中層・灰度Ⅳ）
5. 茶褐色粘質土（白色粘土層）
6. 青褐色粘質土（薄・白色粘土層）
7. 青褐色粘質土（薄・褐色・白色粘土層含む）
8. 白雲岩粉質土
9. 青褐色粘質土（中層含む）
10. 細毛土びじの黄茶褐色粘質土（灰白色粘土層含む）
11. 酢酸紫色粘質土（白色粘土層多く含む）
12. 四四色粘質土
13. 黄角をもじた青褐色粘質土（炭多く含む）
14. 暗灰茶色粘質土（灰色粘土・灰度Ⅳ）
15. 暗茶色粘質土（灰白色粘土・含む）
16. 黑茶色粘質土（褐色・灰白色粘土層）
17. 茶褐色粘質土（灰白色粘土層含む）

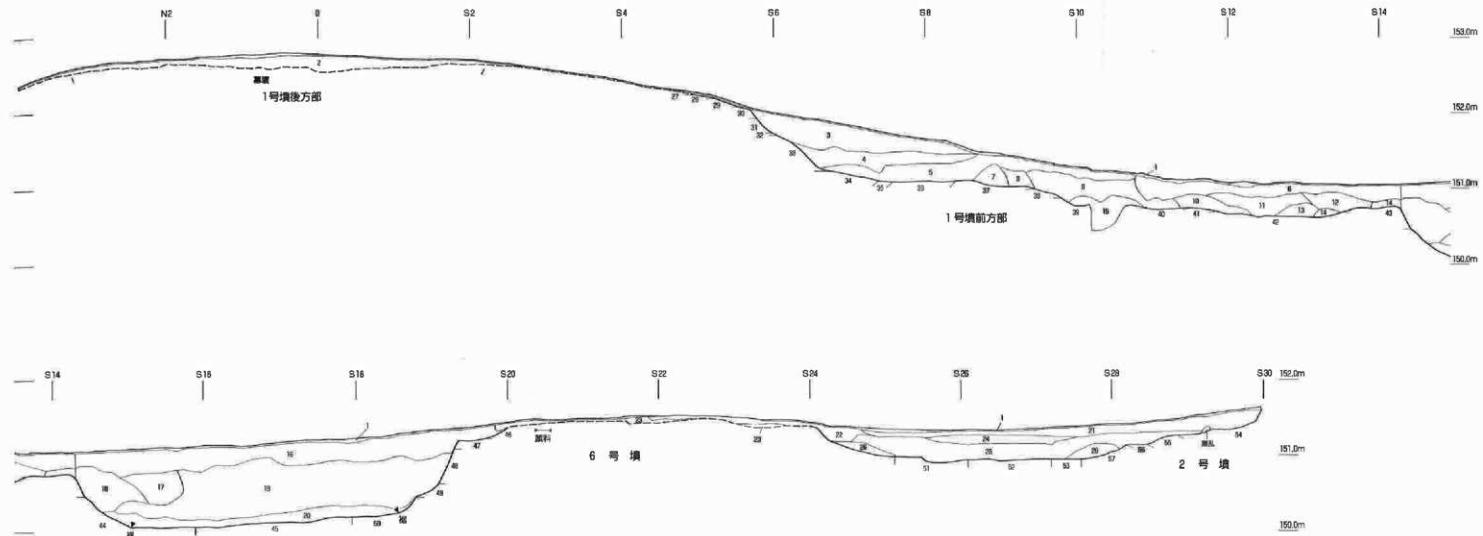
<底土>

18. 浅灰黄色砂質土
19. 白色粘土層り明黄色粘土層
20. 明黄色粘土層
21. 黄褐色粘質土（白色粘土層）
22. 青褐色粘質土（白色粘土層）
23. 茶褐色粘質土（白色粘土層）
24. 暗褐色粘質土（灰白色粘土層）
25. 茶褐色粘質土（灰色粘土層）
26. 茶褐色粘質土（白色粘土層）
27. 明黄色粘土層（灰白色粘土層）
28. 明褐色粘質土（灰白色粘土層）
29. 茶褐色粘質土（赤褐色・含む）
30. 青褐色粘質土（白色粘土層）

<地山>

31. 黑茶色粘質土（灰白色粘土層）
32. 黑茶色粘質土
33. 黑白色粘質土
34. 淡黄色粘質土
35. 青褐色粘質土

図14 定納1号墳後方部北調査区土層断面図



- <表土・透土>
1. 黄土
 2. 黄褐色砂質土
 3. 黄褐色砂土 (中砂質・白色砂土含む)
 4. 黄褐色砂土 (中砂質・白色砂土)
 5. 黄褐色粘土 (白色粘土含む)
 6. 黄褐色粘土 (白色粘土含む)
 7. 茶褐色粘土 (淡茶色)
 8. 黄褐色粘土 (褐色源、明黄色粘土含む)
 9. 黄褐色粘土 (白色粘土含む)
 10. 黄褐色粘土 (白色粘土含む)
 11. 茶褐色粘土 (白色粘土多く含む)
 12. 茶褐色シルト (白色粘土多く含む)
 13. 茶褐色粘土 (小量・斑点)
 14. 淡黄色褐色粘土 (淡茶色)
 15. 暗褐色粘土質土 (淡・白色粘土含む)
 16. 黄褐色粘土質土 (中砂質・白色)
 17. 黄褐色粘土質土 (白色粘土含む)
 18. 黄褐色粘土質土 (白色粘土含む)
 19. 淡黄色褐色粘土 (白色粘土含む)
 20. 黄褐色シルト
 21. 黄褐色粘土 (白色粘土含む)
 22. 黄褐色粘土 (白色粘土含む)
 23. 黄褐色粘土 (白色粘土含む)
 24. 黄褐色粘土
 25. 茶褐色粘土質土 (白色砂土含む)
 26. 縮をかけた茶褐色砂質土

- <底土>
27. 淡黄色砂質土
 28. 黄褐色粘土質土
 29. 白色粘土質土 (淡黄色粘土質土)
 30. 黄褐色粘土質土
 31. 白色粘土 (白色粘土含む)
 32. 黄褐色粘土質土
 33. 黄褐色粘土 (赤褐色・淡茶色)
 34. 淡黄色砂質土
 35. 黄褐色粘土質土
 36. 黄褐色粘土質土
 37. 黄褐色粘土質土
 38. 黄褐色粘土質土
 39. 黄褐色粘土質土
 40. 白色粘土 (白色粘土含む)
 41. 白色粘土 (白色粘土含む)
 42. 白色粘土 (白色粘土含む)
 43. 白色粘土 (白色粘土含む)
 44. 灰白色粘土混り黄褐色粘土
 45. 白色粘土混り灰白色シルト

0 1m 2m

図15 定斜1・6・2号墳断面図

前方部は短小である。後方部から前方部へのくびれ部は、後世の擾乱によって形状がそこなわれている。また前方部端から2本の陸橋状の高まりが南の6号墳にむかって伸びる。

墳丘に段築はなく、後方部はかなり急な斜面をなしている。墳丘裾は地山の削り出しによって形成され、裾から周囲にかけてやや傾斜をもつ平坦面を作りだしている点が特徴である。墳丘部における地山上面の高さは、西から東にやや傾斜している。それより上を盛土で形作る。前方部は地山の削り出しのみで成形され、盛土はみられない。

盛土の積み方は、攪乱溝の断面(図版22-1 図19)、東くびれ部(図版19-2)で観察できる。地山上の盛土は10cm程度の厚さの単位で、基本的には水平に積む。とくに東くびれ部では地山の上にある、ほぼ水平な盛土層の堆積がみられる。

前方部端においては、南にむけて伸びる2本の土手状の陸橋を認めた(図版18-19-1)。双方とも地山削り出しによる。前方部の上端から一段下がったところから伸び、上面はゆるやかな曲面をなす。東陸橋は裾からの高さ0.4m、検出長2.5m、幅1.8mである。西陸橋は東より低く、幅も狭い。高さ0.4m、検出長0.6m、幅1.5mである。これらの陸橋の全体を調査することはできなかったが、現地形などからみて、少なくとも東陸橋は南にまっすぐ伸び、6号墳と接続する可能性が高い。

埋葬施設 後方部頂に一基の埋葬施設が設けられていた(国版6・20・21 図16・17)。中央の大きな撿乱穴(近世墓か)や東西・南北に走る撿乱溝によって損なわれた部分が多い。比較的残りのよい西半の状況からみると長楕円形を呈する墓壙をもつ。墓壙長軸の長さ6.0m、短軸の幅2.4mに復元できる。木棺を直葬したもの。

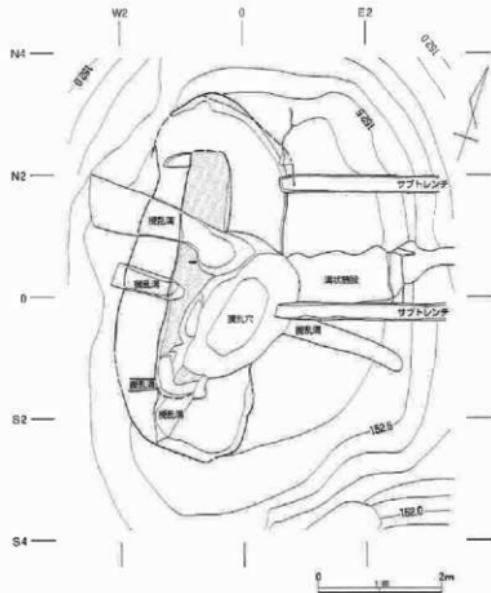


図16 定納1号墳後方部の墳頂平面図（網部分は赤色顔料の分布を示す）

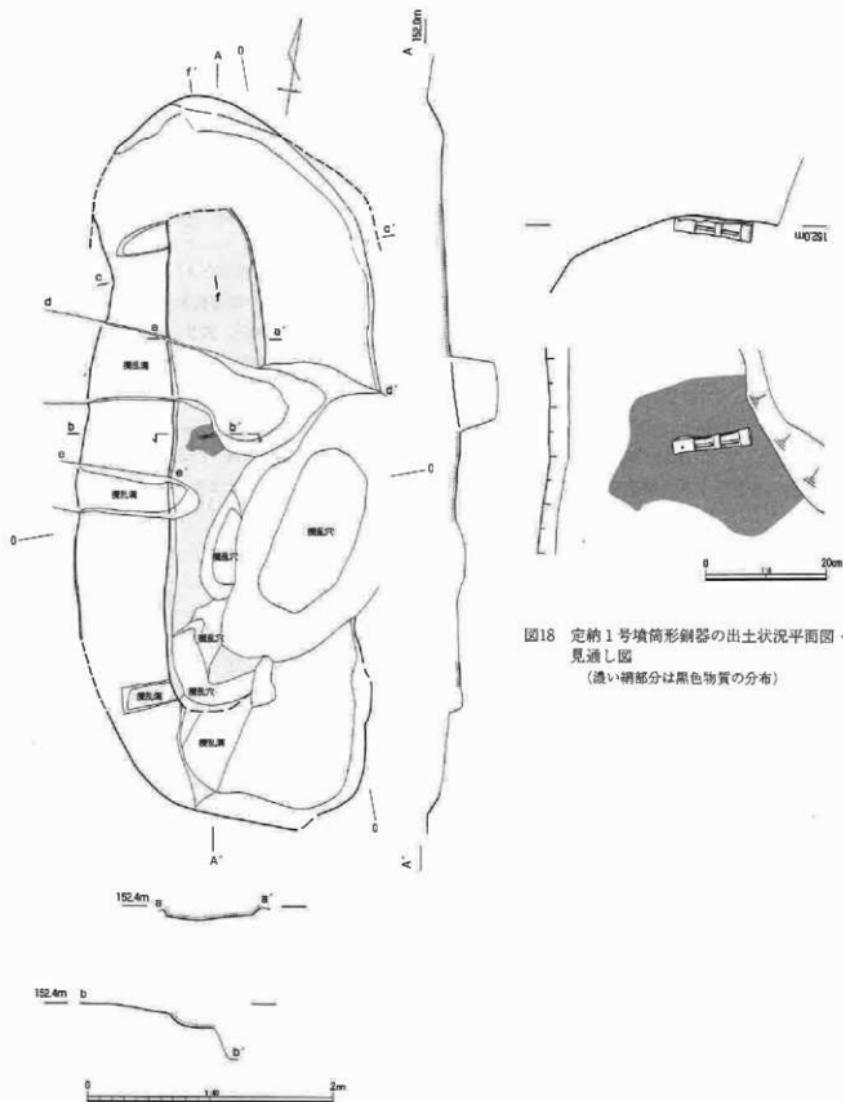


図17 定納1号墳埴形銅器の出土状況平面図・
見通し図
(濃い網部分は黒色物質の分布)

図18 定納1号墳埴形銅器の出土状況平面図・
見通し図
(濃い網部分は黒色物質の分布)

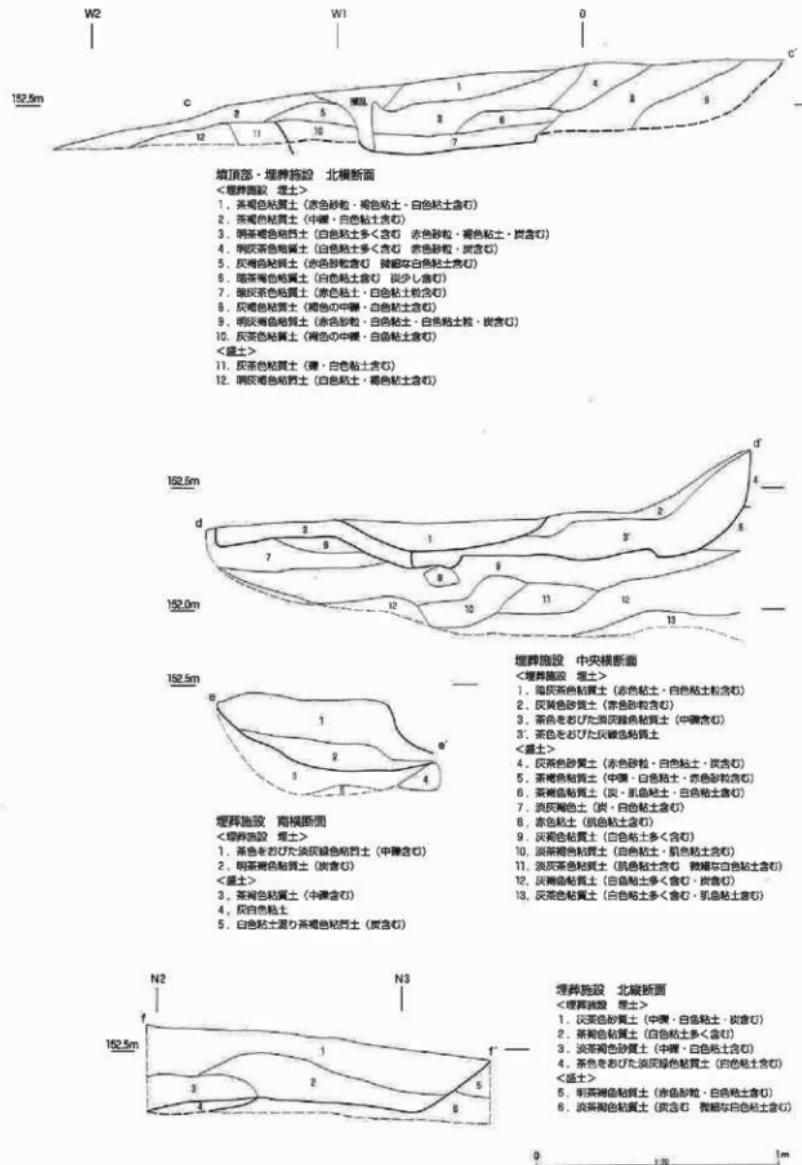


図19 定納1号墳墳頂部・埋葬施設土層断面図

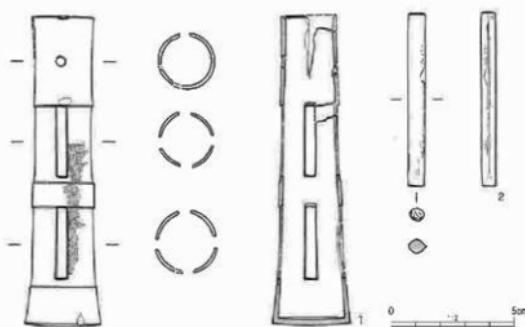


図20 定納1号墳出土筒形銅器・銅製舌実測図

のと考えられるが、棺本体は腐朽して残っていない。墓壙中央に断面弧状の凹みを検出しており、その内面に広がる赤色顔料の状況から、丸木の形を残した刳抜式の木棺と推定できる。赤色顔料は中央部に厚く遺存し、端にゆくほど薄くなる。分析の結果、中央部ではわずかに水銀の反応が認められ、遺骸の置かれていた部分にのみ水銀朱を散布していたと考えられる(IV-7)。

棺の南端は擾乱溝によって破壊されているが、埋土の状況からおおよその位置は推定できる。北端もはつきりとした境界線として検出できなかったが、縱方向に残した畦では外側に傾斜する土層ラインがみられた。赤色顔料がほぼ消失するのも同じ位置であり、棺の北端と想定した。

棺の主軸はほぼ南北方向を向く。全長4.1m、最大幅0.8mに復元できる。残存の深さ15~20cmである。北から南にかけて深さにはほとんど差はない。横断面形はゆるやかな弧をえがく。

棺下の位置の墓壙底はわずかに掘りくぼめてある。その上に粘土質の置き土を施し、棺を設置し、一定部分まで同質の土で埋めたものと考えられる。ただし埋土はほとんど残っていない。

なお、塙葬施設軸に直交方向に伸びる溝状施設を確認したが排水溝としては浅すぎ、性格は明らかでない。

出土遺物 棺内中央から筒形銅器1点が出土した(図版6・7・21 図18)。また中央の擾乱穴から刀剣の茎片1点、剣の破片1点、不明鉄器片1点が出土している。これらも副葬品と考えられる。

また東くびれ部調査区からは土器の小片3点、北調査区から同じく土器小片1点が出土している。いずれも流水からの出土品である。

筒形銅器は棺の中心軸とは直交する方向に置かれ、口縁部を西に向けていた。土圧で出土時の下面がつぶれ破損している。

検出時にはこの筒形銅器を取り巻いて厚さ1cmの黒色物質層が認められた(図版7-1)。また周囲にも径20cmの範囲で黒色物質が広がっていた。筒形銅器の表面には布の付着痕がはっきりと残っていたが、口縁部内には柄などの木質の残存は認められなかった。さらに筒形銅器の下面には木質が小さな板状になって良好に残存していた。周囲に広がる黒色物質は銅器を巻いていた布あるいは棺材など有機物に由来する残存物か、銅器から流出した銅イオンによる土壤の変質作用か判断できなかった。筒形銅器の下の木材は分析した結果、針葉樹と同定され、スギ科かヒノキ科の可能性が高いとされている(IV-9)。この木質は棺の一部が残存したものと考えている。赤色顔料の層もこの筒形銅器周辺がもっとも厚くなっている。被葬者の頭部はこの附近にあったものと考えられる。

筒形銅器(図版7-2 24-1・3~6 25-3 図20)は長さ約12.7cm、口径約2.5cm、底径約3.1cmを測る。

厚みはもっとも薄いところで1mm程度であり、もっとも厚いところでは2mm程度となる。破片を含めた重量は75.78gである（保存処理前の重量）。土圧のため、遺存状態はさほど良好ではなく、各所に亀裂を確認できる。また、接合しない破片の数からみて完形品として副葬されたことを想定できるものの、現状では口縁部から中間節帯にかけて破損部分がある。銅質はやや精良で、色調は全体に淡緑色を呈する。外面には全面的に丁寧な研磨を施しており、研磨の単位を観察することはできない（図版24-3・6）。ただし、口縁端部の仕上げはやや粗く、削り取りの施された部分と鋳肌部分との境に段差が生じているのを確認することができる（図版24-5）。内面は鋳造後の後処理がほとんどなされおらず、鋳放しの状態に近い（図版24-4）。

全体の形状は、おおむね口縁部から底部に向かってわずかに外反する。口縁部は中間付近がもっとも径が小さく、端部と筒部との境界に向けて緩やかな弧を描くように径を増す。口縁端部から2cm程度のところには、目釘孔が対向するように二孔存在する。ただし、それぞれの目釘孔の口縁端部からの位置はわずかにずれる。また、外面から目釘孔をみると周囲にわずかに突出する鋲張りを（図版24-3）、その端面には湯周り不良の痕跡を確認できる。目釘孔の開口方向は、二対ある透かしのうち一対と一致しており、製作技術の相違に基づく分類ではA群に属する（岩本2005）。筒部に節帯を一つもち、透かしを二段に配する中間有帯式であり（森本1929）、山田良三による分類の第II類に属する（山田1969）。節帯は抉られたような形態のものが多いが、本例は直線的な形態をもつ。透かしは、いずれも幅が4mm程度であり、上・下段ともに長さ2.9cm程度のものをそれぞれ筒部の四方に開ける。透かしの端面は、端面から内面に至る屈曲部が鈍角、外面から透かし端面に至る屈曲部が鋭角となるように傾斜するのを基本とするが、本例は研磨によって鋲張りが落とされており、小さな面をなす部分が目立つ（図版24-6）。底部はあまり丸みのない形態であり、ほかの部分に比べるとやや厚みが大きい。なお、筒内部には有機質を確認することができないが、外面の筒部の広い範囲に布の压痕が残る。

内部におさめられた銅製舌は、長さ約7.1cm、短径6mm、長径7mmを測る（図版7-2・24-2・7-9・25-3・図20）。重量は16.86gである（保存処理前の重量）。棒状の製品であり、断面形態は横円形を呈する。遺存状態は良好であり、全体に鉛色に近いような色調を呈する。ところどころに注湯時に発生したガスによってできた鋳巣を確認できる。外面には縱方向に走る突線状の鋲張りを観察することができる（図版24-7）。同様の鋲張りは反対側にもわずかに存在しており、この製品が二分割の鋲型を組み合わせて製作されたものであることを示す。また、一方の小口はわずかに丸みのある形態をもつが、もう一方は丸みがほとんどなく、端面の中心付近は湯周り不良によってくぼむ（図版24-8・9）。湯周り不良が一端にのみ認められることから、その反対側の小口に湯口がとり付けられた可能性を考慮しうる。同様の製作技術にかかる痕跡は、奈良県タニグチ1号墳（河上・西藤1996）や静岡県三池平古墳（内藤・大塚1961）から出土した各例でも確認することができる。

なお、定納1号墳から出土した銅製舌は、ほかの出土例と径がほぼ等しい。いっぽう、ほかの例では銅製舌の全長は2cm程度のものから7.5cm程度のものまであり、差が著しい。多くは全長5cm前後であり、本例の約7.1cmはきわめて長い部類に入る。現状で知られている筒形銅器の平均長が約13.7cmであり、定納1号墳出土の筒形銅器の全長がその平均を下回る点を考慮すれば、本例は筒形銅器じたいの長さにたいして、銅製舌

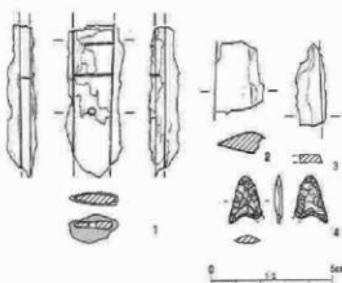


図21 定納1号墳出土遺物実測図
(1:刀剣茎 2:劍 3:不明鉄器 4:石劍)

の長さが楕端に長い例ということが可能である。

鉄器片3点はいずれも棺の南部に位置する大きな擾乱穴から出土したもので、本来は棺内の南部に置かれていた副葬品と考えられる。刀剣の茎片は残存長6.2cm、厚さ5mm。断面形は一端が狭くなる特徴的なものである（図版7-3-a 25-2-a・4 図21-1）。目釘孔をもつ。柄の木質は両面のほか両側面にも残存するが、合わせ目はみられない。柄は一端から割り抜いて孔をもうけ、茎を差し込む形式ないし側面にも板材をあてる形式であった可能性が考えられる（橋本2003）。木質の一方の面には黒漆がよく残り、関寄りの部分に幅1.4cmの帯状の凹みがまわる。柄の接えにかかる痕跡とみられる。

剣の破片は残存長3.0cm、残存幅2.0cm（図版7-3-b 25-2-b 図21-2）。中央に鏽状のふくらみを残すことから両刃であったと考えられ、また一部に残る木質が鞘とみなしうることから剣と考えた。幅2.8cmに復元できる。

もう1点の鉄器片は残存長3.4cm、厚さ3mm。断面形はやや曲面をなす（図版7-3-c 25-2-c 図21-3）。斧の袋部の合わせ目などが考えられるが、内面となる凹面側は、他の器物に銛着していた痕跡を残す。

墳丘土からは土器片が4点出土しているが、小片のため図化できない（図版25-1）。北調査区から出土した土器片（図版25-1-b）は2×2.5cmの小片で表面にミガキが施されている。東くびれ部調査区から出土した土器片3点（a・c・d）はやや厚手であるが、表面は風化している。石鎚1点は墳頂部からの出土（図版25-5 図21-4）。長さ2.0cm、幅1.8cm、厚さ3.5mm、重さ0.7g。凹基式で一方に主剥離面を残す。

3 定納6号墳（図版23-1・2 図6～9）

発掘調査前には1号墳の前方部と考えていた高まりであるが、1号墳との間を幅の広い溝でわけられた別古墳であることが判明した。中央に1本の調査区を通しただけであるので、全体の形状は明らかでない。現地形を考慮すると、平面は方形をなす可能性が強い。尾根筋方向の長さは7.5mである。墳丘北斜面は立ち上がりが急傾斜をなし、その形状は1号墳の前方部南斜面の形態と対応する。盛土の存在は確認できない。尾根を掘削で分断し、1号墳と同時につくられたものと考える。掘削内の埋土は比較的均質であり、短期間に埋没したようだ。

墳頂部で赤色顔料を確認した（図9）。掘り下げはおこなっていないが、1号墳や5号墳と同じく、木棺を直葬した埋葬施設である可能性が高い。

4 定納2・3・4号墳（図版23-2 図6～8・15）

2号墳の北側裾にわずかに調査区を伸ばしただけで、本格的な調査はおこなっていない。2・3号墳は、ともにはっきりした高まりを残しており、古墳であるとみてまちがいないだろう。現地形において2号墳と3号墳の間は浅い溝でわかっているだけとなっている。後で触れる5・7号墳の状況を参考にすると、尾根筋を掘削で切り離し、同時に2つの墳丘をつくりだしていた可能性が考えられる。

4号墳はこれらに比べてはるかに低い高まりしか認められず、古墳の形状に関する材料は得られていない。

5 定納5号墳（図版8～13・26～34 図6・22～24・27～29）

墳丘 5号墳は古墳群中でもっとも高所に築かれた方墳である。1～4・6号墳が並ぶ尾根筋が南東と北西に分かれて下ってゆく分岐点にあたる。

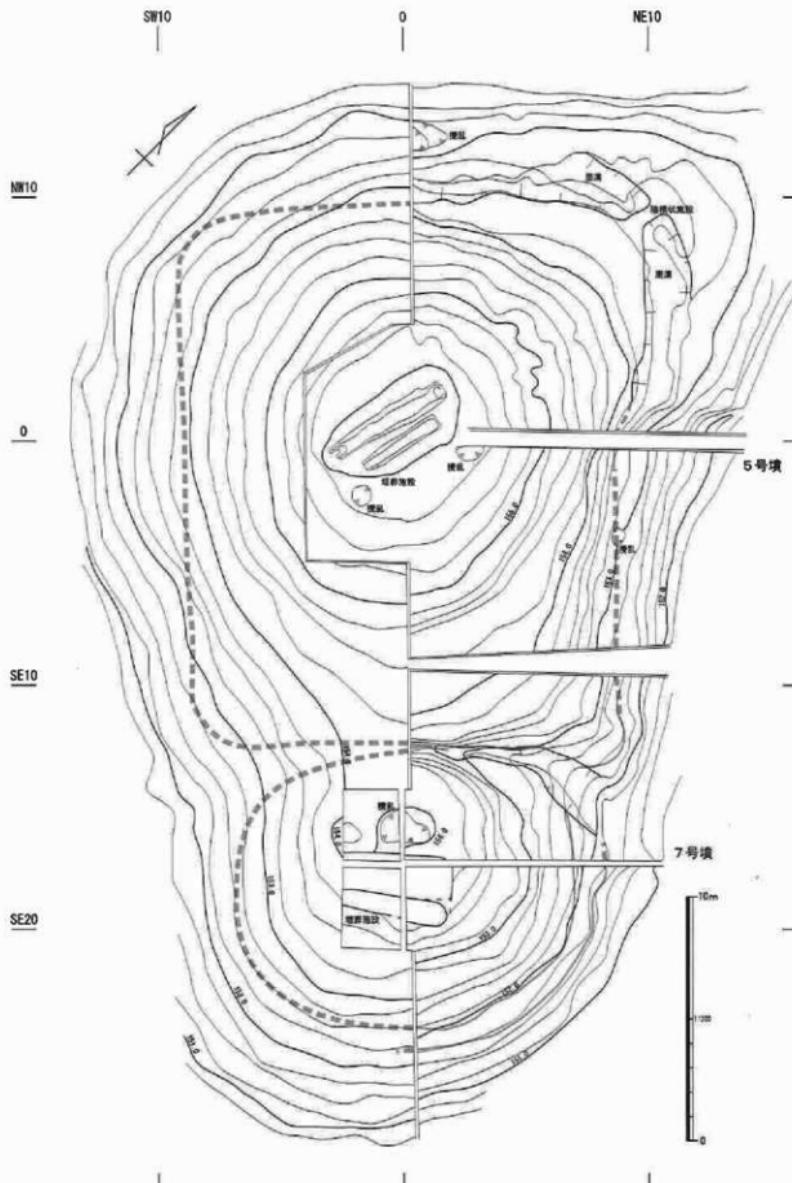
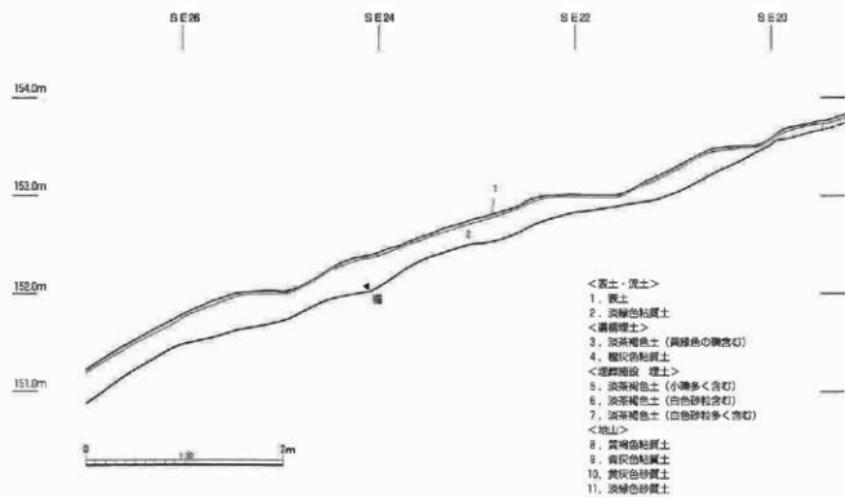
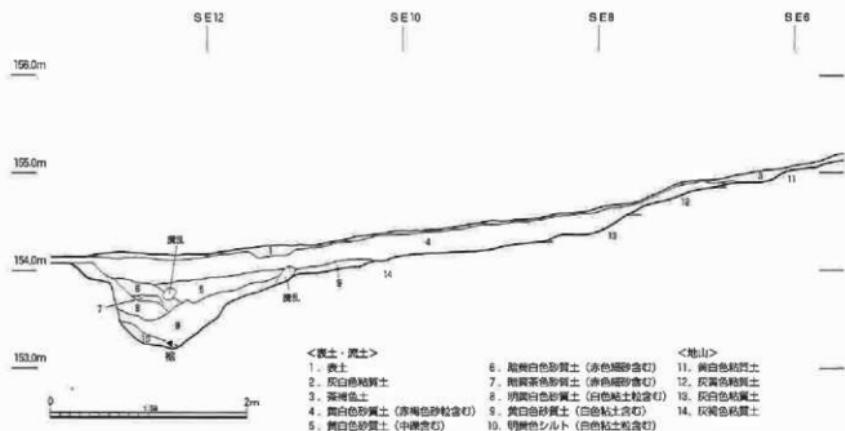


図22 定納5・7号墳平面図

IV 調査の成果



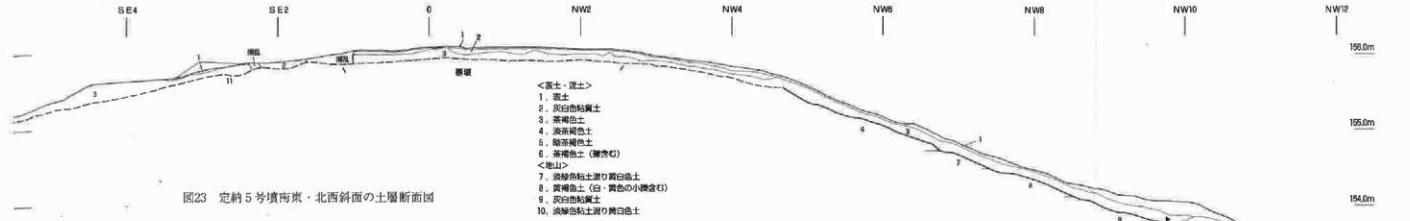


図23 定納5号墳南東・北西斜面の土層断面図



図24 定納5号墳北東斜面の土層断面図



図25 定納7号墳北西・南東斜面の土層断面図

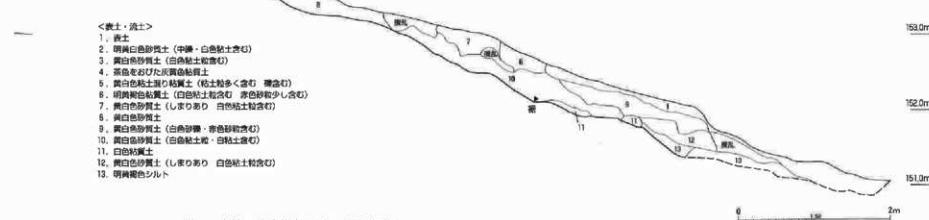


図26 定納7号墳北東斜面の土層断面図

- <黄土・洪积土>
1. 基土
 2. 黄褐色砂质土 (中礫・白色粘土含む)
 3. 黄白色砂质土 (白色粘土粒含む)
 4. 黄色を帯びた灰黄色粘质土
 5. 黄白色粘土层り粘质土 (粘土粒多く含む 硬化)
 6. 黄白色粘土层り粘质土 (白色砂粒少しある)
 7. 黄白色砂质土 (しまりあり 白色粘土粒含む)
 8. 黄白色砂质土
 9. 黄白色砂质土 (白色砂質・赤色粘土粒含む)
 10. 黄白色砂质土 (白色砂粒・白色粘土粒)
 11. 白色砂质土
 12. 黄白色砂质土 (しまりあり 白色粘土粒含む)
 13. 明黄色砂质土

方墳の各辺の隣を結ぶ対角線はほぼ南北、東西方向に乗っている。調査は墳丘の半分にあたる北西、北東、南東斜面に対しても述べているように当初は7号墳と一体の前方後方墳と誤認しており、その軸の半分にあたる部分を発掘した。

北西斜面はほぼ直線的な傾斜をなし、標高153.8mのところで平坦面をなす。この部分で北東斜面に統く、深さ10cm程度の浅い溝を検出した。この部分が溝と考えられる。この溝は墳丘の北側でいったん途切れおり、陸様状を呈する。

北東斜面の北半は同様の形状とみられるが、南半は土砂流出によって平坦面・溝ともに失われている(図24)。また7号墳寄りでは、墳丘の途中から平坦面がはじまる。

南東斜面は、尾根の軸に直交する方向に幅1.8m、深さ0.7mの掘割を設けることによって形成されており、7号墳と区分されている(図版36-2 図23)。この斜面は標高154mあたりで幅2~3mの平坦面を形成したのち、円丘状の高まりへと続いている。北西斜面とは異なる形状を示す。

調査の結果から、長軸22.1m、短軸18.0mの方墳に復元される。現在の高さは2.3mであるが、埋葬施設の残存状況からみて墳丘上部の土がかなり流出したものと考えられ、本来の高さはすくなくとも3m以上あったものとみられる。裾部の標高は北西で153.8m、南東で153.2m。粘土質の地山は標高155.1mまで続き、その上の現状高さ0.4m分が盛土である。

墳丘の上部の形状はやや不整形であり、北西斜面がほぼ直線的な傾斜を示すのに対し、南東斜面には平坦面があり、各斜面で異なる形態を示す。また埋葬施設の位置も現状の墳丘の中心には位置せず、いちじるしく西に寄っている。

盛土は埋葬施設を中心として東半では、粘土、粘質土、小礫を多く含むものなど各種の土を用いて厚さ10~20cm程度の細かい単位ではほぼ水平に積み上げてゆく(図版32-2 図28)。また特筆すべきこととして、炭・焼土を多量に含む層がみられたことがあげられる(図28の22層)。この土層の炭は樹種同定の結果、40点のサンプル中37点がシノノキ属であり、根・幹・枝など各種の部分がふくまれていることがわかった(IV-9)。

一方、西半の盛土には、東部~南部ほど細かい単位を見いだせない。また墓壙の外に墳丘内側に向かって傾斜する土層面をみいだした。こうした差を勘案すると、まず墳丘の北側と南側から中央部をドーナツの穴状に残して盛土をおこない、その後に中を埋めるように土を入れていったものと考えられる。

墳丘裾には浅い周溝がめぐっていたことが、北西斜面、北東斜面の裾の状況からわかる(図版27)。しかし7号墳との間ではこの溝の続きは明確でなく、全周していたかどうか不明である。

埋葬施設 5号墳の埋葬施設は墳頂部に設けられており、楕円形の墓壙内から2基の木棺の痕跡を検出した(図版9~13・28~33 図27・28)。墓壙の軸は南北方向に沿っており、東西の棺の痕跡を東棺、西棺と名づけて記述を進める。

墓壙 墓壙の輪郭は表土直下で検出しており、残存高はわずかである。もっともよく残っているところで、底面からの立ち上がり部が数cm程度であり、多くはより低い部分しか残されていない。北部と南部では墓壙の壁面部分は失われている。とくに北部では輪郭を明瞭に検出できない部分があった。南部も墓壙壁は完全に流出しており、検出したラインは底面の残存部分となる。検出した形としての墓壙の平面形は、南に向かってすばまるような形状となっているが、本来は中央部と同じくらいの幅で続き、全体の形狀は隅丸方形に近い楕円形であったと考える。墓壙の長軸の長さ6.2m、短軸の幅3.3mである。

墓壙の底面は中央に向けて深くなり、全体としてすり鉢状の傾斜をもつ。棺の設置位置に対応する箇所に南北に長い、断面U字形のくぼみが設けてあり、両者は棺の大きさに合わせて深さを変えてある。

棺床 墓壙内土の下半は粘土を基本とする。この粘土層の上面中央は、断面U字形で南北方向に長いくぼみを示し、そこには赤色顔料が広がる(図版10-30-1)。このくぼみが丸木を用いた領抜式木棺の棺身底部

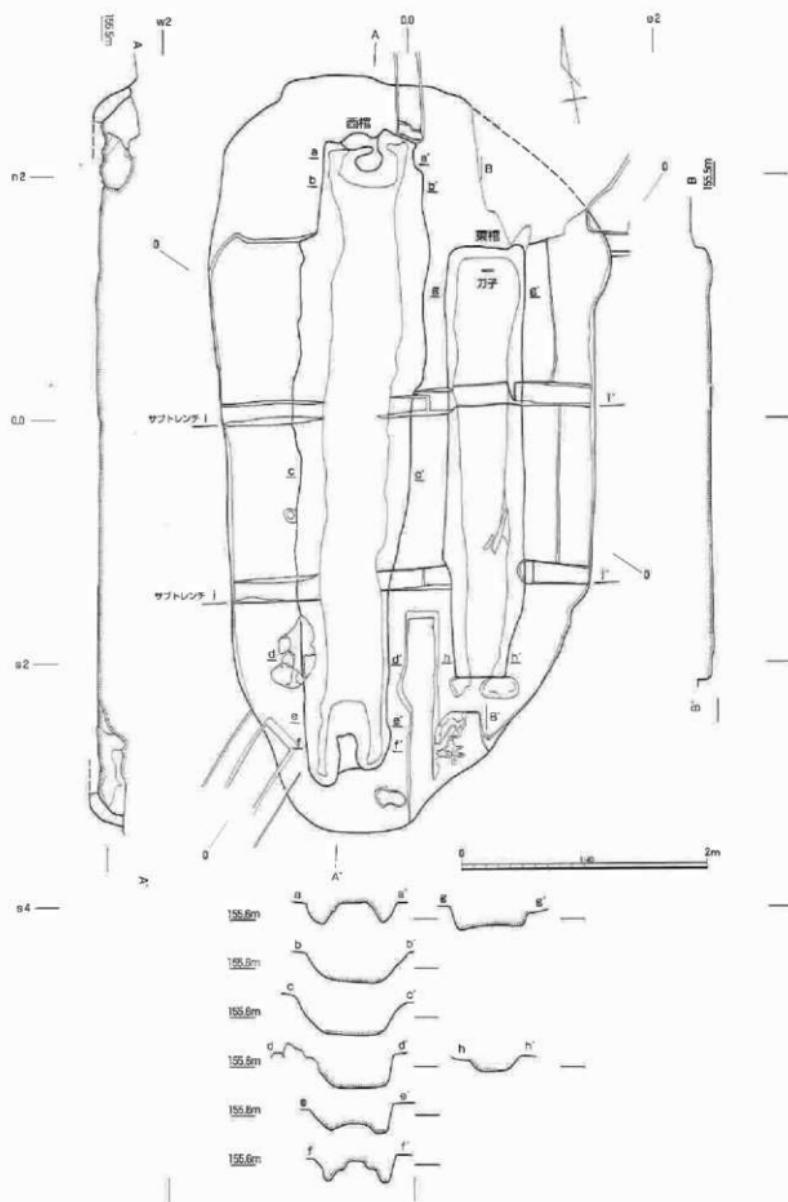


図27 定納5号墳の埋葬施設平面図・断面図（網部分は赤色顔料の分布を示す）

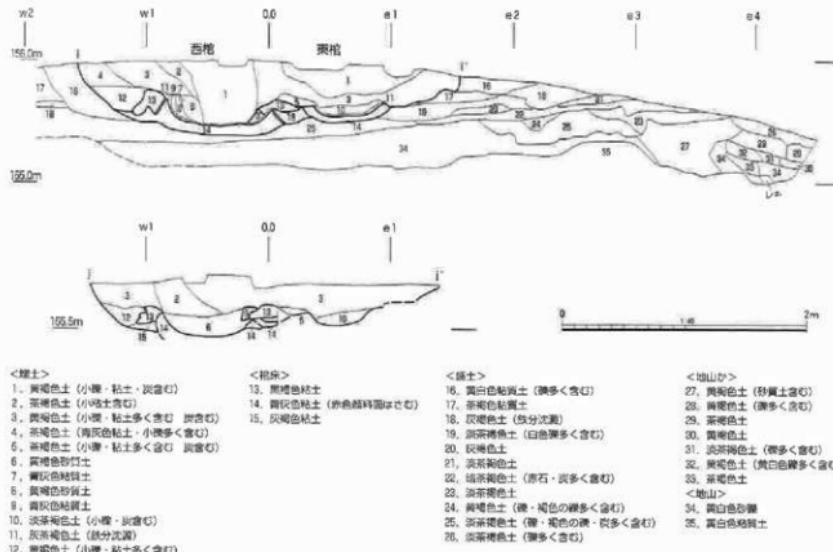


図28 定納5号墳頂部・埋葬施設上層断面図

外面の形状を示すものと考えられ、周囲の粘土は棺床の役割を果たしたものと考えられる。くぼみにそって落ち込んでいる上は、棺の腐朽にともなう陥没層を示す。

両棺の棺床部分の基本は同時に形作られている。墓壙底には棺の大きさに沿ったくぼみが設けられ、それぞれ形状に沿ってU字形に粘土が貼られている。その両脇には断面三角形を呈する支えの粘土が、棺のくぼみの軸に沿って土手状に伸びる。棺床粘土は斜め方向の重なりを示している。東棺側の棺床粘土は西棺の棺床粘土上に被っており、西→東の順に構築したものと考えられる。西棺ではさらにその上に数層にわたる粘土層が重なり、最終的にその上面を平坦に整えている。この粘土層中にも部分的に赤色顔料層が認められた。上面の粘土層は、20~30cmくらいの大きさの粘土塊を詰め込んだような状況であった。

こうした大量の粘土の使用は棺床にのみ認められ、棺の上部には顯著な粘土層はない。被覆粘土は存在しなかったと考えられる。

西棺 西棺は東棺より長く、幅広で深い。全長5.3m、幅は中央で1.0m、北端で0.85m、南部で0.7m、深さは0.25m。横断面の形状は基本的にはU字形を呈するのであるが、場所によって差がある。中央部では幅広で、ゆるやかな弧を描くのであるが、南端や北端は壁の立ち上がりが比較的急で、また底との境が角をなし、全体として逆台形状の断面形を呈する。

両端には、大きな粘土塊がみられる(図版12・30-1・2)。棺床周囲を粘土で埋めてゆく際に、棺内に続けて粘土を継ぎ足し、積み重ねてゆくことによって形成されたものであり、断面には内に向かって傾斜する薄い層が多数認められる。位置と形状からみて棺の端部を密ぐ役割を果たしていたものと考えられる。北端の粘土塊はきれいな半球形を呈し、南端の粘土塊はやや長く方形に近い形状を示す。被葬者の頭側と足元側と

で形状を区別して形成した可能性がある。

断ち割り調査の結果、この粘土塊の下部にも棺底のくぼみから同一面で赤色顔料が継いでいることが判明した（図版12）。棺内に一度赤色顔料を撒いた後に、この粘土塊が設置されていたことを示す。この粘土の存在から、棺の両端は小口板や剝り残しによって塞がれることなく、開放された形状であったと推定できる。

赤色顔料はこのくぼみ全体に広がるが、とくに中央部は濃く、深い赤紫色となる（図版13-2）。成分分析の結果、この中央部の顔料にのみ水銀がふくまれており、水銀朱があわせ用いられていることが判明した（IV-8）。他は鉄分を主体としたいわゆるベンガラと考えられる。端の粘土塊の表面にも顔料が塗布されている。西棺では副葬品はみられない。

東 棺 東棺は西棺より小さい。全長3.5m、幅は中央で0.6m、北端で0.65m、南端で0.4m。粘土層上面のくぼみの上に、淡い朱色を示す顔料をふくむ厚さ2cmの層が、くぼみの形に沿って断面U字形に広がる（図版31-4）。その広がりは西側では粘土層のくぼみとほぼ一致するが、東側の一部ではくぼみの上部にのび、上端は埋土の茶褐色土層中に続いている。棺身上部は棺床より上に続いているものと考えられる。しかし顔料の外側と内側の埋土、すなわち棺脇の埋土と、棺内に落ち込んだ埋土との識別は困難で、顔料によってその境界を区別しているにすぎない。

棺の端部は、西棺と異なって粘土面がほぼまっすぐに立ち上がる（図版30-3・4）。西棺のような粘土塊は認められない。その表面にもわずかながら顔料の付着を認めており、端部は剝り残しによって塞がれた形状であったと復元できる。なお南端では埋土の上半に薄く、断片的に顔料が散布していた。蓋面ないし外面の顔料が及んでいたことを示すのであろうか。

棺内の北端から約10cm南の場所で、刃先を西に刃部を南に向け、棺の軸に直交して置かれた刀子が出土した。

埋 土 棺を覆う墓壇内埋土は小礫や小粘土塊をふくむ茶褐色土を基本とし、東棺と西棺の間に切り合は認められない（図版32 図28）。色合いや小礫・粘土の混じり具合の違いから土層区分をおこなっているが、基本的には同質の土で一挙に埋め戻されたものと考えられる。

埋葬の手順 以上の知見から埋葬施設の構築手順を次のように復元する。

墳頂部から墓壇を掘り込む。墓壇底は棺の設置部分を断面U字形に掘りくぼめる。その内面に粘土を張り、続いて墓壇底全体に粘土を敷く。西棺では棺の設置前に棺の側面下部に支えの粘土を置く。棺の設置は東西両棺同時であったとみる。

西棺の周囲に形成された埋土の平坦面は遺骸の埋葬にともなうものと考えられる。棺の周囲を粘土で囲み、棺端部の粘土塊をかたちづくり、さらに一定の高さまで埋め土をおこなって平坦面を形成した段階で埋葬がおこなわれたことになる。また赤色顔料が粘土塊の下に延びていることから、西棺では埋葬前に一旦赤色顔料の全面塗布がおこなわれたものと考えられる。粘土塊の上面にも赤色顔料が塗られたことから、遺骸の安置後にも赤色顔料が散布されたことを示している。中央部では水銀朱が用いられ、棺の設置前・後、遺骸の埋葬後など各段階ごとに赤色顔料が撒かれた。

埋め戻したのは同時であるが、西棺と東棺での埋葬に先後関係があったのか、あるいは同時であったのか、先後関係にあったとすれば時間差がどれくらいであったのか、明確な根拠を示して説明することはできない。厳密な時間的関係は明らかにしないが、大きさや形状の異なる棺がひとつの墓壇に同時に埋められた点は、この埋葬施設の大きな特色である。

出土遺物 副葬品としては東棺北端から出土した刀子が唯一である（図版34-1・2 図29-1）。

この刀子は長さ9.3cm、刃長6.5cm、茎長2.8cm。茎部には柄の木質が残存する。また別の材と思われる木質も付着するが、刀子の置かれていた場所からみて、棺端部の木材という可能性が考えられる。

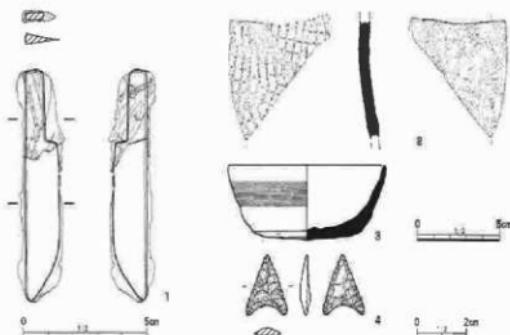


図29 定納5号墳出土遺物実測図（1：刀子 2・3：須恵器 4：石錐）

また流土からの出土品として墳丘北東斜面から須恵器片が2点出土した（図版34-3 図29-2・3）。1点は菱ないし斎の崩部。最大長7.3cm。外面に格子目の叩き痕がみられ、内面の当て具痕はナデ消されている。もう1点は杯の破片。カキ目状の条線がめぐり、底部は回転ヘラ削り。底部外面を上にした状態で回転方向は時計回り。口径9.6cm、器高4.6cmに復元される。

墳頂部の埋葬施設上面から石錐が1点出土した（図版34-4 図29-4）。長さ2.5cm、幅1.7cm、厚さ4mm、重さ0.9g。凹基式で一方の面に主刺離面を残す。

6 定納7号墳（図版35・36 図22・25・26）

丘陵の突端部にあたり、5号墳側をのぞいて急傾斜の斜面をなしている。

墳丘 先にも触れたように7号墳は、5号墳との間に掘割を設け尾根を切断することによりかたちづくられている。南東部では標高152.0mのところに平坦面があり、一応このあたりが裾となると考えられ、現状では長軸14m、短軸11.5mの楕円形を呈する。ただし尾根の突端部分に立地することから各斜面は流出が多いものとみられ、本来の形状をどこまで残しているのか不明である。

盛土は認められず、大部分を地山の成形によってつくりだしていることはまちがいないが、墳丘の流出状況がいちじるしい点からみると、上部に盛土があった可能性は否定できない。

埋葬施設 墳頂部で、墳丘土の流出によって棺の先端などが露出した状況の埋葬施設を確認した（図版36-1）。赤色顔料を用いた木棺を直葬したものと考えられる。

埋葬施設の軸は1号墳・5号墳とは異なり北東-南西方向となる。墓域の南東部および棺の北東端は流出している。また中央部に擾乱があり、南西部は未調査であるが、棺の長さは4.4m以上のものと復元できる。流出面にのぞいた断面形状から剥抜式木棺と考えられる。なおこの埋葬施設と重なって北西部にもうひとつの埋葬施設が存在する可能性があるが、掘りさげをおこなっていないため、詳しく述べられない。出土品はない。

7 定納1号墳埋葬施設赤色顔料の分析（図30・31・表1）

定納1号墳埋葬施設から検出した赤色顔料の成分を調べるためにX線分析顕微鏡を用いて顔料分析を行った。

試料と方法 試料は、現地で取上げられた試料である。測定は、特に赤味の強い部分4個体を選定して測定した(図31)。

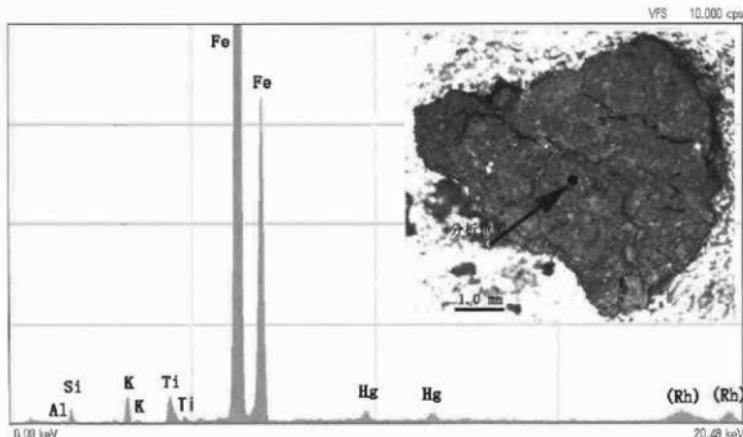
蛍光X線分析は、㈱堀場製作所製X線分析顕微鏡XGT-5000Type IIを用いた。点分析は、X線導管径100 μm 、電圧50kV、電流自動、測定時間300秒で行い、定量分析は標準試料を用いないFP法(ファンダメンタルパラメータ法)を行った。

結果および考察 典型的な赤味の強い部分の点分析を行った結果、鉄Feが24.51~70.51%と高い値が得られた(表1)。また、水銀のピークが明瞭に検出され0.20~0.33%であった(図30)。なお、水銀の材料である辰砂(HgS)を反応してイオウSが検出されている。

その他では、マンガンMn、アルミニウムAl、ケイ素Si、カリウムK、チタンTiなどが検出されているが、

表1 定納1号墳埋葬施設赤色顔料試料の蛍光X線分析結果

試 料	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	HgO	合 計
	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	
P 1	0.47	14.84	38.12	0.14	2.02	0.95	0.03	43.19	0.24	100.00
P 2	0.56	17.29	43.73	0.23	2.48	1.44	0.05	33.89	0.33	100.00
P 3	2.50	7.49	17.32	0.65	0.71	0.61	0.01	70.51	0.20	100.00
P 4	0.00	19.66	48.49	0.21	5.15	1.92	0.06	24.51	0.00	100.00
最小値	0.00	7.49	17.32	0.14	0.71	0.61	0.01	24.51	0.00	△
最大値	2.50	19.66	48.49	0.65	5.15	1.92	0.06	70.51	0.33	



Al:アルミニウム、Si:ケイ素、K:カリウム、Ti:チタン、Fe:鉄、Hg:水銀、Rh:ロジウム(X線管球から)

図30 定納1号墳埋葬施設赤色顔料試料(P 1)の蛍光X線スペクトル図

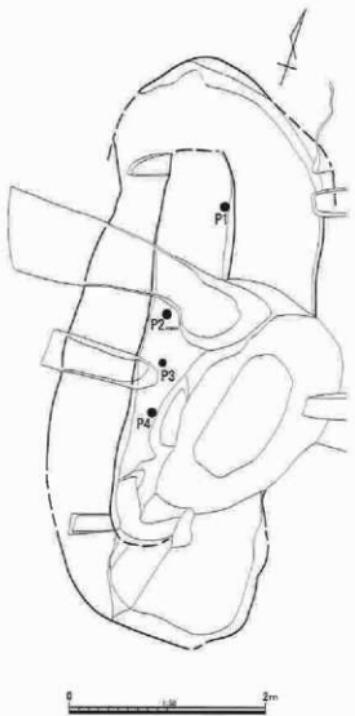


図31 定納 1号墳埋葬施設赤色顔料試料採取地点

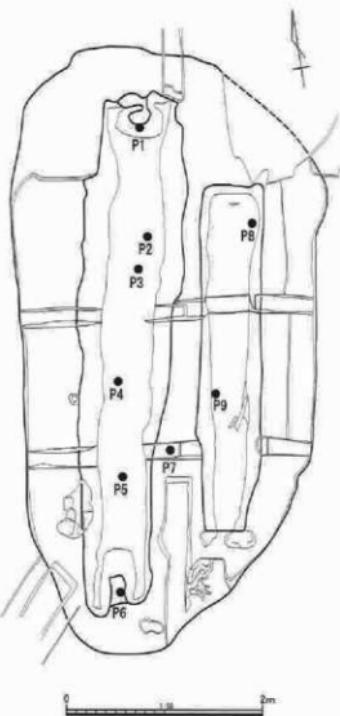


図32 定納 5号墳埋葬施設赤色顔料試料採取地点

これらの元素は主に粘土の成分と考えられる。なお、ロジウムRhは、X線管球から発生する元素であるため、赤色顔料とは関係がない。

こうしたことから、赤色顔料は鉄を主成分とするベンガラと水銀を主成分とする水銀朱である。.

なお、ベンガラと水銀朱を混ぜて赤色顔料としたのではなく、例えば木棺内面をベンガラで赤彩し、埋葬された人の頭部などの一部を水銀朱で赤彩した後、両者が混ざった可能性が考えられる。

8 定納 5号墳埋葬施設赤色顔料の分析（図32）

定納 5号墳埋葬施設の赤色顔料については9ヶ所から試料を採取し、成分分析をおこなった（図32）。これらについては1号墳とは異なり、もちかえった試料について簡易蛍光X線装置で、水銀成分の有無のみを調査した。

計測の結果、全ての地点で鉄分の反応があったが、水銀の反応の有無については下記の通りであった。

西棺棺内

P 3・4・5 水銀の反応あり P 4・5は強い

P 2	水銀反応なし
西棺端粘土塊上面	
P 1・6	水銀反応なし
西棺棺床内	
P 7	水銀反応なし
東棺棺内	
P 8・9	水銀反応なし

結果として、西棺棺内の中央部分では水銀朱の使用が認められたことになる。また東棺棺内の試料では水銀は認められなかった。西棺の被葬者の付近にのみに水銀朱が用いられ、他は鉄分をふくむベンガラが用いられたと推定される。試料数は少ないものの、西棺と東棺では水銀朱使用の有無という点においても違いがあったことになる。

9 定納古墳群出土木材・炭化材の樹種同定（図版37～39・表2）

定納1号墳の棺内中央付近から出土した副葬品の筒形銅器の下層から出土した板材と、定納5号墳の盛土内の焼土が混じる部分に小さな炭化材が多数混在しておりこれらの炭化材を採取し、樹種同定した結果を報告する。定納1号墳出土筒形銅器下層の板材の樹種同定は、棺材などに、当時はどのような樹種が選択されていたかを知ることができる。また、定納5号墳の盛土内焼土混りの炭化材は、その用途や炭化経緯はまったく不明であるため、まずはその樹種や樹種構成を明らかにし、今後の出土事例の蓄積を待つ必要がある。このほかに、定納1号墳の盛土粘土層と木棺中央から出土した微破片の炭化材樹種も検討した。

なお1号墳と5号墳は発掘状況から、刳抜式木棺と推定されているが、残念ながら棺材はほとんど残っていない。筒形銅器下層の板材は、銅成分や付着していたベンガラの鉄分が染み込み、腐蝕を免れていたようである。

方法 定納1号墳の筒形銅器下層木材は、未炭化状態であり保存も悪く、剃刀で薄片を作成し材組織が観察できる状態ではなかった。そこで自然乾燥後に3方向の断面を走査電子顕微鏡で観察した。これは針葉樹材であり、同定に特に重要な放射断面は複数の断面を作成し観察した。定納5号墳の盛土内焼土混り層と定納1号墳から採取した炭化材も、自然乾燥後に同定作業に入った。

同定はまず横断面を手で割り実体顕微鏡で拡大し、主に仮造管からなる針葉樹材か、造管を持つ広葉樹材か、造管配列から散孔材か環孔材か、予察を行なった。筒形銅器下層木材は粘りがあり手では割れないで、剃刀を使用した。次に実体顕微鏡下で、軽く片刃の剃刀を当て、接線断面と放射断面を軽く弾くように割る。この3断面（横断面・接線断面・放射断面）を走査電子顕微鏡で拡大し、材組織を観察した。

走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大さに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子機器 JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

なお、横断面（木口）は材の軸方向に直角な平面であり、接線断面（板目）は年輪線に平行な縦断面、放射断面（柵目）は年輪線に直交する縦断面である。各断面で観察される材組織の形状を元に、樹種同定を行った。

同定した炭化材の残り破片は、近江町教育委員会に保管されている。

結果 同定結果の一覧を、表2に示した。

表2 定納1・5号墳出土木材・炭化材の樹種同定結果

試料	採取地点	試料No	樹種	備考	時期	
1号墳	筒形銅器下層木材	板状材	針葉樹	スギ・ヒノキ科の可能性が高い 板目板か	古墳時代前期後半	
	盛土粘土層	1	シイノキ属			
		2	コナラ属	大型の集合放射組織がある		
		3	広葉樹			
	棺中央	1	シイノキ属類似			
		1	シイノキ属			
	盛土内焼土混り層 (図28-22番)	2	シイノキ属	根材?		
		3	広葉樹a	つる性か		
		4	シイノキ属			
		5	シイノキ属	根材?		
		6	シイノキ属			
		7	モミ属	根材?		
		8	シイノキ属	幹・枝		
		9	シイノキ属	幹・枝		
		10	シイノキ属			
		11	モミ属?	根材?		
5号墳		12	モミ属	根材?	古墳時代中期前半	
		13	広葉樹			
		14	シイノキ属?	微破片		
		15	シイノキ属			
		16	シイノキ属	根材?		
		17	シイノキ属?	幹・枝		
		18	シイノキ属	根材?		
		19	シイノキ属			
		20	シイノキ属			
		21	シイノキ属	幹・枝		
		22	シイノキ属			
		23	シイノキ属			
		24	シイノキ属	幹・枝		
		25	シイノキ属			
		26	シイノキ属	根材?		
		27	シイノキ属			
		28	シイノキ属			
		29	シイノキ属			
		30	シイノキ属			
		31	シイノキ属			
		32	シイノキ属	幹・枝		
		33	シイノキ属?			
		34	シイノキ属	幹・枝		
		35	シイノキ属?			
		36	シイノキ属	幹・枝		
		37	シイノキ属?			
		38	シイノキ属			
		39	シイノキ属			
		40	シイノキ属			

〈定納1号墳〉 筒形銅器下層木材は、板目取り針葉樹材であった。樹種は保存が悪いこともあり分類群は特定できなかたが、分野壁孔の形態からスギやヒノキ科の可能性が高い。しかし、モミ属の可能性もまったく否定はできないものであった（樹種記載参照）。

盛土粘土層から出土した小さな炭化材破片は、シイノキ属とコナラ属（コナラ節・クヌギ節・アカガシ亞属を含む）、そして保存が悪いこともあり分類群が特定できない広葉樹であった。

木棺中央から出土した小さな炭化材は、シイノキ属類似であった。破片が小さいため、クリとの明確な区別ができないため、シイノキ属類似とした。

〈定納5号墳〉 40試料から検出された分類群は、シイノキ属またはシイノキ属?が最も多く、37試料から検出された。このほかに、モミ属またはモミ属?が3試料から、広葉樹aが1試料（No3）から、広葉樹が1試料（No12）から検出された。No6とNo12からは、異なる分類群が検出された。炭化材は小破片がほとんどであるが、モミ属（No6・11・12）は芯もち丸木またはその形状に近いものであった。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の組織写真を提示した。

(1) 針葉樹 conifer 図版37 1a-1c (1号墳 筒形銅器下層木材)

軸方向のおもな構成要素は仮道管である。晩材部の量は多く、晩材部の仮道管壁の肥厚は厚いようである。樹脂細胞は確認できていない。放射柔細胞壁は平滑のようであった。分野壁孔はヒノキ型とやや小型のスギ型が見られ、1分野に2～3個が水平に配置している。

分野壁孔の形状や数から、スギ科スギまたはヒノキ科のネズコやサワラの可能性が考えられるが、特定はできなかった。また放射柔細胞壁は平滑のように見え、数珠状肥厚は確認できていないが保存が悪い事を考慮すると、モミ属の可能性が無いとは言えない。

(2) モミ属 *Abies* マツ科 図版37 2c (5号墳11) 3a-3c (5号墳12) 圖版38 4a-4c (5号墳6)

軸方向のおもな構成要素は仮道管からなる針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかである。放射断面において放射柔細胞の接線壁に数珠状肥厚が見られ、上下端の細胞はときに山形になる。分野壁孔は小型、1分野に2～6個ある。

いずれも放射柔細胞は幹・枝材に比べ大きく、数珠状肥厚はやや不明瞭であった。また、年輪界もやや不明瞭に思われ、根材または根張りの部位である可能性がある。

モミ属は常緑高木で、暖帯から温帯下部の山地・丘陵地に普通に見られるモミ、温帯上部の高山に生育するウラジロモミ・シラベ・アオモリトドマツ、北海道の山地に生育するトドマツの5種がある。いずれの材も組織は類似しており区別はできない。材質はやや軽軟で加工は容易であるが保存性は低い。

(3) シイノキ属 *Castanopsis* ブナ科 図版38・39 5a-5c(5号墳16) 6a-6c(5号墳21) 7a(5号墳4) 8a(5号墳24)

大型の管孔がやや間隔を開けて配列し、1～数層分布した後に急に径を減じ、晩材では非常に小型の管孔が多数の時は火炎状に、少数の時は放射状に分布している環孔材。年輪界は波状であるものが多い。道管の壁孔は交互状、穿孔は單穿孔、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性である。

年輪始めの管孔が間隔を開けて配置していること、大型の管孔は年輪界に向かいあまり径を減少することなく分布することから、クリとは異なりシイノキ属であると同定した。写真6aと8aは枝・幹材の典型的な管孔配列であるが、写真5a・7aは根・根張りや節部または枝・幹材で年輪幅が狭いなか材ともみられるが部位を特定できない。炭化材は写真7aタイプのものが多く、根材も含まれている可能性がある。また、細胞幅が狭く簇く集合した放射組織を持ちツブラジイと特定できる破片は、確認されていない。

シイノキ属は暖帯に生育する常緑広葉樹で照葉樹林の主要素である。関東以西・四国・九州に分布するツブラジイ（コジイ）と、本州の福島県と新潟県佐渡以南・四国・九州に分布するスダジイがある。材組織ではシイノキ属の放射組織は単列がほとんどであるが、スダジイは樹心部に限り集合放射組織が現れることが

あり、ツブライジは樹心以外でも現れる。

(4) 広葉樹 broad-leaved tree 図版39 9a(5号墳12) 10a(1号墳3)

内腔にはチロースが発達した大型の管孔が多数分布する広葉樹材で、年輪界は不明瞭、放射組織は単列である。シノキ属のぬか目材または根材とも思われるが、晩材部の小型管孔は不明である。アカガシ亜属の可能性もあるが、広放射組織は不明で、炭化材が小さいこともあり広放射組織の有無は判らなかった。

(5)コナラ属 *Quercus* ブナ科 図版39 11a・11b(1号墳2)

非常に薄い破片で、中型の管孔と小型の単独管孔が分布しているのが見られたが、年輪全体の分布は不明である。接線断面で非常に細胞幅の広い放射組織が見られたことから、コナラ属コナラ亜属のコナラ節またはクヌギ節、あるいはコナラ属アカガシ亜属である可能性もある。

(6) 広葉樹 a broad-leaved tree a 図版39 12a-12c (5号墳3)

やや小型の管孔が、単独または接線状・斜状に接合して分布し、年輪界は不明、管孔の孔径はあまり変化が見られなかった。道管の壁孔は交互状の部分と階段状の部分があり、穿孔は横棒数が20~25本の階段穿孔、内壁にはらせん肥厚がある。横断面で径の小さい孔の集合部分があり、放射断面でこれに対応するとと思われる細胞群にはらせん肥厚があるが、穿孔がないことから繊維細胞のようである。放射組織は保存が悪く詳細は不明であるが、細胞幅が広く細胞高も高い大型の放射組織があるようで、蔓性の放射組織に類似している。写真12cからは、平伏細胞・方形細胞・直立細胞を含む異性であることがわかり、道管と放射組織の壁孔は小型で多数が交互状に配置していた。年輪は不明瞭で、根材の可能性もある。

管孔配列や道管壁に階段状がある点はブドウ科（ヤマブドウ・ツタなど）に似るが、ブドウ科の穿孔は單穿孔であり異なる。ユキノシタ科（ツルアジサイ・イワガラミなど）の道管穿孔は階段状であるが、道管との壁孔も階段状であり、交互状の本種とは異なる。また、ブドウ科もユキノシタ科も道管にらせん肥厚は無い。現時点では、分類群を特定できなかった。

考 察 定納1号墳から出土した筒形銅器下層木材は、針葉樹であったが、保存が悪いこともあり分類群は特定できなかった。板目取りの板材であり、スギやヒノキ科の可能性が高く、モミ属の可能性もまったく否定はできないものであった。スギ・ヒノキ科・モミ属は、当地域で入手容易な針葉樹材であり、コウヤマキほどではないが古墳の木棺材として利用が知られている（島地・伊東（編）1988）、棺材などとして適材が選択使用されたものと思われる。

定納5号墳の盛土内焼土混り層の炭化材から検出された分類群は、シノキ属が最も多く、このほかにモミ属と広葉樹 a が少しではあるが検出された。いずれの分類群も、根材または根材の可能性がある炭化材を含んでいた。このような樹種構成から、盛土内焼土混り層は祭祀行為の痕跡という解釈よりは、古墳造成の際にシノキ属が優占する照葉樹林を伐採し、その後で耕地や盛上の作業をしやすくするために更に焼き払い、焼土と小さな炭化材が混じる層が形成されたのではないだろうか。当時の尾根筋はシノキ属が優占する自然植生が成立し、そのためにシノキ属の地上部や地下部の材が多く検出され、モミ属も混生していたと思われる。定納1号墳からもシノキ属やシノキ属類似の炭化材が検出されている。

古墳の盛土に、炭化材が含まれている発掘状況を聞く事はあるが、その樹種を明らかにする調査が実施された事例はあまり知らない。6世紀中頃～後半の石室古墳である岐阜市北山3号墳では、石室周囲の盛土部分から焼土と共に小さな炭化材が検出され、樹種調査が行なわれている（植田1998）。この樹種はマツ属複雑管束亜属が多く、クリやシャシャンボも検出されたことから、北山3号墳が構築された時の植生はマツの二次林であったと考えられている。定納5号墳の盛土内焼土混り層の炭化材樹種構成からは、古墳築造前の尾根筋にシイ林が成立していたと推測された。しかし今後更に、古墳周辺の低地遺跡における古墳時代前期の花粉分析結果や、近隣の山地・丘陵地から調達したであろう土木材の樹種構成とも比較することにより、盛

土内から検出された炭化材が尾根部の森林から由來したものかを推定する必要があると思われる。

参考文献

- 岩本 崇 2005 「簡形銅器の製作技術」『紫金山古墳の研究—古墳時代前期における対外交渉の考古学的研究—』平成14～16年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書 京都大学大学院文学研究科 305－314頁
- 植田弥生 1998 「北山3号墳出土炭化材の樹種同定」『岐阜市北山3号墳』財団法人岐阜市教育文化振興事業団報告第2集 財団法人岐阜市教育文化振興事業団 35－37頁
- 河上邦彦・西藤清秀 1996 「タニグチ古墳群（付タニグチ墳墓群）発掘調査報告」高取町文化財調査報告第17冊 高取町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所
- 岸本道昭 1996 「新宮東山古墳群の研究」「新宮東山古墳群－土探しに伴う緊急発掘調査報告書－」龍野市文化財調査報告書16 龍野市教育委員会 55－84頁
- 島地 謙・伊東隆夫(編) 1988 「日本の遺跡出土木製品総覧」 嶋山閣
- 定納古墳群測量調査団 1998 「近江町定納古墳群測量調査報告」「滋賀考古」第20号 滋賀考古学研究会 34－40頁
- 内藤晃・大塚初重(編) 1961 「三池平古墳」庵原村教育委員会
- 橋本英裕 2003 「刀剣装具の復元と位置づけ」「史跡 昼飯大塚古墳」大垣市埋蔵文化財調査報告書第12集 大垣市教育委員会 439－446頁
- 浜崎悟司(編) 2002 「加賀市安坂・黒瀬古墳群」一般国道8号改築工事（南郷拡幅）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 森本六郎 1929 「簡形銅器概観と本古墳発見品」「川柳村将军塚古墳の研究」 国書院 68－73頁（1943「簡形銅器について」『日本考古学研究』桑名文星堂 406－413頁に再録）
- 山山良三 1969 「簡形銅器考」「古代学研究」55号 古代学研究会 22－35頁

V 研究

剖抜式木棺小考

森下 章司

はじめに

剖抜式木棺は弥生時代に登場し、古墳時代にはいわゆる首長墓の棺に用いられた。その普及過程は個人墓としての墳丘墓の発達と関連している。たとえば北陸地方においては、弥生時代中期に剖抜式木棺が現れ、区画墓を中心に組合式木棺とは区別して用いられ、古墳時代初頭に首長墓に用いられる棺の主流となってゆく（前田1999）。

古墳時代前期には、周囲を石積みで覆って竪穴式石室（石槨）を構築するようになる。長さ4mを越えるような長大な剖抜式木棺が、大型前方後円墳を中心に上位の埋葬施設として広く各地で用いられる。長大な木棺は定型化した古墳成立の指標のひとつともされている（近藤1977）。その後、粘土棺あるいは木棺直葬と周囲の施設の簡略化は進むが、古墳時代中期においても主要な棺の形式として用いられ続けた（森下2003）。また上位の棺形式ではなくなるが、後期にも存続する。

定納古墳群において今回に確認した埋葬施設は、いずれもこの長大な剖抜式木棺を用いたものであった。とともに5号墳では周囲が粘土で固められていたため、棺の痕跡がよく残っており、木棺形態や埋葬手順を復元するための材料を得ることができた。この事例を基礎とし、他の例を広く比較することによって、調査の知見を木棺研究に役立てることをめざしたい。

1 木棺形態の復元

古墳時代の木棺は実物の遺存例がきわめて少なく、ほとんどが土中で腐朽している。その形態について論ずるときは、土中の痕跡を手がかりとした復元にもとづくことになる。そうした復元においては、いくつかの前提や条件を必要とする場合が多い。ここでは痕跡と、そこから得られる復元との関係についてまず整理しておきたい。

木棺は、その構造から組合式と剖抜式に大別するのが一般的である。遺構において両者を区別する手がかりは、縦横の断面形、床面、端部に関する土層状況などにある。組合式木棺は箱形を呈するのが基本であり、断面が方形となる。楔や釘を用いない形式の組合式木棺は、側板や小口板を立たせるために、板のどこかを周囲の土や粘土で支える必要がある。側板が小口板をはさむ場合は、その端が飛び出し、平面がH字形となるものが多い。また小口板が底板より下に出る形式ではそれが床の部分に掘り込みや土の違いとして残る（福永分類のI型木棺 福永1985）。一方、小口板や側板が底板上に乗る形式（II型木棺）では、その組合方法が痕跡として明瞭に残ることは期待できない。

剖抜式では丸木材を半裁し、中を剖抜いて遺骸や副葬品の収納部分を設ける。外側はおおむね丸木の形を残すのが基本であり、身の断面形は弧を描く。これを設置する際、そのままでは不安定な棺の下部を固定するため、墓壙底を掘りくぼめたり、棺床を設けたりする。その結果、下向きに弧を描く断面が土層に反映する。棺床に特別なこしらえがない場合も、埋土の違いや棺内に施された顔料の層によって断面の形を読み取ることができる。

蓋については、組合式、剖抜式のいずれにしても、腐朽の過程で棺内の空洞部へ埋土や被覆粘土が一気に

陥没し、その形が失われてしまう場合が多い。

以上は木棺形状をおおまかに復元する際の基本的な観察要素であると考えるが、例外や細分の際の問題点について触れる。

木棺が良好に残っていた例の中に、断面が方形を呈しながら板による組合式ではないものがある。

大阪府土保山古墳は木棺が完存した例として知られているが、2号棺については「5つの部材を組合せである。すなわち、断面L字形の2つの部材を向き合わせて身の底と側とし、側板の両端に近く溝を彫って2枚の小口板をはめて棺身をつくり、これに断面弧状の蓋をかぶせたものである」と描写されている(原口1973)。断面方形ではあるが、そのかたちは板材の組合せによるものではなく、原材料を大幅に削り込んで加工したものをあわせ用いている。

この例から推測すれば、半裁した丸木の外面を方形に加工した剝抜式木棺が存在した可能性もあるだろう。単に土層断面が方形というだけでは、身の構成が決定できないことを示す。識別の手がかりは端部の状況にあるが、明確な判断は困難であろう。組合せを示すH字形の平面形や底部において板小口の痕跡が確認されていない例については、断面方形の土層痕跡があっても組合式ではない可能性も検討する要があろう。詳しい状況は不明であるが、「箱形の組合式の棺」と考えられた大阪府黄金塚古墳東櫛の例など、端部の状況から、剝抜式の可能性も検討の要があろう(末永・島田・森1954)。

すなわち断面が方形であることのみから木棺形式を判断する場合、側板や小口板の突出といった組合式を示す材料がない限り、「箱形木棺」と呼称しておくほうが安全である。なお断面が方形を呈する埋葬施設において、底板が無く、枠と蓋を板材で設けた例が知られている(石崎1997)。

剝抜式木棺については、名称にやや混乱がある。堅穴式石室や粘土棺が剝抜式木棺を複う施設であることを明らかにした小林行雄は、「剝竹形木棺」という名称でその形状を表現した(小林1941)。滋賀県安土瓢箪山古墳の堅穴式石室の断面図を用い、粘土床の上面が弧を描くことから、そこに断面円形の木棺が載せられていたものと復元し、それを覆うものとして石室壁が積まれていることを示した。

その論文で用いられた堅穴式石室と剝竹形木棺の断面復元図が強い印象を与えたせいか、剝竹形木棺の条件として断面が正円形であるというとらえ方が広まるにいたった。棺床のカーブが円形でない場合、「舟形木棺」といった別種の木棺形式を想定する名称を用いることが多い。

横断面形の違いを棺形式の分類要素として重視するのは、剝抜式石棺とともに舟形石棺との対比によるものと考える。しかし、木棺においてそれが全体の形状の差に結びつくのかどうか、検討の余地がある。棺身の底面が半円形をなすか、半円円かという違いが、他の諸要素の違いとも関連するかどうかは確認されていない。自然木の形状は必ずしもきれいな円形を呈さないし、部位によって形に違いが生ずる。きれいな円形を呈するものは、外面を削って丁寧に成形したことを示す可能性もある。

「舟形木棺」のように、舟と関連付けて用いられる用語では、舟を転用した木棺(岡本・押野1996 棺蓋なし)、棺全体が舟の形状と類似するもの(石崎2001)のいう「舟底状木棺」(棺蓋あり)、横断面がゆるい弧をなし「舟形石棺」と類似するものなどがあり、区別が明確でない。いずれにしても木棺形式の復元においては棺床の断面形態だけでなく、他の要素とあわせて検討する必要がある。

なお用語に関連する問題として、ここでとくにとりあげる木棺の端部について整理しておく。一般に木棺の両端部のことを「小口」と呼び、そこに立てられた板を「小口板」と呼ぶことが定着している。しかし後で触れるように、大阪府久宝寺1号墳のほぼ完存した木棺では、小口板が棺の端部よりいちじるしく内側に立つ場合があることが判明した(西村・南條2003)。この部分を「小口」と呼ぶと、指し示す範囲が大きくなる。またそうした内部に立つ小口板の有無や位置については、木棺が腐朽している場合は確認するすべがない。

そこで、検出された棺身の端を「端部」と呼ぶことにし、それより内側に立つ板については、外側となる

かどうかは別として「仕切板」と総称する。

このように木棺形式の復元においては、まだ考慮すべき可能性や条件がいくつもある。とくに削抜式木棺については現在、識別しやすい棺床の断面形に关心が偏っており、その他の要素について検討の要がある。ここでは定納5号墳の例をもとに、木棺形式の諸要素について言及する。

2 定納5号墳の木棺

5号墳からみつかった2つの木棺痕跡について、基本的な情報はすでに記したが、再度その特徴についてまとめておく。

一番の特徴は、ひとつの墓壙内に異なる形態の木棺が納められていたことである。両者は大きさ、端部の構造に違いがあり、埋葬の手順についても差が考えられる。

西棺は長さで東棺を1.8m上まわる。この木棺の端部は板や割り残しによって塞がれることなく、開いたかたちであったと復元する。

両端に置かれた粘土塊は、棺の端部を塞ぐ機能をもっていたと考えられる。木棺周囲に粘土を敷いてゆく

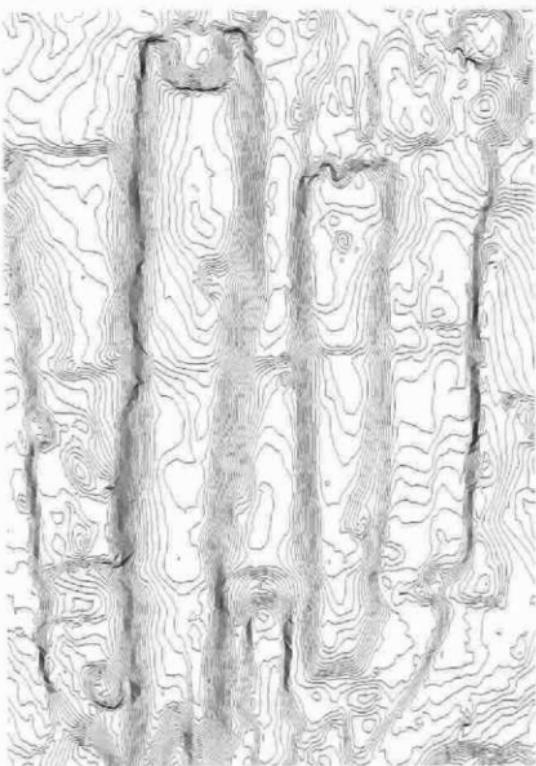


図33 定納5号墳埋葬施設レーザー3次元計測図

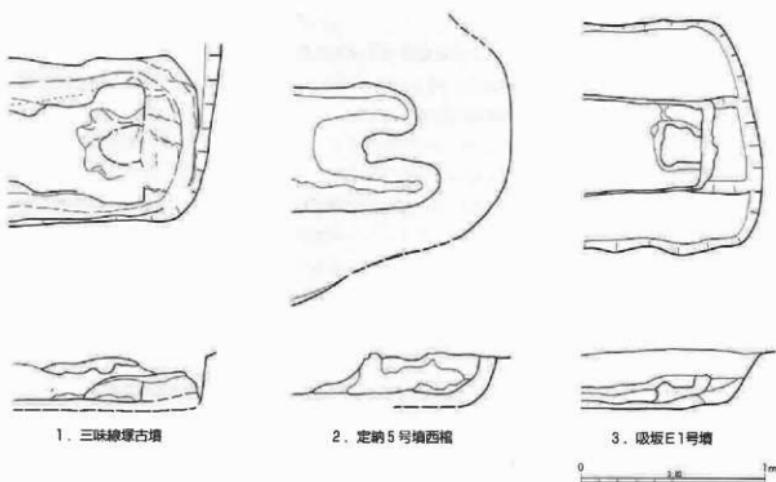


図34 棺籠に粘土塊を据える刳抜式木棺埋葬
(鉢部は粘土使用部分を示す)

際、一連の作業として設けられたものである。棺内の赤色顔料層がこの粘土塊の下に続いていることを確認しており、棺内に顔料を撒いた後、その上に粘土を積み上げてこの塊をつくりあげたことがわかる。粘土塊中にも薄い顔料の層が複数認められ、積み上げの過程において顔料を散布する機会が何度もあったことを示す。また粘土塊の表面全体も顔料で覆われており、積み上げの最終段階ではとりわけ丁寧に顔料が施された。木棺の蓋をかぶせたのは、粘土塊の設置後である。

棺の端部を粘土塊で塞ぐ方式は、他の古墳にも例がある（図34）。愛知県三味線塚古墳例（三田ほか2001）や石川県吸坂E1号墳例（浜崎ほか2002）などと比較すると、粘土塊のかたちなども似通っている。分布が各地に広がることからも一定の普遍性をもった施設とみる。これらはその構造によってさらに分類することができる。被覆粘土があり、粘土部の一部として設けられたもの（三味線塚）、被覆粘土はないが棺床粘土から棺内に粘土を延長させたもの（定納5号）、棺周囲の粘土がほとんど省略され、塊の部分にのみ粘土を使用したもの（吸坂E1号）がある。

一方東館では、端部に接する部分の棺床粘土がほぼ垂直に立ち上がる。開放式であっても粘土の用い方次第で同様の状況となりうるが、北端では垂直面にも赤色顔料の塗布が認められたこと、端部に接した部分の粘土面が整っていることなどから、丸木を直裁し、棺身の中を刳抜き、端部を掘り残した棺形式であったと考える。また北端から約10cm内側に刀子が置かれていたことから、端部の身の厚さが推定できる。

このように5号墳では同一墓域内に異なる形式、とくに棺身端部の形態が違う木棺を納めていたのである。

3 刨抜式木棺の形態

(1) 横断面・縦断面の形状

前に述べたように、棺身の断面形は剖竹形木棺を分類する際にもっとも注目されることが多い要素である。

古墳時代の棺について、底の断面形が半円形に近いものと弧のゆるいものの双方があったことはまちがいない。大阪府久宝寺1号墳は古墳時代初頭の剖抜式木棺がほぼ完全に遺存していた例としてきわめて貴重であるが、蓋とあわせた断面はほぼ円形を呈する（西村・南條2003）。奈良県下池山古墳の木棺遺存例も「身の外形の断面形はほぼ半円を呈し、小口部は垂直に切り落とした形状をなす」とされる（岡林1997）。棺が遺存していない場合でも、石川県雨の宮1号墳例では粘土模の遺存状況が良好で、棺の外形がよくわかる（中屋2005）。この場合は縦にやや長い円形の横断面形をみることができる。ただし棺端の突起の位置から丸木を中央で半截したものではなく、棺身が深く棺蓋が薄いかたちに復元されている。

縱断面に關しても2種類を區別することができる。定納5号墳の例のように、底面がほぼ水平に続くものが多いとみると、端部の底が反りあがる形もあったようだ。前期前半に位置づけられる兵庫県権現山51号墳では、堅穴式石室にともなう棺上面は「南北の両小口部分は緩く反り上がっており、棺底面と小口面が直角をなすものでない」「木棺の底部の形状は、むしろある種の船形石棺のそれに類似したものと推定される」と述べられている（近藤（第）1991：36頁）。さらに時期的にさかのばる可能性がある徳島・西山谷2号墳では「小口部は緩やかにカーブを描き、上方に緩やかに立ち上がり、舟底状を呈する」とされる（徳島県埋文2001）。また前期においても、棺の両端で形状が異なる形式が存在した可能性がある。京都府寺戸大塚古墳前方部埋葬施設では、「木棺小口の形態は、北と南で異なっていたと推定される。つまり、北小口は棺底面と小口面が直角を成していたのに対し、南小口では上方に開き気味に立ち上がるものであったと考えられる」（梅本ほか2001）。これらは弥生時代の舟底状木棺とのつながりが注意される（石崎2000）。

さらに間接的な痕跡による議論となるが、堅穴式石室下部の状況も棺端部の形態を考える材料となる。大阪府紫金山古墳（阪口2005）、京都府寺戸大塚古墳前方部石室（梅本ほか2001）、愛知県東之宮古墳（赤堀2005）などでは、堅穴式石室壁体の下部の裏込めに用いられた小礫が、ほぼ垂直に立ち上がり、棺側に面をもつ。棺の端部が石室の裏込めと壁体に密着しており、突起部をもたない形式であったとみることができる。ただ逆に棺端部と石室壁の間が空く例が、突起のせいか、あるいは石室構築の手法の違いによるものもふくまれるのかは簡単には判断できない。

堅穴式石室における棺床のあり方として、京都府椿井大塚山古墳で端部が被覆粘土状に高く遺存していた例にも注意しておきたい（橋口1998）。

（2）端部の形式（図35）

端部開放式 大阪府久宝寺1号墳1号主体部の棺がもっとも残りのよい例である（西村・南條2003）。長さ3.28mの長大な木棺であり、身と蓋の双方とも半円形の断面形を示す。身の端部は開放式で、別に円形の仕切板を端から約55～75cmのところに立てていた。仕切板が位置する身の内面部分には、浅い溝があるだけで固定のための特別なしつらえはない。土砂の流入によって北仕切板は内側に倒れ、内に向かって傾斜する土層が形成されている。同様の仕切板を用いた例は、大阪府南天平塚古墳などで報告されている。南天平塚の例も「身には首端から一八センチ、尾端から二一センチ入り込んだところに幅九センチの溝がうがたれ、そこに半円形の嵌板を装置し」たようである（春沢1961）。この種の端部形式は土砂の流入状況から判断できる可能性もある。

久宝寺1号墳例では仕切板が端部よりかなり内側に位置するため、埋葬空間の長さは182cmにとどまる。両小口板近くでそれぞれ歯牙が残存しており、2体埋葬であったと考えられる。木棺の長大性は、空間を有効に利用することには活かされていない。棺の長大性は、とくに外見を意識したものと考えることもできる。

端部開放式（外当て板） 大阪府黄金塚古墳中央部に残された棺の端部は、開放式の端部の外側に別板をあてる形式であった（末永・島田・森1954）。この事例が著名になって、堅穴式石室の復元例でもそうした木棺を

想定する場合が多い。痕跡としては残りやすい形式であり、大阪府弁天山C1号墳後円部堅穴式石室（原口・西谷1967）、奈良県鴨都波1号墳（藤田・木許（編）2001）などで報告されている。兵庫県梅田1号墳などもこの形式と考えられる（菱田（編）2002）。ただし痕跡としては残りやすい形式にも関わらず、確認例がそれほど多いわけではない。

端部削残し式 削竹形石棺や舟形石棺の表現にみられるように、端部に一定幅を残して内部を刳抜き、身と一体のものとして小口をつくり出す形式である。石棺表現においては、一定の短い幅を掘り残し、その内側をほぼ垂直に落とし、蒲鉾形に刳抜く。端部外面は垂直に裁ち落とした直裁式である。一方、栃木県七廻り鏡塚古墳のきわめて残りのよい木棺例は端部が曲線を描き、隅丸方形を呈する（大和久（編）1974）。粘土棺に痕跡が残された例として、静岡県若王子12号墳では長さ6.9mに及ぶ木棺痕跡の一端は直裁式であるが、もう一端は先が細く終わる尖頭式とされている（藤枝市教委1983）。埼玉県埼玉稻荷山古墳第1主体においても、礫床の凹みの一端が尖頭式となっている（さきたま資料館（編）1980）。「舟棺」ないし「舟形木棺」との関連が注目されている例である（岡本1999）。

この形式は、刳残された幅の広狭によって区分できる。栃木県七廻り鏡塚古墳出土木棺は、端部に突起をもつが、突起をのぞいた長さは5.13m。遺骸を納める空間は、端部から約0.9m幅を残して、内法の長さ3.21mの刳抜きによってつくり出している（大和久（編）1974）。刳こみの周囲に長方形の段をめぐらし、蓋と印籠合せ形式で組合せる。端部から刳りこみ部端までが、側縁の幅よりもはるかに広いことが特色である。なおこの木棺端部の底面は反りをもち、両端で形態を異なる。

七廻り鏡塚古墳の棺は後期の例であるが、長大な木棺中央部の一定の長さだけを刳抜き、両端に比較的長い刳残し部分を設けた棺は、古墳時代前期の早い段階から存在が想定されている。奈良県下池山古墳から出土した、前期古墳としては希有な遺存状況を示す刳抜式木棺は、「棺内は大きく三分割され、両端部分は刳残される。中央の棺内空間も深さ20cmに満たず、長さも全長の1/2以内にとどまる」と推定される」と観察され

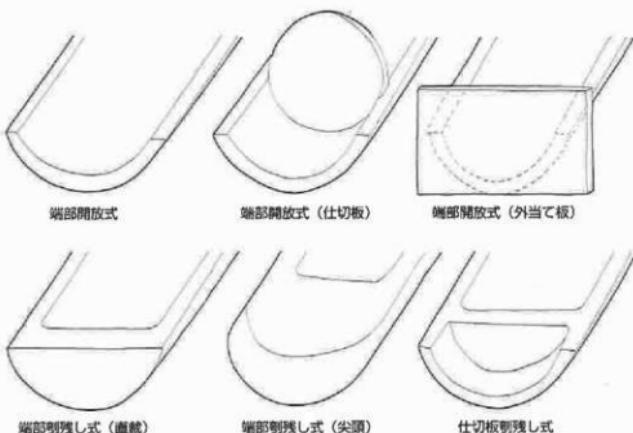


図35 木棺端部の分類

ている（岡林1997）。また三角縁神獣鏡の大量出土で知られる奈良県黒塚古墳の竪穴式石室内の棺は、長さ約6.2mに復元されるが、顔料分布の違いや内部の埴土や落した石材の堆積状況から、中央部の長さ約2.8mの部分のみが削抜き部分であったと推測されている（岡林1999a）。

この形式の木棺では、収容空間が狭くなる一方、重量は大幅に増加する。長大な削抜式木棺においては、外見の大きさが重視されたことを示す材料ともなるだろう。下池山古墳や黒塚古墳のような大和古墳群に築かれた古墳に採用されており、前期において重要な意義をもつ棺形式であった可能性がある。

棺が遺存していない場合、埋土の縦断面の慎重な観察を要するなど、土中では見極めにくい形態であり、潜伏例があることを想定する必要がある。時期は異なるものの、京都府大風呂南1号墓第1主体の例をとりあげる（白数ほか2000）。棺の外形は石崎のいう舟底状木棺に復元できるが、赤色顔料の分布がくぼみの中央の長方形部分にのみ限られる点が注目される。副葬品の位置も対応するこの範囲を腐朽が進行する前の削込み部分とし、端部に幅広い削残しが本来はあったものとも想定できないだろうか。

（3）その他の要素

滋賀県雪野山古墳では端部の粘土床において半環状突起の痕跡が検出された（福永・杉井（編）1996）。この突起がとりつく棺本体の端部は、削残しによってかたちづくられていたものと推測できる。棺の北端部からやや南に隙間を空けて農工具類がまとまって置かれている。この幅が削残しによる端部の厚みと復元できる。

この木棺は底面の横断面のカーブがきわめてゆるく、また中に2つの仕切り板の存在が認められ、佐賀県熊本山古墳の舟形石棺とよく似ていることが注目されている。外形と内部の状況をあわせて、削抜式木棺の全体像に近づく資料として重要である。

石川県雨の宮1号墳では棺端部において身と蓋の双方に各2、計4個の円柱状突起のあったことが痕跡から確認された。慎重な調査から突起の存在を明らかにした貴重な例である（中屋2005）。粘土被であってもこの部分がきれいに残存することはあまり期待できず、検出は困難が多いものと思う。竪穴式石室の場合は、棺床から突起の高さが浮いた位置にくることがほとんどであり、痕跡の残存はほとんど期待できない。粘土被の場合も腐朽にともなう崩落により、痕跡を残しにくい。実際の検出例は限られているものの、突起をもつ削抜式木棺は一定以上存在したと考えたほうがよい。今尾文昭は雪野山古墳例を手がかりとして、棺床と石室壁の間の距離から突起部の有無を推測する方法を考えている（今尾1995）。

もうひとつ別の要素についても触れておく。福岡県若八幡宮古墳の埋葬施設は、棺身は「舟形木棺」であり、平坦な蓋をもつものと復元されている（柳田・副島1971）。いくつかの特異な点がみられるが、とくに目張りと考えられる粘土が、棺身の凹み外郭から10cmあまり離れた位置で方形にめぐっていたことは注目される。報告では蓋が身よりも大きかったのではないかと想定されているが、この位置にいわゆる舟べり状突帯を想定することはできないだろうか。棺床の凹みと粘土との間は明確に平らな面をなしていたと報告されており、そうした突帯の存在を想定するとうまく説明できる。石棺の例からみても、舟べり状突帯をもつ棺が一定数存在した可能性はある。

4 削抜式木棺のかたち

近年の調査例から、弥生時代後期には大型の墳墓などで削抜式木棺が用いられていたことが明らかとなってきたが、古墳時代の削抜式木棺との系譜関係について議論は決着していない。石崎は端部の縦断面形が垂直に立ち上ることなどから、異なる棺形式とも考えられている（石崎2001）。しかしここでみたように、古墳時代前期においても端部にはさまざまな形態の棺が想定され、弥生時代の要素と共に通するものもみられる。今尾文昭は前方後円墳成立の当初から棺形態においていくつかの種類が並存することを強調する（今尾1995）。

古墳時代の剣拔式木棺につながる系譜はひとつではないかもしれない。

前期末～中期前半になると、一古墳に複数の埋葬施設や棺を納める例が多くなる。そこでは異なる形態の棺をあわせ用いる例がめだつ。定納5号墳はその典型例にあたり、ひとつの墓壙に、端部形態のほか、大きさ、設置方法も異なる二つの棺が同時に納められていた。こうした木棺形態の違いは一般に、時期差や地域性のはかに、性別・階層・出自など被葬者の違いを表示するものと考えられている。剣拔式と組合式の木棺形式、竪穴式石室、粘土棺、木棺直葬といった設置施設、箱式石棺や埴輪棺のように棺の素材などさまざまな要素に違いのある埋葬施設が、ひとつの墳丘、ひとつの墓壙に共存する例がすでに知られている。

木棺の細部における違いが、どこまで強く当時の人々に意識されていたかはわからない。しかし定納5号墳の場合のように、そうした要素の中には埋葬の手順の違いと結びつくものもある。どのようななかたちの棺を選ぶのかという点において、被葬者の違いに細かく対応した区分が存在していた可能性がある。

弥生時代の組合式木棺を対象とした福永伸哉の研究では、木棺形態の違いが被葬者の出自の違いと結びつくものと想定された（福永1985）。組合式木棺の場合、墓壙内で組み立てられる際にその形式の違いが示される。それに対して剣拔式木棺は、製作・移送・設置の各段階において、形態や大きさが人々の目にはっきりと触れることになり、その違いがよりめだつ。組合式と比べたときの剣拔式木棺の特性である。さらに検討を続けたい。

参考文献

- 赤冢次郎 2005 「史跡東之宮古墳調査報告書」犬山市埋蔵文化財調査報告書第2集 犬山市教育委員会
- 石崎善久 1997 「京都府下における礎床をもつ木棺について」「浪江庸二先生・林和廣先生追悼 太灘波考古学論集」
- 両丹考古学研究会 127-137頁
- 石崎善久 2000 「弥生墳墓の構造と変遷—舟底状木棺を中心としてー」「丹後の弥生王墓と巨大古墳」季刊考古学別冊10 雄山閣 65-72頁
- 石崎善久 2001 「舟底状木棺考—丹後の剣拔式木棺ー」「京都府埋蔵文化財論集」第4集 京都府埋蔵文化財調査研究センター 67-78頁
- 今尾文昭 1995 「木棺一棺形態の二、三ー」「季刊考古学」第52号 前期古墳とその時代 雄山閣 43-47頁
- 今尾文昭 2004 「前期古墳の副葬品配列」「考古資料大綱」第10巻 弥生・古墳時代 遺跡・遺物 小学館 60-74頁
- 梅原未治 1940 「本邦上代高塚の内部構造に就いて」「史林」第25巻第3号 史学研究会 1-22頁
- 梅本康広・佐々木薫一・茂木麻予・藤井康隆 2001 「石棺の構造」「寺戸大塚古墳の研究」I 財団法人向日市埋蔵文化財センター 61-76頁
- 大和久義平(編) 1974 「七廻り鏡張古墳」大平町教育委員会
- 岡林孝作 1997 「整穴式石室」「木棺」「下池山古墳 中山大塚古墳発掘調査概報」大和の前期古墳Ⅱ 奈良県立橿原考古学研究所 学生社 40-42頁
- 岡林孝作 1999 a 「粘土棺床」「黒塚古墳調査概報」大和の前期古墳 奈良県立橿原考古学研究所 学生社 62-64頁
- 岡林孝作 1999 b 「大和天神山古墳出土木棺の再検討」「青陵」第102号 奈良県立橿原考古学研究所 3-7頁
- 岡林孝作 2002 「木棺・整穴式石室」「日本考古学協会 2002年度 橿原大会 研究発表会資料」日本考古学協会2002年度橿原大会実行委員会 253-262頁
- 岡本東三・押野一貴(編) 1996 「千葉県館山市大寺山洞窟第3・4次発掘調査概報」千葉大学文学部考古学研究室
- 岡本東三 1999 「よみがえる舟葬論」「国説 古墳研究最前線」別冊歴史読本23 第24巻23号 新人物往来社 36-41頁
- 小栗明彦(編) 1999 「三陵墓西古墳」奈良県立橿原考古学研究所・都祁村教育委員会
- 北野耕平 1964 a 「富田林真名井古墳」「河内における古墳の調査」大阪大学文学部国史研究室研究報告第1冊 51-83

貢

- 北野博平 1964 b 「駒ヶ谷宮山古墳」『河内における古墳の調査』大阪大学文学部国史研究室研究報告第1冊 84-118頁
- 小林行雄 1941 「堅穴式石室構造考」『紀元二千六百年記念史学論文集』京都帝国大学文学部 1147-1168頁（同1976『古墳文化論考』平凡社に所収）
- 小林行雄 1946 「日本古墳の舟葬説について」『西宮』第3号 西宮史談会 17-36頁（「舟葬説批判」と改題・改稿して『古墳文化論考』に所収）
- 近藤義郎 1977 「前方後円墳の成立」『考古論集』慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集 249-256頁
- 近藤義郎(編) 1991 『推現山51号墳』推現山51号墳発掘調査団
- 反口英毅 2005 「副葬品の配置」『紫金山古墳の研究—古墳時代前期における対外交渉の考古学的研究—』平成14~16年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書 京都大学人文学院文学研究科 117-124頁
- さきたま資料館(編) 1980 『埼玉稻荷山古墳』埼玉県教育委員会
- 沢田康夫・佐藤昭樹 1983 『井河古墳群』那珂川町文化財調査報告書第10集 那珂川町教育委員会
- 沢田康夫 1983 「妙法寺古墳群発見の剖竹形木棺について」『井河古墳群』那珂川町文化財調査報告書第10集 那珂川町教育委員会 17-18頁
- 白畠真也・肥後弘幸・長谷川達・高田健一 2000 『大風呂南墳墓群』岩滝町文化財調査報告書第15集 岩滝町教育委員会
- 末永雅雄・島田暁・森浩一 1954 『和泉黄金塚古墳』日本考古学報告第5冊 総藝社
- 瀬川貴文 2005 『古墳時代後期の木棺とその多様化』『井ノ内稻荷塚古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第3冊 大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団 425-446頁
- 高木恭二 1987 「九州の舟形石棺」『東アジアの考古と歴史』下 岡崎敬先生追憶記念論集 234-267頁
- 都出比呂志 1986 「堅穴式石室の地域性の研究」昭和60年度科学研究費補助金(一般C)研究成果報告書 大阪大学国史研究室
- 鹿島県埋蔵文化財センター 2001 「阿諦山脈東南縁の古墳群—四国横断自動車道の建設に伴う埋蔵文化財調査概報—」鹿島県埋蔵文化財センター調査概報第3集
- 豊岡卓之・ト部行弘 1996 a 「堅穴式石室」『中山大塚古墳 附篇 萩本弁天塚古墳 上の山古墳』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第82集 奈良県立橿原考古学研究所 45-55頁
- 豊岡卓之・ト部行弘 1996 b 「後円部上部の築造と墓壙」『中山大塚古墳 附篇 萩本弁天塚古墳 上の山古墳』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第82集 奈良県立橿原考古学研究所 161-168頁
- 中屋克彦 2005 「埋葬施設」『史跡 雨の吉古墳群』鹿西町教育委員会 71-90頁
- 西村多・南條直子 2003 「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書」V-大阪竜華都市拠点上地区西整理事業(都市機能更新事業)に伴う発掘調査一 財団法人大阪府文化財センター調査報告書第103集 財団法人大阪府文化財センター
- 取部聰志 1987 「大塚古墳の埋葬施設について」『豊中大塚古墳』豊中市文化財調査報告第20集 豊中市教育委員会 161-169頁
- 浜崎悟司・立原秀明・広岡公夫・佐竹俊昭 2002 「加賀市吸坂・黒瀬古墳群」一般国道8号改築工事(南郷拡幅)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 原口正三・西谷正 1967 「弁天山C1号墳」「弁天山古墳群の調査」大阪府文化財調査報告第17輯 大阪府教育委員会 46-112頁
- 原口正三 1973 「土保山古墳」『高麗市史』第6巻考古編 高槻市史編さん委員会 63-68頁
- 樋口隆康 1998 「昭和28年 椿井大塚山古墳発掘調査報告」京都府山城町文化財調査報告書第20集 山城町

- 菱田淳子(編) 2002 『梅田古墳群』I 一播但連絡道路(5期事業)に伴う埋蔵文化財調査報告書II- 兵庫県文化財調査報告第240冊 兵庫県教育委員会
- 福永伸哉 1985 「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』第32巻第1号 考古学研究会 81-106頁
- 福永伸哉・杉井健(海) 1996 『雪野山古墳の研究』雪野山古墳発掘調査会
- 藤井康隆 2001 「向日丘陵前期古墳群の堅穴式石槨について」『寺戸大塚古墳の研究』I 財団法人向日市埋蔵文化財センター 141-157頁
- 藤枝市教育委員会(編) 1983 「若王子・釣瓶落古墳群」志太広域都市計画蓮花寺池公園事業に伴う文化財調査概要
- 藤沢一夫 1961 「古墳文化とその遺跡」『豊中市史』第1巻 豊中市役所 36-126頁
- 藤田和尊・木許守(編) 2001 『鳴都波1号墳 調査概報』御所市教育委員会 学生社
- 前田清彦 1999 「北陸の木棺墓とその展開」『北陸の考古学』III 石川考古学研究会叢書第42号 石川考古学研究会 97-115頁
- 三田敦司・森泰通・飯塚邦男・川口昌代 2001 『三味線塚古墳』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集 豊田市教育委員会
- 森下掌司 2003 「中期古墳の粘土構造木棺埋葬」『古代日韓交流の考古学的研究—墓制の比較研究—』平成11~平成13年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書 59-68頁
- 柳田康雄・鶴島邦弘 1971 「若八幡宮古墳」「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第2集 福岡市入字徳永・飯氏所在の遺跡 福岡県教育委員会 7-44頁
- 吉留秀敏 1989 「九州の割竹形木棺」「古文化談叢」第20集(中) 九州古文化研究会 1-41頁
- 吉村和昭 2004 「中期古墳の副葬品配置」『考古資料大観』第10巻 弥生・古墳時代 遺跡・遺構 小学館 75-91頁
- 和田晴吾 1995 「棺と古墳祭祀ー『据えつける棺』と『持ちはこぶ棺』ー」『立命館文学』第542号 立命館大学人文学会 22-49頁
- 和田晴吾 2002 「組合式木棺」「割竹形木棺」『日本考古学事典』三省堂 240頁 929頁

挿図出典

図33 同本篤志作成

図34 三味線塚(三田・森・飯塚・川口2001 第22図を一部改変トレス) 吸坂E 1号(浜崎・立原・廣岡 2002
第7図を一部改変トレス)

図35 森下作成

筒形銅器の副葬とその背景

岩本 崇

はじめに

筒形銅器は、これまでに日本列島において40基あまりの古墳から70例ほどが出土している。また、ほぼ同数の資料が韓半島南部地域で集中的に確認されており、古墳時代前期から中期にかけての日韓交渉を考えるうえで有効な考古資料と位置づけられる。

現在までに出土した筒形銅器はいずれも墳墓においてみいだされており、副葬品としての性格を有するものであったとみなしうる。筒形銅器が副葬品としての性格をもつてあれば、副葬に至るまでのその使用時の姿が、最後の使用状況を示す墳墓での出土状況に反映される可能性はけっして低くない。先学によって、出土状況が筒形銅器の用途や機能を考えるうえでの数少ない材料とされてきたのは、こうした理由にはかならない。

今日、筒形銅器の出土状況にかんする情報は調査例の増加とともに、以前に比べるとずいぶんと豊かになった。それは日本列島の出土例に限らず、韓半島の例においても同様である。このたび報告された滋賀県定納1号墳も、筒形銅器副葬のあり方を考える際の貴重な一例となるであろう。

本稿では筒形銅器の出土状況をあらためて整理し、その類型化を試みる。筒形銅器の副葬配置に一定の約束をみいだせるのであれば、そこには共通した背景の存在を予想できるし、細かなとりあつかいの異同があれば、また別の解釈を提示することも可能となるはずである。副葬配置の類型化を試み、その類型が共有された背景、あるいは逆に差異が生じた背景を検討することは、筒形銅器の性格を考えるうえで必要不可欠なのである。そのうえで、出土古墳の様相などを含めた副葬にかかる諸現象を整理し、筒形銅器が墳墓におさめられた背景の一端に迫ることとしたい。

1 研究史

分析に移る前に、筒形銅器副葬の意義にかかわる先行研究の論点を整理しておきたい。筒形銅器の用途と機能にかんする研究と、筒形銅器の流通のあり方を追求する研究に大別し、それぞれの論点を概観する。

用途と機能にかんする研究 鳥居龍蔵は考古学史上で筒形銅器にたいしてはじめて言及し、その用途を劍の把と推測した（鳥居1888：256頁）。高橋健白も香川県石清尾山猫塚古墳での銅劍との共伴を手がかりに、目釘孔を用いて筒形銅器と銅劍を留めたと考えた。しかし、いっぽうでこの想定にもなお吟味が必要であることを強調した（高橋1910：66頁）。末永雅雄も石清尾山猫塚古墳例を重視して、筒形銅器を劍把と推定した（末永1941）。

たいして梅原末治は、関連資料やその形態的特徴を考慮して、劍把にくわえてヤリの石突でもあった可能性を示した（梅原1921）。森本六爾もこの見解について関連資料をまじえながら検証した（森本1929）。さらに村井富雄も、形態的特徴や出土状況から筒形銅器を石突の一種と考えた（村井1956）。

筒形銅器が武器の一部をなすという見方に異論をとなえたのは、小林行雄である。小林は筒形銅器の形状が武器としては華奢であることから武器説に否定的な見解を示し、装飾的な器物の柄に付属するものと推定した（小林1951：108頁）。また、透かしの存在や青銅製舌を内部におさめる点から、音を鳴らすという機能をもつことも指摘した。（三木・小林1959：115頁）。大塚初重も、岡山県金蔵山古墳で埴製合子から筒形銅器が出土した点を考慮するとともに、内部に青銅製舌や管玉をおさめる例の存在から、響音機能を備えた杖頭をな

表3 古墳出土の

No.	古墳名	所在地	出土 点数	墳 形 類	規 模(m)	埋葬施設	山田分類	岩本分類
1 (元) 上野	一		[1]	一	—	II	C?	
2 鷹野神社古墳	埼玉県桶川市	1	円墳	45	粘土甃	III	A	
3 山越村墓塚古墳	長野県長野市	2	前方後円墳	93	堅穴式石室	II 2	B' ? / 不明	
4 三池平古墳	静岡県静岡市	2	前方後円墳	68	堅穴式石室	II 2	A 2	
5 (元) 梶原白野10号墳	静岡県浜松市	1	円墳	—	横穴式石室	II	B'	
6 (元) 朝霞上古墳	静岡県三島市	[2]	—	—	—	不明	不明	
7 榛ヶ原古墳	福井県福井市	1	円墳	36	木棺直葬	II	B'	
8 (元) 小牧	三重県四日市市	1	—	—	—	III	A	
9 安土城塚山中央石室	滋賀県安土町	2	前方後円墳	162	堅穴式石室	II 1, II or III 1	A 2	
10 宝鏡1号墳	滋賀県近江町	1	前方後円墳	21	木棺直葬	II	A	
11 谷塚古墳	奈良県桜井町	1	円墳	27	木棺直葬	III	B	
12 タニケチ1号墳	奈良県高市町	2	円墳	20	粘土甃	II 2	A 1 / 不明	
13 西漢古墳	奈良県御所市	1	円墳	24	粘土甃	II	A	
14 波ノ内5号墳第3室	奈良県桜井市	1	円墳	15	木棺直葬	II	不明	
15 新潟500号墳劇場	奈良県橿原市	5	前方後円墳	62	粘土甃	II 1, III 3, IV 1	A 5	
16 嵩山2号墳	奈良県橿原市	1	円墳	20	粘土甃	II	B	
17 地丸大塚古墳	奈良県橿原市	1	円墳	35	粘土甃	IV	C	
18 (元) 中岡古墳	京都府守谷町	[1]	前方後方墳	64	—	木棺	不明	
19 岩原古墳	京都府守谷市	2	方墳	40	粘土甃	II 1, IV 1	B 1 / B' 1	
20 大穴古墳群中	京都府龜岡市	1	円墳?	—	—	II	C?	
21 矢瀬山工塚古墳	京都府八幡市	1	円墳	60	粘土甃	—	不明	
22 (元) 山城古墳	京都府	1	—	—	—	III	A	
23 紗見古墳前方面右側	京都府向日市	1	前方後円墳	115	—	II	B	
24 カシヤ古墳第1主室	京都府京丹波町	1	円墳	73	堅穴式石室	II	A	
25 酒匂古墳	大阪府守口市	1	立石具形古墳	64	粘土甃	II	B	
26 東草深古墳	大阪府吹田市	1	前方後方墳?	50	木棺直葬	III	C?	
27 (元) 赤塚山	大阪府枚方市	1	—	—	—	II	B	
28 番金山古墳	大阪府茨木市	1	前方後円墳	110	堅穴式石室	I	A	
29 (元) 岩塚	和歌山県和歌山市	1	—	—	—	II	A	
30 丹山古墳	兵庫県太子町	1	—	—	—	II	B	
31 (元) 児見山古墳	鳥取県赤穂郡	1	前方後円墳	—	堅穴式石室	II	A	
32 (元) 石清尾山巣塚古墳	香川県高松市	3	双方中円墳	96	堅穴式石室	II 2, III 1	A 2 / B 1	
33 吉岡石室古墳	香川県高丸町	1	前方後円墳	52	堅穴式石室	IV	B'?	
34 吹上の森1号墳	愛媛県伊予市	2	前方後円墳	40	—	II 2	B 2	
35 高岡1号墳	高知県安佐南区	1	円墳	18	西鉄	額外	A	
36 金武山古墳中央石室	高岡県高岡市	2	前方後円墳	165	堅穴式石室	I Ⅲ 1, II Ⅲ 1	B 2	
37 浅川3号墳	高岡県高岡市	1	円墳	7	組合式石室直葬	II	B	
38 鮎原古墳	尾山川	1	—	—	—	II	B	
39 (元) 四つ塚1号墳	岡山県高底町	1	円墳	27	横穴式石室	II	A	
40 鳥高孫古墳	岡山県高底町	1	前方後方墳	51	堅穴式石室	III	A	
41 大迫山1号墳	広島県庄原市	1	前方後円墳	45	堅穴式石室	II	A	
42 (元) 燐坂2号墳	広島県三原市	1	円墳	15	粘土甃	III	B?	
43 亀山1号墳	広島県神辺町	1	円墳	28	粘土甃	III	B	
44 三木大塚古墳	広島県三次市	1	立石具形古墳	41	堅穴式石室	III	不明	
45 長光学山古墳	山口県山陽小野田市	1	前方後円墳	62	堅穴式石室	II or III	A	
46 西浦山古墳	島根県鳥取市	1	円墳	10	—	II	B	
47 生山29号墳	島根県鳥取市	1	円墳	20	堅穴式石室	III	A	
48 山古墳第1, 第2主室	鳥取県出雲市	各1	円墳	24	木棺直葬	II 1, III 1	A 2	
49 久野10号墳	福井県吉田市	1	方墳	9.5	組合式石室直葬	III	B	
50 横田古墳2号石室	佐賀県唐津市	1	円墳	30	堅穴式石室	II	A	
51 清水木古墳	鹿児島県西城市	1	—	—	組合式石室直葬	III	—	

【例】「傍乳」二角乳頭状の区分は別小2003。甲:無印、乙:斧、丙:单; 坪塚板革冠短甲、方:单、单; 方形板革冠短甲、三:革、单; 三角板革冠短甲。丁:单; 三角板革冠短甲。戊:单; 木棺直葬。己:单; 木棺直葬。庚:单; 木棺直葬。辛:单; 木棺直葬。壬:单; 木棺直葬。癸:单; 木棺直葬。

す器物である可能性を述べた(大塚1961)。

これらの研究をうけて出土状況を網羅的に分析した山田良三の研究には、注目すべき点が多い。山田は、筒形銅器の延長上にはヤリ先やホコ先が存在することを確認し、この使用方法が基本であったと指摘した(山田1969・2000)。

さらに、杖頭など器物の装飾、ヤリ・ホコなど長柄武器の石突のいずれの場合もあったと考え、本来的に宝器的な機能を備えた器物とみる説もある(玉井1997)。

流通にかんする研究 いっぽう、筒形銅器の流通のあり方にかかわる研究は、近年の韓半島における急激

筒形銅器一覧

否	共 伴 資 料		
	三角錐神獸鏡	碧玉製品	甲 寶
—	—	—	—
—	—	石鏡6、筋縫車形5、簡形4	—
青銅	—	車輪石1、竿柱形2	—
青銅／なし	—	車輪石1、石鏡1、筋縫車形2、帆立貝形4	—
—	—	—	—
—	—	—	—
管玉2	—	—	—
—	—	—	—
吉國／なし	—	鉢形石1、車輪石1、石鏡2	方・革・甲
青銅?	—	—	—
青銅	—	石鏡2	—
吉國／青銅?	—	—	方・革・甲
青銅	—	—	—
—	—	筋縫車形1、竿柱形4	—
青銅2／なし3	「偽製」D群	鉢形石片、車輪石3、石鏡1、筋縫車形1、簡形7	方・革・中 小札・革・甲
—	—	—	—
—	—	石鏡1	三・革・甲
—	—	石側石2	—
—	—	—	三・革・堅・革・革・三・革・甲、長・革・甲
—	—	—	—
—	—	鉢形石1(探案)	—
不明	—	鉢形石2、石鏡2、車輪石1	—
管玉	—	石鏡1	三・革・青・三・革・甲、長・革・甲
—	—	石側石1、竿柱形5	三・革・青・三・革・櫛甲
—	—	—	—
なし	舶載、「偽製」A・C・D群	鉢形石6、車輪石1、筋縫車形3	堅・革・甲
—	—	—	—
青銅	—	—	—
—	—	—	—
—	「偽製」F群	石鏡1	—
—	—	—	—
—	—	筋縫車形3	—
青銅	—	—	—
青銅／青銅	—	鉢形石1、簡形、環頭形1	三・革・甲
鉄	—	—	—
—	—	—	—
—	—	—	甲
青銅	—	—	—
—	—	—	—
—	—	—	—
なし	—	—	三・革・甲
—	—	—	横・筋・甲
—	「偽製」D群	鉢形石1、巴形1	—
—	—	—	—
鉄	—	筋縫車形1	—
碧玉／なし	—	—	—
青銅	—	—	—
—	—	—	甲
—	—	—	甲

な出土例の増加を背景とする。主な論点としては製作地問題、出土古墳の評価を基礎とする被葬者の政治的位置、および倭王権の政治戦略における筒形銅器の意義の考究などがある。

申敬澈は、日本列島には祖形がない点や、韓半島における出土総数、多量副葬などを根拠に、筒形銅器が金官加耶で製作された可能性を考えた（申1993）。さらに、その後の研究の進展をふまえて、共伴資料を参考に再検討を試み、自身の見解の妥当性を追認した（申2004）。

こうしたなか田中晋作は、畿内地域を主として筒形銅器出土古墳の様相を整理し、古墳時代前期後半以降に新たに台頭する古墳被葬者に保有される傾向が強いと指摘した。また、畿内地域およびその周辺の新興中

小勢力により受容された器物と考えた。そのうえで数量が限られており、副葬が継続しないこと、甲冑との共伴のあり方などから、筒形銅器が韓半島南部で製作された、あるいは同地を経由して日本列島にもちこまれたものである可能性を説いた（田中1996・1998・2005）。福永伸哉も田中とほぼ同様の方法で、筒形銅器出土古墳の性格を検討した。製作地については見解を保留するものの、日本列島における筒形銅器出土古墳の諸要素を検討し、筒形銅器が大和盆地北部、河内平野の新興勢力によって配布された可能性を示した。そのうえで、筒形銅器出土古墳の被葬者像として、「政権内新興勢力との連携をうけた人物」を想定し、その背景に対韓半島交渉の活発化を考慮した（福永1998）。鄭澄元と洪濬植も田中のあげた根拠にくわえ、韓半島における筒形銅器の生産と副葬が日本列島より先行することなどを指摘し、源流が韓半島にあると想定した（鄭・洪2000）。また、井上主税も田中の指摘をふまえつつ（田中1996ほか）、保有状況や出土墳墓のあり方などから、筒形銅器が韓半島製である可能性を考えた（井上2004）。

そのいっぽうで、筒形銅器の製作地を日本列島と考える見方もある。小田富士雄は筒形銅器を「倭政権を背景とする相互贈答品」とみた（小田1993）。山田良三はほかの後系遺物も韓半島で出土する事実を重視して、一括して韓半島に搬出された可能性を示した（山田2000）。柳本照男も、とくに韓半島における筒形銅器が大成洞古墳群、良洞里古墳群、福泉洞古墳群に限定して出土する点をあげ、そのほかの諸点からも倭の器物が一括して搬出されたという山田の見解を追認している（柳本2001）。

本稿のとる方法 筒形銅器の用途を推定するにあたっては、山田良三が指摘するように（山田1969・2000）、古墳における出土状況が重要な鍵になると見える。しかしながら、その副葬のあり方を体系的に整理・把握しようとした研究はこれまでにない。そこで本稿では、筒形銅器の副葬配置を類型化し、さらに細部における異同をも勘案しながら、配置のあり方の実態を探る。そのうえで、出土古墳の規模や分布などから、筒形銅器が墳墓に副葬された背景を考察することとしたい。

2 古墳における筒形銅器の副葬配置と用途・機能

定納1号墳では1点の筒形銅器が出土した。埋葬施設は攪乱によってその多くを破壊されていたが、幸いにも筒形銅器はほぼ原位置と考える状態で確認された。筒形銅器は棺内の遺体頭部付近と想定できる位置の棺底直上において、棺の主軸にはほぼ直交して出土した。定納1号墳にみる筒形銅器の棺内副葬は、これまでの確認例のなかでも稀少な存在であり、筒形銅器の用途と機能を考えるうえで重要な事例と評価できる。

現在、われわれが日のあたりとする副葬配置は、埋葬過程の諸段階に配置された副葬品の集積によるものである。埋葬施設や遺体との位置関係をはじめ細部に至るまで配置が共通するということは、埋葬過程のそれぞれの段階における行為に共通性があった可能性を示す。それはけっして偶然によるものではなく、配置にかかわる情報を共有した背景があったとみなしうるであろう。こうした情報の共有が、日本列島でのみみとめられるのか、韓半島をも含めた共通性を保持するのか、あるいは配置類型間には細部における差異が存在するのかという点を具体的に検討することは、筒形銅器を評価するうえでの重要な作業と位置づけられる。

そこで、以下ではひとまず対象を古墳出土例に限定し、筒形銅器の埋葬施設における副葬配置を検討する。韓半島の墳墓における出土状況については、次章でふれることにしたい。

(1) 古墳における筒形銅器の副葬配置類型

まずは、副葬配置を棺内副葬と棺外副葬に大別し、さらに遺体や埋葬施設内の位置関係を重視しながら細分する。なお、筒形銅器の副葬位置については、棺外に副葬したものが転落したなど、現状の出土状況がからならずしも本来の状況を示すわけではない（山田1969・2000、福永1998）。ただし、そうした事例については配置の類型化の後に別途検証することとし、ひとまずは調査時に確認できた出土状況を分析する（図36）。な

お、検討の対象とするのは、乱掘など後世の擾乱によって、筒形銅器の原位置がそこなわれていないと判断できる例と、配置状況の復原がある程度可能な例である。

①棺内副葬

筒形銅器が棺内から出土した例である。さらに、遺体や埋葬施設との位置関係、筒形銅器の軸の方向から2類型に細分できる。

A類 棺内の遺体付近から出土した例で、筒形銅器の軸が埋葬施設の主軸にたいしてほぼ直交するものである。頭骨や赤色顔料、鏡や玉類などの副葬品から、いずれも遺体の頭部付近と考えられる位置に副葬されたと判断できる。ヤリやホコとの共伴を確認できない例を含む。定納1号墳はこの類型に該当し、ほかには島根県山地古墳第1主体部、山地古墳第2主体部、岡山県浅川3号墳、奈良県池ノ内5号墳がある。

B類 棺内の遺体付近から出土した例で、筒形銅器の軸が埋葬施設の主軸とはほぼ揃うものである。鏡や玉類などの副葬品から、遺体の周囲と想定できる位置で出土した。大阪府秦金山古墳、大阪府盾塚古墳、京都府カジヤ古墳の3例がある。盾塚古墳では筒形銅器の口縁部を頭位方向に、カジヤ古墳と紫金山古墳では足位方向に向けるなど、その向きには違いがあるが、後述するように棺外からの転落による例を含む可能性があるため、その差異が何によるものであるのかを推定することはむずかしい。

②棺外副葬

筒形銅器が棺外から出土した例である。棺との位置関係から、さらに3類型に細分することが可能である。

A類 棺外小口から出土した例である。筒形銅器の軸が埋葬施設の主軸と直交に近く異なるものを含む。いずれも遺体の頭側の小口で出土した。鳥取県生山29号墳、静岡県三池平古墳が該当する。棺内に配置されることの多い銅鏡や石製品などと一括して配置する点が特徴である。

B類 棺外棺側から出土した例である。筒形銅器の軸が埋葬施設の主軸とほぼ揃うものがほとんどである。筒形銅器の配置方式のなかでも主体をなす類型であり、広島県大迫山1号墳、岡山県金蔵山古墳中央石部、奈良県城山2号墳、奈良県タニグチ1号墳、奈良県谷畑古墳、滋賀県安土郡草山古墳がこの類型にあたる。筒形銅器はいずれも被葬者の遺体頭部付近と想定される位置に比較的近い場所から出土した。筒形銅器の口縁部を足位方向に向けるものが4例、頭位方向に向けるものが2例と、配置そのもののばらつきは大きい。

C類 棺外・椁外から出土した例である。筒形銅器の軸が埋葬施設の主軸とほぼ揃うものが多い。福岡県立野10号墳、広島県龜山1号墳、京都府尼塚古墳が該当する。いずれも筒形銅器の口縁部を足位方向に向ける。なお、立野10号墳は後述するように器物から解体された可能性が高い。椁外に位置することから、遺体の頭部付近に配置しようとする意図はうかがえず、埋葬施設の上や脇に主軸に沿って配置する。

③その他

このほか、岡山県金蔵山古墳では副葬におさめられた埴製合子、奈良県新沢500号墳では副葬品埋納施設から筒形銅器が出土している。

(2) 副葬配置類型と用途・機能

つぎに分類した各配置類型から筒形銅器の用途と機能をどのように評価することができるかを検討しよう。

副葬配置からみた筒形銅器の用途と機能 副葬配置から器物の用途や機能を考えるにあたって留意しなければならないのが、出土状況が本末の器物の姿を反映するのかという前提である。なぜなら、銅鏡の破砕や、鉄製品の折り曲げ、甲冑の解体といった例が存在するからである。筒形銅器についても、立野10号墳では内部におさめられた青銅製舌が筒形銅器とは離れて出土しており、副葬時に筒形銅器をとりつけた器物が解体された可能性をうかがえる。また、金蔵山古墳において埴製合子から出土した1点は、破損した特異な形

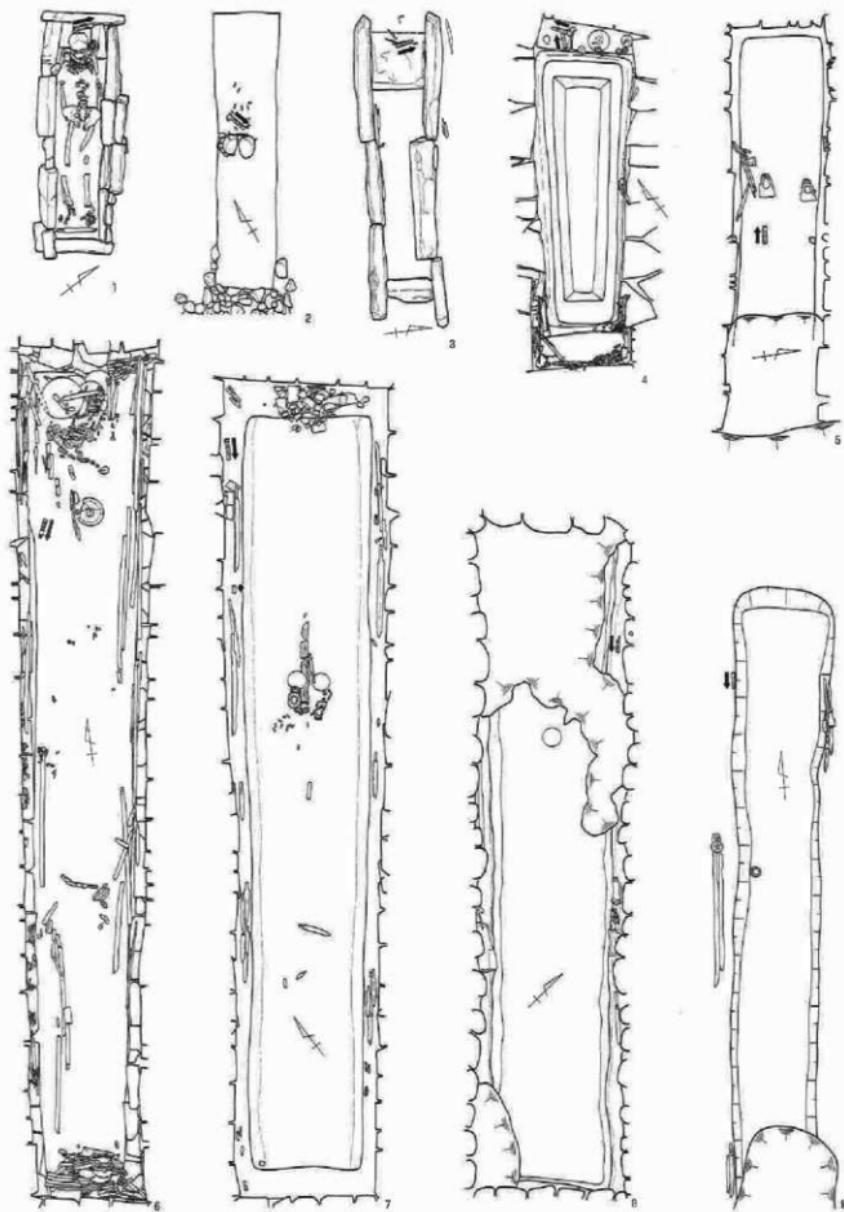
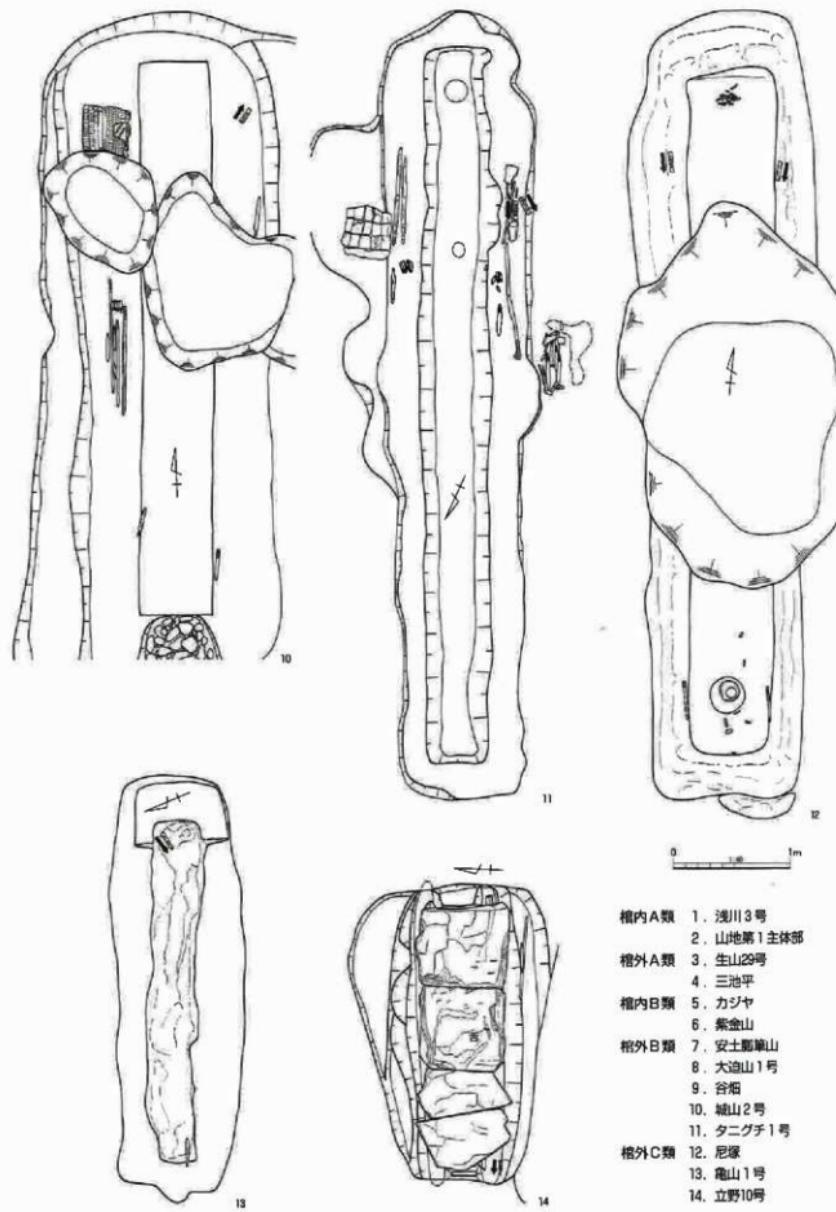


図36 占墳における



- 棺内A類 1. 浅川3号
2. 山地第1主体部
棺外A類 3. 生山29号
4. 三池平
棺内B類 5. カジヤ
6. 紫金山
棺外B類 7. 安土郡龜山
8. 大迫山1号
9. 谷畠
10. 鎌山2号
11. タニグチ1号
棺外C類 12. 尼塚
13. 龜山1号
14. 立野10号

態のホコとともににおさめられており、副葬される以前に両者は解体されていたようである。ここでとりあげた2例の存在は、配置のあり方から筒形銅器の機能や用途を考える際に、十分な吟味が必要であることを示す。

副葬配置からその機能と用途をもっとも推測しやすい類型は、棺外C類である。棺外C類では、筒形銅器が棺外・櫛外から出土しているが、同一の埋葬施設においてほかに同じ出土状況を示すのはヤリ先あるいはホコ先のみである。しかも、両者はほぼ一直線上に並んでおり、筒形銅器がヤリやホコの石突であった可能性（山田1969・2000ほか）をきわめて強く反映する配置と評価できる。

同様に、ヤリやホコの石突と想定できる配置は、棺外B類にも多い。大迫山1号墳、タニグチ1号墳、谷畑古墳、安土瓢箪山古墳では、筒形銅器の口縁部の方向に装具からもヤリ先と判断できる剣形武器をみいだせる。なお、棺内B類の紫金山古墳出土例は、赤色顔料の付着が木棺内出土のほかの器物に比べて顕著ではないことから、棺外から転落したものである可能性が高い。本来の位置と想定される場所の延長上にはヤリ先が存在する。

いっぽうで、ヤリ先やホコ先と共伴しない、あるいはヤリ先やホコ先とは位置関係からも対応しないと考えられる配置類型もある。同一埋葬施設においてヤリ先やホコ先の出土していない例が棺内A類にある。山地古墳第1主体部と同第2主体部ではヤリ先やホコ先そのものが確認されていない。こうした例では、ヤリやホコの石突ではない、別の用途と機能を備えていたとみてあやまりなかろう。

また、配置からヤリ先やホコ先との対応関係を想定しにくい例として、やはり棺内A類の浅川3号墳と池ノ内5号墳、さらに棺外A類の生山29号墳、三池平古墳をあげる。さらに、棺内B類の后塚古墳とカジヤ古墳も位置関係上、ヤリ先やホコ先との対応をみいだしがたい。ただし、カジヤ古墳例は紫金山古墳例と同様に、近接して出土したほかの副葬品に赤色顔料が付着するにたいし、筒形銅器には赤色顔料の付着がみとめられないことから、棺外から転落したものである可能性が高い。また、棺外B類の城山2号墳は口縁部の方向を考慮すると、ヤリやホコといった長柄武器を構成するとみるのが困難な例である。

筒形銅器にみる武器以外の機能 ただし先述したように、十分に考慮しておかねばならないのは、立野10号墳のように筒形銅器が付属した器物を解体したとみなしうる例が存在することである。逆に、解体の可能性を考慮する必要がないのは、ヤリ先やホコ先が伴出しない例に限られる。したがって、ヤリ先やホコ先が同一埋葬施設内で出土しているのであれば、副葬時に長柄の武器を解体した可能性を考慮しなければならない。大半の筒形銅器出土古墳ではヤリ先となる剣形武器やホコ先が出土しているため、十分な吟味が必要なのである。

しかしながら、棺内A類および棺外A類の多くでは、筒形銅器をほかの器物とほぼ同じ位置に括して配置するという特徴がある。とくに、筒形銅器が鏡鏡や石製品などとほぼ同様のあつかいをうけている点はみのがせない。すなわち、筒形銅器が構成した器物に鏡鏡や石製品などと同様の宝器のあるいは威信財的な側面が付与されていた可能性を考慮できるのである。また、山地古墳第2主体部、生山29号墳、池ノ内5号墳、定納1号墳から出土した各例で、布に巻かれたような痕跡がみとめられることもそうした性格とかかわりがあろう。さらに、棺内A類と棺外A類の多くの例が、内部に舌をおさめた状態で出土していることは、これらがことごとく解体されて副葬されたわけではないことを示すと考える。鏡鏡の破碎や、鉄製品の折り曲げ、甲骨の解体は、それら器物の副葬例全体のなかでもかなり少數である。にもかかわらず、筒形銅器の付属する器物のみが積極的に解体の対象になったとは考えにくい。むしろ、鏡鏡や石製品といったほかの器物ととりあつかいが共通する点、そうした例に布の付着したものが存在する点を重視して、筒形銅器が宝器的あるいは威信財的な側面を付与されるような器物を構成した可能性を示すものと評価したい。

(3) 小 結

以上、日本列島における筒形銅器出土古墳にみる副葬配置のあり方から、筒形銅器がヤリやホコなどの長柄武器の石突であった可能性、長柄武器ではなく宝器的・威信財的な側面が付与される器物を構成した可能性を指摘した。すなわち、筒形銅器はとりつけられる対象によって、異なる性格を有する器物を構成した可能性があるとともに（玉井1997）、その差がおおまかに副葬配置にもあらわれていると理解できる。ただし、あくまでもヤリやホコの石突として用いられた例が主流であったと考える。

また、ヤリやホコの石突と想定できる配置において、筒形銅器の口縁部の向きに着目すると、口縁部を被葬者の頭位方向に向けるものが1例、足位方向に向けるものが8例を数える。ただし、口縁部が足位方向に向く例のうち、立野10号墳では筒形銅器がともなう長柄武器が解体され、ヤリ先はその切先を刀とともに頭位方向に向けていた。こうした例を頭位方向へ口縁部を向ける例に含めたとしても、筒形銅器を装着した長柄武器は副葬時にその切先を足位方向に向けるものが優位であるという傾向にあることはまちがいない。筒形銅器が被葬者の頭部付近を意識して配置される傾向にある点はこれまでにもふれてきたとおりであり、この点が筒形銅器の口縁部の向きをある程度規定する結果になったと考える。その背景には、筒形銅器によって構成される器物が本来的に宝器的性格をもつものという点が深くかかわっていたと考える。

長柄武器として副葬されたと想定しうる例には、複数の筒形銅器が出土することもある。実際に発掘調査を経た例が少ないものの、棺の主軸に沿って、複数の筒形銅器を棺や櫛の左右にわけて置くものが尼塚古墳の1例、棺や櫛からみて同じ側にまとめて副葬するものがタニグチ1号墳と安土瓢箪山古墳の2例を数える。また、金蔵山古墳のようにそれぞれのとりあつかいをまったく異にする例もあり、複数副葬の配置のあり方にばらつきがあることを理解できるだろう。

さらに、長柄武器以外の機能を有する器物を構成したと想定できる配置類型には、棺内A類、棺内B類の一部、棺外A類、棺外B類の一部がある。これらが長柄武器以外の同じ性格をもつ器物を構成した保証はないが、先の長柄武器とともに考えられる例と同様に、同じ筒形銅器でありながら、じつに多様な配置のあり方を示す点はみのがせない。多様な機能をもつ可能性を示すとともに、副葬時に多様なとりあつかいをうけた可能性を考慮できる。

また、棺内A類と棺外A類が基本的には小規模な埋葬施設で採用されている点にも留意しなければならない。とくに、棺内空間に副葬品をおさめるスペースが少ないので、必然的に埋葬施設の主軸に直交させて配置する、あるいは鏡や石製品などとともに棺外に配置することになった可能性を考慮しうる。この点は筒形銅器が長柄武器を構成した場合でも同様であり、長さがあるために棺の主軸に沿って配置されたことは容易に理解できる。すなわち、筒形銅器が付属した器物には、ある特定場所に配置しようという強固かつ明確な意図が付与されるのではなく、埋葬施設にあわせて配置方法が変化したとみることも十分に可能なのである。さらに別のいい方をすれば、銅鏡の副葬配置にみるような、特別なとりあつかいを積極的にうかがうことが困難であるともいえるだろう。

以上分析したように、筒形銅器の副葬配置にはいくつかのパターンがあり、それぞれの類型はおおまかに共通すること、類型の差が用途・機能の違いにむすびつきうこと、配置方法に特別なとりあつかいをみいだしにくいことを特徴としてあげることができる。

3 韓半島における筒形銅器の副葬配置

つぎに、韓半島の墳墓において筒形銅器がどのように副葬されていたのかを検討することとした。ただし、韓半島の筒形銅器はまとめて出土する例が多いために、かえって出土墳墓の総数は少ない。さらに、

遺体との位置関係をくわしく検討できる例となると、その数はより少なくなる。したがって、以下では代表的な事例に設定して個別に検討をくわえ、そのうえでいかなる傾向にあるのかを明らかにしたい(図37)。

大成洞1号墳 主櫛の木櫛内より8点が出土した。上軸を東西にとる櫛のなかで、7点が北西隅に近接して馬具類とともに出土し、1点が南西隅付近で確認された。南西隅で出土した1点は、軟質器部の脇から出土しており、原位置を保つものである可能性が高い。筒形銅器は櫛の主軸に直交しており、ヤリ先やホコ先との関連を想定することはできない。残りの7点については馬具類の隙間や直上から出土した。いずれも櫛の主軸方向に軸をとる。これら筒形銅器群の東側にはヤリ先が存在しており、対応関係を想定できる可能性が高い。ただし、7点のうちの4点はヤリ先の存在する東側とは反対方向に口縁部を向ける。2点が接して出土した例と、ヤリ先とこの2点の筒形銅器をむすぶ延長上にある1点が東側に口縁部を向ける。なお、埋葬は人骨から5体以上が想定されており、筒形銅器と被葬者との位置関係を明らかにすることは難しい。

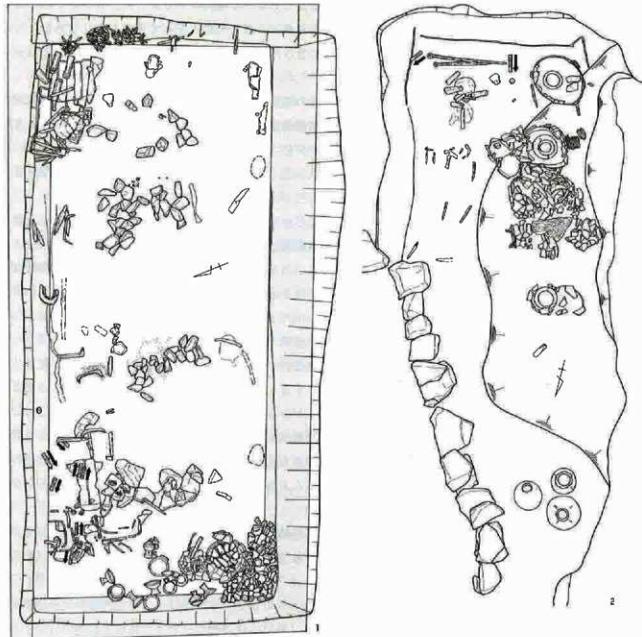
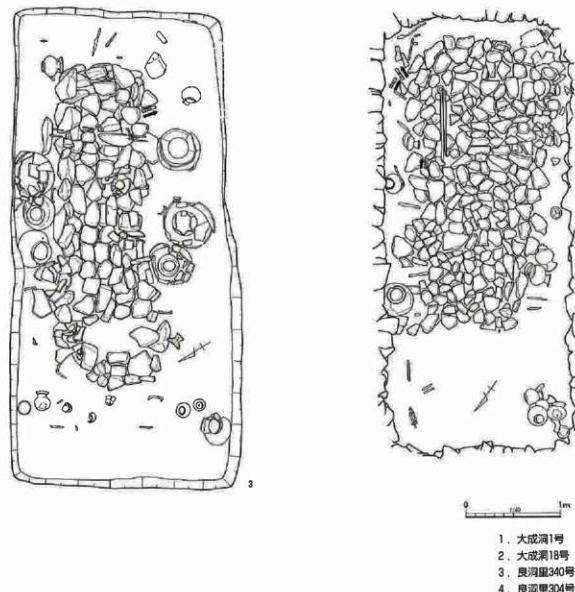


図37 韓半島の墳墓における筒形銅器の副葬配置

大成洞18号墳 木櫛内より2点が出土。木櫛は南北に主軸をとり、中央よりやや東側に南枕で被葬者が葬られたことが人骨より明らかである。筒形銅器はいずれも軸を南北、すなわち櫛の主軸と並んで、櫛内南端付近の遺体頭部近くで出土した。口縁部は被葬者の足元側に向ける。口縁部の延長上にはヤリ先が存在しており、遺体の両脇を筒形銅器が付属する2本のヤリではさむように配置したと復原できる。被葬者との位置関係が把握できる点で重要な調査例といえよう。

良洞里304号墳 主櫛の木櫛内より3点が出土した。主軸を東西にとる木櫛内で筒形銅器はおおむね2ヶ所にわかれて出土した。副葬品の配置などから、被葬者は東枕で葬られた可能性が高い。2点は木櫛南東隅、被葬者頭位方向の梢外と想定される場所で軸を木櫛の主軸とあわせるような状況で配置されたと想定できる。口縁部は櫛の外側に向ける。もう1点は主軸に併行して並べられた鉄刀2点の脇で、口縁部を被葬者の足位方向に向ける。おそらく被葬者の体側に沿って置かれたものであろう。体側に配置された1点はホコ先との



1. 大成洞1号
2. 大成洞18号
3. 良洞里304号
4. 良洞里304号

対応を想定しうるが、ほかの2点についてははっきりしない。

良洞里340号墳 木櫛内より1点が出土した。木櫛は東西に主軸をとり、棺台と想定される硯敷が確認されている。筒形銅器は硯敷が途切れる位置の南東付近で出土した。筒形銅器の軸を木櫛主軸にたいして直交するように配置しており、ヤリ先やホコ先との対応関係をみいだすことのできない副葬例である。

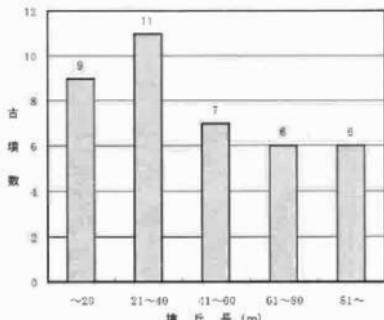
韓半島の墳墓における筒形銅器の副葬配置 以上、きわめて簡単に代表例に限定して出土状況を概観した。その結果、韓半島の墳墓における筒形銅器の配置方法は以下のように整理することが可能である。まず、筒形銅器の軸を埋葬施設の主軸に併行して配置する例と、直交するように配置する例の大きく二つのあり方をみとめうる。主軸に併行して配置する例にはヤリやホコを構成したと想定できる例が含まれるとともに、直交して配置する例にはヤリ先やホコ先との対応関係をみいだせない例が目立つ。ただし、あくまでも主軸に併行して配置する例が主体である。こうした配置と機能の関係は、日本列島の古墳における筒形銅器の副葬配置と共通するものとみなしうる。また、長柄武器を構成すると想定できる例では体側に配置する例が多く、被葬者の頭部付近から筒形銅器が出土する例が顕著である。長柄武器以外の機能を想定できる場合でも、被葬者の頭部付近から出土している例が存在する点は、日本列島の出土例と同様である。ただし、韓半島の筒形銅器出土墳墓の埋葬施設は木槨を基本としており、埋葬施設の構造上、ある程度の空間を確保できるという特徴をもつ。日本列島では、埋葬施設の構造によって筒形銅器の副葬配置が規定された状況をうかがうことができることはすでに先述した。そうした諸点を考慮すれば、被葬者の体側に沿って筒形銅器を配置する例が多い事実は、どちらかといえば日本列島よりも韓半島の方が墳墓における副葬配置の共通性が高いことを示唆するであろう。

4 筒形銅器出土古墳の様相

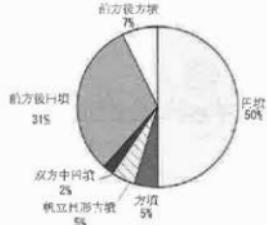
本章では、日本列島における筒形銅器出土古墳の規模や形態、分布、埋葬施設や其伴資料の特徴をあらためて整理することで、出土古墳の様相をうかがってみたい。

(1) 出土古墳の様相

筒形銅器出土古墳の規模・形態 筒形銅器出土古墳の墳長と古墳数の関係をグラフに示す(図38-1)。任



1. 筒形銅器出土古墳の墳丘規模



2. 筒形銅器出土古墳の墳丘形態 [n=42]

図38 筒形銅器出土古墳の規模・形態

意の規模区分を採用しているものの、おおまかな傾向をつかむことは可能と考える。グラフをみると明らかのように、20m以下の墳丘規模の小さな古墳をはじめ、80~160mに達するような大型の古墳からも、偏りなく出土している点が注目できる。いっぽう、出土古墳の墳丘形態にはいかなる特徴をみいだせるであろうか(図38-2)。グラフをみると、墳丘形態にかかる限りは、いっけん円墳が優位であるような状況をよみとることができる(福永1998)。ただし、40m以下の墳丘規模では前方後円墳や前方後方墳じたいが少ないという点、出土古墳の半数が40m以下である点を考慮すれば、上述のあり方をただちに全体の傾向とみることはできない。むしろ、古墳の規模と形態の関係、それぞれの全体的な比率を考慮すれば、墳形のばらつきは大きいと理解すべきである。以上のように、筒形銅器は特定の墳丘規模や墳丘形態をもつ古墳から出土するのではなく、小規模墳から大規模墳まで、さまざまな形態をもつ古墳から出土するという特徴をみいだしうるであろう。

筒形銅器出土古墳・墳墓の分布 つぎに出土古墳および墳墓の分布をみよう(図39)。日本列島における筒形銅器出土古墳の分布をみると、やや畿内地域に集中する傾向はあるものの、近畿地方から瀬戸内沿岸地方を中心とした広範囲に一定数が分布する状況をよみとることが可能である。これらの地域にくらべると、東日本や九州では出土古墳が極端に少ない。筒形銅器が九州を除く西日本を中心に分布するという点を確認できるであろう。しかも、ある程度分布が密な近畿地方から瀬戸内沿岸地方でも、集中的な出土というよりは全体に広く出土する点が重要と考える。いっぽう、韓半島ではその南部地域、なかでも大成洞古墳群で16点、良洞里遺跡で7点、福泉洞古墳群で12点と、合計43点がきわめて限られた範囲から集中的に出土している(申2004)。日本列島と韓半島の分布をあわせてその特徴をみると、韓半島から瀬戸内沿岸を経由して近畿地方に至るルートの周囲に一定数の筒形銅器が分布するという状況をうかがえる。そうした状況は、東日本の出土古墳が極端に少ない事実をも考慮すれば、畿内地域に分布の中心を求めることがやや困難であることを示唆するを考える。

筒形銅器出土古墳の埋葬施設 先述したように、古墳出土の筒形銅器の副葬方法が埋葬施設にあわせて変化した可能性は十分に考慮できる。筒形銅器を副葬するにあたって、埋葬施設が与えた影響はけっして小さくないと考えることが可能である。

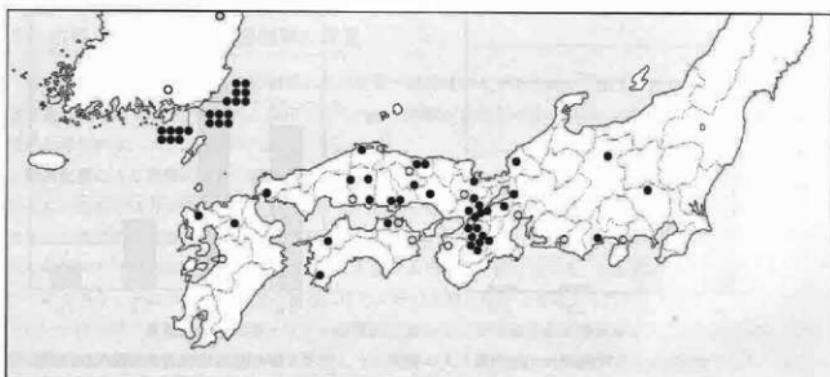


図39 筒形銅器出土遺跡の分布 (○は伝出土地)

図40 簡形銅器出土古墳の埋葬施設($n=39$)

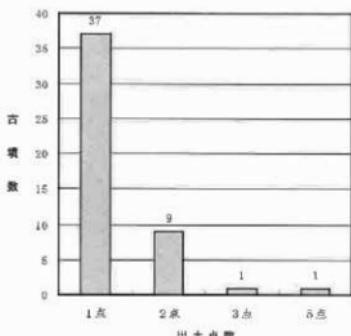
出土古墳の埋葬施設のあり方をみると、壁穴式石室と粘土壙、木棺直葬が主体である(図40)。こうした傾向は、古墳時代前期後半から中期前半にかけての埋葬施設のあり方とはほぼ符合する。横穴式石室から出土した例が若干存在するが、3例のうち2例は伝承によるものである。注目されるのが、筒形銅器出土古墳のなかに、特色ある埋葬施設を採用する例がわずかに存在する点である。佐賀県横田下古墳では初期の横穴式石室、鳥取県生山29号墳では碑斂をもつ組合式石棺を壁穴式石室におさめ、高知県高岡山1号墳では碑斂が採用される。横田下古墳の横穴式石室については、同種の横穴式石室がこの時期では北部九州にほぼ限定できるあり方を示しており、畿内地域との関係というよりはむしろ韓半島との関係のなかでうみ出されたものとみてよい(柳沢2002)。いっぽう、生山29号墳では底石のない石棺を壙のよう構築し、さらにその外側に板石を積み上げて覆る。碑斂を有するほかにあまり例のない埋葬施設の構造であり、その系譜を畿内地域との関係のなかでのみとらえることは難しい。また、高岡山1号墳の埋葬施設もほかの古墳にはあまり例をみない碑斂である。

このように筒形銅器出土古墳の埋葬施設は、古墳時代前期後半から中期前半にかけての通有の埋葬施設をまんべんなく網羅するとともに、畿内地域との関係だけではとらえにくい特徴をもつ例や特殊な例をわずかに含む。

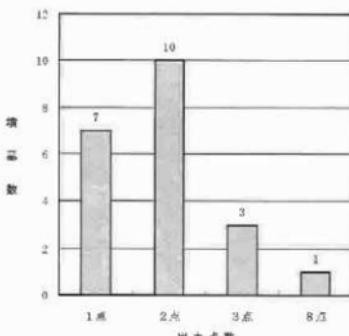
(2) 保有状況と共伴資料による特徴

つぎに、筒形銅器の古墳における保有状況と共伴資料にいかなる特徴があるのかを検討しよう。

筒形銅器の保有状況 同一埋葬施設あるいは同一古墳における、筒形銅器の出土点数と古墳数の関係を示す(図41-1)。全体の約77%が1点の出土、約19%が2点の出土であり、3点と5点がともに約2%となる。およそ8割が単数副葬例であり、これが基本的なあり方であったと判断できる。墳丘規模や墳丘形態と出土点数のあいだにも明瞭な関係をうかがうことができず、日本列島において筒形銅器は幅広い階層で均質に受



1. 古墳における筒形銅器の出土点数



2. 韓半島における筒形銅器の出土点数

図41 墳墓における筒形銅器の出土点数

容されうる器物であったとみなしうる。

いっぽう、韓半島では1点の出土が約33%、2点の出土が約48%、3点の出土が約14%、8点の出土が約5%となる（図41-2）。複数副葬例が大半であり、出土した副葬品の内容が豊富な例ほど数多く副葬する傾向にある。日本列島における筒形銅器の保有状況とは大きく様相を異にしており、数量によって格差を設定した状況を想定することができる。とりわけ、2本をセットにする例が多い点は注目できるであろう。

三角縁神獸鏡との共伴例 筒形銅器出土古墳では数は少ないものの、4基で三角縁神獸鏡が出土している。さらに、京都府妙見山古墳前方部の西側で筒形銅器が採集されており、前方部粘土塚からの出土品である可能性が高い。いっぽう、香川県・石清尾山猫塚古墳から出土した3点については、そもそもこの古墳から出土したことすら確定的ではない。複数の埋葬施設が存在することからも、この古墳から出土したとされる三角縁神獸鏡と同じ埋葬施設で共伴した可能性を支持する材料はない。²⁰⁾

石清尾山猫塚古墳を除き、妙見山古墳前方部を含めた4基の古墳から出土した三角縁神獸鏡の下限は、いずれも筆者の「仿製」第1段階に相当する（岩本2003）。数量が少ないと断定することはできないが、古い段階の「仿製」三角縁神獸鏡と筒形銅器の共伴はけっして異例ではなかったようである。また、いずれも前方後円墳からの出土であり、墳丘規模もある程度大きいという共通点がある。

甲冑との共伴例 田中晋作が指摘するように、筒形銅器と甲冑の共伴例は多い（田中1998）。検討の対象とした40例のうち、15例で甲冑が共伴する。その割合は35%程度となる。共伴した甲冑の内訳は、3基の古墳から出土した短甲が形式不明であるものの、堅矧板革縦短甲1例、方形板革縦短甲3例、小札革縦短甲1例、三角板革縦衝角付冑3例、堅矧板革縦冑1例、三角板革縦短甲5例、長方板革縦短甲2例、横矧板革縦短甲1例である。堅矧板革縦冑甲・方形板革縦短甲・小札革縦短甲など前期甲冑（橋本1996・1998）との共伴はいずれも畿内地域の古墳に限られるが、これは前期甲冑の分布の問題であろう。主体となるのは帶金式甲冑（古谷1996）との共伴例であり、7古墳で確認できる。また、広い範囲ではあるが、近畿地方から瀬戸内沿岸地方にかけての範囲に分布が限定される。この現象は、筒形銅器出土古墳のなかでも有力古墳がこれらの地域に分布することを示唆しており、これらの地域が筒形銅器の流通に多大な影響を与えた可能性をうかがわせる。なお、製作技術の違いにもとづく区分ごとにみると（岩本2005b）、A群はいずれも形式が明らかな例では堅矧板・方形板革縦短甲と共にし、ほとんどのB群は帶金式甲冑と組み合う。相対的にA群を占く、B群を新しく位置づける。おおよそA群が古墳時代前期後半、B群が古墳時代中期前半に盛行した形式であると考えておきたい。

5 古墳における筒形銅器副葬の背景

前章までの分析によって、筒形銅器の副葬配置や副葬時のとりあつかい、出土古墳のあり方、保有状況や共伴資料の特質を明らかにした。以下ではこれまでの検討結果をふまえつつ、古墳における筒形銅器副葬の背景を考察する。

副葬配置にみる異同の背景 副葬配置の差から、筒形銅器には長柄武器を構成した場合と、武器以外の機能をもつ場合の双方があった可能性はすでに指摘したとおりである。とりわけ、長柄武器を構成したと想定できる配置例では埋葬施設の主軸に併行させて棺外に配置するが多く、武器以外の機能をもつと推測しうる配置例では埋葬施設の主軸に直交させて配置する例が一定数存在する。長柄武器はある程度の長さをもつものであり、それゆえ埋葬施設の構造に応じてその主軸に併行させるように配置することが必然となる。そのいっぽうで、長柄武器とは考えにくい配備例において、筒形銅器が埋葬施設に直交して副葬されるのは、筒形銅器の付属した器物が直交させて配置しうる程度の大きさであった可能性をうかがわせる。²¹⁾このように筒形銅器が付属した器物は、その大きさや埋葬施設の構造にあわせて、古墳における副葬配置とその方法が

変化したという点を確認できる。副葬時の細かなとおりあつかいにばらつきがあるという点も、筒形銅器の用途と機能に差があることと無関係ではなかろう。

さらに、韓半島と日本列島の墳墓における筒形銅器の副葬配置には、用途と機能の別にもとづく副葬位置の異同の存在とともに、埋葬施設の構造に応じた配置が採用されるなど、相違点よりも共通点のほうが目立つ。ただし、どちらかといえば、日本列島よりも韓半島の出土例の方が配置にみる共通性が高い。いずれにしても、筒形銅器が付属した器物に、特別な意図にもとづく列島独自の配置方法が採用された状況を考えるのは困難である。

なお、列島出土の長柄武器と想定できる例では被葬者の頭部付近に筒形銅器が位置する例や、武器以外の機能をもつと想定できる例でも被葬者の頭部付近に銅鏡や石製品とともに配置する例が多い。そうした点では、筒形銅器に宝器的な側面をうかがうことが可能である。ただし、同様のあり方を示さない例も一定程度存在しており、被葬者の頭部付近を意識したとみなしうる配置方法を採用しながらも、配置類型にもばらつきのある点を考慮すれば、そこに倭王権の特別な意味づけを想定するのは難しい。¹²⁾被葬者の頭部付近を意識した配置という一定の傾向も、倭王権による影響下で共有されたものとは考えにくい。むしろ、韓半島の影響をうけたものとみておくのが妥当であろう。

古墳における筒形銅器の副葬背景 これまでの本稿の検討結果を整理すると、①副葬配置や副葬時のとりあつかいにみる差異が顕著である、②用途と機能の別にもとづく副葬位置の異同を考慮できる、③どちらかといえば韓半島の出土例の方が日本列島の出土例より副葬配置の共通性が高い、④古墳における副葬配置やその際のとりあつかいにみる異同の背景に、筒形銅器にたいする倭王権の特別な意味づけを想定するのが困難である、⑤列島では幅広い階層に受容された器物と想定できる、⑥西日本のなかでも近畿地方から瀬戸内沿岸地方に広く分散しており、分布の中心を畿内地域に求めることが難しい、⑦出土古墳の埋葬施設にはばらつきがあり、まれに畿内地域との関係のなかのみではとらえにくく埋葬施設をもつもの含む、⑧韓半島とは異なって、列島内の筒形銅器は単数副葬が圧倒的である、⑨列島においては計画的な配布行為を想定しにくい、という9点に集約できる。これらの諸点を整合的にとらえると、すべての筒形銅器が倭王権を媒介とした配布活動によって各地の古墳の被葬者にもたらされたものとは考えにくい。むしろ、近畿地方から瀬戸内沿岸地方を中心とした西日本における交流のなかで広く流通し、各地の古墳の被葬者が個々入手するといった状況も含めた多様な流通形態を想定することも十分に可能であろう。

おわりに

本稿では、筒形銅器を材料に、その副葬にかかわる諸現象を検討し、筒形銅器が古墳に副葬される背景を考察した。その結果、筒形銅器に複数の機能を想定できること、特定の勢力に意図的に配布したものではなく、幅広い階層の被葬者が入手した器物を構成した可能性を説いた。

そのうえで、かならずしも畿内地域との関係によらない、すなわち倭王権を介した配布活動によってすべての筒形銅器がもたらされたとは考えにくい可能性を想定した。

いっぽう、すでに筒形銅器の製作技術にかんしては一定の見通しを提示しているものの（岩本2005b）、これをふまえた分析や考察を試みることができなかった。また、製作地問題についても製作技術面からの検討を絶たうえで判断すべきものであることはいうまでもない。さらに、筒形銅器そのものの年代や出土古墳の時期を考慮した検討をおこなうことも必要な作業である。時間的な変化のなかで筒形銅器の流通のあり方が変化した可能性も考慮できるからである。本稿では概略的にしかふれることのできなかった韓半島での筒形銅器のあり方を詳細に検討することも不可欠である。これらの点と、それをふまえた考察については今後の課題とし、機会をあらためて論じることとしたい。

付 記

田中晋作氏には有益なご教示とご高配をいただいた。牛山29号墳の出土状況図の掲載に際しては、鳥取市教育委員会の平川誠氏、鳥取市埋蔵文化財センターの谷口恭子氏に格別のご高配を賜った。末筆ながら記して感謝の意を表したい。なお、本稿の作成には平成17年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）を使用した。

註

- (1) 「ヤリ」および「ホコ」の名称と区分については菅谷文則の案にしたがう（菅谷1975）。
- (2) 器物の副葬配置にかかる情報は、一連の行為のうち埴輪施設を埋め戻すため、きわめて限られた状況下でしか共有されないという側面があると考える。
- (3) 表3に掲げた「古墳出土筒形銅器一覧」にとりあげた例を検討の対象とする。なお、筒状で底部が閉塞されていない、奈良県富雄丸山古墳出土例と京都睿妙見山古墳出土例については、そのほかの例と製作技術を異にするとみなしているのであつかわない。また、広島県福ノ岡古墳出土上例と広島県畠山古墳出土例については広島県馬場谷2号墳例との混亂があるため、これらについても検討の対象から除外する。〔伝〕上野と〔伝〕南山城、〔伝〕郡原古墳については、具体的な所在地が不明のため、本稿で検討の対象とはしないが、参考として示した。なお、このほか出土地不明が7例以上あるが、今回は一覧から除外する。
- (4) 以下の分析で用いる、筒形銅器の軸については、口縁部と底部をむすぶ方向とする。
- (5) いっぽう同じ類型の唐塙古墳出土の筒形銅器も転落によるものであるという指摘があるが（山田2000）、調査者が示す一括したまとまりという認識を重視しては原位置を保つものと考えておく。ほほ同じ機能を有する銅鏡が接して出土しているのもその傍証となろう。
- (6) 増田逸朗は、埼玉県熊野神社古墳出土の筒形銅器・筒形石製品の数と鉛錠車形石製品の数とが一致する点、出土した管玉の法量がメスリ山古墳から出土した玉杖の管玉と一致する点から、熊野神社古墳出土の筒形銅器・筒形石製品と鉛錠車形石製品、管玉が玉杖を構成した可能性を指摘する（増田1986）。筒形銅器と鉛錠車形石製品の共伴率の高さは、細川晋太郎も指摘している。しかし、細川は鉛錠車形石製品が器物を構成する部品ではなく、基本的には単体で器物として成立した可能性を考慮する（細川2004）。
- (7) 銅鏡の副葬配置について、前期中葉以降に埴輪施設の简化化にあわせて変化した可能性を指摘したことがある（岩本2004）。ただし、距離の離れた古墳間においても特徴的な配置が採用されるとともに、細部のとりあつかいについてもある程度の共通性を保持する点で、筒形銅器とは様相を異にすると考える。前期中葉以降の銅鏡の多様な配慮のあり方は特徴的なものであり、しかも複数副葬例に限られる。いっぽう、半数副葬の場合はあくまでも被葬者の頭部付近に配置するのを基本とする。この点も筒形銅器の配置にみるばらつきとの相違点である。
- (8) 井上主税は、韓半島では被葬者の頭部付近に、口縁部を足部方向に向けて配置するといった共通点を指摘する（井上2004）。韓半島における筒形銅器の副葬配置に共通性を指摘する点では本稿と共通するが、その具体的な内容はやや異なる。とくに井上が指摘する筒形銅器の口縁部を足部方向に向けるという共通性は、日本列島でも同様に確認できることは、すでに述べたとおりである。
- (9) 生山29号墳における筒形銅器の出土状況にかんしては、鳥取市埋蔵文化財センターの平川誠氏、谷口恭子氏よりご教示をうけた。
- (10) 阿波・讃岐地域の堅穴式石棺を検討した山本三郎の成果によれば、石清尾山墓塚古墳の中央石棺の年代は前期初頭以降、前中期に下らない（山本2002）。中央石棺より筒形銅器や終焉段階の「仿製」三角縁神獸鏡（岩本2005a）が出土したとされるが、石棺そのものの年代と副葬品の年代のあいだに大きな差があり、注意を要する。
- (11) 未調査のため古墳であることが確認されていない例をひとまず含む。
- (12) このことは、棺内A類や棺外A類を除く、ほかの配置類型においても副葬が可能であることを示す。ただし、そう

した状況を明確に把握できる例はほとんど存在しない。

- (13) 筒形銅器がある器物を構成する部品と考えられる以上、器物に付与されるべき意義は筒形銅器ではなく、筒形銅器が構成した器物に与えられるはずである。また、構成する器物の性格が大きく通えば、その器物に与えられる意義も異なると想定できる。ひいては筒形銅器じたいに特別な意義をみいだしえないのは器物を構成する部品であり、多様な性格を有するがゆえのことと考える。
- (14) ただし、筒形銅器が長柄武器以外の機能をもつ器物を構成する例には、あるいは倭王權を介した配布の可能性も想定できるかもしれない。今後の良好な出土例の増加に期待したい。

引用文献

- 井上主税 2004 「金海および釜山地域古墳出土の儀式遺物について」『堀田啓一先生古稀記念 謹呈論文集』堀田啓一先生古稀記念獻呈論文集作成委員会 25-48頁
- 岩本 崇 2003 「「彷彿」三角縁神獸鏡の生産とその展開」『史林』第86巻第5号 史学研究会 1-39頁
- 岩本 崇 2004 「副葬配置からみた三角縁神獸鏡と前期古墳」『古代』第116号 早稲田大学考古学会 1-26頁
- 岩本 崇 2005 a 「三角縁神獸鏡の終焉」『考古学研究』第51巻第4号 考古学研究会 48-68頁
- 岩本 崇 2005 b 「筒形銅器の製作技術」『紫金山古墳の研究—古墳時代前期における対外交渉の考古学的研究—』平成14~16年度科学研究費補助金(基盤研究(B))(2))研究成果報告書 京都大学大学院文学研究科 305-314頁
- 梅原末治 1921 「佐味田及新山古墳研究」岩波書店 166-168頁
- 大塚初重 1961 「筒形銅器について」『三池平古墳』庵原村教育委員会 166-172頁
- 小田富士雄 1993 「古墳文化期における日韓交渉—倭と百濟・伽耶・新羅—」『伽耶と古代東アジア』新人物往来社 71-100頁
- 小林行雄 1951 「日本考古学概説」創元選書218 東京創元社
- 申 敬澈 1993 「伽耶成立前後の諸問題」『伽耶と古代東アジア』新人物往来社 115-160頁
- 申 敬澈 2004 「筒形銅器論」[福岡大学考古学論集・小田富士雄先生退職記念ー]小田富士雄先生退職記念事業会 679-702頁
- 末永雅雄 1941 「日本上代の武器」弘文堂書房 159-160頁
- 菅谷文則 1975 「前期古墳の鉄製ヤリとその社会」『櫛原考古学研究所論集 別立35周年記念』奈良県立櫛原考古学研究所 315-346頁
- 高橋健自 1910 「近時発見の珍品其三」『考古学雑誌』第2巻第3号 学術会議 66頁
- 田中晋作 1996 「古代国家の黎明—4世紀と5世紀の狭間で—」平成8年度特別展図録 池田市歴史民俗資料館
- 田中晋作 1998 「筒形銅器について」『網干善教先生古稀記念古文化論集』(上) 網干善教先生古稀記念論文集刊行会 495-518頁
- 田中晋作 2005 「筒形銅器について」『日本考古学協会第71回総会研究発表要旨』日本考古学協会 171-174頁
- 玉井 功 1997 「メモ・筒形銅器の用途とその意味」『伊達先生古稀記念古文化論叢』伊達先生古稀記念古文化論叢刊行会 239-245頁
- 鄭澄元・洪浩植 2000 「筒形銅器研究」『福岡大学総合研究所報』第240号(総合科学編第3号) 福岡大学総合研究所 45-56頁
- 鳥居龍藏 1888 「阿波國二古墳ノ記」『東京人類學會報告』第17号 東京人類學會 254-258頁
- 橋本道也 1996 「古墳時代前期甲冑の技術と系譜」『當野山古墳の研究』考察篇 雪野山古墳発掘調査團 255-292頁
- 橋本道也 1998 「堅矧板・方形板革縫短甲の技術と系譜」『青丘學術論集』第12集 財團法人韓國文化研究振興財團 47-76頁

- 福永伸哉 1998 「対半島交渉から見た古墳時代倭政権の性格」『青丘学術論集』第12集 財團法人韓國文化研究振興財團
7-26頁
- 古谷 稔 1996 「古墳時代甲冑研究の方法と課題」『考古学雑誌』第81卷第4号 日本考古学会 58-85頁
- 細川晋太郎 2004 「前期古墳副葬紡錘車形石製品の性格」『古文化論叢』第51集 九州古文化研究会 31-66頁
- 増田逸朗 1986 「4. 副葬品について」『墺玉県古式古墳調査報告書』 墇玉県県史編さん室 196-204頁
- 三木文雄・小林行雄 1959 「伝統工芸と新興工芸 装身具の変遷」『世界考古学大系』日本Ⅲ 古墳時代 平凡社
105-124頁
- 村井嵩雄 1956 「武藏国川田谷熊野神社境内所在の古墳」『考古学雑誌』第41卷第3号 日本考古学会 51-60頁
- 森本六爾 1929 「筒形銅器概観と本古墳発見品」『川柳村将军塚古墳の研究』同書院 68-73頁 (1943「筒形銅器について」『日本考古学研究』桑名文星堂 406-413頁に再録)
- 柳沢一男 2002 「4 横穴式石室の検討」『御崎古墳—1981~1983年調査報告一』福岡市埋蔵文化財調査報告書第730集
福岡市教育委員会 110-114頁
- 柳本照男 2001 「金海大成洞古墳群出土の後系遺物について」『久保和士君追悼考古論文集』久保和士君追悼考古論文集
刊行会 203-218頁
- 山田良三 1969 「筒形銅器考」『古代学研究』55号 古代学研究会 22-35頁
- 山田良三 2000 「筒形銅器の再考察1999」『福原考古学研究所紀要 考古学論叢』第23号 奈良県立橿原考古学研究所
1-43頁
- 山本三郎 2002 「阿讃地域の長大型堅穴式石室の出現について」『論集 德島の考古学』徳島考古学論集刊行会 471-
487頁
- 遺跡文献**
- 群馬
- 〔伝上野〕
- 森本六爾 1929 「筒形銅器概観と本古墳発見品」『川柳村将军塚古墳の研究』同書院 68-73頁
- 埼玉
- 〔熊野神社〕
- 村井嵩雄 1956 「武藏国川田谷熊野神社境内所在の古墳」『考古学雑誌』第41卷第3号 日本考古学会 51-60頁
- 長野
- 〔川柳村将軍塚〕
- 森本六爾 1929 「筒形銅器概観と本古墳発見品」『川柳村将军塚古墳の研究』同書院 68-73頁
- 静岡
- 〔三池平〕
- 内藤亮・人塚初重(編) 1961 『三池平古墳』庵原村教育委員会
- 〔根堅向野10号〕
- 梅原末治 1933 「讀破高松石清尾山石塚の研究」『京都帝國大學文學部考古學研究報告』第12冊 刀江書院
- 静岡県 1930 『静岡縣史』第1卷 445-452頁
- 静岡県 1992 『静岡縣史』資料編3 考古3 719頁
- 〔御蔵上〕
- 静岡県 1931 『静岡縣史』第2卷 715-718頁
- 福井

〔福井山〕

齊藤優 1960 「足羽山の古墳」福井県郷土史懇談会

福井市 1990 『福井市史』資料編1 考古

三重

〔四日市市小牧〕

岩野見司 1956 「考古学上からみた北伊勢」三岐鉄道株式会社

滋賀

〔安土瓢箪山〕

梅原末治 1938 「安土瓢箪山古墳」滋賀県史蹟調査報告第7冊 滋賀県

〔定期1号墳〕

本書

奈良

〔谷畑〕

関西大学考古学研究室(編) 1974 「谷畑古墳」奈良県宇陀郡橿原町教育委員会

〔タニグチ1号〕

河上邦彦・西藤清秀 1996 「タニグチ古墳群(付タニグチ塙墓群)発掘調査報告」高取町文化財調査報告第17冊

高取町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所

〔西浦〕

梅原末治 1922 「大和御所付近の遺跡研究」「歴史地理」第39卷第4号 日本歴史地理学会 13-23頁

森本六爾 1943 「筒形銅器について」『日本考古学研究』桑名文星堂 406-413頁

〔池ノ内5号〕

菅谷文則 1973 「池ノ内5号墳」「磐余・池ノ内古墳群」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第28冊 奈良県教育委員会 56-87頁

〔新沢500号〕

網干普教・伊達宗泰・森浩一・山田良三・猪熊兼勝・堀田啓一・寺沢知子・菅谷文則 1981 「500号墳(茶臼塚古墳)」「新沢千塚古墳群」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第39冊 奈良県教育委員会 23-78頁

〔城山2号〕

白石太一郎・前園英知雄 1974 「馬見丘陵における古墳の調査」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第29冊 奈良県教育委員会

〔斑鳩大塚〕

北野耕平 1958 「斑鳩大塚古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第10輯 奈良県教育委員会 43-54頁

〔富雄丸山〕

泉森咬(編) 1973 「富雄丸山古墳発掘調査報告」奈良県文化財調査報告書第19集 奈良県教育委員会

京都

〔カジヤ〕

坪倉利正・杉原和雄(編) 1972 『カジヤ古墳発掘調査報告書』京都府峰山町文化財調査報告第1集 峰山町教育委員会

〔中畠〕

森下浩行 1990 「<付記>中畠古墳」「圓部塙内古墳」圓部町教育委員会 11-12頁

〔穴太31号〕

亀岡市史編さん委員会(編) 2000 『新修亀岡市史』資料編第1巻 亀岡市
〔尼塚〕

- 山田良三 1969 「尼塚古墳発掘調査報告」『立命館文学』第289号 立命館大学人文学会 26-64頁
城陽市史編さん委員会(編) 1999 『城陽市史』第3巻 城陽市役所
山田良三 2005 『尼塚古墳 付宇治一本松古墳』尼塚古墳刊行会

〔美濃山大塚〕

- 梅原末治 1919 「美濃山ノ古墳」『京都府史蹟勝跡調査會報告』第2冊 京都府 83-91頁
〔妙見山〕

- 梅原末治 1921 「大枝村妙見山古墳ノ調査」『京都府史蹟勝跡調査會報告』第3冊 京都府 51-66頁
梅原末治 1955 「山城における古式古墳の調査」『京都府文化財調査報告』第21冊 京都府教育委員会
向日市文化資料館 2004 「向日丘陵の前期古墳」開館20周年記念特別展示図録

〔伝南山城〕

- 森本六爾 1929 「筒形銅器概觀と本古墳発見品」『川柳村將軍塚古墳の研究』図書院 68-73頁
大阪

〔扇塚〕

- 末永雅準(編) 1991 『扇塚 穂塚 珠金塚古墳』由良大和古代文化研究協会
〔東車塚〕

- 奥野和大・小川暢子 2000 『交野東車塚古墳〔調査編〕』交野市埋蔵文化財調査報告1999-I 交野市教育委員会
〔伝赤坂山〕

- 武藤誠 1977 「中井後類縣『集古群類』について」『兵庫県の古社寺と遺跡』武藤誠先生古稀記念会 531-548頁
〔紫金山〕

- 上原真人・吉井秀夫・阪口英毅・森下章司ほか 2005 「紫金山古墳の研究—古墳時代前期における対外交渉の考古学的研究—」平成14~16年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書 京都大学大学院文学研究科

和歌山

〔伝岩橋〕

- 田澤金吾 1922 「和歌山県史蹟調査報告」第1 岩橋千塚第一期調査 和歌山県
兵庫

〔松田山〕

- 龍野市史編纂専門委員会(編) 1984 『龍野市史』第4巻 龍野市
太子町史編纂専門委員会(編) 1989 『太子町史』第3巻 太子町

徳島

〔勢見山〕

- 鳥居龍藏 1888 「阿波國二古墳ノ記」『東京人類學會報告』第17号 東京人類學會 254-258頁
香川

〔石清尾山猫塚〕

- 梅原末治 1933 『讃岐高松石清尾山石塚の研究』京都帝國大學文學部考古學研究報告第12冊 刀江書院
〔吉岡神社〕

- 香川県教育委員会 1983 『新編香川叢書 考古篇』

- 日本考古学協会昭和58年度大会香川県実行委員会(編) 1983 『香川の前期古墳』

愛媛

〔吹上の森1号〕

相田則美 1984 「愛媛県伊予市吹上の森1号墳の出土遺物」『「社会科」学研究』第8号 「社会科」学研究会 68-73頁

高知

〔高岡山1号〕

山本哲也 1985 『高岡山古墳群発掘調査報告書』高知県教育委員会

岡山

〔金蔵山〕

西谷真治・鎌木義昌 1959 『金蔵山古墳』倉敷考古館研究報告第1冊 財団法人倉敷考古館

〔浅川3号〕

内藤善史(編) 1998 『高下遺跡 浅川古墳群ほか 横原古墳群 根岸古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告123 建設省岡山国造工事事務所・岡山県教育委員会

〔四つ塚1号〕

近藤義郎 1953 『蒜山原—その考古学的調査』岡山県教育委員会

〔岡高塚〕

今井亮 1963 『美作勝央町琴平山古墳』『古代古備』第5集 古代吉備研究会 21-24頁

倉林真砂斗・澤田秀実(編) 2000 『美作の首長墳 墳丘測量調査報告』古備人出版

〔舞原〕

森本六爾 1929 『筒形銅器概観と本古墳発見品』『川柳村将军塚古墳の研究』岡書院 68-73頁

広島

〔大迫山1号〕

川越哲志(編) 1989 『広島県比婆郡東城町 大迫山第1号古墳発掘調査概報』広島県東城町教育委員会・広島大学考古学研究室

東城町史編纂委員会(編) 1993 『東城町史』第1巻 自然環境・考古・民俗 資料編 東城町

〔馬場谷2号〕

福井万千 1977 『三原市史』第1巻 原始・古代編 636-639頁

〔龜山1号〕

桑原隆博(編) 1983 『龜山遺跡—第2次発掘調査概報—』広島県教育委員会

〔三玉大塚〕

森本六爾 1929 『筒形銅器概観と本古墳発見品』『川柳村将军塚古墳の研究』岡書院 68-73頁

桑原隆博・鷲田滋・伊藤実・田邊俊 1983 『三玉大塚—調査と整備—』広島呉双三郡吉舎町教育委員会

〔鳩ノ岡〕

内藤晃・大塚初重(編) 1961 『三池平古墳』庵原村教育委員会

山田良三 1969 『筒形銅器考』『古代学研究』55号 古代学研究会 22-35頁

福井万千 1977 『三原市史』第1巻 原始・古代編 636-639頁

〔船山〕

山田良三 1969 『筒形銅器考』『古代学研究』55号 古代学研究会 22-35頁

山口

〔長光寺山〕

中司照世・小野忠彦(編) 1977 『長光寺山古墳』山陽町教育委員会

桑原邦彦・岩崎仁志 1984 「長光寺山古墳測量調査と若干の遺物」『考古学ジャーナル』No.233 ニュー・サイエンス社 25-27頁

鳥取

〔西浦山〕

亀井熙人 1964 「筒形銅器」『郷土と科学』第10巻第1号 鳥取県立科学博物館 6頁
〔生山29号〕

鳥取市教育委員会 1984 「生山古墳群発掘調査現地説明会資料Ⅱ」「鳥取市の遺跡」号外

鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査課 1989 「津ノ井遺跡群 鳥取新都市整備事業に伴う発掘調査」

山陰考古学研究集会 2002 「第30回山陰考古学研究集会資料集 山陰の前期古墳」

島根

〔山地〕

川上稔 1986 「山地古墳発掘調査報告書」出雲市教育委員会

出雲市教育委員会(編) 1988 「出雲市埋蔵文化財調査報告書」第1集 出雲市教育委員会

出雲市教育委員会(編) 1989 「出雲市埋蔵文化財調査報告書」第2集 出雲市教育委員会

福岡

〔立野10号〕

児玉真一(編) 1984 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—5—甘木市所在立野遺跡の調査」福岡県教育委員会

佐賀

〔横田下〕

松尾耕作 1931 「横田下古墳」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第10輯 佐賀県教育委員会 63-84頁

熊本

〔清水〕

角田政治 1918 「三角町の古墳」『熊本県史蹟調査報告』第1回 熊本県教育会史蹟調査部
大韓民国

〔大成洞1・2・11・15・18・39号〕

申敬澈・金寧佑 2000a 「金海大成洞古墳群Ⅰ」慶星大学校博物館研究叢書第4輯 慶星大学校博物館

申敬澈・金寧佑 2000b 「金海大成洞古墳群Ⅱ」慶星大学校博物館研究叢書第7輯 慶星大学校博物館

申敬澈 2004 「筒形銅器論」『福岡大学考古学論集一小田富士雄先生退職記念一』小田富士雄先生退職記念事業会
679-702頁

〔良洞里1053・04・321・331・340・352・443・447号〕

林季澤・郭東哲 2000 「金海良洞里古墳文化」東義大学校博物館学術叢書7 東義大学校博物館

申敬澈 2004 「筒形銅器論」『福岡大学考古学論集一小田富士雄先生退職記念一』小田富士雄先生退職記念事業会
679-702頁

〔福泉洞38・42・60・64・71・73号〕

釜山大学校博物館 1996 「東萊福泉洞古墳群Ⅲ」釜山大学校博物館研究叢書第19輯

申敬澈 2004 「筒形銅器論」『福岡大学考古学論集一小田富士雄先生退職記念一』小田富士雄先生退職記念事業会
679-702頁

挿図出典

- 図36 1 浅川3号（内藤編1998、97頁—第8図を改変トレース） 2 山地第1主体部（川上1986、15頁—図6を改変トレース） 3 生山29号（鳥取市教育委員会提供図面を改変トレース、なお改変・情報の取捨選択についての責はすべて岩本にある） 4 三池平（内藤・大塚編1961、131頁—第37図を改変トレース） 5 カジヤ古墳（坪倉・杉原編1972、11-12頁—第5図を改変トレース） 6 紫金山（上原・吉井・坂口・森下ほか2005、119頁—第55図を改変トレース） 7 安土瓢箪山（梅原末治1938、岡版第13を改変トレース） 8 大迫山1号（川越編1989、9-14頁を改変トレース） 10 谷畑（関西大学考古学研究室編1974、12頁—第7図を改変トレース） 11 城山2号（白石・前圓1974、77-78頁—第61図を改変トレース） 12 タニグチ1号（河上邦彦・西藤1996、図5を改変トレース） 13 尼塚（山田2005 20頁—第6図を改変トレース） 14 亀山1号（桑原編1983、8頁—第4図を改変トレース） 15 立野10号（児玉編1984、56頁—第46図を改変トレース）
- 図37 1 大成洞1号（申・金2000a、90頁—図面15を改変トレース） 2 大成洞18号（申・金2000b、48頁—図面15を改変トレース） 3 良洞里340号（林・郭2000、170頁—図面47を改変トレース） 4 良洞里304号（林・郭2000、175頁—図面52を改変トレース）
- 図38 1 岩本作成 2 岩本作成
- 図39 岩本作成
- 図40 岩本作成
- 図41 1 岩本作成 2 岩本作成

補記

脱稿後に、大阪府羽曳野市庭鳥塚古墳で2点の筒形銅器が出土したという情報を得た。庭鳥塚古墳における筒形銅器の出土状況や出土古墳の形態や規模も、筒形銅器の副葬を考えるうえで重要な事例となるであろう。

羽曳野市教育委員会2005『大阪府羽曳野市東阪田所在 庭鳥塚古墳現地説明会資料』

近江町内中世遺跡における流通拠点としての特質

藤本史子

はじめに

近江町は、琵琶湖の東岸に位置し、古代から畿内と北陸・東国を結ぶ水陸共に交通の要衝に位置づけられる。そして、現代においても、東海道本線・東海道新幹線・北陸自動車道など日本の主要幹線が町内を通過



- | | | | |
|------------------|-----------------|----------------|----------------|
| 1 長沢開跡（長沢） | 9 長門寺遺跡（旗戸） | 17 日光寺跡遺跡（日光寺） | 25 寺倉遺跡（寺倉） |
| 2 土川湖底道路（長沢・宇賀野） | 10 旗戸山砦遺跡（旗戸） | 18 多和田崎跡（多和田） | 26 地頭山城遺跡（寺倉） |
| 3 速藤屋敷遺跡（宇賀野） | 11 明井屋敷遺跡（旗戸） | 19 安龜寺遺跡（能登瀬） | 27 西円寺遺跡（西円寺） |
| 4 三田村屋敷遺跡（宇賀野） | 12 安龜寺遺跡（旗戸） | 20 中村屋敷遺跡（能登瀬） | 28 西円寺着遺跡（西円寺） |
| 5 世継遺跡（世継） | 13 净蓮寺遺跡（旗戸） | 21 能登瀬遺跡（能登瀬） | 29 太尾山城遺跡（西円寺） |
| 6 法勝寺遺跡（高溝） | 14 新庄遺跡（新庄・雲浦） | 22 青木館遺跡（能登瀬） | |
| 7 猿塚遺跡（高溝） | 15 兼浪市場遺跡（其浦） | 23 宮ノ前北遺跡（能登瀬） | |
| 8 旗村館遺跡（飯） | 16 日光寺山砦遺跡（日光寺） | 24 宮ノ前跡（能登瀬） | |

図42 近江町内中世遺跡分布図

しており、日本の交通史上重要な位置を占めてきたことは明白である。水上交通の拠点としては、町内を西流する天野川の河口部に位置する古代からの要津である朝妻瀬があげられる。この朝妻瀬へ集められた北陸・東国からの物資は、湖上水運により京へと積み出されていった。延喜式にも記されている塩津（滋賀県伊香郡）・海津（滋賀県伊香郡）・勝野（滋賀県近江高島市）とならんで朝妻は古代からの主要な瀬であった。¹⁰ 近世になると朝妻瀬は、慶長年間（1596～1615）に米原瀬が成立し、大打撃を受け、その後衰微していくことになるが、それまでは湖東第一の瀬と位置づけられていた。

また陸路としては、鎌倉期以降とくに東国から京への主要道となった東山道と北陸への街道の分岐点は、町内の飯・箕浦辺りと推定されている。¹¹ そして、近世の北国街道が湖岸沿いに南北を通るが、古代・中世においても人や物資の動きはあったと考えられる。先述した朝妻瀬について、古代から中世にかけての盛期には、朝妻瀬に着いた人・物資は、箕浦・新庄・能登瀬を経て、桶口あたりで東山道に合流していたことも、文献史料などから推定される。

このように近江町内が交通の要衝であることは周知の事実であり、文献史料から、交通の要衝であることを解説した記述は多く認められる。そして、考古学においても、弥生・古墳時代・古代に関しては、遺跡・遺物から流通拠点としての特質を示した記述は認められるが、中世に関しては、これまで遺跡・遺物からこの問題に言及した記述はほとんどみられなかった。

そこで、本稿ではこのように交通の要衝に位置した近江町の中世における流通拠点としての特質の一端を示すことを目的とする。その方法として、まず、町内の遺跡・遺物を検討したうえで、地図など歴史地理的な手法も援用し、町域内における水陸の交通路を再確認するとともに、課題とした近江町内における流通拠点としての特徴的な事象を抽出してゆきたいと思う。また、時代的には、原始から現代に至るまで、交通の要衝であることは一貫しているが、鎌倉に幕府が開かれたことにより、東国と京との連絡路として東山道がより重要性を増したという歴史的状況を踏まえ、中世を中心に検討する。

現在、近江町内遺跡分布図において中世遺跡として27遺跡が認知されている（宮崎1995 38-40頁）。そして平安時代を含む遺跡が9遺跡、その他として明確な時代が記されていないが、中世も含む可能性がある遺跡が41遺跡確認される。平安時代とされる遺跡やその他とされる遺跡の中には中世遺跡も含まれる可能性はあるが、図42として作成した近江町内における中世遺跡の分布図は、中世と分布図で確認されている遺跡に限った。ただし、長沢閑遺跡と宮ノ前遺跡の2遺跡については、その他に含めず中世遺跡に含めた。

1 近江町内における中世の主要交通路（図43）

(1) 陸路

① 東国への交通路

東国への交通路として東山道は秋田城へ達する古代の一級駅路であったが、中世になり、鎌倉幕府により、美濃から尾張を結び東行する東海道の駅路制定以後、京・鎌倉を結ぶ主要道としてさらに重要性が高まった。

また、東山道は湖上交通との結節点として、朝妻瀬と関連があり、大津・坂本・堅田・八坂・朝妻そして東山道へというルートも史料に見られる。

② 北陸への交通路

古代、京から若狭・越前などへ向かう北陸への交通路は北陸道と呼ばれ、琵琶湖西岸地域を北上するルートをたどる。この古代北陸道に対し近世北国街道は中山道の下矢倉より分岐して湖東を北上して越前へ抜ける道である。しかし、中世段階においてもこの交通路が湖西の北陸道とともに重要視されていることは、たとえば「長沢」に閑所が設けられ、興福寺人乗院の使者が関銭を払っている史料や、京極氏・淺井氏・六角

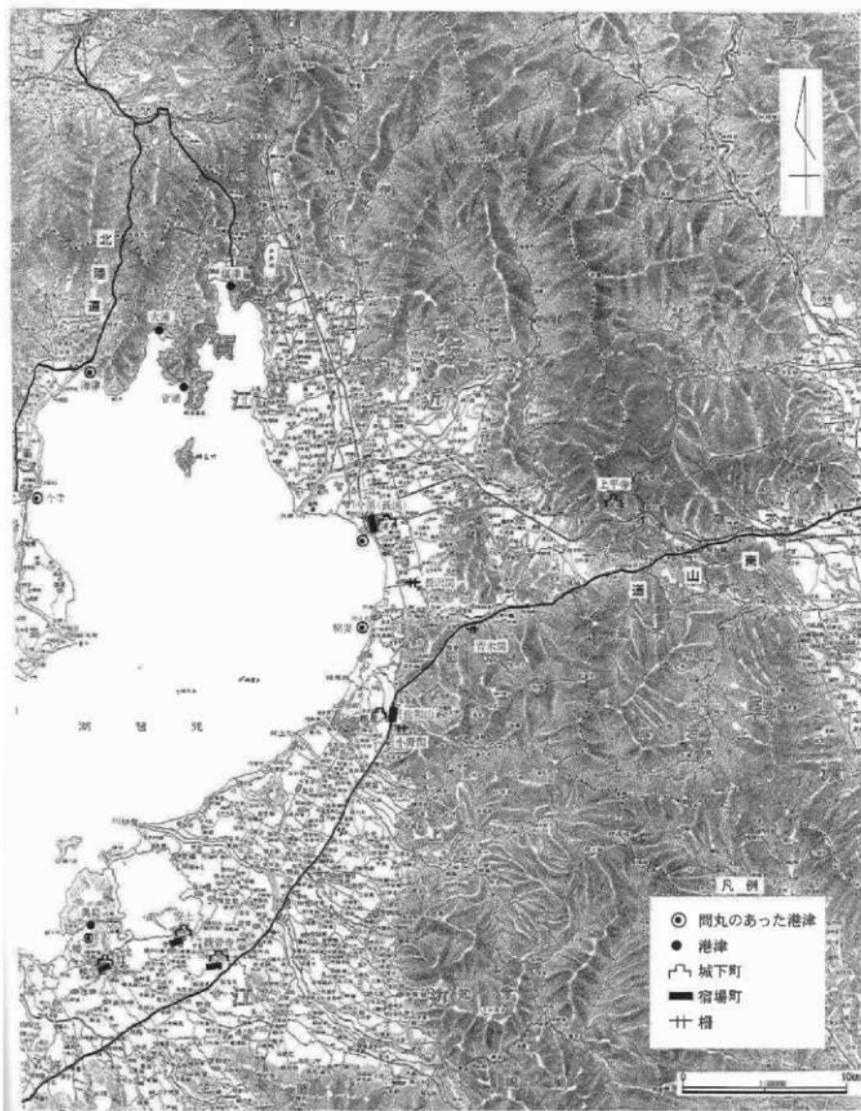


図43 湖東・湖北の中世主要交通路・港津（足利1981を参照、間にについては筆者加筆）
(鉛版20万分の1 国復刻版名古屋 (明治19年)・岐阜 (明治21年) を合或・縮小)

氏さらには織田信長等の権力闘争に巻き込まれ、湖北から湖南の武家勢力の戦闘の際に拠点としてこのルート上に各陣の拠点が置かれ、交通路として重要視されていたことからも明らかである。たとえば、天文七(1538)年、六角定頼が湖北の京極高広・浅井亮政軍を攻撃した際の陣立て書には、北攻めへの拠点として長沢に六角氏の本陣・同御馬廻衆を置き、東からの備えとして後陣は箕浦・能登瀬に置いたことが記されている。

(2) 港津

① 湖東における中世の港津

中世において湖北から湖東にかけて位置した主な港津として、海津・大浦・普浦・塩津・今浜(長浜)・朝妻・奥島・八幡があげられる。また、その中で間丸があった港津は海津・今浜・朝妻・八幡である。

この中でも朝妻津は、近世になって米原湊へ中心が移るまで、古代から中世にかけては湖東における中心的な湊であったとされるが、これは先述したように近江町地域が京都・奈良・北陸・東海をつなぐ陸路の交叉地点であったことが理由としてあげられる。つまり、陸路と湖上交通路の結節点に位置する湊として、重要性が高かったと推察される。

② 朝妻津(世継)の位置づけ

港津を復元するにあたり、汀線を復元する必要があるが、この点については、出土遺物・遺構の存在、地形図、字名、絵図などが参考となる。

朝妻津は朝妻庄法勝寺郷に属し、「近江輿地志略」には朝妻村は、「筑摩村の北にある村なり。此地古昔は湖東の人湊にして往来の船必此處にかゝりて繁昌すといへ難」とあり、地誌などからも湖東の中心的湊であったことがわかる。「近江国坂田郡筑摩社并七箇寺之図」(坂田神明宮所蔵、文明六(1474)年)(近江町史編さん委員会編1989 124頁)によると、息長川(天野川)を挟んで朝妻の対岸に世継が描かれており、安政三(1856)年の「便覧図譜」では同位置に「四木」とある(図44)。朝妻と世継はいずれも天野川河口部に位置しており、広義の朝妻津とは天野川河口部の湊(朝妻・世継)を指したのではないかと思われる。



図44 絵図に記された世継・朝妻津(「便覧図譜」(安政三年)による)

近江町は、天野川の沖積作用によって発達した三角州と氾濫原からなっているが、世羅遺跡付近は浜堤上に位置しており、朝妻湊は潟港であったと考えられる。中世の港に関しては、入江状の地形を利用した船泊り的な施設だったと考えられている。また、天野川については、北の師川河口部と比べ三角州の発達が小規模である。この理由として天野川の方が下流へ粉砕物が供給されにくいかがあげられる。この特質も潟港として有利な地形条件といえる。

世羅遺跡の調査成果として船泊り的な遺構は検出されていないが、遺物として、10世紀前半の灰釉陶器碗（折戸53型式）が出土している。碗の底部外面には「穴」「貝」の墨書きがみられる。同時期から近江地域において灰釉陶器が一般化する傾向があり、導入期の遺物といえる。

また、奈良火鉢瓢箪も出土しており、これは15世紀と考えられ、漆塗りの痕跡が見られる。

土師質土器の小皿は茶褐色を呈し、器歌が厚い在地タイプの製品が出土している。

2 東国への推定交通路周辺に位置する集落

中世後期集村化以降の集落は現在の集落と重なる例もあり、考古学で個別の中世集落を特定することはむずかしい。そこで、集落を構成する小字名を調べ、小字名に含まれる古代・中世の歴史関連地名や中世遺跡の存在をてがかりに、中世集落を推定し、集落の位置を大正9年（1920）年の地形図に示した（図45）。

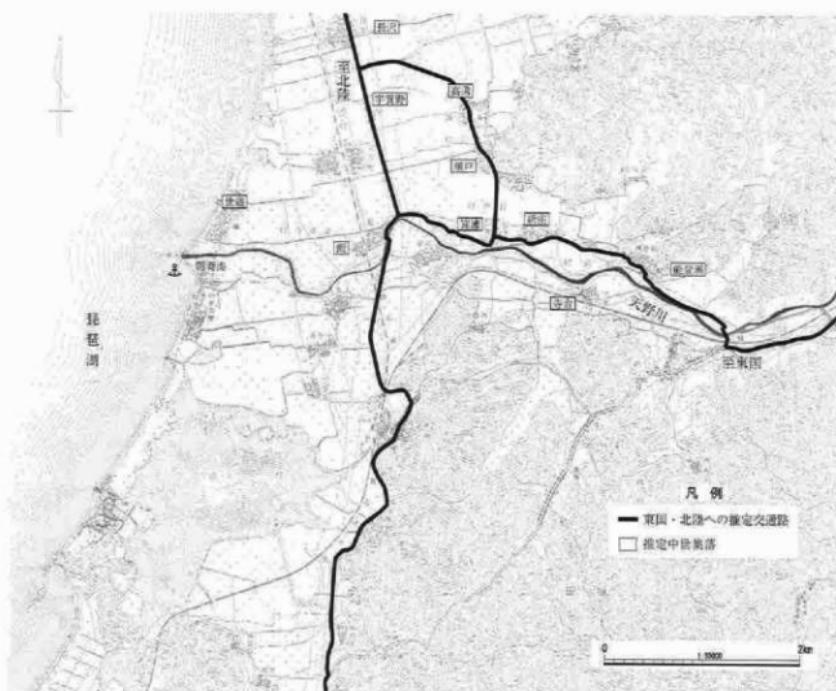


図45 中世における東国・北陸への推定交通路と集落（基礎図は大日本帝国陸地測量部大正9年測図）

(1) 飯

① 小字

飯は、東川原、堀町、黒上、瀬入田、久田二、十二條町、小一條町、内嶽原、外出原、味噌内、角田、六ノ坪、神子作、松田、尻鷹、伊勢地町、金光寺、森下、小山、横田、野田、奈良ノ木、地蔵、北寺内、田門、横枕、南寺内、城堂替、長塚、北鹿替、南鹿替、内湯倉、向川原、丹後町、久保田、瀬、多奈川原、下川原、折戸、柳ノ木町、苗代、堂ノ前、堂ノ西、堂ノ東、中湯天、大将軍、居堂、小性房、柳ノ内、前川原、ヒ俣、外湯倉、石丸、東川原、奥ノ森の合計58の小字からなる。小字名には条里関連の名称と考えられる十二條町、小一條町、味噌内、味噌内、六ノ坪などの小字も立つ。

② 饭摩寺遺跡群

飯には、飯廢寺遺跡群として正恩寺・普明庵・地藏堂の3遺跡が認知されている。この遺跡からは山田寺式單弁八葉蓮華文軒丸瓦が採集されており、灰釉陶器、山茶碗も大量に採集されることから、寺院跡群の下限は平安後期と考えられている。昭和62年度調査では、正恩寺遺跡の中心部の調査が行われ、白鳳時代の柱穴群と瓦が検出されている。正恩寺遺跡出土平瓦の中で、凸面は長軸を側縁に平行させる斜格子叩き、凹面は布目痕を残し、酸化炎焼成で褐色を呈する平瓦Ⅰ類（B類）については、三大寺（米原町枝折）、法泉寺遺跡（山東町本郷）で同形の叩き板で作られた平瓦が見つかっており、平瓦の一部については、天野川流域がひとつの流通圏になっていたことが指摘されている（図49-22・23）（北村1987）。また、山田寺式軒丸瓦が同じく正恩寺遺跡、法勝寺遺跡（近江町高溝）、三大寺遺跡から出土している。

③ 川湊

近世には、北国街道の川渡し場が飯にあったとされ、町内の個人宅には、元禄二（1689）年の『川越賃定

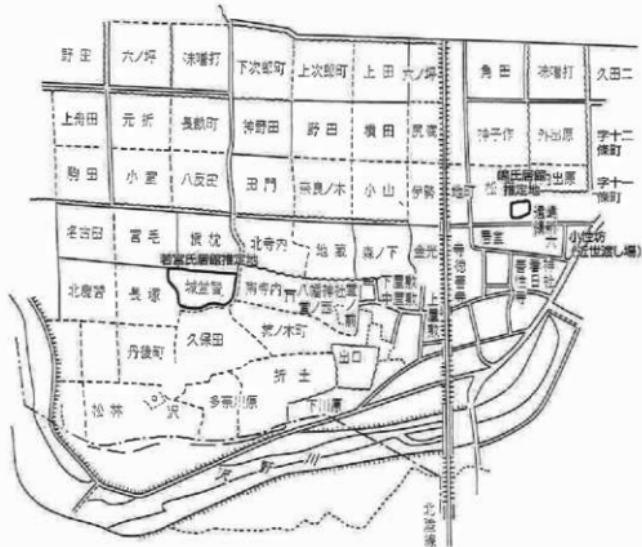


図46 若宮氏・鳴氏居館推定地

之事』の掲示板が残されている。この位置は、字小性坊あたりと推定される（図46）。

④ 国人の居住地

国人の若宮氏、今井氏重臣の鶴氏も駿に居館を構えたとされる。現在、発掘調査で居館跡などの検出例はないが、若宮氏の居館は先述した小字名の中で、天野川沿いの地点の「城堂替」付近が候補とされる。また、鶴氏の居館は、先述した川瀬西側に比定されている（第46図）。

(2) 新庄・箕浦

① 小字

新庄は、上川原・若宮・土橋・上口・定納・上口・保田・北白川原・塚ノ越・南白川原・中川原・外川原・大正寺・横田・綾ヶ崎・中川原・岡ノ山・中川原・白川原・塩ノ内・弁慶石・下川原・川原口・北小路・的場・城ノ内の合計26の小字からなる。この内、城ノ内は方形微高地上に位置しており、今井氏居館の推定地である。

箕浦は、中西・荒木・川原口・立町・替添・坊ノ西・栗毛・小角・桑ヶ田・黒田・下川原・大川原・中川原・外川原の合計14の小字からなる。この内、「立町」は「館町」であり、今井氏家臣団館があったことが伺える小字名であり、「中西」は今井氏同族である今井中西家政の屋敷があったと考えられている。

図47に地籍図（城ノ内（新庄）・的場（新庄）・中西（箕浦）・立町（箕浦））の合成図を掲げたが、城ノ内の北西地点が新庄城跡とされる（網掛け部分）。そして、小字名から新庄・箕浦に広がるこの地域が今井氏および家臣の居住域と推定される。的場の東、立町の西は「川原口」の小字名で、南には天野川が流れしており、



図47 新庄城跡付近地籍図

（中西（箕浦）・立町（箕浦）・城ノ内（新庄）・的場（新庄）明治後期作成地籍図を合成）（網掛け部分新庄城跡（箕浦城跡））

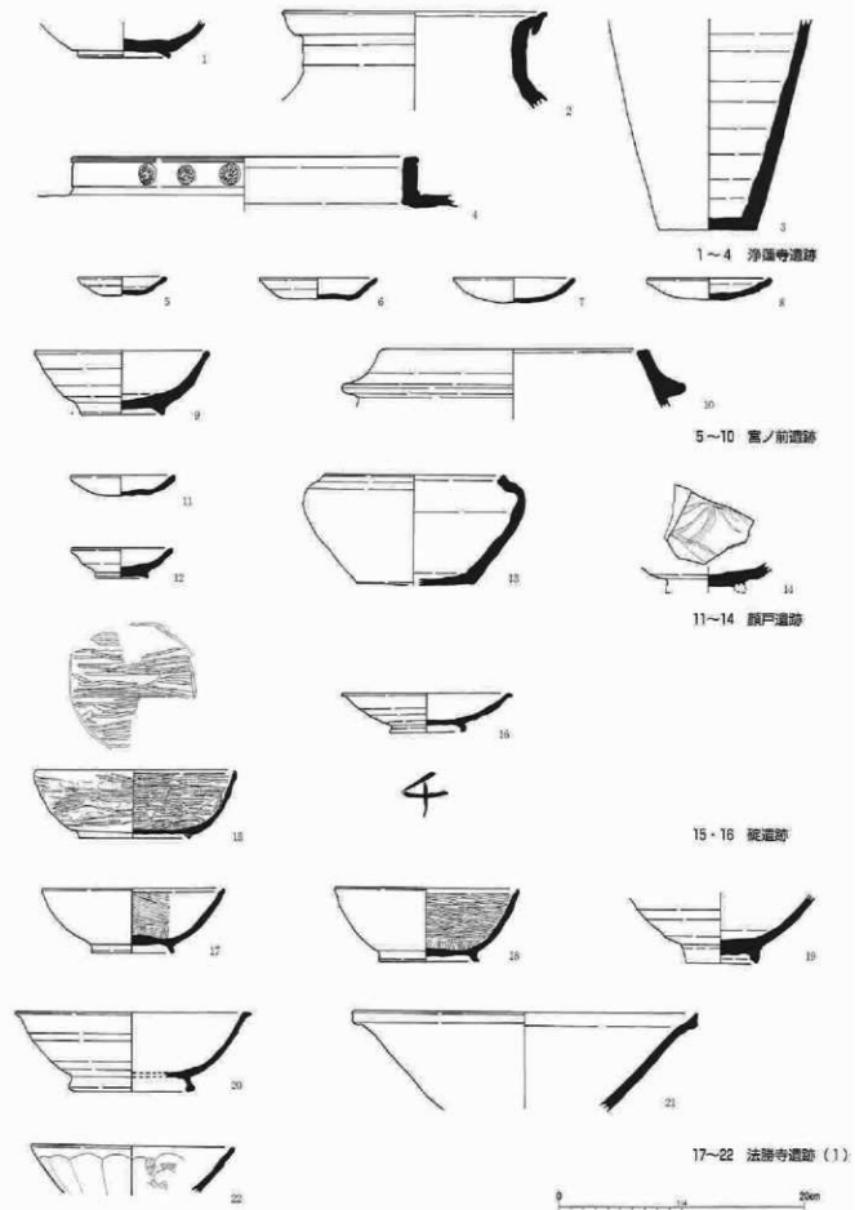
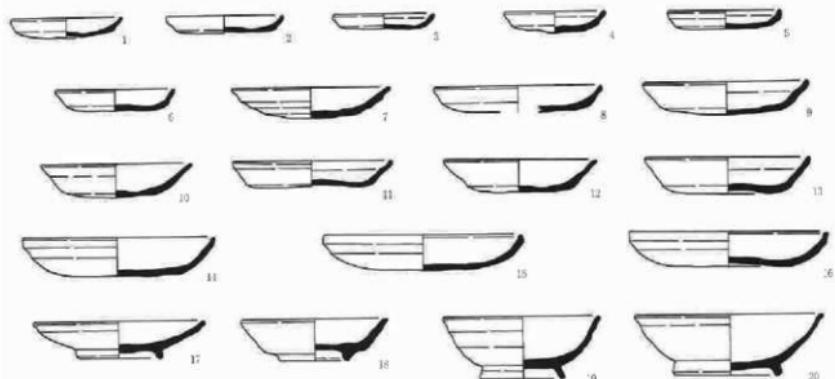
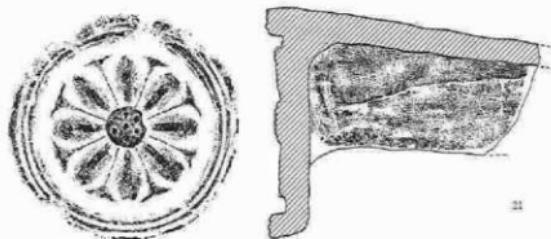


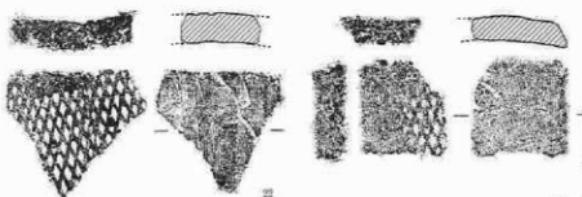
図48 東国・北陸への推定交通路周辺遺跡出土物実測図（1）



1~20 法勝寺遺跡 (2)



21



21~23 正原寺遺跡



図49 東国・北陸への推定交通路周辺遺跡出土遺物実測図 (2)

天野川沿いに立地している集落であることがわかる。城ノ内の東には、現在も地蔵堂が位置する。地蔵堂は「井戸村文書」文明三(1471)年条「二斗八日市端(場)の地蔵堂へ」という文言から、八日市場にあったとされる(近江町史編さん委員会(編)1989 248~249頁)。

② 新庄（箕浦）城

新庄（箕浦）城の城主は、近江町内における最大の国人今井氏である。その規模は南北120m、東西200mの城館と考えられており、遺構としては新庄・箕浦城跡第1次調査において、堀の一部（幅5m、深さ0.8m）が西側方向へ約15m検出され、堀沿いに溝・橋列もみつかり二重堀構造を呈している。その他柱穴も検出し、掘立柱建物が復元されている。遺物としては、土師質土器皿・漆器・中国製磁器・北宋銭が出土している。

新庄・箕浦城跡からは、は堀整備関連調査においても瓦質土器の火合、瀬戸の灰釉天目茶碗・擂鉢・盤、土師質土器皿などの中世遺物が出土している。瓦質土器は口縁部外面に菱形文を印刻した製品や、体部外面に唐草文を刻んだ製品など15世紀と考えられる。瀬戸の灰釉天目茶碗は内面全体と体部外面2分の1に灰釉を施し、外面部部分は削り、内面底部には2ヶ所胎土目痕が残る。

また、先述した小字城ノ内の北側に位置する淨蓮寺遺跡、小字中西北西の埋塚遺跡からも、中世の遺物が出土している。淨蓮寺遺跡の遺物は、旧額川の埋め戻し作業に使用された淨蓮寺遺跡内の土砂から採集されており、4点掲げた（図48-1～4）（宮崎1991b）。1は12世紀の南部系山茶碗の底部である。2はN字形口縁部を呈する常滑焼の口縁部で、13世紀後半と考えられる。3は古瀬戸の瓶で、13世紀後半頃の製品である。4は瓦質土器風炉の口縁部であり、口縁部外面には菊文を印花する。14世紀末～15世紀前半と考えられる。余良火鉢が形態・外面の文様とともに発展した時期の製品である。

(3) 能登瀬

① 小字

能登瀬は、上川原・宮ノ前・西川原・西代・北込・大郷・福山・御屋敷・向山・奥深・高尾・乙井・オホギ・前川原の合計14の小字からなる。オホギは「青木」で、山津照神社の故地であり、現在は青木神社が位置している。山津照神社は中世には「青木大梵天王本社」と称され、明治15（1882）年に現在の社地に移転した。

② 宮ノ前遺跡

宮ノ前遺跡は、先述した山津照神社の故地正面に広がることから名称がつけられている。畠地を中心として平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺物散布が認められており、周辺を描いた絵図に、養生寺・定応寺・蜜好庵の3つの寺名が認められることから、平安時代後期以降の寺院関係遺跡とされる（宮崎1991a 3頁）。

長老墓地川改修工事に際して宮ノ前遺跡第2次調査において、12世紀後半～13世紀にいたる遺構群が検出されており、建物跡・井戸などをとり開む大区画溝も検出されている。遺物の一部を図48-5～10にあげた。5～8は土師質土器の皿で、口径は5.2cm～10cm前後である。8は口縁端部をつまみあげる特徴を持つ。6は2段ナデ調整を施す。9は山茶碗である。ハの字形に開く高台を有し、口縁端部は丸く收める。

図化していないが、輪花口縁を呈する山茶碗も出土しており、12世紀中頃と考えられる。10は瓦質土器の羽釜である。口縁部端面に段をもつ河内・和泉型の形態を呈す。瓦質土器羽釜の出土量は、湖南に比べて湖北では激減することが指摘されている（宮崎1991a 11頁28～29行目）。

3 北陸への推定交通路周辺に位置する集落

(1) 宇賀野・高溝

① 小字

宇賀野は東碇・西碇を含む110の小字からなる。高溝は、31の小字からなる。法勝寺に関連する小字名およ

びその他寺院関連の小字名は確認できない。

③ 碇遺跡（宇賀野）・法勝寺遺跡（高溝）（図48・49）

碇遺跡は、集落としては宇賀野に属するが、法勝寺遺跡・狐塚遺跡・奥松戸遺跡とともに法勝寺遺跡群を構成している。古墳時代から奈良時代にいたる複合遺跡とされるが、平成12年度末～平成13年度初頭にかけて実施された第4次調査において、平安時代後期の畿内系黒色土器A類碗や灰釉陶器皿が出土している（図48-15・16）。黒色土器は、器形については後出する在地系黒色土器が碗形を呈するが、碇遺跡出土遺物は杯形を呈しており、畿内との関係を示す遺物といえる。灰釉陶器皿は三日月高台を有し、底部内外面には施釉せず、口縁部から体部外面にかけてつけ掛けする。底部外面には「千」と墨書きがある。猿投窓戸53号窓に相当しており、10世紀前半の年代が与えられる。同型式の製品が世継遺跡からも出土している。

法勝寺遺跡は、南北480m、東西450mの規模をもつ縄文～中世までの複合遺跡である。白鳳時代を中心とする寺院跡からは、白鳳～平安時代にかけての瓦が出土し、碇石も点在する。しかし本稿では中世を中心とした遺物を取り上げた（図48-17～22、図49-1～20）。図48-17・18は畿内系黒色土器Ⅲ類の碗である。口縁端部内面に段をもち、体部外面はナデ調整を施す。また、ハの字形に聞く高台を特徴とする。17は器高がやや浅く杯形に高台を付したタイプで、18は口縁端部から内底面にかけて深いタイプの製品である。19・20は灰釉陶器、21は東播系須恵器の練鉢である。13世紀初頭の神出窯の製品である。近江町内ではこの他にも寺倉遺跡から13世紀の東播系須恵器の練鉢が出土している。22は龍泉窯系の青磁碗である。体部外面には蓮弁文を施し、内面には劃花文を施す。12世紀中～後半にかけての製品である。

図49-1～16は土師質土器の皿である。大きく口径が5cm前後のタイプ、7cm前後のタイプ、8cm以上のタイプに分類される。器壁が比較的薄く、2段ナデ手法（7）、口縁面取り手法が目立つ（5・8・15）。京都系土師皿のAタイプに属する製品が多い（伊野1987）。また、國化していないが1988年に行われた法勝寺遺跡の調査では、口径10cm前後で白色系を中心とする土師質土器の皿が40点近くまとまって出土している。

この他にも口径13cm前後の中皿、16cmの大皿が報告されており、一段ナデ手法、2段ナデ手法と両手法が認められるが、平安京内で出土するような明瞭なナデは認められない。

17～20は山茶碗タイプの皿と碗である。12世紀の南部系山茶碗である。

（2）顔戸

① 小字

顔戸は140の小字からなる。その中には「甲塚」、「後別当」、「黄牛塚」、「日撫山」など古墳の名称や、「勝正寺」、「不明庵」、「圓光寺」、「佛光寺」、「安養寺」、「淨蓮寺」、「惠林庵」、「正光寺」など寺院の存在を示す名称も残る。

② 顔戸遺跡・黄牛塚古墳

今回、図48-11～14に掲げたのは顔戸遺跡第2次調査出土遺物である。11は土師質土器皿で口縁端部外面は面をもってたち上がる。12は山茶碗タイプの皿である。ベタ高台で体部から高台部への変化点にくびれを呈し均質手で北部系山茶碗の特徴を持つ。13は越前焼の鉢である。北陸系の出土遺物は、常滑焼など東海系の出土遺物と比較すると多くはない。14は龍泉窯系青磁碗である。内底面に印刻が施される。なお、この遺物は、高台が欠損した底部のみの扁平な形状をしている。これは円板状製品の可能性がある。円板状製品は面子などの玩具としての性格、あるいは祭祀用品としての性格も考えられる。

この他國化していないが、黄牛塚古墳の石室内からも中世遺物が出土している。胎土がやや粗く、疊付部分に粗粒痕を残す南部系山茶碗、7型式の常滑焼窯の口縁部、瀬戸・美濃陶器の天目茶碗、龍泉窯系積蓮弁文青磁碗など出土遺物の時代幅は13世紀～16世紀までと広い。

おわりに

近江町内における交通路、中世遺跡の様相を確認してきた。ここではその内容をまとめておきたい。

まず、東国への推定交通路周辺に位置する飯・箕浦・新庄・能登漸の各遺跡から出土した遺物をみると、奈良火鉢や羽釜などの瓦質土器製品、灰釉陶器、南部・北部系の山茶碗、常滑焼の壺など畿内・東海系の遺物などが認められる。東海系の遺物については湖東地域では特殊な遺物ということはないが、瓦質土器製品は湖南と比べ、湖北では出土数が少ない上器であり、畿内との結びつきが考えられる。また、飯遺跡においては、古代ではあるが天野川流域を流通圈とする平瓦が出土しており、天野川を交通手段として利用したことが伺える。限られた資料からであるが、これらの遺跡においては、遠隔地からの遺物が一定量出土している。

また、新庄・箕浦遺跡においては国人領主の館跡が検出されており、堀開いの館であったことが確認される。飯遺跡においては遺構として検出されていないが、小字名などから、国人鷦氏・若宮氏の屋敷跡が推定されている。いずれの国人館跡も天野川沿いに位置しており、さらに、先述した遺物の出土状況からも交通路に位置した集落として考えることも可能である。これまで、中世の文献史料に基づき、箕浦に関しては八口市場の存在から市の開催地であること、源頼朝が箕浦に宿泊したことから、箕浦を通る交通路が中世東山道のひとつルートとして示唆されていたが、今回検討した出土遺物の搬入土器の様相や、国人領主の館跡が位置していたことなどから、交通の要衝に位置した集落であることが追認できた。

朝夷添との関連で考えられる世継遺跡からも畿内産の瓦質上器が出土しており、北陸への推定交通路周辺に位置する碇遺跡においても出土している灰釉陶器は古代ではあるが、近江地域において導入期の製品であり、世継・碇遺跡においては東海からいち早く製品が搬入されていることになる。

そして、古代・中世にはどのようなルートとして機能していたのか明確にされていない北陸への交通路については、碇遺跡・法勝寺遺跡・孤塚遺跡・奥松戸遺跡を含む法勝寺遺跡群、長沢遺跡など北陸への推定交通路周辺に位置する遺跡から畿内産の黒色土器A類、橋葉産と考えられる黒色土器B類など9~11世紀にかけての畿内からの搬入土器や、12世紀末~13世紀の東播系須恵器練鉢などが出土している。東播系須恵器練鉢は東国への推定交通路に位置する寺倉遺跡からも出土している。これらの遺跡からは、周辺遺跡と同様の灰釉陶器・山茶碗など東海系の遺物も出土しており、東国への推定交通路周辺に位置する遺跡と同じく搬入土器を一定量含むことを特徴とし、この交通路が中世において機能していた可能性は高く、このような状況下で長沢閻も設置されたと思われる。

土師質土器皿に関しては、各遺跡から出土しているが、新庄・箕浦城跡から出土している皿には、へそ皿タイプや、褐色系で厚手の在地系タイプが目立つ傾向に対し、法勝寺遺跡出土の皿は白色系で、京都系Aタイプの口径10cm前後の小皿が目立つ。この土器様相は法勝寺遺跡という寺院跡、新庄・箕浦城跡という城跡及びそれに伴う集落跡といった出土遺跡が示す性格による違いと考えられるが、今後発掘調査が進展し、中世の出土土器様相がなおいっそう明らかになれば、北陸への交通路周辺に京都系土師質土器皿の出土比率が高いなど、近江町内における交通路別の土器様相の違いとして認識されることになるかもしれない。また、畿内系搬入土器に関しても、9~11世紀の畿内系搬入土器は北陸への交通路周辺に認められるが、東国への交通路周辺の畿内系搬入土器は12世紀末~15世紀にかけての東播系須恵器練鉢や瓦質土器などが中心を占める。

これまでの出土遺物の様相から、東海系の遺物が湖東・湖北に一定量搬入されるという事実は、近江町のみではなく、湖東・湖北周辺遺跡においても明らかである。しかし今回近江町内から出土した遺物を検討した結果、東海系の遺物に関しては、灰釉陶器の折戸53型式の早い導入や、畿内との強い結びつきが認められた。また、搬入土器の時期に関しては北陸への交通路周辺では古代末・中世前期から畿内系土器が認められ

ることに対し、東国への交通路周辺では中世前期～後期の火舎や羽釜など瓦質土器を中心とする搬入土器が目立つことと特徴のひとつといえる。

最後に北陸系土器について触れておきたい。今回近江町内の出土土器の中で取り上げたのは、額戸遺跡出土の越前焼鉢1点のみである。北陸系土器については、湖南と比べ湖北では出土量が多いという認識があるが、今回確認したところ、貯蔵具としては、東海系の常滑焼の壺、東播系須恵器壺、信楽焼などの破片が目立った。中世においても近江町内においては北陸への交通路が機能していたことを示したが、北陸と湖北・湖東との流通問題に関しては、今後の検討課題としたい。

今回は検討資料が少数で、結論付けるには早計であるが、中世における近江町内の流通の特質を一部ではあるが明らかにし得たのではないかと考える。今後も資料を集め、検討を加えることにより、詳しい様相を解明することができるようと考える。また、先述したように中世後期に関しては近江町内には、京極氏・六角氏・浅井氏を中心とした紛争において、湖北における重要な戦略拠点となっており、人の動きとともに、物流も盛んであったと考えられる。しかし、本稿では中世後期の様相についてほとんど触れることができなかつた。

同じく、橋・砦・城郭の検討なども近江町域の交通の要衝としての重要性を示すものと考えるが、今回は地図上に地点を示すにとどめた。これらの問題に関しては今後の課題としたい。

本稿をなすにあたって、近江町内の遺跡の状況に関しては近江町教育委員会宮崎幹也氏からご教示いただき、町内各遺跡の資料実見に際しては、滋賀県教育委員会内田保之氏、財団法人滋賀県文化財保護協会中川治美氏にご配慮いただいた。記して感謝いたします。

註

- (1)『延喜式』卷26主税上（新訂増補国史大系 延喜式 中編）
- (2)「此の地より東へ一直線に飯村を経て箕浦へ通じる道路あり。箕浦は古へ東山・北陸両道の分岐点にして繁華の地なりき」と記し、「保元物語」や「吾妻鏡」を引用し、東国と京への道筋に箕浦があることを示している（坂田郡教育会(編)1975a 501頁5-11行目）
- (3)『大乗院寺社雜事記』文明十一年七月二六日条（増補 続史料大成 大乗院寺社雜事記七）
- (4)朝妻瀬は犬養四(950)年「東大寺封戸葬圓井寺用帳」、永祚元(989)年「尾張國郡司百姓等解」などの史料から、朝妻瀬には東海からの官物・貞納米などが東山道を経て集められていることがわかる（近江町史編さん委員会(編)1989 91-92頁）。前掲註(2)で記した箕浦・飯を経た東国への交通路を推定すると、朝妻瀬で荷揚げされた物資は、橋口あたりで本流の東山道と合流したと考えられる。
- (5)鶴崎裕雄・鈴木秀一 校注 1990 「藤河の記」（『中世日記紀行集』岩波書店）
- (6)前掲註(3)
- (7)『朽木家古文書』（近江町史編さん委員会(編)1989 206頁）
- (8)足利健亮作図「中世交通図」を参照した（足利1981 1220頁）。
- (9)小字名について、能登瀬・宇賀野・高溝は近江町史編さん委員会(編)1989に掲り、それ以外は大津地方法務局長浜支局保管地図（明治後期作成、平成6年再観により閉鎖）に掲る。
- (10)元禄二(1689)年 飯村川「川越賃定之事」と記された横188cm、縦39cmの木板（飯、成宮大藏氏所蔵）（近江町史編さん委員会(編)1989 425-26頁）。
- (11)光鏡院院宣（山津照神社所蔵）（近江町史編さん委員会(編)1989 172頁）。

参考文献

足利健亮 1981 「中世交通図」『角川日本地名大辞典』25 滋賀県 角川書店

- 伊野近富 1987 「かわらけ考」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 財團法人京都府埋蔵文化財研究センター 395-407頁
- 近江町史編さん委員会(編) 1989 『近江町史』 近江町役場
- 兼康保明・植垣正宏 1987 「坂田郡近江町世經遺跡」「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』 X IV-3 滋賀県教育委員会・財團法人滋賀県文化財保護協会 1-29頁
- 北村圭弘 1988 「坂田郡近江町正恩寺遺跡」「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』 X V-1 滋賀県教育委員会・財團法人滋賀県文化財保護協会 33-36頁
- 小島捨市繩體 1915 『近江輿地志略』
- 坂田郡教育会(編) 1975 a 「改訂近江國坂田郡志」第一卷
- 坂田郡教育会(編) 1975 b 「改訂近江國坂田郡志」第二卷
- 坂田郡教育会(編) 1975 c 「改訂近江國坂田郡志」第三卷
- 新域常三 1967 『鎌倉時代の交通』 吉川弘文館
- 千田 稔 1974 「埋れた港」 学生社
- 戸田芳実 1992 『歴史と古道』 人文書院
- 長浜市史編さん委員会 1996 『長浜市史』第1巻 湖北の古代 長浜市役所
- 宮崎幹也 1990 「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』 X VII-1 法善寺遺跡 滋賀県教育委員会・財團法人滋賀県文化財保護協会
- 宮崎幹也 1991 a 「宮の前遺跡」近江町文化財調査報告書第7集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1991 b 「堀塚遺跡」近江町文化財調査報告書第8集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1991 c 「理塚遺跡2」近江町文化財調査報告書第9集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1991 d 「碇遺跡2」近江町文化財調査報告書第11集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1993 『西円寺遺跡』近江町文化財調査報告書第16集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1995 「近江町埋蔵文化財調査集報」1 国庫補助事業「町内遺跡発掘調査報告書」近江町文化財調査報告書第18集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 2001 a 「近江町埋蔵文化財調査集報」3 一町内遺跡発掘調査報告書一 近江町文化財調査報告書第21集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 2001 b 「近江町埋蔵文化財調査集報」4 一碇遺跡 第3次発掘調査一 近江町文化財調査報告書第22集 近江町教育委員会

挿図出典

- 図42 宮崎1995、38-40頁を参照 藤本作成
- 図43 足利1981を参照、一部加筆 藤本作成
- 図44 「便覧図讀」(部分)に一部加筆 藤本作成
- 図45 大正9年測図に一部加筆 藤本作成
- 図46 近江町史編さん委員会(編)1989、251頁に一部加筆 藤本作成
- 図47 「中西」・「立町」・「城ノ内」・「的場」地籍図を合成 藤本作成
- 図48 1~4 (宮崎1991 b、14頁第10図を変更トレス) 5~10 (宮崎1991 a、10頁第8図を変更トレス) 11~14 (宮崎1991 b、26頁第22図を変更トレス) 15~16 (藤本実測・トレス) 17~18 (宮崎1990、58頁第45図を変更トレス) 19~22 (宮崎1991 b、25頁第21図を変更トレス)
- 図49 1~20 (宮崎1990、58~60頁 第45~47図を変更トレス) 21 (北村1988、図版八を変更トレス) 22~23 (北村1988、図版九を変更トレス)

息長古墳群の変遷と特質

森下 章司

はじめに

今回の定納古墳群の調査により、息長古墳群の変遷をたどる上で重要な時期の資料を得ることができた。弥生時代から古墳時代後期に至るまで、いわゆる「首長墓」の変遷をひとつの小地域でみることができるという点で、息長古墳群はモデルケースになりうるものと考える。これまでの調査・検討結果をふまえて、その変遷と地域的特色、他地域との関係についてまとめる。

1 息長古墳群の変遷

息長古墳群の変遷に関しては高橋克壽による的確な論述があるが(高橋1995)、ここではその後に判明した知見や弥生時代の墳丘墓もふくめて新たな取りまとめをおこなう。

天野川流域の平野部では多数の方形周溝墓群が調査されている。とくに中心となるのは法勝寺遺跡であり、弥生時代中期中葉から後期まで、同一場所に重なって墳墓が築かれている点が大きな特色である(宮崎1990)。この遺跡は弥生時代～古墳時代にかけて墓域として継続するが、これに対応する集落遺跡として北方の長沢遺跡が想定されている。

墳墓の大多数は方形周溝墓である。中期中葉にはほぼ同一規模で一辺10m程度のやや小型のものが密集して築かれているが、中期後葉には一辺10～15mと大きさにやや格差が生ずる。さらに後期後葉には規模に明確な差が認められ、群の中心には大型の方形周溝墓が位置する。さらにその中には前方後方形の形態をもつものも登場する。

法勝寺遺跡のS D X323号墓は全長20.4m、後方部幅12.3m、前方部幅6mをはかる前方後方形の墳墓である。墳丘上部は後世の削平により残されていない。同一方向に軸をもつ方形周溝墓が周囲に築かれている。宮崎幹也による北近江土器編年の法勝寺F-1段階(縦向1式 回向I-0様式平行)に位置づけられる(宮崎1994)。

法勝寺遺跡の墳墓は弥生時代末まで継続するが、その後に特徴的な墳墓が認められるのは天野川の南側の西円寺遺跡である(宮崎1993)。

西円寺遺跡は、天野川に平行する方向に開削された大溝とともに南北に集落があり、墳墓は集落内ないし近接した位置に築かれている。もっとも特徴的な墳墓である西円寺第1号墓は、陸橋部をもつ円形周溝墓で、長軸22mある。出土土器は宮崎編年の頬戸G-3段階(縦向3式新相 回向II-4様式)に位置づけられる(宮崎1993 60頁)。

これら法勝寺S D X323号墓と西円寺第1号墓の時期については、他地域の墳墓との平行関係や「弥生時代」「古墳時代」の時期区分問題と関連して、今後さらに検討が必要であろう。たとえば『前方後円墳集成』近畿編では、西円寺第1号墓が古墳時代1期に位置づけられている。(用田・細川1992)。

いずれにしても、この地域では弥生時代末～古墳時代はじめに、規模や形態において墳墓間の格差が顕著になってくる。法勝寺遺跡 S D X323号墓と西円寺第1号墓は平地に築かれている点、集落内ないし集落に近接した位置にある点が共通する。

法勝寺S D X323号墓の場合は、小型の墳墓と同じ墓域につくられている点も特徴である。格差はありながら、立地において集落や一般的な墳墓から分離していない段階ととらえることができる。

西円寺第1号墓に統く時期、宮崎編年で頬戸H-1・H-2段階(縦向4式 回向II-1・2様式)に該

当する墳墓は明確でない。ただし次の定納古墳群および平地の集落遺跡の調査状況から、この段階前後に丘陵上に墳墓が築かれるようになったと考える。そして可能性として日進山の墳墓があげられる。

定納古墳群は、本報告で示したとおり、丘陵上に継続的に築かれた墳墓群であり、時期は古墳時代前期後半～中期前半に位置づけられる。集落からは分離し、高地に築かれたものであるが、一方で集落遺跡からの眺望が可能で、墳丘の高まりがよくめだつ場所が選ばれている。1号墳にみられた、墳丘周間に平坦面をめぐらすような造作は、平地部から見あげたときに墳丘の高まりをきわだたせる役割を果たす。1号墳と5号墳では、地山を成形した後に盛土を高く積み上げており、造営にかかる労力は平地の墳墓を上回る。また長大な削抜式木棺と朱・ベンガラを多く用いている点も特徴である。定納古墳群前段階の墳墓の状況がよくわからないが、集落から独立して丘陵上にいわゆる首長墓が築かれるようになるのは、造営体制や墳墓の性格において画期ととらえられる。

定納古墳群に統いて築かれたと推定されるのは甲塚1号墳である。直径43mに復元され、大型の円墳である（高橋1995）。北側に付属する小さな方形の高まりを、今のところは2号墳として区別しているが、造出の可能性がある。発掘調査はなされていないので詳しい特徴は明らかでないが、表面には石が多数露出しており、全面に葺石がなされているのは確実である。墳頂部には広い平坦面があり、竪穴系の埋葬施設が複数存在することを想定できる。

甲塚1号墳は定納古墳群よりもさらに50mあまり高いところに位置し、墳丘の高さも6mあって、その偉容を示す。葺石はその外観をさらにきわだたせる効果を發揮する。息長古墳群の中で、平地からの眺望という点でもっともめだつのは甲塚1号墳である。

甲塚1号墳と同様に中期に位置づけられる円墳として、奥深古墳群が同様に丘陵上に位置する。奥深古墳群は2002年に近江町教育委員会によって調査された。埋葬施設は盜掘によって破壊されており、須恵器片が出土したのみである。後別当古墳も丘陵上に位置する円墳と位置づけられているが、その内容はまったくわからっていない。

中期末における塚の越古墳の築造は、息長古墳群の変遷の中でも大きな画期と位置づけられる。

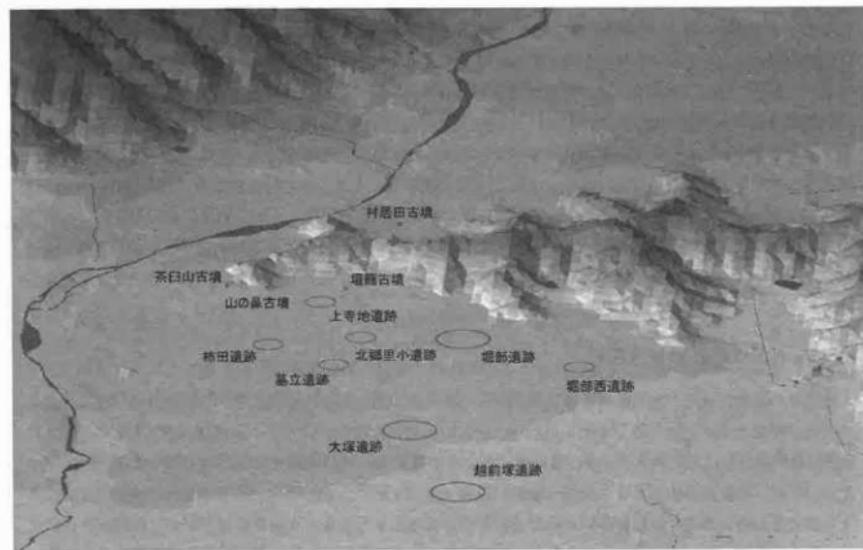
この古墳の存在は古くから知られており、塚の越古墳出土の伝承をもつ仿製鏡や、銅留金具の出土などが報告されている（島田1925）。1989（平成元）年の調査で、全長40.4mの前方後円墳に復元された。周濠・葺石をそなえ、石見型盾形埴輪と円筒埴輪をめぐらし、木製樹物が存在していた可能性も考えられた（宮崎1991b）。典型的な石見型盾形埴輪の分布域の東限にあたる。埋葬施設は横穴式石室と推定され、この地域でもっとも古い例に属する。埴丘形態、埴輪、埋葬施設、副葬品のいずれをとっても、格段に優れた内容をもつ古墳と位置づけることができる。「湖北地方における息長古墳群の優勢を決定づけたのは、山津照神社古墳よりもむしろ、先行する塚の越古墳の出現であった」と評されている（高橋1995：116頁）。石見型盾形埴輪や円筒埴輪の技法的な特徴が示すように、明らかに畿内から導入された形式の埴輪が用いられるようになった点も注目される。

狐塚遺跡からは弥生時代の方形周溝墓とともに古墳時代中期末～後期の円墳がみつかっている。そのうちの5号墳は全長30mの造出付円墳で、豊富な形象埴輪が出土したことで知られている。塚の越古墳と狐塚5号墳の年代的関係については、埴輪の評価をめぐって意見が分かれている。宮崎幹也は円筒埴輪の特徴から塚の越古墳～狐塚古墳群の順序を考え（宮崎1991b）、高橋は「豊富な埴輪の構成や、刷毛目の起点をそろえた円筒埴輪」から狐塚5号墳が併行ないし先行する可能性を説く（高橋1995）。

細かい時間的な関係はともかくとして、両者は別のまとまりをもつ古墳ととらえたい。狐塚古墳の周囲では、埋塚古墳など中期末～後期の小規模な古墳群が調査されている。また西円寺遺跡でもB種ヨコハケを施した碧麻焼成の埴輪をもつ、西円寺第3号墳が存在する。それらは弥生時代に墳墓域として利用されていた



息長古墳群と集落遺跡



長浜古墳群と集落遺跡

図50 息長古墳群・長浜古墳群と集落遺跡

地に築かれていること、小規模で群をなしていることなどに共通点をもつ。一方、塚の越古墳は単独墳の様相が強い。

両者とも平地に築かれた古墳であり、周濠をそなえている点も注目される。正確にいえば、塚の越古墳は定納古墳群の丘陵から続いてくる尾根状の微高地上にあり、狐塚古墳群は額戸山周辺の微高地上に位置する。しかしそれまでとは明らかに異なる立地、より集落に近い平地に再び墳墓が築かれるようになったのである。

こうした立地の変化は、ひとつに古墳の外観や祭祀のあり方とも関連する。丘陵上にあって見上げるのでではなく、より間近で接するような存在に墳墓の位置が変化したものといえる。この段階に埴輪が多くの古墳に普及するのも同様の現象とさえられよう。また交通路との関係も重要であろう。東山道の位置が古墳時代において重要な交通路であったとすれば、道からの距離を意識した立地と考える。

後期前半の山津照神社古墳は、息長古墳群中でもっともよく知られた存在である。1994（平成6）年の京都大学文学部考古学研究室の発掘調査により、墳頂46mあまりの前方後円墳に復元された（小野山ほか1995）。円筒埴輪がめぐらされ、石見型盾形埴輪も配されていること、くびれ部で須恵器を用いた祭祀がおこなわれていたことが判明した。1882（明治15）年、神社の参道工事の際に開口した埋葬施設は埋め戻されて今みることはできないが、残された絵図から比較的小ぶりの石を積み上げた横穴式石室で、玄室奥に石棺ないし石屋形状の施設のあったことがわかる。一部取り出された副葬品として、金銅製の冠ないし杏や鉄地金銅張馬具、刀剣、刀子、水晶製三輪玉や多数の須恵器などが保存されている。築造時期や場所から継体大王や息長氏との関連でとりあげられることが多い。いずれの要素をとりあげても、息長古墳群中において、また近江の後期古墳においてもきわだった存在の古墳である。また埴輪など畿内との関連を強く示す特徴が多い点も注目される。

山津照神社古墳は、息長古墳群のなかでもっとも奥まった位置にある。琵琶湖よりの平地部からの眺望は望めない。おそらくその立地は、交通路や集落との位置関係によるものと理解される。

從来息長古墳群の最後の前方後円墳と位置づけられてきたのは、額戸山の北西裾に位置する人塚山古墳である。しかし、2001（平成13）年、近江町教育委員会と大手前大学史学研究所の共同調査により、この墳丘状の高まり全体が岩盤で構成され、その上を近世後半の魔除物を含む層が直接覆っていることが判明した。須恵器片がわずかに出土している点には留意すべきであるが、盛土層などはまったく存在せず、後期の前方後円墳の存在を示す材料はない（森下・藤本2002）。この調査により、山津照神社古墳を息長古墳群の最後の前方後円墳とみることができるようになった。

以上のように弥生時代の墳墓から続く息長古墳群の変遷は、ひとつの流れとして追うことができるばかりでなく、立地や古墳の規模・内容にさまざまな変化が認められる。この状況を周囲の古墳群と比較して検討する。

2 長浜古墳群と息長古墳群

北近江の古墳は分布が密にまとまる地域がいくつかある。はやくに田中勝弘は、古保利古墳群をはじめとする高月町域、長浜古墳群の分布する長浜市、近江町の息長古墳群という3つの地域的なまとまりを示している（田中1982）。これに加え、近年、彦根市において全長100mを超える大型の前方後円墳の存在が知られるようになり、発掘調査もおこなわれた（滋賀県埋蔵文化財センター2005）。周辺にこの前後の時期の古墳が存在するかどうかはわかっていないが、ここにも核となる古墳のまとまりを想定できる。

息長古墳群との関連で重要なのは、長浜古墳群（横山北部古墳群）である。長浜市の北東部、鈴川流域に接した位置にある。定納古墳群が横山丘陵の北端にあたるのに対し、長浜古墳群はその北端にある。

長浜古墳群のなかでは茶臼山古墳の規模がもっとも大きい。低い丘陵の尾根の突端部に築かれた前方後円

墳である。墳長約100mに復元され、葺石をそなえ、段築の存在も想定される。時期比定をめぐって諸説がある。以前にこの古墳の時期を中期後半にさける材料とされてきた埴輪や須恵器は、近隣の埴籠古墳からの出土品と考えられるようであり、明確な時期の指標がとぼしい。近年においても、墳形や埋葬施設の中年層探査の結果などから前期後半に位置づける見解（宮森・森口1996 219-221頁）や、中期にくだる可能性を示す見解（辻川2003d）があつて決着はついていない。

茶臼山古墳が前期になるかどうかは別にしても、前期にはいわゆる首長墓が継続して築かれたとみられる。丘陵の頂部に築かれ、前方後方墳の可能性をもつ龍ヶ鼻古墳、丘陵尾根の突端部に築かれた前方後円墳の山の鼻古墳が、前期に属するものと考えられている。丘陵上には大小の円墳と方墳が並ぶ。中期前半の古墳は明瞭でないものの、中期末には丘陵下の平野部に埴籠古墳が築かれる。周濠をもつ前方後円墳であり、埴輪も出土している。埴籠古墳の埴輪に関しては近年重要な新知見が判明しており、後で詳しく触れることにする。

またこれらの古墳群からやや離れた位置ではあるが、やはり横山丘陵沿いの平野部に位置する中期後半の前方後円墳として村居田古墳の存在も見逃せない。規模など不明な点も多いが、石棺を埋葬施設として、埴輪も出土している。

こうした比較的規模が大きく、副葬品も多く出土している古墳とは別に、墳丘上部が削平されて埋葬施設や副葬品ははっきりしないが、息長古墳群の狐塚古墳群のように平地部に小規模墳が群集して築かれているものとして、上寺地遺跡（稲葉・松室1996）、柿田遺跡（仲川1989）などで古墳群が中期後半に展開する。なお長浜古墳群から離れた平地にある越前塚遺跡でも弥生時代中期～後期の方形周溝墓群の上に、古墳時代中期後半の周濠をもつ方墳が築かれている。また別に越前塚古墳は後期後半に位置づけられ、前方後円墳の可能性もあるという（宮成（編）1988）。

両古墳群の歩みを比較すると、前期においては長浜古墳群が優勢で、はやくから埴輪も導入されている。茶臼山古墳の位置づけによって評価は大きく分かれるが、前期に遡るとすれば息長古墳群に対する優位性はさらに高まる。中期前半とすれば、甲塚1号墳との細かい年代的関係が問題となる。

中期後半になると両者はよく似た変化を示す。丘陵縁の平地に周濠をもった前方後円墳を築き、埴輪を配する。比較的小規模で埴輪をもつ古墳群も形成される。また早くから横穴式石室を導入していた可能性が高い。

辻川哲朗は埴籠古墳が眾の越古墳に先行するとし、後期の段階で、長浜古墳群から息長古墳群へ中心が移ったものと想定されている（辻川2003c）。時期関係は微妙であるが、息長古墳群と長浜古墳群とでは、中心となる時期に違いが認められる。

3 墳墓と集落

先にも触れたように息長古墳群の変遷は、集落との関連をある程度比較しながら検討することができる。また長浜古墳群の周辺でも集落遺跡の調査が進んでいる。これらの成果を利用して、墳墓と集落との関係をまとめてみよう。

弥生時代においては双方とも、後期の集落遺跡が各地でみつかっている。同時期の墳墓は、集落の付近に群として営まれている。法勝寺遺跡にみられたように、前方後方形や陸橋付の円形墓など形や規模において格差のある墳墓が後期には登場してくるが、やはり他の小規模な墳墓と同じ墓域につくられる。

調査された弥生時代後期から古墳時代にかけての集落遺跡は、中心となる時期にやや差があるようだ。近江町域では顕戸遺跡・高瀬遺跡を経て、古墳時代前期はじめには黒田遺跡が中心的な位置を占める。宮崎幹也は、定納古墳群に対応する時期の集落遺跡として、米原市の入江内湖遺跡に注目する。図51には定納古墳

群の可視領域について、もっとも高所に築かれた5号墳で代表させて示した。すぐ西側の額戸山にはばまれ、法勝寺遺跡など額戸遺跡群からの眺望はのぞめない。黒田遺跡からも無理ではないが、やや離れた入江内満遺跡群からの眺望が可能である。

長浜古墳群近傍では、北郷里小遺跡、上寺地遺跡、柿田遺跡などの集落遺跡の調査がおこなわれている(榎葉・松室1996・仲川1989)。それらは後期に成立したものが多いが、「横山丘陵に茶臼山古墳などの前方後円墳の造営がはじまる古墳時代前期後半から中期前半になると北郷里小遺跡は一時衰退し、上寺地遺跡もやや縮小傾向となる」が、「この時期の造構が多く検出されているのは柿田遺跡で、この地の拠点的な集落として古墳の造営に関ったもの」と推定されている(榎葉・松室1996:48頁)。それらの集落からやや琵琶湖よりに位懸するものの、弥生時代後期の大集落と考えられる大坂遺跡も注目される(丸山1995)。隣接して多数の弥生時代中後期の方形周溝墓群がみつかった越前塚遺跡がある(宮成(編)1988)。越前塚遺跡からは、口縁部に突帯をめぐらし、B種ヨコハケの施された円筒埴輪が出土している。近江町の狐塚遺跡と同様に、埴輪をもつ小規模な古墳が群集している状況が想定される。

両古墳群の変遷の上で西期と先に位置づけた時期、中期後半における集落の様相は明らかでない。長浜では柿田遺跡が中心的な位置を占めるようだ(仲川1989)。息長古墳群の中後期に対応する集落遺跡はわからない。今のところ法勝寺、孤塚、黒田の諸遺跡の調査結果でも、その時期の造構・遺物が希薄であることからすれば、調査のおこなわれていない塚の越古墳周辺に移動していた可能性がある。

いずれにしても、両地域とともに古墳に大きな変化がみられた時期に、集落の中心が移動したものと考えられる。

4 墓の諸要素と地域間関係

小地域間内における墳墓や集落の変遷をみてきたが、ここでは墳墓を構成する諸要素に着目し広く他地域の古墳との比較を進める。

立地と墳形 先にも触れたように、息長古墳群も長浜古墳群とともに前期～中期前半は主として丘陵上に古墳が築かれる。その中で定納1号墳は前方後方墳という墳形が注目される。赤坂次郎は前方後方墳の平面形態を分類して地域によって特徴があることを見出しているが、定納1号墳のように後方部が長軸に長い形式は正方形のものから変化してきたものと位置づけている(赤坂1992)。この地域では法勝寺遺跡においてはやくに前方後方形の墳墓が登場している。前方後方形と円形の墳墓が交錯した流れをみることができる。どちらについても、時期により他地域からの影響に変化が生じたものとみる。長浜古墳群中にも龍ヶ鼻古墳などの前方後方墳が存在し、さらに北方の古保利古墳群でも前方後方墳が卓越する。

一方、中期前半と推定される大型円墳の甲塚1号墳は、他の丘陵上の古墳と比較してもきわめて高い位置に築かれている点が特色である。同様に大型円墳が高所に築かれた例は、岡山県月の輪古墳(近藤(編)1960)、兵庫県茶すり山古墳(岸本ほか2003)、京都府私市円山古墳(鍋山ほか1989)など各地に認められる。中期前半においては低地においても大型円墳が各地で築かれ、前方後円墳に匹敵するような量の武具・武器類を副葬している例がめだつ。甲塚1号墳の副葬品や埋葬施設についてはわからないが、以上のような立地の共通性などからみて、広く共通の性格をもった被葬者の古墳としてとらえられる。

埴輪 円筒埴輪の様相は、他地域との関係を検討する上で重要な材料を提供する。まず長浜古墳群の埴輪を詳細に検討した辻川哲朗の最近の研究成果に依拠して記述を進める(辻川2003d)。

先にも触れたようにこの地域でにおける埴輪の導入は長浜古墳群が先行する。また中期後半においても、畿内地方の埴輪と共通性の高い埴輪が使用されている。

ところが埴籠古墳においては尾張型埴輪が用いられていることが明らかにされた(辻川2003a・2003c・2003

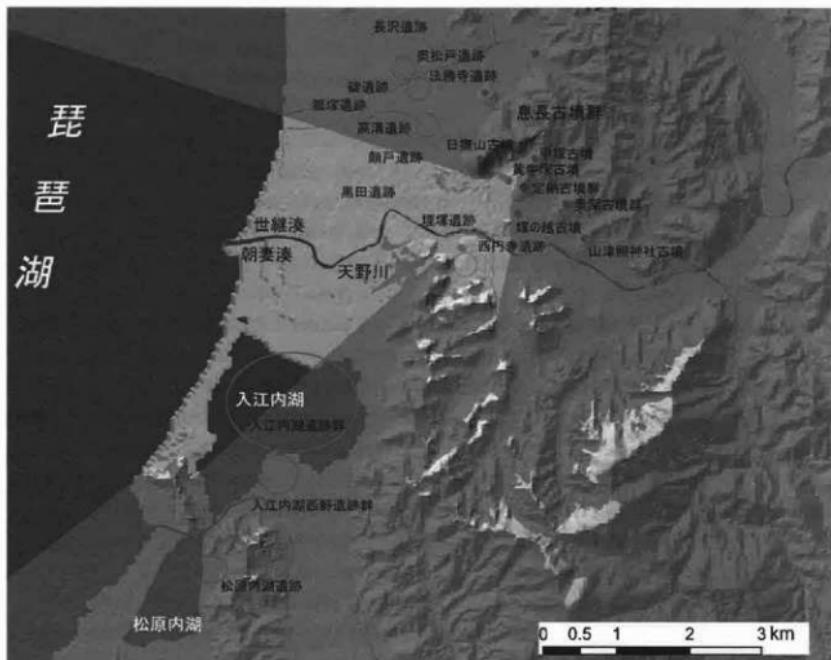


図51 定納古墳群の可視領域

d) 尾張型埴輪とは、川西宏幸が最初にそのまとまりを指摘し、赤坂次郎がその技法的特徴を明らかにして命名した特徴的な埴輪群である(川西1978 赤坂1991)。尾張～美濃に分布がまとまり、きわめて地方色が強い。それまでは畿内地方に近い埴輪の様相が統くことからみると、この地域への導入の意義は大きい。一方、直後の時期に息長古墳群には畿内の特徴をもった埴輪が普及するのであり、対照的である。

狐塚5号墳、塚の越古墳、山津照神社古墳に用いられた円筒埴輪は、鐘方正樹のいうV群系の埴輪であり、あらたに編成された埴輪製作者集団によるものと評価されている(鐘方1999)。石見型盾形埴輪はV群系埴輪とともになものであるが、息長古墳群のそれは分布の中心の東限にあることを強調しておきたい。

なお山津照神社古墳の円筒埴輪が、兵庫県西宮山古墳のものときわめてよく似た特徴をもつことが注目されている(高橋1995)。2003年に京都国立博物館および龍野市教育委員会所蔵の西宮山古墳出土円筒埴輪と山津照神社古墳出土の円筒埴輪とを直接比較する機会を得た。ハケ目パターンの一一致など確実な証拠は得ていないうが、技法の細かな特徴が共通しており、両者が同一製作者集団の製品である可能性は十分ある。

埋葬施設 定納古墳群にみられた長大な刳抜式木棺は各地にみられるものであり、特定の地域とのむすびつきを示す材料とはならない。先にみたように5号墳西棺にみられた端部を粘土塊で塞ぐ手法も、各地に散発的にみられる。長浜古墳群では前期～中期前半では埋葬施設の調査例がないので比較はできない。

形態や構造はわからないが、塚の越古墳にはやくに横穴式石室が導入され、埴籠古墳も横穴式石室であった可能性が考えられている(辻川2003c)。埴輪と同様、畿内から直接に影響を受けたものと考えられる。な

お山津照神社古墳の横穴式石室の奥に描かれた石組みが「石屋形」であったとすれば、九州系の埋葬施設の影響を考える必要が生ずる。

5 息長古墳群の特質

息長古墳群の変遷にもっとも影響を与えた要因は、その地理的位置にある。本書でも各所で言及し、さらには藤本論考で中世の交通路のあり方からも論じられているように、近畿、北陸、東海を陸路と湖上交通とをつなぐ結節点にあたる。黒田遺跡では祭祀土壇 S X01から多数の土器が出土したが、そこには畿内や東海系の土器や、北陸、讃岐のものに類似した土器がみられた。古墳時代前期初頭における地域間交流の交点としてこの地域の特色を如実に物語る資料である。

墳墓の諸要素のさまざまな変化は、それぞれに特色をもつ他地域からの影響を受けやすい立地に要因を求めることができよう。息長古墳群は全体としては近畿地方の影響と考えられる要素が多いが、定納1号墳の墳形とその造作など東海地方の影響を考える余地がある。

長浜古墳群とでは立地や横穴式石室の導入など共通の変化を示す要素もあるが、前期段階での埴輪の導入（長浜古墳群）、大型円墳の築造（息長古墳群）、尾張型埴輪の導入（長浜）、中期末～後期において近畿地方の古墳の強い影響（息長）といった点で違いもある。

集落の様相とも比較すると、息長古墳群と長浜古墳群とは関係をもちつつも別個に展開した集団による造墓活動を示す。他地域との影響関係の変化などにより、それぞれの活動には起伏が生じたようだ。古墳時代における小地域の状況を通時的にみることができる点で、本地域は興味深い事例を提供している。

参考文献

- 赤堀次郎 1991 「尾張型埴輪について」『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第24集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 34-50頁
- 赤堀次郎 1992 「東海系のトレースー3・4世紀の伊勢湾沿岸地域」『古代文化』第44巻第6号 古代学協会 35-49頁
- 安土城考古博物館 2003 「日報知らす可き王無し—繼体大王の出現—」平成15年度春季特別展図録 滋賀県立安土城考古博物館
- 稻葉隆宜・松室孝樹 1996 「北郷里小遺跡 上寺地遺跡 中町田遺跡」県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書XII-1 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 稻葉隆宜 1997 「上寺地遺跡 北郷里小遺跡 法性寺遺跡 墓立遺跡」は場整備関係遺跡発掘調査報告書XXIV-1 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 稻葉隆宜・内田保之 1999 「上寺地遺跡 北郷里小遺跡」は場整備関係遺跡発掘調査報告書26-3 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 岩井覚堂 1909 「近江国北郷里村字垣籠古墳に就きて」『考古界』第7編第11號 考古學會 457-474頁
- 横田文雄(編) 2004 「神郷亀塚古墳」能登川町埋蔵文化財調査報告書第55集 能登川町教育委員会・能登川町埋蔵文化財センター
- 植野浩二・信里芳紀(編) 1997 「五村遺跡—いきがいセンター建設に伴う発掘調査報告書」虎姫町文化財調査報告書第2集 虎姫町教育委員会
- 小野山範・高橋克海・森下章司・吉井秀夫 1995 「琵琶湖周辺の6世紀を探る」平成6年度科学研究費補助金一般研究B調査研究成果報告書 京都大学文学部考古学研究室
- 鍾方正樹 1999 「2条突帯の円筒埴輪」「埴輪論叢」第1号 墓地検討会 109-131頁
- 河内一浩 2003 「古墳時代後期における円筒形埴輪の研究動向と編年」「埴輪論叢」第4号 墓地検討会 39-59頁

- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪紹論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会 95-164頁
- 岸本一宏・岩本宗・加藤一郎・千葉太朗 2003 「茶すり山古墳調査概報」兵庫県教育委員会 学生社
- 岸本道昭 1996 「新宮東山古墳群の研究」「新宮東山古墳群-土採りに伴う緊急発掘調査報告書-」龍野市文化財調査報告 16 龍野市教育委員会 55-84頁
- 北原治・中川治美 2002 「入江内湖西遺跡」県道彦根米原線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 黒坂秀樹(編) 2001 「占保利古墳群第1次確認調査報告書」高月町教育委員会
- 近藤義郎(編) 1960 「月の輪古墳」月の輪古墳刊行会
- 滋賀県埋蔵文化財センター 2005 「荒神山古墳の発掘調査」「滋賀県埋蔵文化財ニュース」第300号 滋賀県埋蔵文化財センター
- 島田貞彦 1925 「近江國坂田郡能登瀬の古墳」「歴史と地理」第15巻第3号 史學地理學同好會 64-82頁
- 高橋克泰 1995 「湖北の後期前方後円墳の動態」「琵琶湖周辺の6世紀を探る」平成6年度科学研究費補助金一般研究B調査研究成果報告書 京都大学文学部考古学研究室 109-121頁
- 田中勝弘 1982 「湖北地方の前方後円墳」「北陸自動車道開通関連遺跡発掘調査報告書」Ⅵ 高月町瓢塚古墳 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 10-33頁
- 田中勝弘 1987 「狐塚古墳群の問題」「一般国道8号(長浜バイパス)関連遺跡発掘調査報告書」Ⅳ -西火打遺跡-、狐塚遺跡- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 83-91頁
- 辻川哲朗 2003 a 「近江における古墳時代中・後期の円筒埴輪-長浜古墳群・息長古墳群を中心として-」『日進知らす可き王無し-雜体大王の出現-』滋賀県立安土城考古博物館平成15年春季特別展回録 滋賀県立安土城考古博物館
- 辻川哲朗 2003 b 「近江地域の円筒埴輪編年」「埴輪論叢」第4号 墓輪検討会 61-108頁
- 辻川哲朗 2003 c 「長浜市須籠古墳の再検討」「考古学に学ぶ(II)」考古学研究室開設五十周年記念 同志社大学考古学シリーズⅧ 同志社大学考古学シリーズ刊行会 389-400頁
- 辻川哲朗 2003 d 「長浜古墳群の埴輪」「北近江」創刊号 北近江古代史研究会 59-71頁
- 仲川 翔 1989 「柿田遺跡発掘調査報告書-県道中山東上坂線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-」滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 鍋田勇・大崎康文・高野陽子・石崎善久 1989 「私市円山古墳」「京都府遺跡調査概報」第36回 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 3-79頁
- 西原雄大 2005 「大成亥・鶴田遺跡の研究」「北近江」第2号 北近江古代史研究会 1-23頁
- 浜崎悟司 1988 「長浜市森前遺跡・国友遺跡」「(は)場整備関係遺跡発掘調査報告書」XV-1 -長浜市森前遺跡・国友遺跡-、小沢城跡・坂田郡近江町正恩寺遺跡- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1-19頁
- 福永伸哉 1996 「雪野山古墳と近江の前期古墳」「雪野山古墳の研究」雪野山古墳発掘調査団 293-308頁
- 細川修平 1996 「古墳時代における琵琶湖およびその周辺地域」「紀要」第11号 財団法人滋賀県文化財保護協会 55-94頁
- 丸山雄二 1995 「大塚遺跡」長浜市埋蔵文化財調査資料第12集 長浜市教育委員会
- 丸山竜平 2004 「巨大古墳と古代国家」吉川弘文館
- 宮崎幹也 1990 「法勝寺遺跡」近江町文化財調査報告書第6集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1991 a 「塙塚遺跡2」近江町文化財調査報告書第9集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1991 b 「塙の越古墳」近江町文化財調査報告書第10集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1993 「西円寺遺跡」近江町文化財調査報告書第16集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1994 a 「黒田遺跡3」近江町文化財調査報告書第17集 近江町教育委員会

- 宮崎幹也 1994 b 「北近江の土器様相」『庄内式土器研究』VI 一庄内式併行期の土器生産とその動き—近江系土器の実態とその移動 庄内式土器研究会 45-66頁
- 宮成良佐(編) 1988 「越前塚遺跡発掘調査報告書—加納工業団地造成関連—」長浜市教育委員会
- 宮成良佐・森口訓男 1996 「豪族と古墳」『長浜市史』第1巻湖北の古代 長浜市史編さん委員会 170-224頁
- 森下章司・藤本史子 2002 「滋賀県坂田郡近江町人塚山の発掘調査」『大手前大学史学研究所紀要』第1号 大手前大学史学研究所 15-25頁
- 用田政晴・細川修平 1992 「近江」『前方後円墳集成』近畿編 山川出版社 35-43頁
- 吉田秀則・田中勝弘 1987 『一般国道8号(長浜バイパス)関連遺跡発掘調査報告書』IV -狐塚遺跡- 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 吉田秀則 1988 『一般国道8号(長浜バイパス)関連遺跡発掘調査報告書』V -狐塚遺跡・法勝寺遺跡- 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会

挿図出典

図50 福井亘作成

図51 福井亘作成

VII 総括

1 調査と研究の成果

古墳群の構成 定納古墳群は、ほぼ南北方向に伸びる丘陵の尾根上に築かれた古墳群である。道路工事によって失われた2古墳を合わせて計9基から構成されるが、4号墳については調査によって古墳かどうかの確証を得ていない。

立地と眺望 定納古墳群の大きな特色のひとつとしてその立地があげられる。古墳からは琵琶湖をはじめとして主要な交通路をみおろすことができる。また逆に、横山丘陵の南西部から琵琶湖にかけての平野部からの眺望が可能な場所に古墳群は位置する。入江内湖遺跡など、この範囲内に定納古墳群と関連する集落が広がっていたものと考えられる（V森下論考）。

墳丘 1号墳が前方後方墳、2・3・5・6号墳が方墳または方墳の可能性が高いもの、7号墳が楕円形墳であり、全体としては方形を基準とする。大きさは墳長21.4mの1号墳、長軸22.1m・短軸18mの5号墳、長軸14m・短軸11.5mの7号墳と続き、10m以下の小規模な墳墓もふくむ。

前方後方墳は東海地方とのかかわりで近年議論を呼んでいる墳丘形態である。定納1号墳の墳丘をみると、単に平面形だけでなく、規模のわりに高さがあり、墳丘斜面が急傾斜をなす点や墳丘のまわりに平坦面を造成している点などが注目できる。さらに比較検討が必要であるが、こうした要素も東日本の前方後方墳によくみられるものと考える。また陸橋状施設も北陸などに例がある（和田1984）。墳丘に関しては東の影響なし伝統をもつものと理解できる。

構築方法について、1号墳と6号墳、5号墳と7号墳では、尾根を切断する掘削によって2つの墳丘下部が同時にづくりだされていることに注意したい。2号墳と3号墳も同様の関係になると推測する。これらの古墳は同じ時期に築造されたものと考えられる。

5号墳と7号墳のように、ひとつの掘削によって2つの墳丘を同時にづくりだし、2つの古墳が並んで築かれる例は他にも多くみられる。岸本道昭は方墳2基が並んで築かれる例をとりあげている（岸本1996）。円墳でも同様の事例がある（浜崎・川原1998）。

墳丘の下半部は地山成形によってつくりだされているものの、1号墳と5号墳ではその上に比較的丁寧に盛土をおこなっている。とくに5号墳では、盛土層の途中に炭と焼土層を交えていたことが注目された。分析の結果、尾根筋に広がっていた照葉樹林の材を用いていた可能性が考えられ（IV-9）、古墳築造時に焼き払ったことによるものと推測する。

埋葬施設 確認できた埋葬施設は1号墳で1基、5号墳の2基、7号墳の1基であるが、すべて墓壙内に長大な剖抜式木棺を納めたものであることが共通する。

1号墳の埋葬施設は棺を据えるための特別な施設をもたないが、5号墳では多量の粘土を用いて棺床を設けている。また5号墳はひとつの墓壙に二棺を納め、両棺は大きさや形式を異にしていたことは興味深い。7号墳も長大な木棺を用いている。

棺の軸は1号墳と5号墳では南北方向にあり、とくに5号墳は墳丘軸と斜行する向きに置かれている。被葬者の頭位は北向きと考えられる。頭位方向を北向きにおく約束が強く守られていたことを示している。ただし7号墳では南北から大きく振れた向きに設けられていた。

1号墳では筒形銅器下に遺存した棺材と考えられる木製品を分析し、針葉樹でスギ科スギまたはヒノキ科のネズコやサワラの可能性が考えられた（IV-9）。1号墳と5号墳西棺では棺内的一部分に水銀朱を用い、他

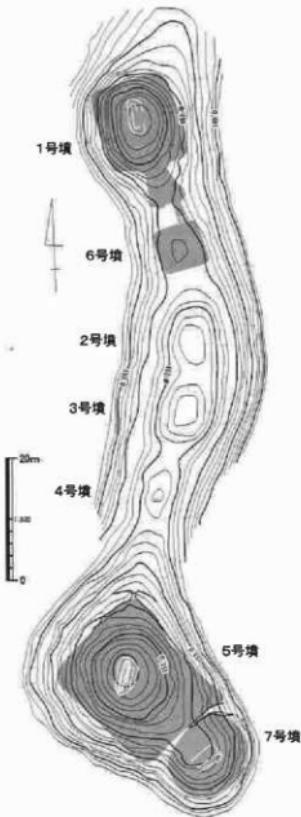


図52 定納古墳群復元想定図

少し念入りな造作を施した例は大阪府豊中大坂古墳第2主体部の2植（柳本(編)1987）にあり、中期前半に位置づけられる。これらと比較すると、定納5号墳の例は中期前半とみることもできよう。

一方1号墳では、とくに棺床施設がなく、墓壇底に置き土をしたやや変則的な方式である。5号墳の埋葬施設に先行する独自性の強い形式とみることができる。

副葬品で参考になるのは筒形銅器のみである。一般に前期後半～中期前半に副葬される。鋳型の構造にもとづく変遷觀によれば、その中でも古い形式に位置づけられる（V岩本論考）。

材料が乏しいことを強調した上で、5号墳および同時に埴丘が形成された7号墳の年代を中期の前半、1号墳はそれに先行し、かつ埋葬施設や筒形銅器の形式から前期後半に遡るものと位置付ける。失われた8・9号墳についてはまったく情報がないが、前期後半から中期前半にかけて継続的に築かれた古墳群と考える。

の棺もふくめ棺内全体にベンガラを赤色顔料として使用している（IV-7・8）。7号墳の棺も全面に赤色顔料が施されているようである。6号墳でも一部に顔料の痕跡が認められた。

副葬品 1号墳からは筒形銅器が出土し、刀剣その他の鉄製品もふくまれていたようである。5号墳では東棺に刀子があつただけである。

1号墳の筒形銅器は棺内の被葬者近くに置かれていたものであり、筒形銅器の用途を考える上で重要ながかりを提供する（V岩本論考）。

全体としてそれほど副葬品は多くないようである。玉の副葬例がみられないことも目をひく。土器類の副葬・供献も明確ではない。

年代 各古墳の築造年代については、上器など直接のがかりとなる資料が乏しい。古墳の横築順序および年代について、検討材料となるのは立地、構築方法、埋葬施設、副葬品などである。

立地については、尾根の中で丘陵本体に近い1号墳をもっとも早い時期の築造と考え、そこから南に順次築かれたとみることができる。ただし群中で一番高い位置にあるのは5号墳である。古墳からの眺望範囲がもっとも広く、また平野部から見たときにもっともめだつのもこの古墳である。

埋葬施設はいずれも長大な木棺を用いたものであるが、5号墳は木棺を据える下部に多量の粘土を用いて、棺床を形成していることが注目される。被覆粘土は持たないものの粘土郴の影響を受けた形式と考えられる（V森下論考1）。また棺の周囲に置かれた粘土を、棺の端から中に入れ込み、そこに粘土塊をかたちづくる例としてあげた、石川県吸坂E1号墳（浜崎2002）、愛知県三味塚古墳（三田ほか2001）などは中期中ごろの古墳である。いま

息長古墳群と長浜古墳群 まだ情報の不足している墳墓もあるものの、今回の調査により、息長古墳群の変遷について、立地、墳丘形態、規模、埴輪・葺石など外表施設、埋葬施設と副葬品など、さまざまな要素からとらえることができるようになった。この地域では弥生時代末から「首長墓」の変遷を追うことができ、地域における「首長墓」の動きを集落遺跡とからめて細かくみてゆく上で、標識資料となりうる。また近くに展開する長浜古墳群の動きなどを比較して、弥生時代から古墳時代にかけての地域史を復元してゆくこともできよう（V森下論考2）。

歴史的位置 この地は、東海・北陸と近畿地方を水陸の交通路で結ぶ要として位置づけられ、古墳時代以降においても重要な役割を果たしてきた（V藤本論考）。

しかし息長古墳群の展開をみてもわかるように、大型古墳などが継続的に築かれたわけではない。古墳の規模から勢力の大きさをみると、一貫して強い勢力が存在したというように説明することはむずかしい。

むしろ他地域との関係の中で、さまざまな影響を受け、墳墓の特徴が各時期に変化してきたことがもっとも注目すべき特質であろう。その要因は交通の要衝としての地理的・歴史的役割に關係するものと推論する。

2 活動の成果と課題

今回の調査においては、里山の保全と活用という大きな目標の中で、古墳群についての基礎的な情報を得ることが目的であった。生活環境の変化によって荒廃した里山をよみがえらせ、古墳という文化財をその中で活用するための方法、取り組みの体制をいろいろに工夫した（1）。

丘陵の頂部というやや厳しい条件の地にあって、古墳を保護するとともに、墳丘のかたちをある程度イメージすることができ、また下草など管理の手間を軽減するための手法として、やまんばの会の協力を得て木のチップを前面に散布するという方法をとった。まだ実験的な試みではあるものの、復元的な整備や自然状態のままの保護とは異なる方向性を模索している。

また古墳のある場所だけでなく、丘陵部を広く里山として整備し、散策やこどもの遊び場としての活用に役立つ環境も整えつつある。

こうした試みをおこなうにあたってもっとも重要なのは、それぞれの組織の協力体制のあり方である。教育委員会、地元NPO団体、地元中学校、大学、研究機関がそれぞれの特色を活用しつつ、新しい発想で調査と遺跡の保護活用に取り組んだ。

社会の変動がいちじるしい今日において、こうした各種機関の自由な活動は困難な状況ではあるものの、遺跡の調査を媒介とした新しい試みをめざした。古墳群の内容をほんまらにしたこと、さまざまな機関が協力し合えたこと、自然と文化遺産の新たな保全方法を実施したことなど成功と評価できる部分もある一方、調査および保全活動における人的負担がきわめて大きかったことなど問題点も残る。さらに間近に控えた市町村合併が、こうした取り組みに今後どのような影響を及ぼすのか、今のところ確かな展望はない。

さまざまな課題は残るもの、全国で展開されている里山保全、遺跡の保護活動に対して、参考となる活動例となれば幸いである。

この活動に参加・協力をいただいた多くの方々に心より感謝もうしあげます。

参考文献

岸本道昭 1996 「新宮東山古墳群」龍野市文化財調査報告16 龍野市教育委員会

浜崎悟司・山川史子 1998 「八幡古墳群」『石川県小松市 八幡遺跡』I 一般国道8号小松バイパス改築工事関係

- 蔵文化財調査報告書－ 社団法人石川県埋蔵文化財保存協会 126－168頁
- 三田敦司・森泰通・飯塚邦男・川口昌代 2001 「三味線塚古墳」豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集 豊田市教育委員会
- 柳本照男(編) 1987 「摂津豊中大塚古墳」豊中市文化財調査報告第20集 豊中市教育委員会
- 和田晴吾 1984 「石川県国分尼塚一・二号墳」「月刊 文化財」254号 文化財保護委員会 11－17頁

報告書抄録

ふりがな	じょうのう こふんぐん							
書名	定納古墳群							
副書名								
巻次								
シリーズ名	近江町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第28集							
叢集著者	森下章司・宮崎幹也・藤本史子・奥田智子・岩本崇・藤根久・植田弥生							
叢機関	近江町教育委員会・大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター							
所在地	〒521-0072 滋賀県坂田郡近江町顔戸488-3 ☎0749-52-3111							
	〒662-0965 兵庫県西宮市郷免町8-17 ☎0798-32-5007							
発行年月日	西暦2005年8月31日							
ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
定納 古墳群	滋賀県 坂田郡 近江町 新庄・顔戸・ 日光寺	254649		35° 20' 00" (5号墳)	136° 18' 58" (5号墳)	20020510 ~ 20050831	1,200m ²	確認調査 里山保全 事業
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
定納1号墳	古墳	古墳時代前期後半	前方後方墳 全長21.4m 木棺直葬	筒形銅器 鉄器 土器片 石器				
定納5号墳	古墳	古墳時代中期前半	方墳 長軸22.1m・短軸18m 粘土床をもつ木棺	鉄器 須恵器 石器				
定納7号墳	古墳	古墳時代中期前半	橢円形墳 長軸14m・短軸 11.5m 木棺直葬					

図 版

定納古墳群周辺の遺跡	図版 1
定納古墳群	図版 2 ~ 4
定納 1 号墳	図版 5 ~ 7・15~22・24・25
定納 5 号墳	図版 8 ~ 13・26~34
定納 6・2・3 号墳	図版 23
定納 7 号墳	図版 35・36
木製品・炭化材の分析	図版 37~39
定納古墳群の保護・整備	図版 14
やまんばの会	図版 40

図版1 定納古墳群周辺の遺跡





1 天野川と横山丘陵 南東から



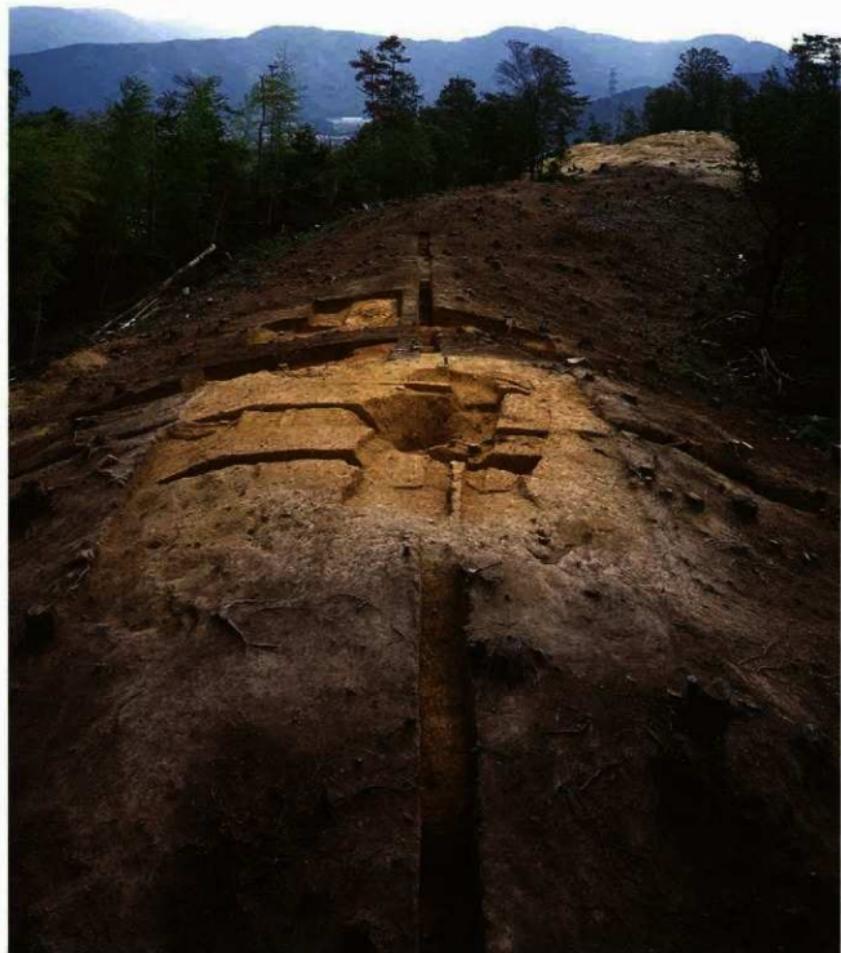
2 横山丘陵と定納古墳群 南西から



1 大野川のほとりから望む定納古墳群 西から



2 丘陵下から望む定納古墳群 南西から



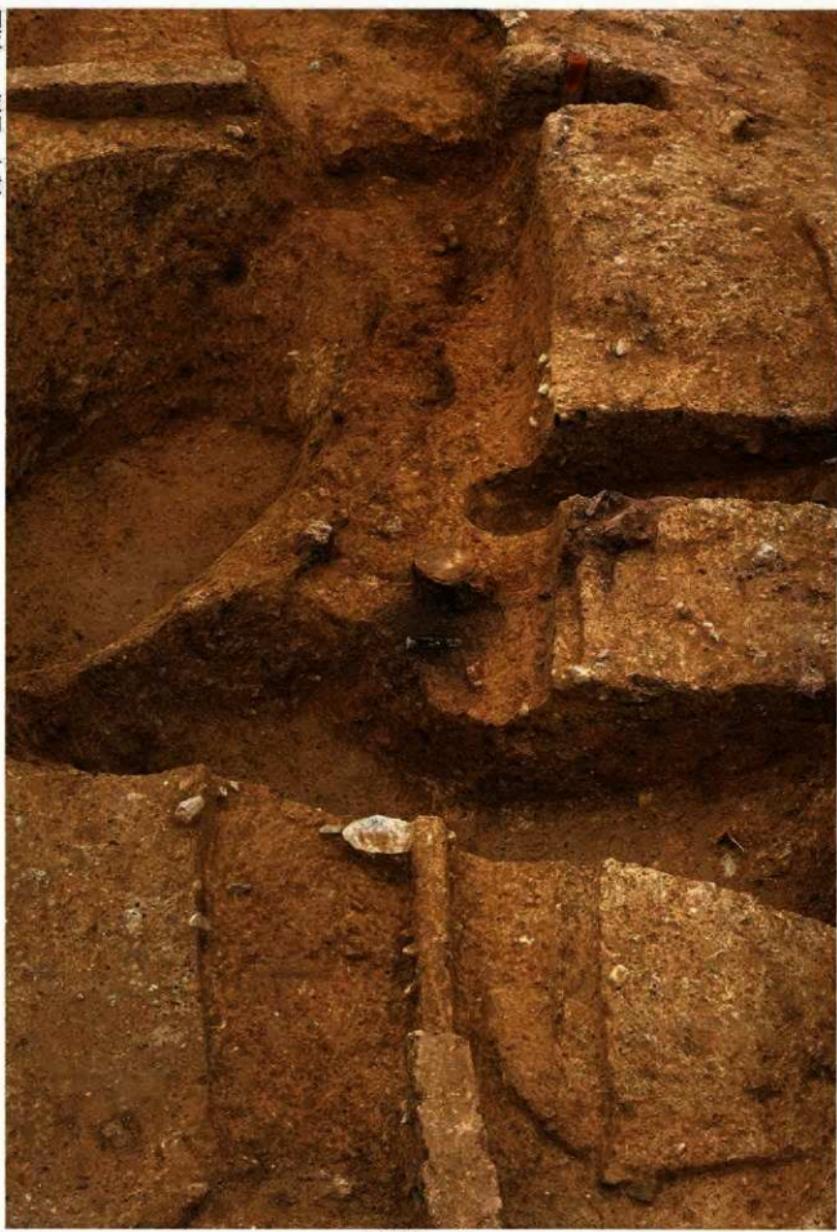
古墳群全景 北から 手前から1号、6号、2~4号墳、遠景に5・7号墳



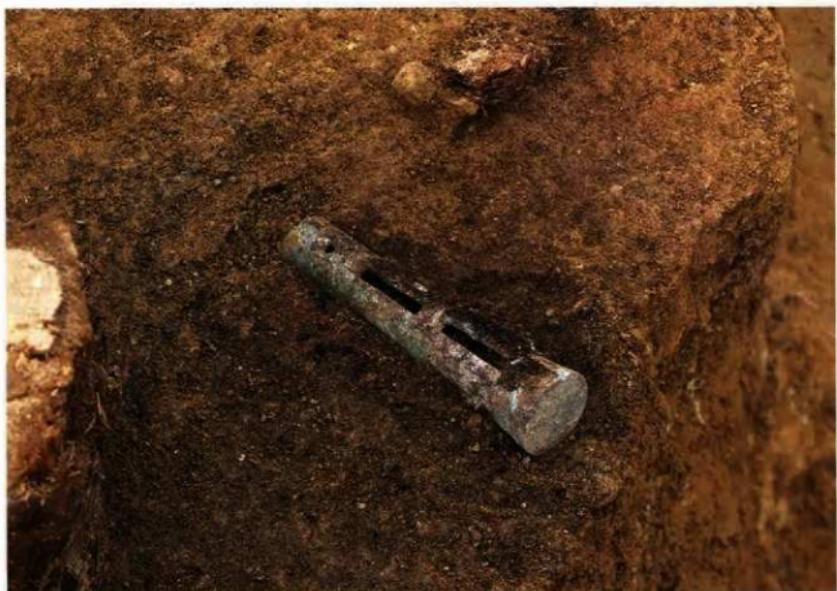
1 墳丘 北東から



2 墳丘 南東から



粗葬陪設 北から



1 簡形銅器出土状況 北東から



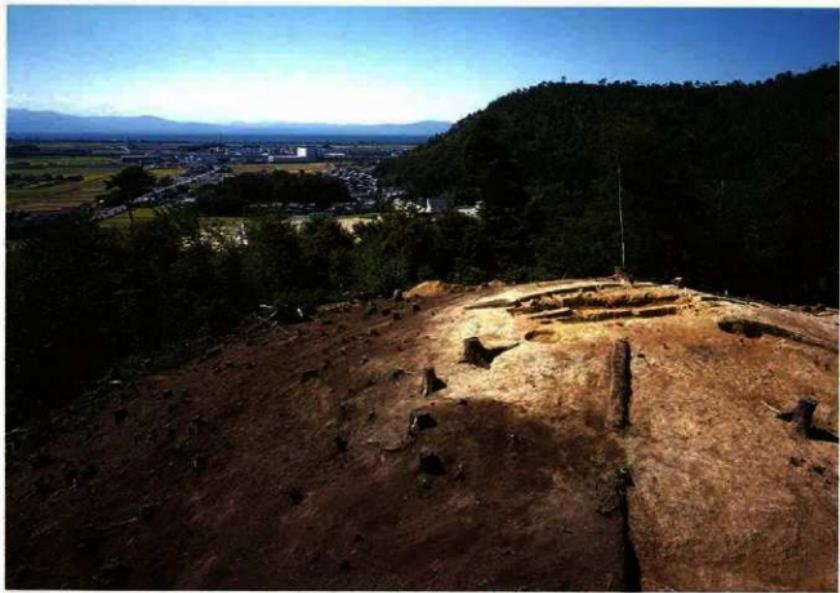
2 簡形銅器と銅製舌



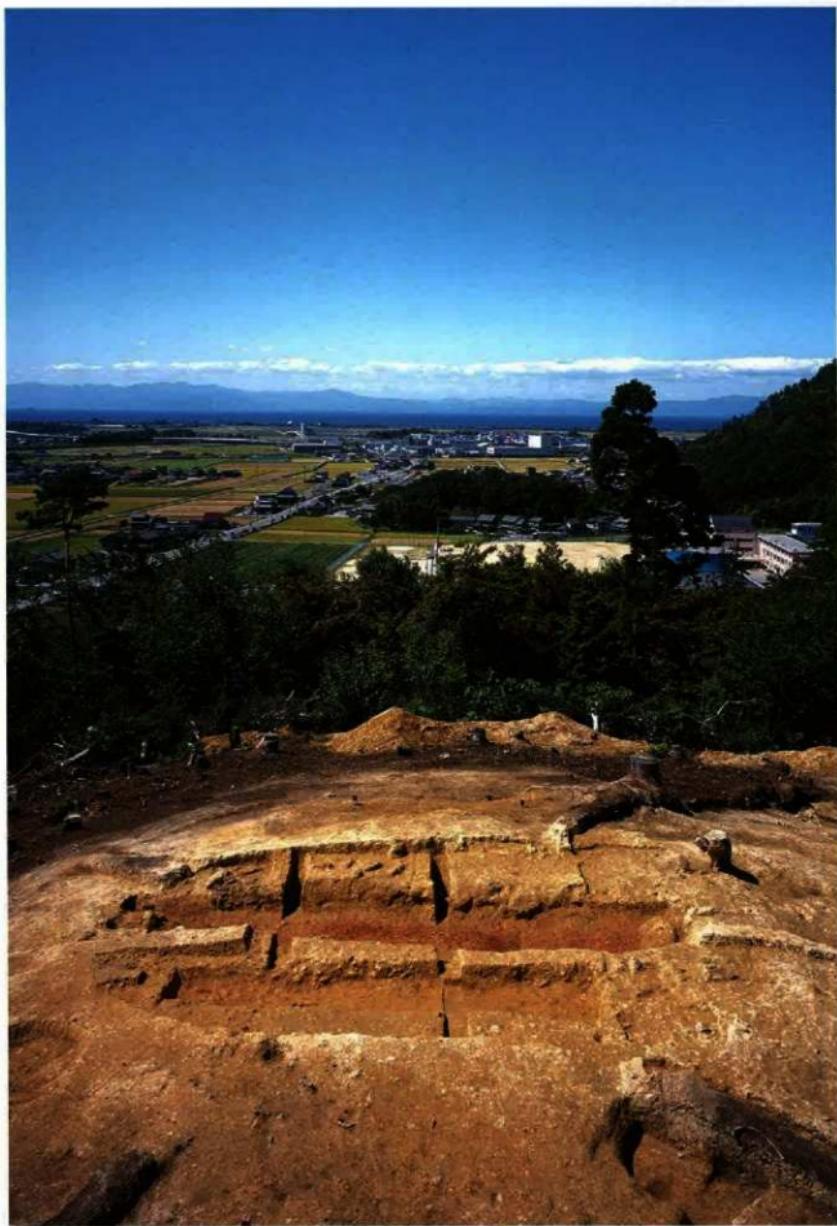
3 鉄製品



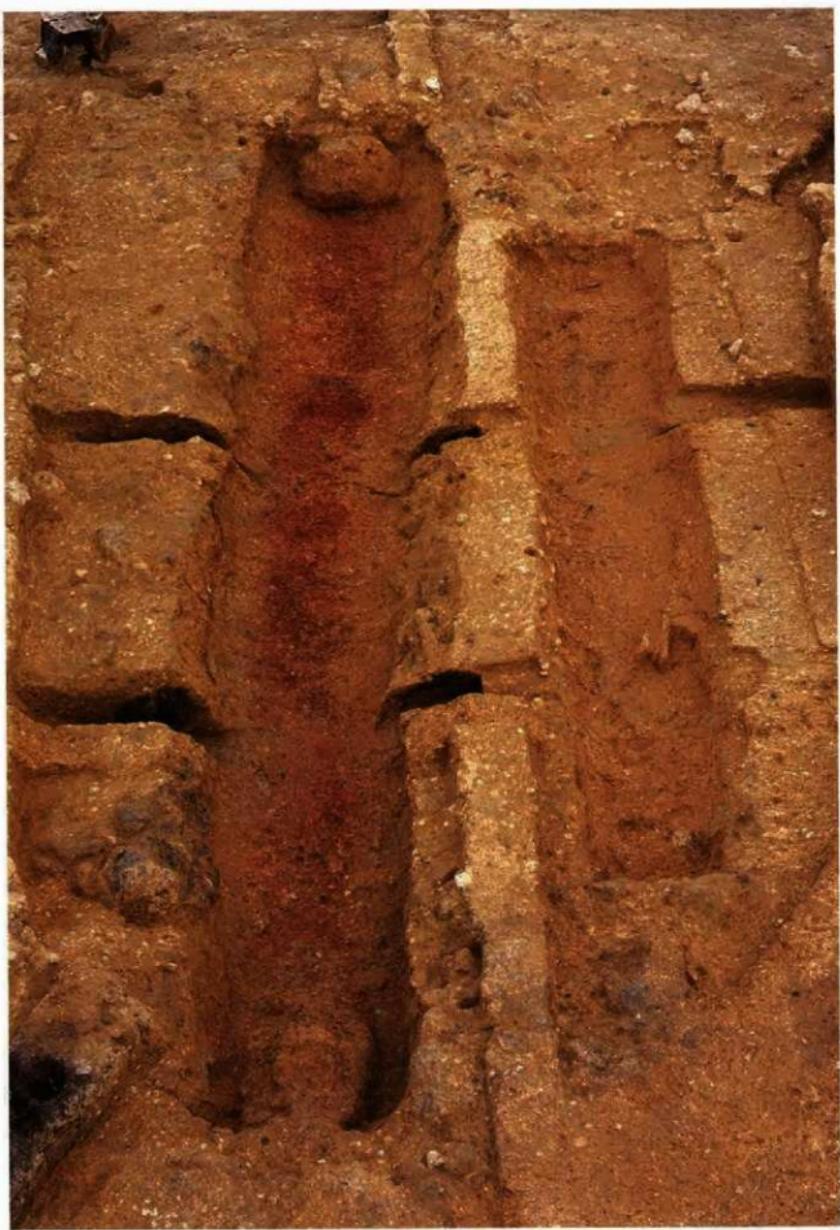
1 墓丘 北から



2 墓丘と琵琶湖遠景 南東から



想像施設と延喜制造景 南丸から



理葬施設 南から 左：西棺 右：東棺



1 埋葬施設 北東から



2 西棺・東棺の端部 東東から



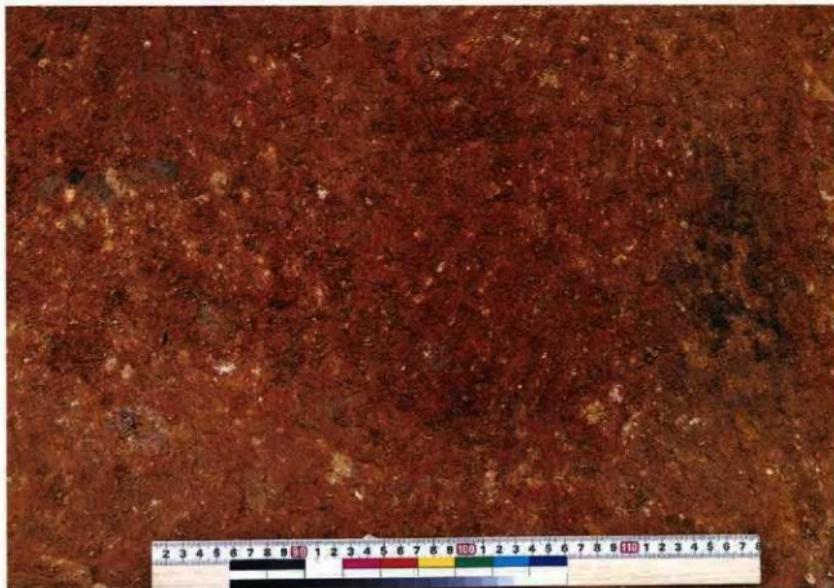
1 西棺北端部粘土塊の断面 西から



2 西棺南端部粘土塊の断面 西から



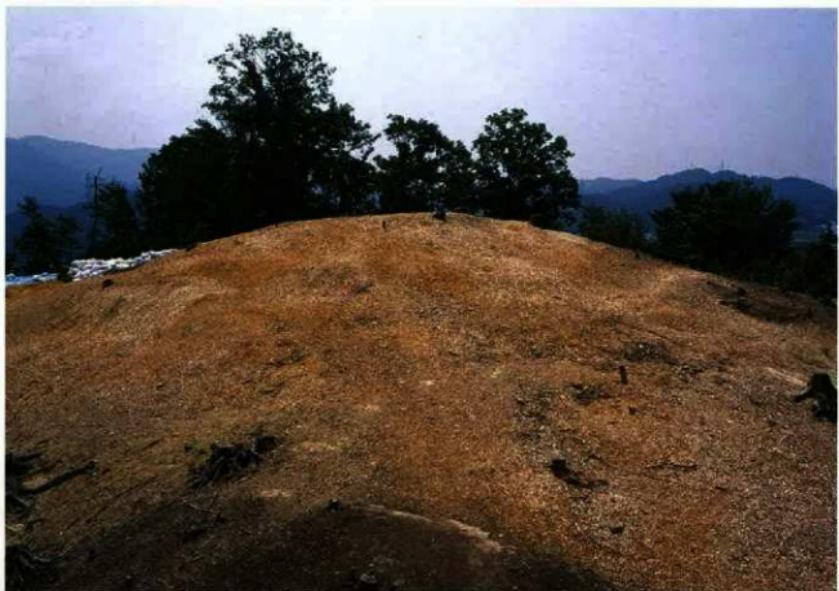
1 西棺と東棺の棺床 南から



2 西棺の赤色顔料



1 チップで覆われた1号墳 西東から



2 チップで覆われた5号墳 北から



1 調査前の墳丘 南から



2 墳頂部の擾乱穴 南から



墳丘全景 南から



1 墓丘北調査区 北から



2 墓丘北調査区の盛土 北から



3 墓丘西調査区 南西から



4 墓丘東調査区 南東から



1 陸橋部 北から



2 西陸橋部 西から



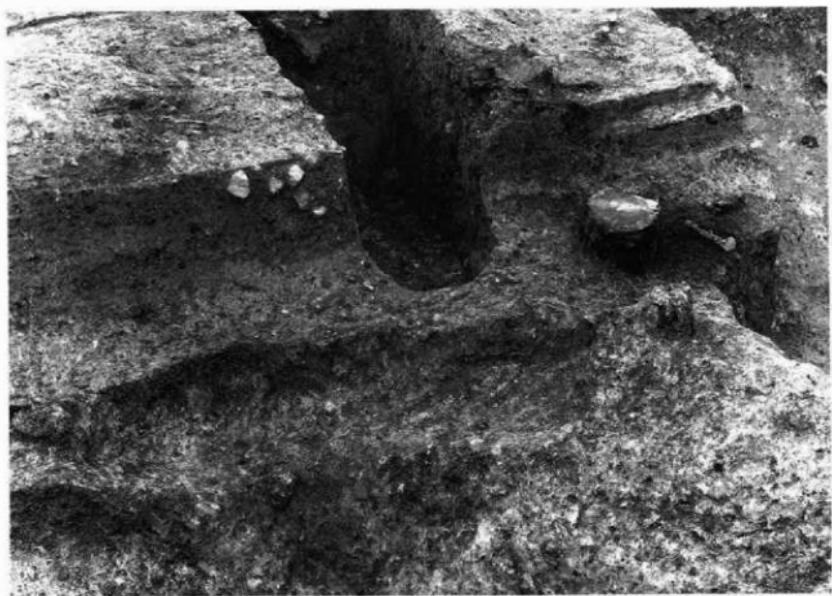
1 東陸側部と前方部 東から



2 東くびれ部調査区の地山と盛土
東から



埋葬施設 北から



1 墳葬施設 南東から



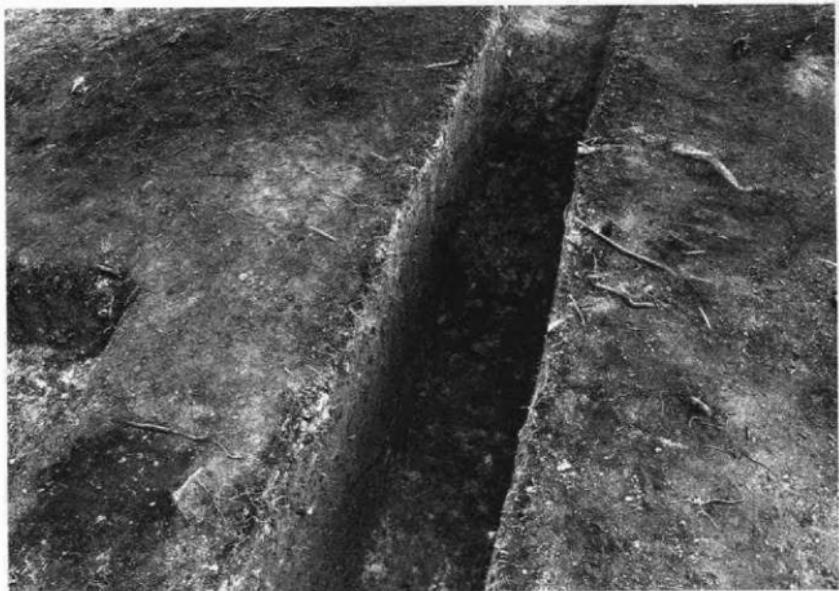
2 墳葬施設 北から



1 槽乱溝・穴の断面 底から



2 溝状施設 東から



1 6号墳の北斜面 北西から



2 6号墳の南斜面と2・3号墳 北西から



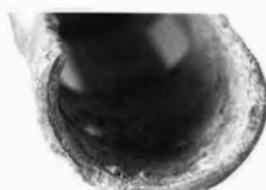
1 筒形銅器



2 銅製舌



3 筒形銅器内面



5 筒形銅器口緣部



4 筒形銅器内面



6 筒形銅器透かし端部



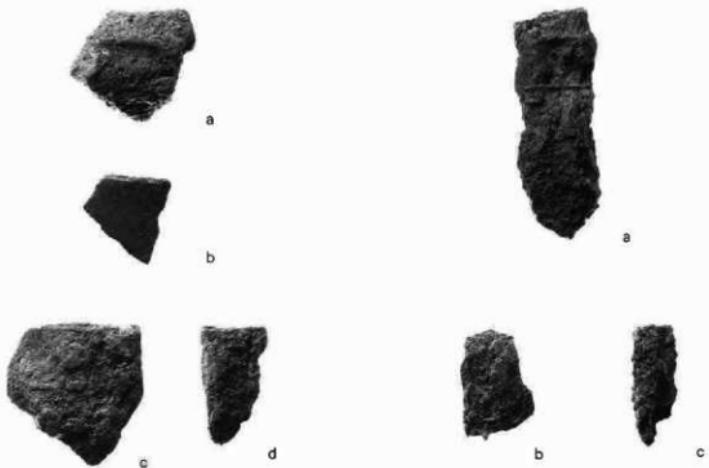
7 銅製舌側面



8 銅製舌端部

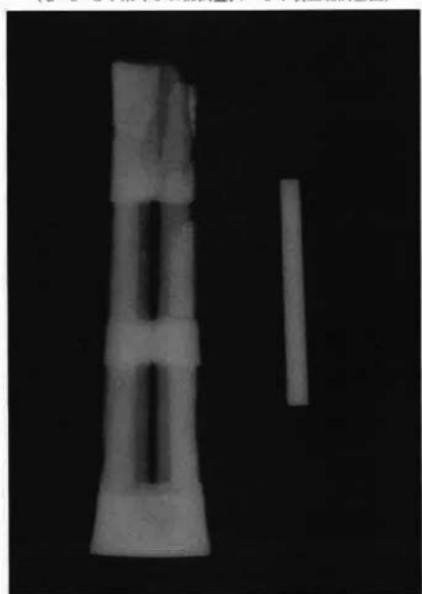


9 銅製舌端部



1 土器
(a・c・d : 東くびれ部調査区 b : 墓丘北調査区)

2 鉄器 (a : 刀剣茎 b : 剣 c : 不明鉄器)



3 筒形銅器・銅製舌X線写真



4 刀剣茎X線写真



5 石器



1 墓丘 北から



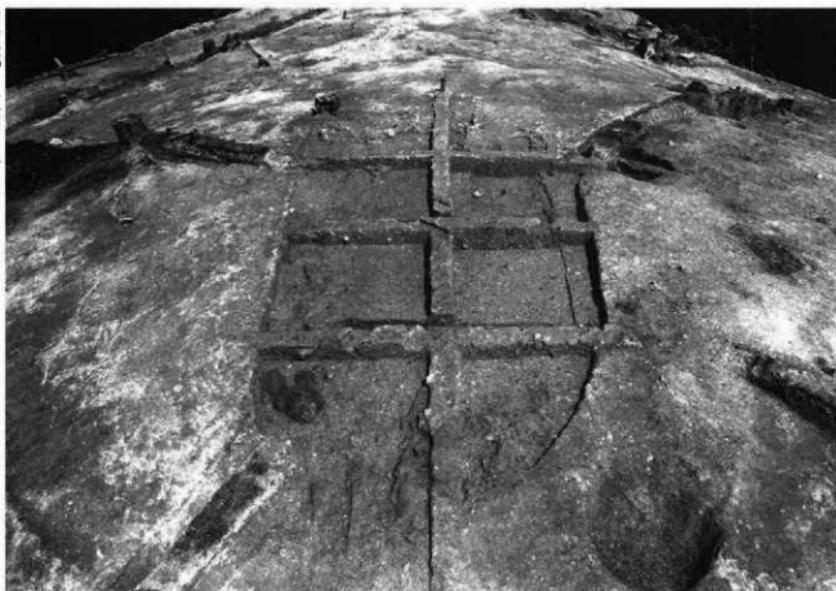
2 墓丘上部 南東から



1 墓丘と周溝 北京から



2 墓と陸續状治版 北から



1 墓葬施設検出状況 南から



2 墓葬施設 北東から



埋葬施設 南から



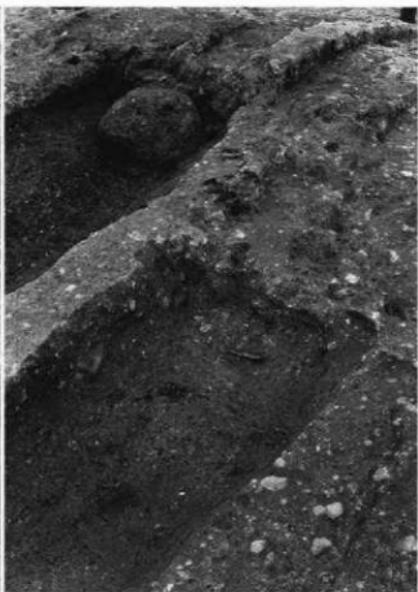
1 西棺南端部 北東から



2 西棺北端部 南東から



3 東棺南端部 北東から



4 東棺北端部 南東から



1 西棺北端部粘土塊の断面 西から



2 西棺南端部粘土塊の断面 西から



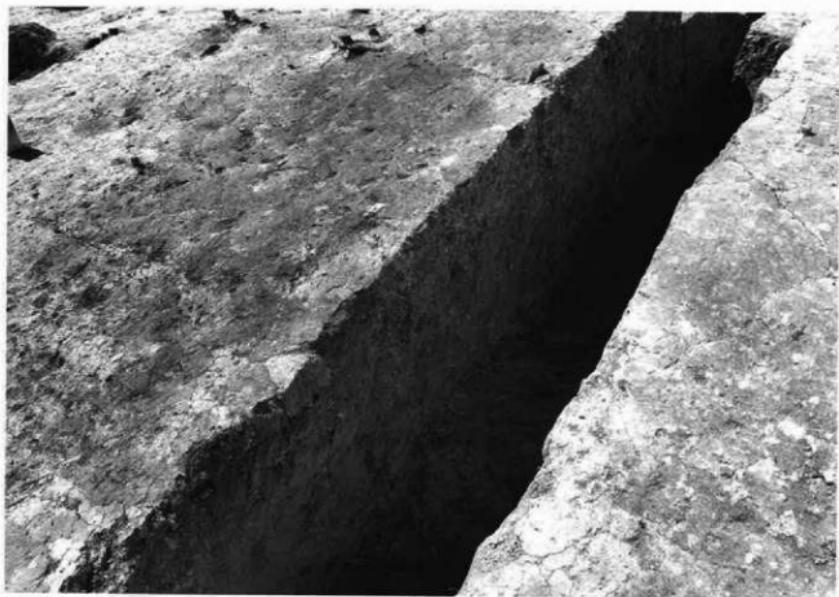
3 西棺棺床 南から



4 東棺棺床 南から



1 西裕と東館の床床面 南西から



2 型幕柱候東部の盛土層断面 北東から



1 東棺北端内埋土断面 南東から



2 西棺南端内埋土断面 西から



3 東棺内埋土 北から



4 西棺内埋土 北から



1 刀子



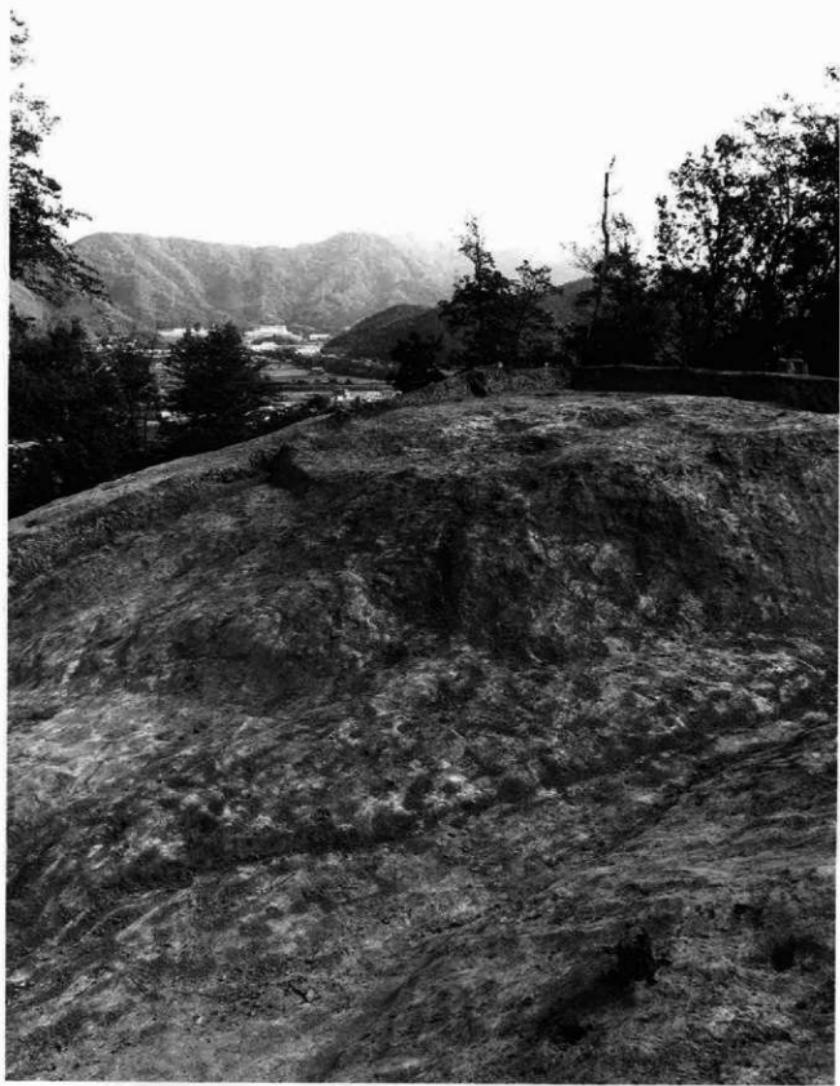
2 刀子X線写真



4 石簇



3 頸窓器



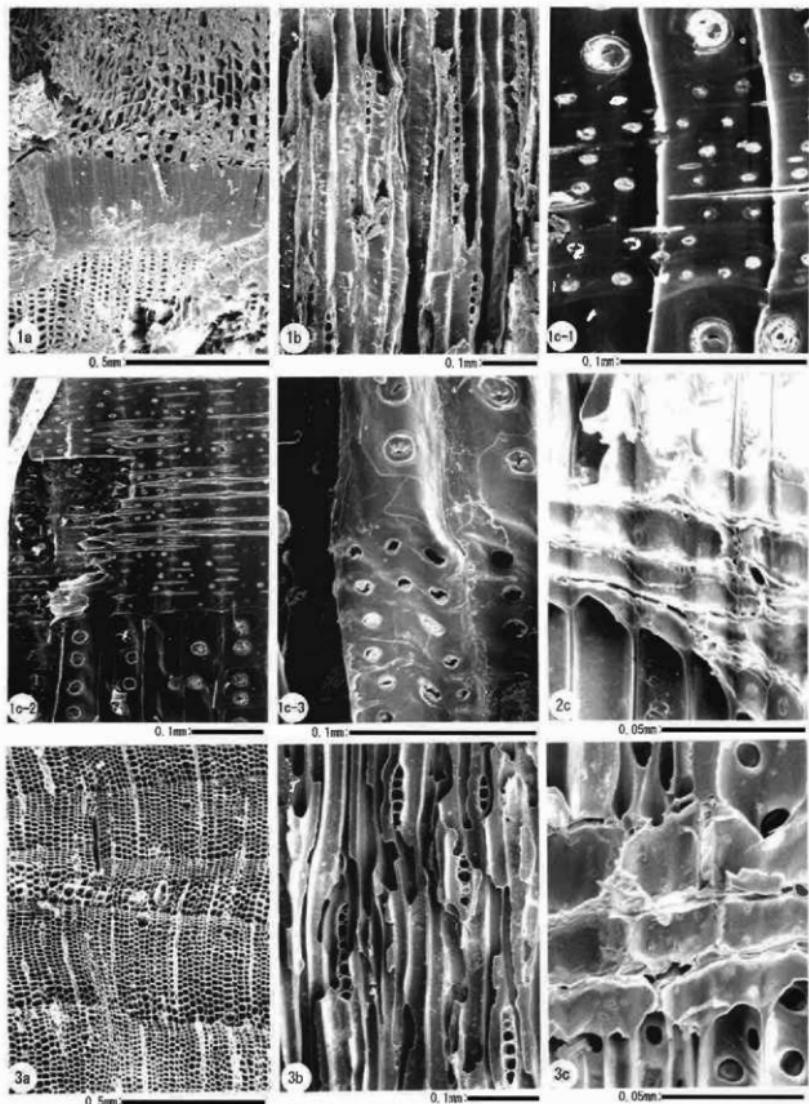
墳丘 北から



1 埋葬施設 東東から



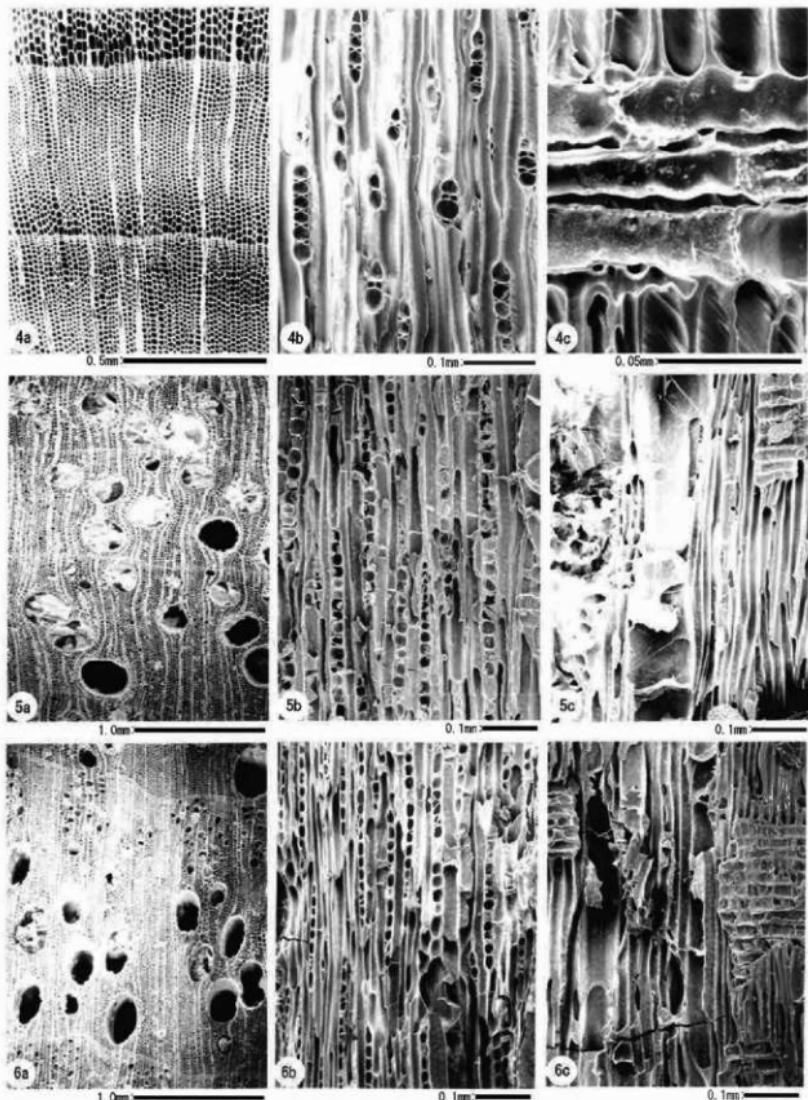
2 7号墳-5号墳間の溝 東から



1号墳筒形銅器下層出土木材・5号墳埴丘盛土出土炭化材の材組織走査電子顕微鏡写真

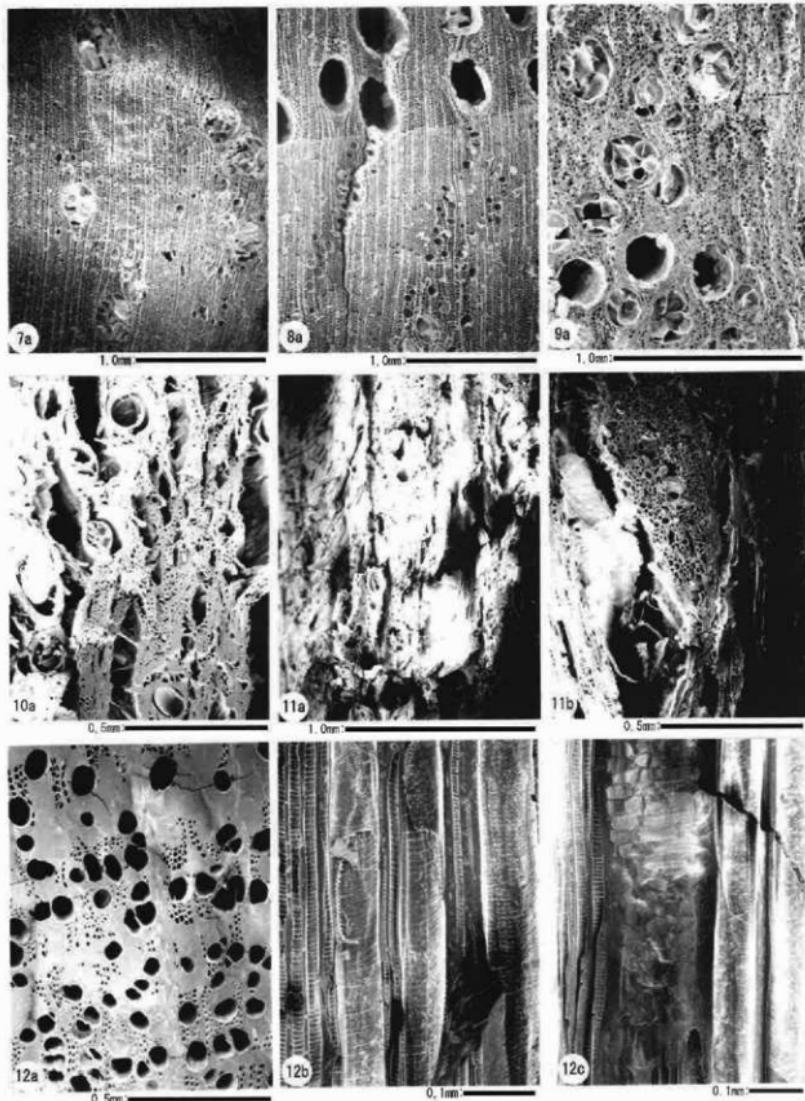
1a~1c-3:針葉樹 (1号墳 筒形銅器下層木材) 2c:モミ属? (5号墳埴丘 11)

3a-3c:モミ属 (5号墳 12) a:横断面 b:枝条断面 c:放射断面



5号墳丘盛土出土炭化材の組織走査電子顕微鏡写真

4a-4c: モミ属 (5号墳 6) 5a-5c: シイノキ属 (5号墳 16) 6a-6c: シイノキ属 (5号墳 21)
a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面



1・5号墳埴丘盛土出土炭化材の材組織走査電子顕微鏡写真

7a:シイノキ属(5号墳 4) 8a:シイノキ属(5号墳 24) 9a:ガラ木属(5号墳 12)

10a:広葉樹(1号墳 3) 11a-11b:コナラ属(1号墳 2) 12a-12c:広葉樹a(5号墳 3)

a:横断面 b:接線断面 c:放射断面



1 里山の保全作業

2 こどもたちの作業



3 やまんばの森学園祭

4 やまんばの家にて



5 やまんばの会

近江町文化財調査報告書第28集

定 納 古 墳 群

2005年8月31日

編集・発行 近江町教育委員会

〒521-0072 滋賀県坂田郡近江町額戸488-3

☎0749-52-3111

大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター

〒662-0965 兵庫県西宮市郷免町8-17

☎0798-32-5007

印 刷 大津紙業写真印刷株式会社

〒520-2152 大津市月輪一丁目9-33

☎077-544-0190